



明星

35周年記念誌
明星学園文芸部

目次

文芸部考……………(1)

次の五カ年……………照井猪一郎(2)

中・女誕生……………上田 八一郎(4)

子供達を明星へ入れて……………松井 憲紀(6)

心……………茶郷 穰(6)

地……………茶郷 穰(22)

童子……………茶郷 穰(30)

詩二題……………与田 静(32)

やおやさん……………宮川木末(28)

はねだのこと……………中西貴光(36)

ひとり……………熊谷礼子(15)

あ る 日

日光へ行ったこと……………川上幸子(7)

中野の歴史を調べて……………若林 博(7)

静かな夜……………渡辺 忍(8)

佐渡弥彦国定公園……………勅使河原郁子(8)

ちんちようげと私……………徳照弥寿子(9)

千倉の生活……………善方真理子(9)

無力……………高橋乃利恵(10)

夜……………熊谷多勢子(10)

一人言……………徳照弥寿子(10)

〈特集〉

自分達を見つめる……………(11)

一 海外の友達への手紙……………(12)

イタリア・スイス・ドイツから

二 O・Bを訪ねて……………(15)

矢口光子さん……………白木東洋氏(15)

富尾里瑠氏……………秦慧孝氏(17)

大須賀住吉氏……………佐藤雄次氏(17)

坪田正男氏……………土居通芳氏(19)

三 父母への手紙……………(26)

明星の生徒について……………家庭における親子の問題

………星野たづ子さん(27)……………小西良清さん(31)

………大学入試について……………川崎庸之さん(32)

………荒井なみ子さん(29)

………徳照 節子さん(30)

四 座 談 会……………(33)

他校生を囲んで

受験・自治会・青少年犯罪・政治

童 心

石井きよみ	海に行く時の電車とディーゼ	(53)
中山まり	ルカーのようす	(53)
映画「福竜丸」を見て	影	(53)
芝生の秋	松井昭彦	(55)
田中一水		
福井幸子		
黒岩号		

読 書 批 評

狭き門	谷村遙	(40)
聖書	飯田能子	(41)
巴理に死す	岡野里美	(41)
鼻	小寺照士	(43)
ここに私は立つ	高莉苗子	(44)
アンネの日記	宮川木末	(44)
赤毛のアン	風早多美子	(45)
嵐の前・嵐の後	江藤朋子	(48)
動物園夜話	大島卓	(49)
にあんちゃん	風早多美子	(46)
次郎物語	山村邦子	(47)
高瀬舟	正 宗	(47)
カラマゾフの兄弟	角尾美那子	(48)
ローランド、ランゲ	室谷幸子	(50)

きやんぷごつこ

ふでばこ	新田保	(37)
ふろたき	夏目敏	(37)
自然の中へ	茶郷穰	(37)
きやんぷごつこ	石山鐘	(37)
おとなりのおじさん	奥住多栄子	(37)
初島キャンプ	宮崎吉明	(38)
雨	茶郷 穰	(38)
青い大きな海	上条永子	(38)
矛盾	高橋乃利恵	(38)
ねこのひとりごと	今村かおる	(38)
病気	新田保	(39)
観察記録	せきさない	(39)
〃	いとうその子	(39)

作 品 集

学ぶ自由と怠ける自由	押川 昌一	(56)
考えたこと	浜谷 共	(59)
影と少年	原田 励	(57)
富士登山	戸島 久子	(60)
彦市ばなし	いいなゆきを	(62)
断章	はやし 典子	(63)
悪夢	森本 栄子	(64)
伯父の家	柳沢 槇江	(66)
偽善者	上田 紀子	(68)
純チャ	金井 三知	(71)
河のある下町	原田 励	(73)
或る女	原田 励	(79)
赤ちゃん	海津 脩	(84)
蟬の声	天野 元子	(85)
わが家を語る	武藤 昭子	(85)
創立十周年の追想	原田 満寿郎	(88)

文芸部員名簿・編集後記・明星学園略年表

表紙・木村鉄雄

文芸部考

文芸部とは一体何をする部なのだろう。数多くある自治会の部の中で一番活動する範囲がひろそう。ある学校では学芸部とも呼んでいる。他の部のように部の名称にとられる事なく自由に活動出来る事は確かだ。「文芸」と言う名がひどく曖昧なように、この文芸部の性格も曖昧モコとして見当がつかかねる。自治会の中の部であり、その自治会の目的が外界に対抗する為に学生達が結束する場所であってみれば、その線にそって「文芸部なり」の活動をすれば良いのだろうか。「文芸」と言う言葉自体が解りにくい。まさか「文章芸術」の略ではあるまい。ここで文字にとらわれてとやかく言う必要はないが、ダ性で動いているような自治会の中で、その性格を反映しているようなこの文芸部でも「文芸部」とは何かが再考されるべきではないのだろうか。

自治会の目的が「外界に対抗する為に学生達が結束する場所」と言うのは、これは必ずしも一般的見解ではないが「自治会の目的は？」に対する答えらしいものは、今の所これしか見当らない。そんな中で今迄文芸部は何をして来たのだろうか、——ここ二三年の活動をその間に発行された文集や、文芸部ノートで見ると、人形劇や、放送劇は共に実現を見ず、読書批評、映画批評は、「やりっ放し」に終わってしまったようだ。文芸部の性格がその名前の通りひどく曖昧な為か、又それが文芸部の宿命なのか、外部に対する働きかけに欠けていたようだ。文芸部だけで文芸部の為に楽しんで終っていたような気がする。独りよがり、——外部との接触を嫌うそれが今までの文芸部の性格のように思える。どの学校の文芸部も年に一回発行する機関誌めいたものが、大体においてそんな性格で終っているのは文芸部と言うものがどうしても「同人」の集りのような気分になりやすい為なのだろうか。

この頃つくづく感じた事ではあるが文章とは大変、不便であり、又便利であるとも思った。余り手紙を書くのになれていない自分が、原稿の事でPTAの人と二、三回手紙のやりとりをした。最初にその人からいただいた返事は原稿に対しての批評だったが、その文面は大変親切な批評だったが、どうも読んでいて妙な感じを受ける。もともと書いた人にはそんな意図は全然ないのだから、どうも文句を言われているような気がしてならなかった。その人がテイネイな言葉を使っていたら使っているだけそれがイヤ味に受け取れる、こっちが書いている人が大人だ、と言う事を前提にして読んでいる為にそんな風に受けとれるのかと、何回も何回も読み直してみたら結局同じだった。それに対して返事を書いたが、こちらはその人のくれた手紙に対して素直

な気持ちを書いたつもりだった。二度目にその人からいただいた返事はどうやらこちらの文面をそのまま受け取ってくれなかったらしく、言いわけめいた事や、文句と受け取れるような事がたくさん書いてあった。これを書いた人にはそんな気持ちは全然ないのだから、どうもそう受け取れて困った。そう思うつもりか、前の手紙より大部感情が露骨になっていて、誤解しているような部分も二、三見受けられた。これに又、言いわけめいた返事を書けば、ますます感情がもつれて「喧嘩」のようなものになりかねない感じがしたのでそのまま返事は書かなかったが、何んとも理解仕合えないのは残念な事だった。お互いに話し合えば簡単に片付く事なのだろうが、どうも、書いていても読んでいても歯がゆくて仕方がなかった。

ここ二、三カ月の間に、いろいろな学校の文集を読ませてもらって、感じた事があった。わりあい多くの人は文章を単なる「書く楽しみ」だけで書いてる人が多いようだ。「私は文学少年、文学少女でございます」と文学者を気取って、書く作品の主題は別にいろいろと掘り下げた様子もなく、安易に「芸術的思考が湧くままに奔放に書きまくった」——と言うような作品ばかりにお目にかかる。「文集を出しますから何か書いて下さい」「はい、書きましたよ」と言うような作品ばかりだ。だから描写は妙に形容詞を並べたてたりして凝っているようだが到る所で矛盾を生じているし、一体作者は何んの為にこの作品を書いたのだろうと、考えてしまうような作品が多い。そんな安易な、単なる「書く楽しみ」だけで書いている為に、名前と場所だけを代えて、どこかの雑誌からもって来たような「恋愛小説」めいたものや、ギジ哲学的な、およそ詩とは呼べない、文字のラレッツにすぎない詩、——文章を書くと言う事は「楽しい」だけでなく、書いて人に発表する以上それ相当の責任が作者に掛って来るのだから、もっとしん重な態度でありたいものだ。又「文学者」を気取る為か、内部でかたまり、外部へ働きかけようと言うような、意欲、——例えば、と言うより、文学は全てそうだが、「批判」——と言うようなものが足りない「恋愛小説」めいたものを書き、自分もこの作品の中の人間のようにになりたい、そんな気持ちだけで終ってしまったというようだ。

高校生ともなれば、そろそろ、単なる「楽しみ」だけで文章を書く時代は卒業しなくてはいいのではないのだろうか。

明星が草深いむさし野の畑中に、新教育の産声をあげたのは、大正十三年五月。文部省が久しい沈滞を破って教育制度に大刷新を断行したのは、ずっと遅れて昭和十六年。いわゆる「国民学校案」なるものがそれで、その殆どがわれわれ私学が長年に亘って研究し実践して来た成果を、性格をかえて転用したものであった。

われわれは常に日本の教育の先端に立たされて、その啓蒙開発に努めて今日に至ったので、その意味では、一応その役割を果たしたといえないことはない。

今年は創立三十五周年に当るので、数えでは三十六年目ということになる。

三十六年——それは人生でいえば働き盛りの壮年期に当る。人間にはこの期を頂点として、下り坂となり、やがて老衰して行くが学園は教育の場であるから、永遠に成長し、発展し、常に新鮮であるべく約束づけられている。

今日われわれは曾って新教育と呼ばれた当初の目的は充分に達成され、高く評価もされているが、われわれは徒らにそこに安住するべきではない。それは先駆者の宿命である。

三十六年前のアザヤカな出発に比して

今日のわれわれに社会が果して同量同質の魅力を以て迎えてくれているかどうか。映画やラジオも普及せず、テレビも

なかった大正末期でこそ学校は教育の殿堂であり、教師の技術が高く輝きもしたろうが、月の裏側が覗かれ、月にロケットが到達し、数年後には人間を乗せて、

成層圏外の軌道をまわる航空機は既に設計されつつあるという今日、果して教育の実際がそうした事実を計算に入れて企画されているかどうか。

三十六年来伝承し、改良を加えて来た私達の新教育ではあるが、予想もできない急テンポな最新文化に密着して歩みつつあるかどうか。

あえて明星といわず、日本といわず、世界中の教育はその理念にも方法にも思い切った切り替えを遂げなければ時代の波底に沈潜してしまはいはしないだろうか。

誰にでもわかることは、教育の効率を高めるためには「無駄と憶病をとり除いた高能率な教育方法に依らなければならない」ということである。

明星の場合でいうならば、従来のままで果して、小、中、高十二ヶ年を通した一貫教育が円滑に行われているかどうかである。単に地域を同じくし、一段階づつ進学できるといふことだけならイージョーイング以外の何物でもない。

十二ヶ年の区分の仕方と。原理原則。それに伴う教科の課程の改廃。教科の内容の

次の五カ年

照井 猪一郎

修正家庭学習のあり方。児童生徒の能力負担合理化。教科外活動の指導。見学プランの統一。有効適切な共学の運営。自治会の持方。担任教師の能率的配置それ等何一つとり上げて多様な問題が内含されてよりよい解決を待っている。

今私達は五ヶ年計画を立てて是等の一つ一つと取り組んでいる。そして昭和三十九年——明星創立四十周年までには、一応の骨組は終わりたいと急いでいる。

これが充分な肉付けを完成するためには、今後多くの人達による長い努力を要することではあるが、それなしには明星の教育的使命は考えられない。

既にこの計画の一部は二年前から地均らしに着工している。今のところ十二ヶ年を大体三期に仮想してその各々に研究部門をつくり、定時的に集会を開いて研究を進めている。教師はとて忙がしい。しかしこの事は明星を変貌させることはあつても決して明星の性格をかえるものではないし、その歩みを停滞させるものでもない。凡ては飛行中の航空機に給油するように、快適な這りの中に行われるもので、子供達にとつては一日一日の進歩の中に作用されるよう工夫されるはずである。

こうした見地から現行の教育を眺めると、そこには夥しい無駄と退屈がある。国語の例でも明星の場合、一年の入学児に平仮名の読めない子など一人も居ない。漢字だって相当数持つて入って来る。それは幼稚園にさえその傾向が見られる。

語イの数だって四千ぐらいは優に持つて居て、しかも質も甚だしく大人のそれに近いし、用法も適切である。

マスコミの影響も大きいであろうが、一般社会の文化水準が急速に高まりつつある反影でもあらう。われわれはこれ等を有効に教育計画の中に組み入れてプランを立てなければ時代から完全に遊離する。

教育の仕事は「有るものを有る」としてそれに積み上げ、その子の現実を出発点として発足するものである。

現在五十音を持つて入って来る子等を、「いろは」の「いの字」からまき返すような間違つた方法論に促われてはならない。

強制してはいけないうが智識慾の旺盛な子供等に、つまらない古い始期説に捕われて制動機をかけてはなおいけない。欲しないものを強いて与えることに問題はあつて求めるものを出し惜しみすることにも考えなければならぬ。

曾っての新教育の業績の大きな一つは、児童の世界を発見し、児童を開放したこと

にあった。社会経験にも、知識の領有にもあまりに貧困であった当時の子供達に、大人並みの榮養を与えてやりたいというアセリは私達になかったろうか。

教科書外にいろいろな説物が、文部省の圧迫を物とせず正風に教室に持ち込まれた。副読本、学習帖の数々、教科の新設など。併しその反面、情操教育を唱えながらもそこに底流する偏智教育が覆面しては居なかったか。

今われわれの唱える明星五ヶ年教育計画はこれ等新教育の効罪を深く解剖して「新教育」から「真教育」を化生させようと努力するところにある。

来るべき四十周年を迎え、われわれの五ヶ年教育計画がどのような実を結ぶであろうか？ その時に今一度この回想を読んで回想を回想する日を期待してやまない。

就職が決って

高三 中 沢 久 美 子

この頃の毎日って何て気の抜けた、だらしない生活を過しているのだろう。何をやる気もしない。卒業したら就職する事を決めて、試験が八月中旬にあると聞いた時はやる事が多過ぎて何から手をつけて良いかわからない程だったのに……。

私は第一志望の会社が普通より遅れて九月の初め頃に試験があったので、心配だったが八月中に試験のある会社は一つも受けず、夏休み中その会社めざして頑張った。予定表をたて、その通りに、それこそ朝から夜遅く迄、詰め込んだ。気分転換に何度も予定表を書き変えたりしながら……。何か他の事をしようとしても、すぐ「勉強しなければ……」という気持が先に来て落ちて着いて出来ないのだ。それも初めのうちは良かったのだが、夏休みの終る頃、生まれて始めての試験もいよいよ近付いた頃、気分的に最も苦しい時だった。毎日こんなにまでして何かプラスしているのかしらと毎日勉強々と追いまくられているような生活がつくづくいやになり、こんなにしなくても大丈夫受かるという自信を持つかと思うとすぐその後から絶対だめだ、落ちたらどうだろう。そんな気持の連続で気分的にすっきりまいってしまった。そして（皆よりずっと遅れて）合格通知を受け取った時は嬉しかった。やるだけやったんだという満足感が快かった。

ところが、それからなのだ。今迄全精力を傾けていたものがフツとなくなってしまう

ったものだから、毎日ただぼんやりと過すばかり。就職が決ったらあれもしよう、これもしたいと思っていたのに、皆から「おめでとう！ 進路が決ってしまつて、これからはのんびりと楽しく学生生活の最後を送れるわね、羨しいワ」なんて云われれば云われる程何かつまらなくなつて、以前は就職するという事にいろいろ夢を描いていたのに、それがだんだん崩れていつてしまうのだ。そして進学をめざす人はいよいよ押し迫った様子で話し合っているのを聞くと、おかしいようだがとても羨しくなってしまう。自分でもどうにも理解しにくい不思議な気持。

今、考えてみるとどんなに辛くとも、目標があつてそれに前進する生活はずっと張りがあつて素晴らしい事じゃないかしらと思う。夏休みの終りの頃のあの辛さも忘れて……。

（ただこの就職という事を通して、世の中ってこんなにもせち辛い所なのだナとつくづく思い知らされた。）

「一教師から」 右の中沢君の文は、文芸部の要求にもとづいていそいで書いてもらったものです。高等学校三年生の秋はそれぞれに思いの深い季節なのです。ところで私も、深い感慨をもって次の詩を写してみることになります。この詩は二十五周年記念号「明星」に載つたものです。

さくらんぼ

初二 中 沢 久 美 子

まあい、まっかなさくらんぼ。

あまくて、すっぱいさくらんぼ。

おさらにいっぱいさくらんぼ。

まあいおさらになけましよう。

みんなでなかよくいたでこう。

みんなおいしくたべている。

さくらんぼはだいすきだ。

中・女誕生

上田 八一 郎

学園も今年創立三十五周年を迎えた。今から三十五年前即ち大正十三年五月に小学部、一、二、三あわせて僅か二十一名の児童が集まって呱呱の声をあげたのであるが、その創立に参加した人々は赤井米吉、照井猪一郎、山本德行、照井げんの四先生と、この仕事を援けた、かげの人茶郷基氏とであった。十年前に出た二十五周年記念号明星に照井先生が次の如く書いておられる。

「個性尊重、自主自立、自由平等、ただそれだけが私達の上に輝く教育の灯し火であった。ただそれだけが明星教育のゆるがぬ基本理念であった」云々

次いで昭和三年四月旧制中学校と旧制女学校が発行した。この出版にもかげの人茶郷基氏の助力があった。

昭和九年十周年記念式が行われ、「星雲時代」が記念号を発行した。其の後昭和十九年に二十周年を迎えたが、戦争のどさくさで警戒警報や空襲警報の心配もあり、記念式らしいものを開いたかどうかはつきり覚えていない。次いで二十四年が二十五周年記念で前記の「明星」が発行された。越えて二十九年には三十周年記念式が盛大に行われ同時に物故功労者、物故旧職員戦（病）死卒業生の慰霊祭なども執行されたが記念号は出なかった。ただPTAだけが記念号を発行した。それらに就ては現在の生徒達にはあまり興味もないと思うが、何処かに残っているかもしれないから、関心のある者は見て貰いたい。父兄母姉卒業生の方々のうちには保存している方もあろうと思う。僕も一部持っているから貸してもよろしい。

回顧すると中女創立当時の先生方は内野先生、杉山先生共に他界され、終戦まで一生懸命働いてくれた井上万二郎夫妻も今では此世にいない。ただ多湖先生だけは五年前に明星を去られたが、現在日本歯科大学に勤めておられる。

故内野先生杉山先生井上夫妻は学園にも僕にも思い出の多い人々であるが、その思い出は此処で中々書けない部分が多い。当り触りが多いからである。書けば中女の裏面史として興味深いものがあると思うが、結局一生筆に出来ないであろう。

昭和三年最初の中女第一学年の学科担当は次の様であったと思う。

中、校長、修身 赤井 米吉 主任、英語、国語、作文、体操、上田八一郎
理科（動物・植物） 多湖 実輝 数 学 岡 邦雄

地理	山下 重輔	歴史	照井猪一郎
音楽	吉原 規	美術	松岡 正雄
体育	垂水 繁光	校医	井草 完二
校長、修身	赤井 米吉	英語	寺田すすむ
	多湖 実輝	数学	岡 邦雄
	山下 重輔	音楽	吉原 規
	松岡 正雄	体操	垂水 繁光
	菱田 秀		

僕自身のことには就ては多少覚えてはいるが、一週三日間は「上田デー」と呼んで僕だけが朝から晩まで学校にいて、主任の仕事、中女の会計事務、英語、国語、作文、体操の一部も受持った。国語はメルリンクの「青い鳥」を愉快に数えたことを記憶している。作文も随分書かせたし、面白かった。現在の父兄である梅田豊彦君など同志を集め文集を数種類作ったが、それは何処かに残っている筈だ。三十周年記念の際其の一部を展覧したが、原田先生が何処かに保存してくれていると思う。体操の一部も受持ったが、これは甚だ自信のない仕事で生徒から「先生の号令はかけ方が変だ」と小言が出て岡崎健児に代行させた事を思い出す。花も植えたし、二十大根も作らせた。野球もやった。庭球もやった。現在中学校校舎のある処など雨の日には運動靴など土の中にはまり込んで動きがとれなかった事もある。

思い出はどこまでも続く。学校前を流れる上水（一名、人喰川）には時々水死人が浮び、其の度毎に御巡りさんが来て引上げていた。現在玄関前にある大小様々の樹木は大抵照井先生が植えられ井上万二郎が世話して来たものである。与えられた紙面も残り少なくなった。最期に昭和三年の日誌抄を載せてこの稿を終ることにする。

一、一四（土）市衛生試験所に井戸水を運び水質検査
一、二六（木）中学校地ならし
二、六（月）基本合同目鼻つく（茶郷氏五万円、川井氏服部氏、尾高氏二万円）
二、二二（水）小学校宛入学募集チラシ作成

- 二、二五(土) 地鎮祭
- 二、二七(月) 中、女建築土台ガタメ(セメント)
- 三、二(金) 東京府より中、女同時に出発は無理なりと云い来る
- 三、一四(水) 中学校前新橋架橋工事開始
- 三、二二(木) 中女設立認可書類作成(夜十二時まで赤井氏宅にて)
- 三、二七(火) 外部よりの入試者生方、梅田、平出、志垣呼び出し
- 四、三(火) 時事と報知に入学募集広告
- 四、九(月) 女学校入学式、始業式
- 四、一〇(火) 中学校入学式、始業式
- 四、二〇 中女設立認可可下る

オランダの生活

水 野 靖 子

学校とはどの国も同じに毎朝教室に入り机に向かい本を開く、しかしその先は同じとはかぎらない、かぎらない所にその国の面白さがあると思う。

学校制度は、小学六年制、高校五年制、大学四年制で小学生の教科書は学校持だが高校は個人だった。高校の教科書は指定の書店に買いに行かなければならなかった。本は大変上等の紙を使用するので高価で平均三百円で世界地図は千七百円もした。そのかわり使用後も教師のサインが入っていれば書店が買い取った。又高くても買えない子は学校から借りられた。授業料は年に一度市役所から(市立)生徒の親の収入に合わせた金高が学校に行くのでその分だけ納入すればよかった。その他に納入はなかった。

課目は、国語(文法も)文の内容にあまり重きをおいていないようだった。一年生週に四時間仏語(小学四年から)ヨーロッパ語の本はラテン語なので、共通点が多く進みが非常に速かった。週に五時間英語(高一から)いきなり単語に入りおにも会話を中心としている。週に三時間独語(高二から)週に三時間幾何高一からで日本よりも一年以上進んでいるが、これを使った応用問題はまったく学ばないので実際は日本の方が進んでいると言う人もある。週に二時間代数も同じ三時間、世界史は一年古代、二年中世、三年近代で大変くわしく学んだ。日本のやり方と、どちらが良いかわからないが私は分けたほうが身に入る気がする。四時間地理これも歴史と同じ方法だ

った。週に三時間、生物、一年は人体で絵をくりぬいてはりつけたりしていた。二時間、図画、皆大変下手で小学二、三年生程度で絵ばかりでつまらなかった。三時間、体育、実技ばかりでデンマーク式で道具を使用するのが多かった。(マンバ、リング、マット等)三時間の聖書は聖書の内容よりも、むしろ道徳を教えていた。この一時間、これらは日本の中学生の単位にあたる。高校になるとコースが二つになり大きなひらきがあるから中学生のにした。その他にラテン語のある学校もあった。新学期は九月からで、中頃からステームが入り、葉がどんどん散って新しい学生になったとは思えなかった。十二月二十日ごろから冬休みで、演劇会とダンスパーティーが行われ校長その他の先生は全員奥さんずれて生徒とダンスをする。二学期は一月六日から三月二十日まで三学期四月六日から七月十一日まで、夏休みには十日間外国でキャンプ生活(山がないからベルギー、ドイツ等へ行く)

一クラス二十人で四クラス、どのクラスも女子が少く男子より五人少なかった。五年生になると理数コースの女子は三、四人だった。人数が少ないので担任はいず、移動教室だった。ベルが鳴るたびに二階、三階を行ったり来たり。先生は自分の教室を好きなように使用していた。教室が何か物たりない感じがするのは日本と変りない。先生の話し中はノートを取る事をゆるさなかった。後で要点をノートした。試験はテスト程度で三十分か二十分間が多く月に一回、語学や数学は一定の部分がすむたびに行った。その平均が通知書(十進法)について。一人一人校長から手わたされ進級出ると握手をしクラスの一歩には賞が出た。日に二科目と月曜(前日が休日だから、休日は決して宿題がない)のテストはゆるさなかったので皆大変ノンキで通知書に四を二つも取って落第するのがクラスの三分の一が普通だった。大学入学は無試験、しかし入学してもあまり高望みをすると単位が取れずにいづまでも卒業出来ないう事にもなる。生徒が先生に対する態度は明星と変らないが、先生は大変女子を大事にし、使い走りは男子と決っていた。校長が生徒全員に話をするのはクリスマスの時だけで朝礼もなかった。書き忘れたけれど、どの学校もグラウンドが無いので冬は体育室で体育をし、夏は市の学校のグラウンドまで自転車で行かなくてはならなかった。校長の大きな仕事は先生の後つぎを探す事(教師が少なくて困っている)又生徒への伝達事項を各クラスに知らせてまわる事だった。担任がいれば校長も少し飛びまわらないですむと思うが。日本の生活はほとんど知られていないのに驚いた。まだ電気もない熱帯地方かと思っている人が十人に九人の割である。日本を紹介した新しい本をどんどん海外に出して欲しい。

子供達を明星へ入れて

現PTA会長 松井憲紀

三十五周年記念出版をするから何でもよいから書いて欲しいという依頼がありました。が、さて何でもよいからと言われても之という考えも浮ばないので、私事に亘って恐縮ですが、私が最も強烈に明星学園の事について感じた一つを書く事に致しました。この事が一般的な明星学園の事を知るための私の印象でしたから。

私は終戦の年に小学校一年に入学する適齢の長女がおり、昭和二十一年四月に私の住んでいた埼玉県川越市の市立小学校へ入学させました。皆様、御存知のように終戦直後の事として、教育方針も混沌としていましたし、設備も不十分であって、二部、三部の授業が行なわれていました。小学校三年の時、私共家族が仕事の都合上、三鷹の牟礼に移転し、第四小学校へ転校させました。ここも亦二部教授で、子供達は学校へ行っただかと思うと帰って来るような事で、これでは学力も人格も思うにまかせまいと考えました。どこかもっと良い学校へ入れたいと思うようになりました。私の勤め先の会社に

明星学園を卒業したH君が居りますが、このH君の仕事の遂行を見ていると、他の人とその違いがハッキリ判り、責任と自主独立の精神が見られ、本人の性格から来るものと後天的教育によるものとあると考えさせられたわけです。私はこれからの人として「自己の行動に責任を持つ人」「他人に迷惑をかけない人」「社会に役立つ人」であって欲しいと思う、子供を明星学園に転校させたいと考えるようになりました。私の生活から考えると収入に比べ教育費はね上るわけですが、二度と同じ日はない事を考え、子供の教育に親として、悔いのないようしておきたい一心から考へ至ったわけです。次女が小学校へ入学する年に先ず之を明星学園の児童として入れていただくためにテストをうけました。このテストをうけるために次女と共に学校へ参つてお

心

真赤な靴下をはいて、

純白のマフラーを首に巻きつけて、

舗道を肩で風を切って歩いて、

キザな奴だとささやかせたいものだ。

高二 茶郷 穰

が如何なる人生を送り作り出していくかは判りませんが、明星学園に於ける教育に関しては悔いはありません。

明星学園に集まって来られる教師の方々も、照井校長の思想と教学の精神に共感を持っておられる方々ばかりであると信じております。

明星学園も三十五年の才年を経て有能な卒業生を各方面に送り出しており目下働き盛りのところでしょう。之等の方々为社会に於て如何に明星生活の影響を發揮するかこれから益々期待出来るものと存じます。

PTA会長という肩書きをし乍らPTAについて一言もふれていない事をおわび致します。

りました時の事です。

多分、当時小学校の五年か六年の生徒でしょう、職員室へ入ってワラ判紙をもらいに来ていました。このワラ判紙はクラスで使用するもので学用品は必要の都合で、学校から出していたものです。当時、物資不足の折柄で、照井校長の前でその生徒が対等に話合っているところを見ました。このときの子供の人格を認めつつ、子供を愛はしむ校長の態度と、校長の前と雖も主張すべきは主張する子供の態度とに教育の成果の一断面を見せつけられた私は「これは立派な学校である」とすべてを判断したわけです。幸い、次女は入学しましたが、長女の転校はまだ出来ませんでした。妹が入学しているという、一つの条件が新に出来た事から長女も何人かの転校希望者の中でテストをうけ、その年の五月頃だと思いますが、当時の鈴木先生原田先生等のおはからいで、どうやら転入出来る事になりました。

こうして明星学園と私の関係が子供を通じて出来、以来、三女、四女の全部の子供が明星学園へ通学致しております。そして子供達はノビノビと生活し、勉強し、一年一年と生長して参っております。

こうした学校生活を経てから彼女達が如何なる人生を送り作り出していくかは判りませんが、照井校長の居られる限り私の教育に関しては悔いはありません。

ある日

日光へいったこと

一年 川上幸子

きょうは、日光へいく日なので、うれしくてうれしくて、わたしは五じにひとりで目がさめました。しばらくして、ひろ子ちゃんもおきてきて、

「きょうは、日光にいくんでしょ」

といったから、

「そうよ」

と、わたしはいいました。

はじめ、ちかてつにのって、あさくさからこんどはきしゃのような、とつきゅうでんしゃにのりました。

でんしゃの中では、ジュースをのんだり、アイスクリームをたべたりして、日光のえきにつきました。えきには、はたをもった人がなんにんもたっていました。

はたをもったひとりの人が、おとうさまとはなして、みんなでじどうしゃにのりました。

いろいろうっているおみせまでいってそこで、おひるごはんをたべて、いっつきしてから、とうしようぐうを見にいきました。

あんないのおねえさんがいろいろせつめいをしました。そしたら、ゆうだちがふってきました。だから、ようめいもんの下であまやどりをしました。

あめがすこしやんだので、また見ました。

おとうさまがあんないのおねえさんに

「きょうは、もうつかれたから、これくらいでいいです」

だから、あんないのおねえさんとおわかれをしました。そしておひるごはんをたべたおみせにいて、おにもつをとって、こんどはバスにのりました。すこしバスの中でねむってしまいました。

目がさめたら、バスはお山をのぼっていて、みちがくねくねまがって、なんだか、おちそうでした。だから、おかあさまに、しがみつきました。

くねくねくねくねとのぼって、おみせのあるところへきました。バスをおりると、みずうみが見えました。

こんどはりよかんにいきました。にかにあがつて、おへやにはいりました。男の人が

「すぐ、おふろへごあんないをしましゅう」と、いいました。

だから、すぐ、ゆかたにかえて、おふろへいきました。おふろはおくすりのようなにおいがして、

「いおうのにおいよ」と、おかあさまがいました。

ごはんをたべてから、おとうさまといっしょに、しりとりあそびや、いろいろのことをしてあそびました。

つぎの日は、みんなでげんのたきを見にいきました。

たきは上のほうからザーザーとお

ちていました。水は白く見えたり、水いろに見えたりしました。

こんどは、バスにのって、あけちだいというところへいきました。

ロープウエーにのって、お山の上にくくと、いま見たげんのたきや、みずうみが見えました。ぼうえんきようで見たら、すぐそこへきたように、大きく見えました。

ロープウエーにのって、バスにのってまたみずうみのところにかえて、しよくどうでおひるごはんをたべました。それからちゅうぜんじこのゆうらんせんにのりました。

青いいろをした水でした。

おふねをおりてから、うぐいすぶえをかってもらいました。

たくさんおさかなをかつているところを見るつもりでしたけど、みんなつかれたから、りよかんにかえりました。

つぎの日は、りよかんの人に、「さよなら」をいって、じどうしゃで、ちゅうぜんじえきへいきました。

それからバスにのって、つぎにケーブルカーにのって、お山をどんどんおりました。それからまたでんしゃにのって日光のえきにつきました。

りよかんで、おふとんをかけてねたので、あつくてあつくてあせがでてきました。

だいぶんまって、とつきゅうでんしゃにのりました。でんしゃの中では、サンディッチをたべたり、ひろちゃんと

かしやさんごっこをしたりしていたら、いつのまにかあさくさにつきました

中野の歴史を調べて

小五 若林 博

ぼくは、ぼくのふるさとである、中野区の歴史を、この夏休みに調べてみた。

そしたら、中野の昭和通りには、寺が多く、河竹黙阿弥の墓や、新井白石、吉良上野介の墓があった。

とくに、感じた事は、高德寺の新井白石夫妻の墓だった。

漢学の大家である、新井白石の墓は、四角い石に、新井氏と書いてあるだけで水はからから、花は一本もなく、あたりは、草がのびほうだった。

が、やはり、大家の墓だけあって、四方を石のさくに、くさをめぐらして、だいいじにあってあった。でも、ちよつと他の墓に、くらべて、ひんじやくだった。

ぼくは「子孫が、いないのかな」と、思った。もし子孫が、いるなら白石の墓をあんなふうにみすばらしく、しておくはずがない。

又、

「白石は、はじめは有名でなかったが、死後に有名になったのではないかな」とも思った。

さて、新井白石の墓の事は、このくらいにして、次に、めずらしい、吉良上野介歴代の墓を話そう。

吉良上野介の歴代の墓は碑になっていて五本立っていた。

いずれも、上にこま犬の頭のような形の石が乗っていて、中ごろに、火の国と書いてあった。変った墓だなと思う。

では、この調査に当って苦しかったこと、くやしかった事などを、話してみよう。

まず、苦しかった事。

第一は、自転車をご事だった。実地調査の時ぐるぐるまわる自転車を使った中野には、坂が多いので、ももが、とてもいたくなかった。帰ったとたん、ガクンとなってしまった。

第二には、頭を下げる事だった。

まず道を聞くのに、ぼうしをとり、ていねいな言葉をつかい、ペコペコする。しまいには、首すじがいたくなるほどだった。

でも、そうしたかいがあつて、いちいち、ていねいに、わかりやすく、おしえてもらえたので、たいして、目的地をさがすのに時間をとらなかつた。

こんな、苦しみがあつたけど、最後までやったので、とてもいい勉強ができた。

次に、くやしかった事。暑いさ中をいまわりして写真をとって来て、フィルムを現ぞう、焼きつけをしてもらった。

そしたら、なんと、はつきり写っているのは、一枚だけ。

それをみた時は、くやしいような、悲しいような、なんと言つていいかわから

ない暗い思いがした。

だって暑いさ中を苦心してとつた写真が一枚だけしか写っていないのだから、ほんとに暗い思いだった。

それで、もう一度まわつて来た。

けれど、まだはつきりしないものが二、三枚あつた。でも、まあまあ成功だった。

ぼくは、来年もこういうことをしてみたいと思う。それには、この調査がいいカギとなるだろう。

来年は、もっとすばらしい勉強をしてみようと思う。

この調査を足場として、もっともつとすばらしいものを、しらべて、成功させよう。

「静かな夜」

中三 渡辺 忍

庭のなしの木の花が

つぼみをわつた。

おとなりのサクラの花は、

さかんに、ひらき始めている。

今日は、静かな夜だ、

窓からもれる、

青い月の光

そつと窓からのぞいた。

なんてきれいな夜だろう。

星は、かがやき、

サクラの花は

月に照らされ

うすべに色にはほえんでいる。
なしの花は、うす青く、

やすらかにねむっている。

風が吹いて来た、

サクラの花びらが一枚ちつていく

ヒラヒラと音をたてながら、

ちつていく。

佐渡弥彦国定公園

高一 勅使河原郁子

何百年のいや何千年の樹令だろうか。

真直空に向つて延びている杉。

ひんやりとした空気が私を包んだ。

猛暑だというのにこの涼しさ。

私は弥彦神社の前に立っている。

何か不安な事件が私の頭にひらめいた。

三、四年前の元旦の惨事。その傷跡も今はすっかり姿を消した。

二度と、再びあの惨事を起すまいと老樹達は願っている。

それを静かに聞き入れている官幣大社。

心の清い人でないと仰ぎ見れない様なお社。

上を見た。

お社の屋根から登つて行く様に見える小箱。

「ロープウェーだ。」弟が歓声を上げた。

フラリ、フラリ、生きた心地もない。

定員二十六名。

二十六の命は三本のロープにかかっている。

全長千メートル。

高低差四百八十メートル。

速度毎秒三・六メートル。

絵で見たロープウェー。

遊園地に乗ったロープウェー。

実際に乗って味わったロープウェー。

私は相当固くなっていたらしい。掌は汗でぐっしょり。

私は今弥彦山頂に立っている。

青い大きな空が一層大きくなって、

夏の山、平野、川、島、海を見降している。

下を見た。

弥彦神社は老樹に囲まれはるか眼下に治まっている。

私の真正面には弥彦競輪場が見える。

山麓の木の葉の深緑が心にしみる。

「上に行こう。」父が言つた。

よい、ドン。フウフウ言つて展望台まで一登り。

普通なら汗ぐっしょりになるのに今は一滴も出ない。

私は今展望台に立っている。

大パノマラを広げたようなすばらしい展望。

右を見た。

弥彦の連山から次第に目を落す。はるか下方に海水浴を楽しむ人々が見えた。

寺泊だ。

それから先は青い青い海原。

水平線に煙が一本。

遊覧船かな。漁船かな。それとも佐渡へ行く巡廻船かな。

「佐渡だ。」私は言った。

海の潮風が私の首筋を通って行く。

私は今展望台に立っている。

目は左方に移る。

前を見た。

ボーッとかすみながら佐渡が目止まった。

左端には沢崎燈台がある。

でも今日は見えない。

日本で一番裕福な島。

佐渡ヶ島。

「あの放水路は。」母の徒弟が言った。

鳥の様な気持になって、

私は今展望台に立っている。

目はさらに左方に移る。

左を見た。

大きな平野が目飛び込んで来た。

深緑に包まれ、稲穂は待っている。

農民の「豊作だ。」という言葉葉を、

蒲原平野の右よりに直線の銀帯がしかれ

ている。

信濃川の氾濫を防ぐ為に作られた放水

路。

美しい自然の中に入った人工的美の放水

路。

銀の水は静かに日本海に注ぎ出ている。

五年、続きの豊作を夢みて。

ちんちようげと私

中三 徳照弥寿子

ただいま。あらっ？ウーン良いにおい、なんだろうなあこれだわフツッ良いにおいのするはず、玄関の横にちんちようげの花が一枝ボンと入れてある。紫と白のちんちようげ、私は花の中で彼女が一番好き、あのねーもしかしたらちんちようげって貴婦人が化けているのかもしれないそうさ、きつそうさだわ、もし何年後でもいいからちんちようげのようなおいの香水ができたらうれしいわー彼女を体にふりかけ町を歩くみんなふりむいて私に笑いかける。そして「お茶はいかがですか」と素敵な可愛いいきつ茶店にさそわれる。

音楽が流れるように美しい、どっかのこわーいこわーいおじちゃんが出来た。すぐおこるといふ評判、私うっかりしてそのおじちゃんとぶつかってしまった。もう完全にだめだと思ったの。そしてそのおじちゃんフウッと大きく息をすうとニコニコしながら「ちんちようげのような子だねー」ですって。この間ねえ、ちんちようげの花にはおずりしてたのよ。そしたら壁にはあった大スタターが写真から飛び出して来て「もうちんちようげの香水はできたの、それはどこに売ってるの、そして大変失礼だけど高いかしら？」ですって——ねえちんちようげって素敵でしょう。本当に愛する

ちんちようげ私は大好きです。

千倉の生活

小四 善方 真理子

宇佐見さんの家へ、グループ学習に行った。その日は、千倉へ行くので体かむずむずしている。今日は紙しばい作りのしあげの日なのに、紙しばいをもっているリーダーの加藤君が、九時をすぎているのにまだこない。二人でしばらく加藤君がくるまでマンガをよんでいた。こうやってまってるかもしれない、と思つて私と宇佐見さんと二人で、よびに行つた。歩きながら私はきつと、またやりたくないから、さぼっているにちがいない。と思つた。

五／六分歩いて加藤君の家についた。シーンとしていてだれもいない。るすだと思つたら、台所のまどががらあきだつた。「よんでみようか。」と宇佐見さんにいったら「うん。」と言つて「まりこちゃんよびなさいよ」といった。私は「いやだなあ、と思つた。でもよんでみた。でも返事はなかった。三三べん「加藤君！」と二たりでよんだ。そうしたら加藤君の家のとなりのこが「はあい、はあい。」なんていつていた。

そうしたらどこかのおばさんが「加藤さんによろしく。今江の島へいっていますよ。」と言いました。しょうがないので宇佐見さんの家へ向かつて歩きだした。

歩きながら私と宇佐見さんで「ほんとに加藤君でやあね」なんて話しながら行きました。しょうがないので絵をかくことにした。紙しばい作りなのでみんな、えのぐはもっていた。でもいざとなるとなにかをわかんない。やとと菊地君をかき初めて、えのぐをぬろうと思つたら、もう十一時なのでいそいで帰つてしたくをして十一時半ごろ家をでて新宿駅につきました。しばらくして鴨川行のりきました。三時間くらい乗って千倉につきました。タクシーに乗って行きました。けしきをみながら、「来年はこの道をおくんだな」とおもつた。りょうについたのは、四時ごろだったけど、いせよく、海へいきました。もつと波が荒れると思つたら、わりあいしずかでした。一時間ぐらいいそんで帰った。

八月二十二日(晴)

「もうあした帰るんだな」と思いながら海へ来た。しばらく水の中でポチャポチャしてたら、おとうさんとおかあさんがきた。そしたら隆ちゃんがかけていって。そして私のところへきて「おかあさんたちって、魚をとるからってあみとばけつもってきてんの」とニヤニヤわらいながら、さもおかしそうに言つた。それから町田先生が隆に「どうだ、隆ちゃんうきをつけて先生といっしょにこないか」と言つた。隆ちゃんは、まえくり山君にばうはていの所までつれていってもらったので、自信たっぷりなで「うん」と元気よく言つた。しばらくして、おき

の方を見たら、隆ちゃんと町田先生がばうはていよりもおきのほうにいた。私はそれを見て「隆ちゃん、こわがってないんじゃないかな。」と思っていた。すこしたったらもうそばまで隆ちゃんたちがきていた。あがつきたらおかあさんがしんばいして「なかなかった。」なんていっていました。十一時になったのでビーチコートきました。でも私は、町田先生よりも黒くなりたいたから、りょうにビーチコートをおいてきました。

岸先生の家のポコちゃんとうちの六人で、いわの水がたまっている所へきて魚をとりました。りょうに帰ってごはんを食べて昼ねをしました。起きてからも今日午後は海に行きませんでした。

曇のち雨

朝、起きたら雲っていた。せっかくさいごの日なのになと思つた。ごはんがすんだら、みよちゃんがカレーライスを作っているのを見てました。たかしちゃんが、おかあさんに海にいくといったので、目をひろいにきました。明星学園の先生たちがつくったこやを、町田先生たちがこわしていました。海に流れている川の所まできました。おかあさんは、ブローチのげんりようにする、木ばっかりひろって「これはちよっと大きすぎるわね。こんなべつたりしてんのなんてつまないわね。こういうふうにだんになつていいのいいのね。」なんていっていました。帰ってきてからおふろにはいつてから、ライスカレーを食べてから、おとう

さんたちが帰るしたくをしてくれたので私と隆とおねえちゃんと、くり山君大くま君たちで、バレーボールのたまで天下おとしをしました。くり山君が天下の時

家の中でやったので、電気がさがとれてしまいました。それをやめて帰るしたくをはじめました。しおわった所に小形バスがきたのでのった千倉の駅でじゅんきゅうにのりました。汽車の中で、はず向かいにくりやまくんたちがいました。それで「アイスクリームやをよんだのにべんとうやがくるでやんの、おれたちよっぽどくいしんばに見えるんだな。」なんて大声で言っていました。新宿駅から三鷹まできて三鷹から、すーっとタクシーで北うらまできて、とことと家まできてベルをジューっとならしながら、やつと家についた、と思つてホッとししました。

「無力」

高二 高橋 乃利恵

そこにいる脳なしのお前よ、

お前はいつもボートとしている。

やりたい事、しなければいけない事が

山程有る。

それを知りながら、……

お前は、いつも、ボートとしている。

バカな奴だ！

と決めつけたいが

お前は可愛い、いや哀れだ。

自分の希望に向つて進んで行けない、

いや、進もうとしない！
努力しない！……

怠け物のお前よ、

お前が我に返り、

本気で、学問に、身を入れたら

大いに遊べ、

遊べ。

遊んでしまえ！……

「夜」

高二 熊谷 多勢子

夜がこっそりと地面をはうようにやってくる。

そして、私の囲り一面、暗く包んだ。

固く、かこまれた四角形な

だれもわからないような、隠れた部屋

しかし、私のかすかな燈は燃えつづけ消えなかった。

小さな力ではあったが、……

そうして夜は広く、一面霧のように

広が、^{とも}灯はその中でうるんでいた。

又明日も今夜のように

やってくるのです。

×

×

×

「一人言」

中三 徳照弥寿子

痛い！ やめて下さい本当に痛いんだ。

貴方達は、私をきずだらけにするつもりですか。

ですか。

そんなひどい事はありませんよ

貴方はきずをすれば、すぐやさしいお

母達にほうたいをしてもらつたり

ちよっとこわそうだけど、上手なお医者

様に見ていただければそれでいいでしょう

だけど私にはだれもそんな事をしてくれ

ない

悲しいな――

でも私はみな様方のお勉強の助けをする

ためにこうして

生まれてきたのですから、大きな体で乗

られても、おいしそうなおべんとうを

見せられても、けしこむでキュウキュウ

とすられてもぐつとがまんしますだれだ

ってそれぞれに与えられた役目がある

し、また少しでも貴方達の助けになるこ

とはとてもうれしい事なのですから。

だけど、お願いですどうぞ私の顔や手足

や体にきずやいたずらをしないで下さい

い。そうすれば私は、ぐつと長生きでき

るのです。貴方達だって早く死にたくない

いでしょう？ ああ、でも私は云いたい

事を今云つてはつとしました。でももう

すぐご主人たちのいらつしやることです

し、おしまいにします。以上は朝の机の

一人言でした。

特集

自分達を見つめる

この三十五周年誌を発行するにはいろいろ問題がありました。まずその出発点が「三十五周年誌を発行しようじゃないかそうしようじゃないか」と言うごく浮わつたものだったのですが、計画をたてて行く内に最初からの出発点が間違っている事に気がつき今までの計画をゴハ算にして立て直したのは夏休みを直前に控えての事でした。

ですから再出発した時は何を中心にしてこの文集を発行しようかと、何回も議論が重ねられました。その結果、今いろいろな場所でいろいろな角度から問題にされている「ティンエージャー」——私達が属する「十代」とは、一体何んなのか自分達は一体何を考え、何をしようとしているのか、と言う事を明星三十五年の歴史の中で描いてみる事にしたのです。新聞、映画その他で問題にされている、私達の世代の真実の姿を知らないままに「それ等？」にホンロウされない為にも又真実の姿を知らないままに私達の世代を「問題」にする「それ等？」に對抗する為にも、ここで「自分達」と言うものを見つめる事は非常に重大な事だと思ふのです。それにまず「自分自身」を知らなくては全ての面でどうにもならないのではないのでしょうか。

その「自己を知る」為には何を材料にしたらよいか、——どんな方法で行ったら最も私達の出来得る範囲内で最大の効果が上げられるか、——これも毎日議論を重ねようやく夏休み前迄に、「大学入試

制度」「青少年犯罪」「親と子の問題」「明星生の生活態度」の四つの問題について、いろいろ分析する事にしました。「大学入試」は極言すれば現在の学生達にはどうしても黙って通過する事の出来ない大きな関門の一つです。それは大きな関門だけに私達学生に与える影響も「善」「悪」共に多く含んでいます。この問題に対して、——と言うより、そう言う問題を作り出している社会をどのように自分達は見ているか、——そんな所から自分達が分析出来ると思うのです。「自分達を分析する」と言う問題は非常に抽象的なものです。それを解決する具体的な材料としては「大学入試」は重要なものです。「青少年犯罪」にしてもそうです。その原因をさぐれば、社会の混乱や、その他数々の問題が出て来ます。果して非行少年個人の心の弱さが全ての原因なのでしょう、——「親と子」は、戦前戦後の教育の違いによって生ずる考え方の相違と言うものであり、私達の生活にじかに触れている事ですし、「青少年犯罪」とも「大学入試」とも切りはなして考える事は出来ない問題です。そんな中で明星生は「強く、正しく、明らかに」モットーの下に三十五年間育って来てどうなっているのだろうか、——この四つの問題を私達自身や仲間がどの様に見ているか、それを発見する事は自分達の姿を発見する事の糸口になるのではないのでしょうか。

これ等の問題について文芸部では夏休みを費して文芸部なりの、原因影響等に対する見解を出しました。その見解を土台に卒業生をお訪ねしたり、父兄の方に手紙を出したりして、いろいろな角度から分析してみました。結果的に見れば、この特集で自分達を発見する、と言うより、むしろこの特集記事を材料にして自分達を発見するように努力する、と言う風な形になってしまいました。が、これからの私達に残されている仕事はここに出た意見を単なる空論に終らせず、如何にして実行にうつすかと言う事ではないでしょうか。

海外の友達への手紙

▽……今度の文集の特集記事して取り上げた中には、自分達が今まで足を踏みこんだ事の無い、……△
 ▽……と言うより、踏みこもうとしなかった方面の意見をいろいろと聞いている。訪問、他……△
 ▽……校生との座談会等、——それ等は皆「自分達」と言うものを発見する為の、言わばその謎……△
 ▽……を解く鍵のような役割を果たしているのだが、外国へは、一体日本以外の国々で、自分達が……△
 ▽……んな風に考えている問題をどのように受とっているか、それを知る為に手紙を書いてみた。……△

海外の友への手紙

明星学園の編集部

始めまして。突然御便り申上げます非礼を御赦し下さい。私たちは日本の明星学園高等学校文芸部の編集委員です。

さて今度私たちは、世界の現実の問題に就て、あなた方と私たちの考え方に何か共通の点があるか、或はどういうところが相違しているかを知りたいと思っています。私たちはあなた方のことは何も知りませんが、あなた方が私たちの人生問題に就てどう御考えになるか、又あなた方の人生の悩みは一体何なのかということに深い関心をもって居ります。日本では、青年男女によって行われる犯罪の数が、この数年間にだんだん多くなって来ています。就中、所謂十代の少年少女による犯罪は驚くべきものです。何故、彼らがそんな乱暴な悪辣な罪を犯さなければならぬのでしょうか。私たちはそのことを長い間議論して次のような結論を出してみました。

第一に、大人と子供の社会に対する考え方が全く違っていることです。大人は相変らず古い昔の夢を追いつつ

けています。私たちは全人類の幸福のために新しい世の中を私たちの国土に築こうと懸命です。偏見と偽善に満ちた古い伝統や因襲などは、世界平和の達成のためには百害あって一利なしです。だが、大人はそういう既制道徳ばかり振廻して私たち若ものを理解してくれようとはしません。そのため私たち若い世代のものの中には、家を離れ、一人で理想に向おうとするものも沢山います。その中には生活に負け、この世の誘惑に負けて悪の道に入ってしまうものも出ます。

第二に、私たちの周囲の社会は余りにも不安定です。私たちは自分の政府を全然信頼できません。何故なら彼らは国民の幸福なぞ気にしてはいないからです。更に原爆です。人類は早く原子力の平和利用だけを考えないなら、やがて自分自身の手で自分を滅してしまうのではないのでしょうか。とに角、世界は強い人々以外にはだんだん住みにくくなって来ています。弱い人々が瞬間的の楽しみを求めてしまうのも当然ではないでしょうか。

以上のことに就てあなた方は如何御考えになりますか私たちの結論を御批判下さり、若い世代の問題を如何解決したらよいかわドバイスして下さいませんか。大人と子供の問題に就ては皆さんと私たちの間にも共通したも

のがあるのではないのでしょうか。
 あなた方にはあなた方の御両親や大人の人たちにあなた方の問題を理解させる名案があるのでしょうか。何卒私たちの質問に答を御寄せ下さい。御便りを御待ちします。
 草々

ドイツのお友達より

—— 明星生の質問に答えて ——

文芸部の皆様、
 ずっと前に御手紙いただきましたのに、仕事に追われていましたので、すぐに御返事できませんでした。申し訳ありません。

皆様の御質問には沢山の御返事が必要で、それを書いたらきつと一冊の本ができることでしょう。できるだけ短くまとめてみます。

皆様の御手紙で一番大切な問題は青少年犯罪のことだと思っています。ドイツでも全く同様の問題がありますが、彼らの犯罪の動機は皆様が御手紙で述べられていたこととは全然違っています。ドイツではその犯罪の大部分は破壊された家庭が原因です。多くの親たちが自分の子供の面倒を見ないのです。そういう親は子供のことでわずらわされたくないのです。ですから彼らは子供にあり余る自由と、あり余るお金を与えるのです。すると子供はその自由で飽きて新しい刺激を求めます。

こういう新しい娯楽は始めは犯罪と無関係なのですが結局最後にはひどい犯罪を犯す破目になるのです。こういう惨めな事件の起きるもう一つの原因は若い人々が家庭で調和を保っていない場合です。彼らの両親の結婚が不幸に終って満足な家庭を作れないからです。あなた方の国の大体は古い昔の夢を追っていると言われますが、私たちの両親も、国の伝統が戦後いろいろ変って来たか

らと言って、古い因襲とか伝統を捨てるには及ばないと思うのです。もうアメリカの影響が急速に新しい慣習を作っていますし、二つの戦争（第一次、第二次世界大戦のこと）がドイツのあらゆる伝統をくつがえしてしまつたのです。だから、若者が罪を犯すのは、大人が頑固に因襲を守っているせいではなくて、おびたしいお金と自由で甘やかされているせいであることがおわかりと思います。

皆様はこういう問題を如何に解決すべきかお尋ねになりましたが、私にはそれは余りに難かし過ぎると思います。沢山の有名なお方がこの問題を解決しようとして来たが、本当の解決は末だ出来て居りません。多くの計画がこういう子供たちを救おうとして企てられて来ましたが、彼らにも世の中で役に立つ方面で活躍する機会がいろいろと与えられているのに、彼らはとばく場などの悪い所にばかり入りびたるのです。

さて、皆様の次の質問ですが、皆様は自分の政府を信じられないと言つて居られますが私たちは彼らが私たちの生活のためにできるだけのことをしてくれと確信し又彼らが良い政府を作るのを知つて投票するのですから国の責任ある人々の間に違反や汚職はないはずじゃありませんか。もし彼らがそんなひどいことができるなら、そんな人に投票しなければよいじゃありませんか。だからその政策に必ずしも満足できなくても私たちは政府を信頼しているわけでしょう。

終りに、原爆のことですが、私たちは皆、原爆の恐しさを知っていますし、私たち若いものは皆それを大変心配しています。私たちは原爆の製造を望んでいませんし皆が恐れている限りそれが使われるとも思えません。二大強国アメリカとソ連は軍備の点では互角のようですし戦争が起れば、二つながら互に滅しあうことでしよう。保証はできないにしても、私たちは常識を信じます。原動力は平和目的のためにだけ用いられねばなりません。

皆様の御質問に何とかお答えできていればと思います。御利用いただければ幸いです。またいつか私の意見や私の国の青少年の意見を如何考えられるか御返事いただけたらと思います。

カリタス・グロス
(ドイツ ハンブルグにて)

イタリアの先生から

初めに、御尋ねの問題は我々すべてを悩ませている太問題であるだけに明快な解決はむずかしい。従つてこれは私の個人的見解であることを御断りしておきます。

先ず現在十代の青少年が多くの犯罪を犯しているのも事実ですが、更に多くの悲惨な犯罪は、大人たちが巧妙な手口で一攫千金をねらつて大がかりにやっているのだと言えます。青少年による犯罪は多くは頭にカッと血が上つて衝動的にやつてしまったもので、綿密に計画したのなどは少いようです。

このような年のいかに若ものの犯罪が何故近年増加しているのか、その最も大きな原因はこの前の戦争であり、母は忙し過ぎ、父は戦野に馳り出されていたために両親の手が行届かなかつたことにありましょう。両親こそ青少年の最も大切な教育者です。学校教育も青年学級も、どんなに立派なものであつても、両親の愛情に代ることはできません。

戦争の恐ろしい破壊力は、生命とか財産の価値に対する道徳観をも傷つけその世界不安は「我が人生は短し」と言つた恐怖心を育て、そのため利己的で利根的な快楽を求めている人も沢山います。視野の狭い考慮の浅い行為がよく見うけられます。

科学の時代と言われる現代の影響で、確信のない動揺

と不安の気持が生れています。科学さえも時には人生の安心立命の要因である健全な宗教的信仰に逆効果を与えています。こうした宗教的・道徳観の欠如した一般の風潮が、良心と責任のない頹廢した悪い傾向を生み出しています。例えば、あのどぎつい映画をごらん下さい。こうしたことは健全な信仰の精神があれば押さえられるはずなのに。

私も政治が青少年問題に少なからぬ悪影響を与えていると思います。世界的に急速に拡がっている最近の国家主義（これは真の愛国心とは大へん違つたものです）は国家の利己主義にはかなりません。これが国民大衆に悪い心を植えつけています。政治家たちが国家間に強奪、強盗、残虐などを正当化しようとするとき、どうして人々を目をつぶつて居られましょう。

近代教育もまた青少年に対して責務があると私は思います。最近の教育はどちらかと言うと生徒の興味本位に考えすぎ、団体訓練、自己陶冶の面に欠けているようです。一つの信念で鍛え抜こうという気持が弱いために、個々人の本能を押さえる理性の力も不足しています。こちらでは（あなたの方の国の制度はよく知りませんが）大ていの子供は十五才で卒業します。十五才と言えどもとても危険な年頃です。自分たちは利口なのだ。自分たちの両親より優れた教育を身につけたのだと自惚れて学窓を離れてゆきます。青年で、本当に自分の底知れぬ無智を痛感させられるのは大学教育を終えた少数のものだけです。人間は年をとり知識を身につけ研究すればするほど、それだけ深く自分が何も知らないことに気づくものなのです。多くの十代の犯罪は自分が利口だと錯覚し、一つ頭の切れるところを見せびらかせてやろうと思つたり、心の力が足りないところから起るのではありますまいか、知識のある人ならこんな具合に人生を失敗はしないのです。

また重税とインフレ政策によって物価を吊り上げた

いう点からも政治家に責任があります。世智辛い世の中は無情な窃盗犯を生み、切羽詰まった犯罪のもとになるのです。社会主義や共産主義は個人の財産の神聖な価値を知りません。また政府に所得税の申告をごまかしたり税金のがれの方法を考えたりするのも当然でしょうが、やはりこういう傾向は不道徳です。不道徳からろくなのは生れません。

以上、あなたの御質問に充分に答えられたとは思えませんが、少しでもあなたが社会を考える糧になればと思います。青少年犯罪の問題は世界的な問題で、国際的文化思想の交流によって考えるのがよからうと思います。大ていの国の国民は、もし政治家たちがその気になれば、みんな仲好くしたがつているのです。私たちがお互に各国を旅して知合いになれば、共通の話し合いの広場ができて、青少年問題の解決にも役立つことでしょう。

更にジェネレーションの考え方の相違ですが、年三十五才で人は青春に別れを告げ、別の世代に入ります。そしてもう青年を充分には理解できなくなります。青年のことを書いたものを読んだり学んだり考えたりはできても、もう共通の興味や関心を分かちあうことは不可能です。年が変わると人も変わります。わずかに青春と手をふれ、あえるものは作家とか教師くらいじゃないでしょうか。

(P・ブルック)

スイスの友だちより

—— 明星生の質問に答えて ——

あなたの第一の質問、世界の問題を各国々で共通に考えていることは何だろうということですが、平和な生活を送りたいという気持、これは世界共通の理念でしょう。小さい地域社会なら、皆が協力すれば平和を守るのも容易です。だが人口が増加するにつれて、人間は自国

の領土を拡げたいとか、複雑な利害関係が生じます。世界平和も一つでない世界の中に入ると面倒な問題になります。

「道にはずれた人々」も少人数ならば良い方向へ導くことも出来ましたが、住民が百万以上もいる大都市では大きな組織になっている愚連隊を善導しようとしても全く袋小路へ入ったみたいなのでしょう。

私たちの国でもいわゆる Teenage 問題があります。彼らは自分たちの年齢以上に見せたがったり、現在の自分の能力以上に背伸びしたり、派手に金を使ったりしたがりです。実際大なり小なり彼らには青年期の不安があるし、かあつとすると自殺もしくはねえせん。だが、こうしたロースト、ジェネレーションの問題はスイスでは他国に比して少い方だと思います。でも、大都市での生活ですと、きつと自然に十代の愚連隊も多いでしょうし、そういう若ものを救うのも並大抵ではありませんまい。小さい町村でもよくあることです。個人々々を指導するだけでなく、そうした組織を考慮すべきです。いわゆる悪い人も愚連隊集団の一部なのですから。

スイスのような小さい国では前に述べましたように数は少ないですが、若ものの中には、失恋とか金欠病とか家庭の問題などで苦しさを遁れようとするものはかなり居ます。こちらの現実逃避のよくある手は、自殺する代りに、アラブ人たちと戦っているアフリカのフランス軍の群に投じてしまうのです。

勿論大人と青年は受けた教育も違うから、社会生活に就ての考え方も大変違います。だが、年配の人々は精神的な思慮分別ある生活を実行して若い人々の模範となるべきです。いつの時代も、どこの世界も、新しい世代は新しい考え方を生み出し、それが生活の幅を拡げて来るわけだし、日常の出来事も変化して来るはずで。若い世代の社会に対する波紋がなければ世界は退屈なくらいに静かでしょう。

さて第二の御質問の原爆のことですが、私たちはあなた方ほどには危険を感じませんし、平和に対する脅威とも思いません。人類が滅亡することは先ずありません。人が騒ぐほどさし迫って感じられないのは、原爆については新聞雑誌でその破壊力を知っているだけです。あなたの国には実際に原爆が落とされたし、ひどい被害を受けたのだから、原爆による世の終末が事実として実感されるでしょう。私たちにそういう不運にあつていないのでピンと来ないのです。

ただ、これだけは言えます。第一次、第二次の世界大戦でも、二つの交戦国は大変危険な有毒ガスを沢山貯えていました。でも、そんなガスは実際には未だ使われていません—— 少くとも大規模には。もし使われていたら二つの大戦で優に一国以上の全人口を完全に撲滅していたことでしょう。あのヒトラーの政権下でさえも、人間の理性のおかげで用いられないですんだのです。ですから、原爆が今後大規模に用いられることは東西ともに先ずありません。万一使ったら、それは使った人たちの自滅なのですから。

以上私の個人的見解ですが御参考になりましたでしょうか。

(マックス・テシュデウム)

以上三つの国際通信は、文芸部で用意した前掲の質問に答えて下さったものです。カリタスさんは山本和子さんのドイツ時代のお友達、マックス君は水野靖子さんのオランダ時代英語のレッスンをとっていたお友達で二十一、二才、ブルック氏は同じく水野さんの英語の先生で五十才位のお方です。紙上を借りて山本さん水野さんの御世話に御礼申し上げます。

O・B を訪ねて

明星と言う学校は外部との接触が少いわりに卒業生との接触も少い。ごく限られた個人的なつながり以外に公の接触は「明星会」を通じてだけで余りなされてないようだ。これは「強く、正しく、朗らかに」のスローガンは三十五年前の事で新しい明星精神を作らなくてはいけないと言う私達にとっては大変困る事だ古い明星を知る為に、——その明星を卒業した人達がそれぞれの職場でどのような生活をしておられるか、訪問を試してみた。

矢口光子氏・農林省生活改善課

矢口さんの経歴 明星旧女学校昭和十六年第九回卒—

東京女子医大—農林省生活改善課。

日時 八月十九日十二時—一時半

所 霞ヶ関下車、駅から十分ほど行った所の食堂木村屋

記者 林典子（高校一年）室谷恭子（高校一年）

質問事項 仕事の事

質問事項

今の明星の自由教育に関する問題。

受験の事、

青少年の不良化。

（以下が矢口さんのお話して下さった事をまとめたものです）

敗戦。弟は戦死、お父さんは戦犯でとらわれてしまふ。その中で私とお姉さんとお母さんは、千葉の荒れはてた野原を開拓し始めたのです。とってもひどい生活でした。又附近の農村の生活もひどいものでした。衣食住、なんでもが、不合理で不潔でした。私が医者だった

ものですから、近所の農家のお嬢さんが夜中に体の調子が悪いから見てくれと言って来るのです。昼は畑仕事等で嫁さんのあいている時間は、夜中しかないので。そして見てもらっても払う金がないから、秋の収穫時まで待って下さい。お米が何かでかえしますから」と言うのです。

農村では医者と葬儀屋が一緒になってしまった様な状態なのです。何ヶ月も床に伏して、死ぬ一時間前や死んでしまってから医者を呼ぶといった様に。私は「これじゃだめだ」「こんな事じゃ」と思いました。

農村の成人が一人一人自分の考えを持つ「考える人」になる様教育しなくては、と悩んでいたところに、たまに新聞に農林省に生活改善課が新しく設けられたという記事が載っていたのです。それを見て、私は「これだと思ったのです。一人で小さな農村で力んでいるよりも、もっと大きな組織の中に入って働こうと思ったのです。今の仕事をやろうと思ったきっかけはこんな事なん

ひとり

高三 熊谷礼子

真つ青な空を見上げて

大きく息をすい込みたい。

これが私のささやかな望み。

黙って 何も考えないで

一人ぼっちで居たい。

これが私のちかごろの願い。

何からも離別して 干渉を受けないで

一人で居たい。

それでいて

いつでも自分を受け入れてくれる——

そんな場所もほしい。

これが私の小さな望み。

迷 信

歯が抜けた

下歯が抜けた

知っていないから

屋根の上になげ

るなんとなく嬉しい

ですけれど

私ね、明星で育った事、本当に良かったと、喜んで居るのです。今の仕事と明星とが「考える人」っていう点でつながっているのです。明星は私を「考える人」に育ててくれたと思います。なぜなら、その頃の明星は、先生達も一緒になって一つの問題を興奮しながら議論し合うといった様な事が随分、さかんに行われていました。だから私は、社会に出て、ちょっとやそっとの事には驚かなかったんです。考える力を持っていたから。

「今の明星」良くは、わからないのですけれど、貴女方に聞いた所では、ずい分変わってしまったのね。コース制が出来たなんて、本当にいやですね。人数が多くなったのにも驚きました。明星の精神が失なわれつつあるという事で悩んでいるそうですけれど、時代が変わり、明星が変わったとしても、やはり「実行しながら考える。行動しながら考える」っていう事が大切じゃないかと思っています。学校全体が考える場になるっていう事。そして

そうなるために、もっと皆が話し合う時間っていうものをふやさなくてはいけないと思うんです。クラスで話し合うとか、グループで一つの問題を議論し合うといった様な貴女方には、今考えなければならぬ、話し合わないければならない事が、とっても沢山あると思います。話し合えば、自然に自分自身の考えというものを持つ様になるし、考えるっていう力がついてくると思います。

青少年の不良化という事も、話し合いの足りない事から起るんじゃないかと思います。大人と子供の考え方の差が大きすぎるから、青少年の不良化が生まれるのではないか、とおっしゃったでしょう。年代のひろきもあることだし、一人一人の考え方のちがひもあるし、考え方がちがうという事は、あたりまえだと思います。だって、もし、皆、同じ考え方だったとしたら、人生なんて本当に味気のないものになってしまうじゃありませんか。青少年の不良化は、考え方の相違から生まれるのではない

くて、話し合いが足りないのだと思います。

人間というのは、話し合いながら、お互に向上しているものなのでしょう。たとえば、私は、貴女の言っている事を聞いて成長しているし、貴女だって私の話している事を聞いて、少しずつ、成長しているのでしょう。

けれども不良少年だって言われてしまった人は、まわりの人々に不良少年だ、不良少年だと言われて、特別な目で「あの人は不良少年なのね」と見られ、又、自分も不良少年なのだと思い込んでしまつて、話し合う機会が全然なくなってしまうのだと思います。話し合わないで人間の向上なんて「考える人」になれ、なんて望めない事だと思っています。

そうして、今の社会は、話し合いの出来にくい状態にあると思うのです。確かに乱れています。今の社会は、上からおさえつけられて、それに従う、という、ボスと子分の関係にあるのです。これがいけないのですリーダーとグループといった関係になれば良いのです。社会全体が一つのグループ活動になって皆が同等の立場と考えれば、話し合うっていう事はそんなにむずかしい事ではないと思うのです。

今貴女方の一番大きな問題である、受験については、私達の時も、受験勉強は、はげしかったと思います。

小学校六年の時から補習授業が七時頃までありましたし女学校の時だつてずい分ひどかったんです。私は受験勉強というのが大嫌いだつたから、何もみませんでしたけれども。結局受験勉強という事においては、昔も今も変わりないと思います。社会状態は、私達の時は今の様に悪くはなかったけれども。社会状態の方は（この場合の社会状態というのは、今の大学の立場、生活の為の一つの手段になってしまつてゐる、という事）十年もすれば良くなると思います。

私は受験勉強する事は、悪い事だとは思わないのです。ぎりぎりの線で、はげしく勉強してみること、又

試験されるという事も、良い事だと思っています。

何か自分の進みたい道の為に勉強するのは良いと思うのです。しかし、受験の為の受験勉強をするのがとてもいけないと思います。受験の為だけの教育を受けると教育はあつても、教養のない自己主義な人間が出来てしまふと思います。そして今は、そんな人間が沢山作り出されつつあるのです。そんな人間を大量生産するいわゆる受験準備学校が、非常に多いっていう事なのです。

だから今の日本には、個性を伸ばして、自分の考えを持つ「考える人、行う人」を育てる明星の様な学校が必要なのだと思います。

皆を愛し、愛され自分自身の考えを持つ「考える人」に皆がなると本当に良いと思うのですが。

本当にそうだ。本当にそうだ。

矢口さんのお話しして下さる一言、一言に心から納得しながら、林さんと私は、うれしくなつてうなずきながらマカロニグラタンを味わつていた。

私達は「私は毎日毎日が、とってもいそがしいの、でも人間は暇よりも、いそがしい方がずっと、楽しいわね」と言いながら、以前一度、どこかで会つた事がある様に話しかけ、答えて下さつた矢口さんに、感謝し乍ら、お別れした。その夜「忙しい中をお会い下さつて、良いお話を聞かせていただき、御馳走までして下さつてありがとうございます。」と手紙を出した。

予期しなかつた返事がすぐ来た。

前文略す。

日頃考えている事がうまくお伝え出来ませんでした。何か通うものがあつたかしらと思つて居りましたが、お手紙でとても嬉しくございました。どうぞその御活動と、考えること、行う事、を大切になさつて、社会の礎石の力となつて下さい。

とてもうれしかった。そして、立派な方だと思つたのである。

富尾里瑠氏

記者 室谷・森本・林

八月十六日 日曜日

新制第一回の卒業生、富尾さんを阿佐ヶ谷の駅に近い静かな、お宅にお訪ねした。

商業美術のお仕事をしらっしゃるとのことだったので私は私なりのイメージを描いていたが、お会いしてみると、それとは反対に、白と紺のゆかたにシブイ帯を、きりっとしめて、出ていらつしやった。

おば様も、おいでになって、大変懐しそうに、明星の事を聞いていらつしやった。

まず初めに、お仕事の話から伺った。

商業美術と云っても範囲が広く、文化と文明を結びつけるのが、デザインの本分だそう。色々専門的な事を御説明下さったが、誠に申し訳ない事だが、よくわからなかったので、省略させていただくことにする。

一応こちらで用意してあった問題に、話を移した。

受験勉強、大学が就職への手段であること、予備校的な高校、いずれも私達の持っていた意見とは違っていた。

勉強することが、たとえ、受験の為であったにしても、本当に勉強に打ちこんですることが出来るのら、決して悪いことではない。学生として勉強することが、第一のなすべき義務であるとのことだった。

徹底した受験勉強に踏み切ることが出来ず、しないで済めば、いつまでもしない私達にとって耳の痛い御話だった。しかし、ガチガチ、つめこみ勉強ばかりしていると、岸さんみたいな人が出来るのではないかと、言ったら、それは明星から、その様な人が出来ないから、ひがみだと、一本クギをさされてしまった。

現在の明星についても、昔のままで居ては何にもなら

ない。他の学校も、種々な面で進歩して行く今、明星ももっと強い特色をうちださなくては、追いついていけないのではないだろうか……。

結局は、受験も、一流会社への就職も、勉強する事に

視野が狭い？

よって、その門を突破することが出来る。どんなことにも、より多くの知識を持つこと、つまり勉強

することが絶対だとのことだった。

又、青少年の不良化については、学校教育と家庭教育に、もっと密接な結びつきが、必要だとのこと、つまり私達が持つて行った受験難や就職難等の重荷よりも、家庭と学校のむすびつきがない時、その間に生じる種々な問題が原因になるのでは、ないかとおっしゃった。

この様な問題は、私達には身近すぎて、身辺にある原因に気が付かなかつた様な気がする。

又、一度不良と云われた人間は、その人を見る世間の目は、不良と云う観念を持って見る以上、彼等には、救いもないし、理解の得られない世間には、素直に生きていけないのではなからうか、つまり彼等を救うのは、暖い理解が必要だと言ふことを、おっしゃっていた。

この様に言っていただけのこととは、私達にとって、大変うれしいことだと思う。何でも「今の若い者は」式でかたづけがたがる大人が多い現在、私達の立場を、もっと理解してくれる人が、一人でも多くいてくれることを願っている。

結果としては、私達は、私達なりに考え、話し合った問題ではあるが、こうして色々お話をうかがっていると考える方があまいとも云うのか、かたより過ぎて視野が狭い様な気がしてならなかった。

御忙しい一日を、私達三人の為に、いろいろお話をし下された事を感謝すると共に、おば様やお家の方におもてなしを受け、大変御迷惑を、御かけしたことを、お許し下さいますよう。

大須賀住吉氏

大須賀住吉氏訪問記。八月の終りの暑い日、私は産経会館、写真部に大須賀さんをお訪ねした。五階の写真の部室の前で心臓がドキドキしてノックができな。それでも気を取り直してノックするとすぐに大須賀さんが出てきてくださった。何をどう話し始めて良いのか見当もつかなかったのだが、学校の事を話しているうちに、気持ちが落着いてしまつて、お昼過ぎ迄お邪魔をしてしまった。なによりも嬉しかったのは年令や時代の相違があるのに、大須賀さんが本当によく私達の考えを分けてくださった事で、私はそこに何か共通したものを感じた。後の文は大須賀さんとの大体の話をまとめたものであるが少しまとまりがつかないかもしれない。

「好きで写真を撮っていらつしやるんですか。」

「いやー。食うためですよ、僕の伯父が田舎で写真屋をやっていたんで、それで憶えたんです。」どこでも切実な問題ばかり、生きていくのはなんと大変なのだろうとふと思つてしまふ。それで

「現代の社会で不安の様なものは……」とたづねてみた。

「感じますね、写真の仕事っていうのは普通のサラリーマンとは違うものです。会社はただきちんと写真をとる事

写真スタジオにて

を要求するが、こっちは技術を磨かなくてはならない。その上給料は悪い。これから先どうして良いのか分りませんよ。やっぱり食べるっていう問題が切実ですからね。僕等のような大人でもなく子供でもないっていう時代には一層不安は大きいですね。独立すればいいけど、資金の面もあるし、今の日本の写真屋っていうのは技術を重くみませんからね」成程社会の不安は私達よりもずっと深いのは当然な事だ。なんといつても私達は親に保護されているのだから。

「明星はどうでしたか。明星にいたいんですけど、受験の面になると他校と比較にならないんです」

「そりゃそうでしょう。明星は元からそういう受験の為の勉強をする所ではありませんからね。僕は旧制の中学の時しかいませんでしたけど、コース制なんてありませんでした。そういうように分けられてコンプレックスのようなものを感じませんか。学校じゃどういふつもりなんだろう。受験に比重をかけているんですか。僕の時代には就職試験も受験も今程ひどくありませんでした。今の高校生は大変だと思いますね。自分の時間、自分のやりたい事をやるという時間がないんじゃないんですか。それなのにやれ思想とか、なんといつても、そんな事考える暇もないでしょう。僕等の中学の時は丁度戦争だったんです。だから教科書もしょっちゅう変わりましたよ。僕は勉強なんてしないで小説ばかり読んでました。その当時の社会は人間を一つの型にはめてこんで教育したんです。だから個性もなにもありませんでした。その点青少年の犯罪なんかも少なかったですね。それが戦後開放されたでしょ。男女の交際だってあの頃は隠れてするより他仕方がなかった、今はずい分自由でしょう?。明星なんか特にそうでしょ。」

青少年の犯罪の増加、発生の原因は、根本的には社会の有り方と人間との喰い違いからくるんだと思います。社会にしろ、人間にしろ一つの目的が許されない。それ

で混乱が生じる。これが根本的なものだと思うんです。だから行き当りバッタリになるんです。」

「大学については?」

「貴女は大学へ行くつもりですか。何の為に大学へ行くんですか。教養を身につける為なんですか。いふなら行かない方がいいですよ。大学へ行くんなら専門をやるべきです。僕は写真の専門の大学へ行っただけど、その中にも女の人が十五、六人はいました。でもそのうちで芽がでたという事は一人もいませんでした。もっとよく考えて行くべきです。でも勉強がしたいでしょう。それだったら大学へ行くべきでしょうね。」

受験にしても、日本の社会、状況、進歩をみて、自分の才能、趣好を考えてするのが良い、親の意見も強制されない程度なら必要、その点、明星の親は自由放任というよりも無関心じゃないんですか。勉強は体をこわさない程度にというより他仕方がないが、やるなら徹底的にやるべきですよ。大学が就職の為というのは認めざるを得ませんが、学校もよくその点を理解して職業教育をやるというんです。今の学校は中途半端ですからね。」

「進学の事にしても、他の事にしても家ではすぐ私の考え方が甘いというんですか?」

「いや、そうじゃないんですよ。だって貴女はまだ社会を本当には知らないんですから、知っている上で甘いとやら云えるでしょうけど、社会を知らない者は甘いのが当然でしょう。でも今の若い人というのは僕等の時の人よりもずっと行動的ですね。」

「でも私達ってなにか議論したり、話し合ったりして考えているだけで、実際行動しないような気がするんですよ。」

「今の若い人が観念的というのは言えるでしょうが、それが通る世の中をつくらばいいんです。観念と現実との間にでてる喰い違いを対決させ、それを解決していくところに人生の生きがいがあると思います。僕だって高

校の頃はずい分親に反撥しましたよ。でもそれが若さの特権だと思うんです。明星の生徒は自由にもっと、自分というものを伸ばしていつて欲しい気がします」

大須賀さんの話を聞いているうちに、私は自分の考えや云いたかった事を大須賀さんがよく判って下さっているという気がしてきた。いくら話しても話し足りないような気がする程、あれやこれやとしゃべってしまった。新聞部でいつか新聞に取り上げた「明星っ子の夢」の話をする、こんな事をおっしゃった。

「夢がありますか。でも僕等の時代の方がもっと夢らしい夢はあったでしょうね。今の社会には失望というよりは悲哀のようなものを感じますね」と

又、「平凡であるという事は人生で最も難しく、又幸福な事だと家では言われましたけど。」と言うと

「そうですね。それは人によりけりでしょう。僕はそうは思はない、そんなのは人生の最後に人が言う負け惜しみかもしれません。」と私を喜ばせる返事をして下さった。

最後に月並みだと思ったが、

「明星にいらして良かったですか?」と尋ねてみた。大須賀さんは

「さあ(ちよつと考えて)まあ、良かったでしょうねもし他の学校へ行っていたら、あの時代、上から押しつけられて、自分の考えも分らず、メチャクチャにされてしまったでしょうね。他の人はみんなどう言います?」と聞かれるので

「良かったっていうんですけど……」と答えると「そうですか。」と言って笑っていらした。

時間も大分たっていたので、私は大須賀さんにお別れして、又暑い街へ出た。けれど私は自分が一体何を三時間近くも話して、聞いてきたのか忘れてしまっていた。頭がボーとして、どうしても内容が断片的にしか思い出せなく、私は懸命に話をつなぎ合わせていた。

坪田正男氏

現在世間で騒がれている我々の身近かな問題として取り上げられている非行少年について、この二三年、少年犯罪が目に見えて増えていると言う事ですが、その原因はいったいどこにあるのでしょうか、又現在論議的になっている少年法の改正は少年犯罪の傾向への対策として本当に適切であるのでしょうか、そしてどのような部分が改正されるのでしょうか、というふうな疑問を抱きながら、又これらの問題の核心を聞きたく我々の先輩であり(第2回卒業)宜つ少年審判部第四課に居られる坪田正男氏を訪ねて色々とお尋ねしました。印象と云つたものは、少年審査部は実にモノモノしく陰気な所でしたが、予想外に坪田氏が明るく、親しみの持てる方であつた事で、その裏づけとして、明星生に対する特別な理解があつた事でした。それに当時の明星についての思ひ出話や、御自分の仕事等について色々とお話下された。

私達は、家事審判部や農林省を案内して頂き農林省の屋上で、私達の目的である本筋に入って頂きました。第一に世間で云われている非行少年とは一般の人達に云われる不良少年である。あやまちを犯した少年、又犯しそうな少年少女についての問題はどこにあるか、その原因として最も多い点は、先ず自己の要求が十分に満たされない場合が多く、それは大人が少年に対して、自分達の矛盾しきつた世界をかくそうとするばかりか、自分では実現の可能性のないエゴイスチックな理念の虚栄を押しつけようとして、親が上から子供に押しつけるため子供としての自由、権利が認められない場合とか、自分のしたい事が経済的にゆゑられないとかである、次に、生活の安定がなく、家庭内の不和とか、悪環境によるものなどであり、私達、文芸部で討議した非行少年たる者の原

因が、時代のづれ、現在社会の不安、大学受験のノイロ一ゼ、その他等と云つた事でしたが、このような点での不良化はほとんど少ないという事で、自分自身に負ける弱い意志が最も危いと言う事でした。

次に不良化した青少年は、少年審判部ではどう扱うのでしょうか、警察や検察庁から、このような少年を送ってきますと家庭裁判所調査官がその生立ち、身体、性格、家庭、学校、職場、友達等の環境を科学的に調査し、その結果にもとづいて裁判官が審判し、保護の方法をきめます。そしてそのさい審判は、その子の将来のためにも関係者にめいわくのかからぬためにも公開しない事になつてゐる。審判の結果、裁判官がさとして家に帰すとか家庭に帰して保護司が指導するとか、少年院等の施設に送つて教育する等の方法がある、がしかし小松川高校の女生徒殺しのような犯罪の場合は、少年であつても大人と全く同じ方法で裁判を受ける。

次に現在世論に騒がれている少年法の改正の必要については、いろいろな事を云っていますが、例えば戦争の影響とか、マスコミや、エログロ文化の影響とかいう理由で少年法の改正を押し通そうという考え方は、無暴である事は言うまでもない事です、必ずしもこれらの影響はないとはいえないのではないのでしょうか、そして、

少年審判所

この改正の根本に上つてゐる問題は、青少年

として扱う「年令」の問題である、それは先ず家庭裁判所側と検察庁側の先議権の問題で、現在は裁判所に先議権が強いが青少年の年令は現在、十四才から二十才までとなつていますが改正されるとすれば、十四才から十八才までとなる事になる。この年令の問題が重要視されるのは青少年の処分に関係するからでありその処分の根本が社会感情にあるため、現在のように非行少年の犯罪

が増えている時には当然この問題は大きく上るわけである。日本が法治国であり罰刑法定主義であるため、処分も自然厳罰主義になるのは当然の事である。又、問題の「練鑑ブルース」これは我々にも大いに考えさせられる問題である。その歌と云うのは、「身から出ましたサビゆえに、いやなポリ公にパクられて、手錠かけられ意見され、ついた所が裁判所………」という文句で始まるあの歌ですが、この歌はいったん飛び出すやいなやたちまち十代の人に異常な反響をまき起したそうです。又レコードにする直前、レコード製作基準管理委員会の勧告で製作を中止すると、今度は不発のヒットソグとして、いっそうマスコミの関心を集めたというように、世論の反対にあつて取り止めになつたはずですが「非行の少年がある限り、この歌は消えないそうです。いやこの世から消し去るよう我々が努力すべきではないでしょうか………」。

では最後に坪田氏が明星の生徒に一言「世の中を甘くみないで、人生を踏みはずさぬよう基礎的な勉強をしっかり」とつんで下さい。」

坂

坂の上から下を見ると

物が低く見える

その反対に

坂の下から上を見ると

高く見える

事件記者 白木東洋氏

八月十六日私達は井ノ頭線浜田山の三井ランド前にあるO・Bの白木東洋さんのお宅をお訪ねした。毎日新聞社の社会部の警視庁勤務の記者をしていらっしゃる方で俗に言う事件記者だそうです。人を訪問する事を初めて試みた私達かとまどつていると、「僕はいつも聞く方で聞かれる方は苦手なんです。気軽に何でも聞いて下さい」とおっしゃって下さったのでやっと落ちついて話し出すことが出来た。これも目には見えない親しさと明るさを持つていらっしゃることがそうさせたのでしょうか。

—記者は大変ですか。—

「生活のきまりがないから大変だなあ。夜中になっても帰れないことがある」

—この御職業についたのは御希望で—

「ええ、明星にいた時からです」

—じゃあ御希望のかになった今はどうお思いですか—

「いや、どうも思っています」

—近頃青少年の犯罪が多いですが、増加しているんでしょうか—

「僕は青少年の方ではないから詳しくわからないがね、増えていますよ、でもいろいろ意見があつてね」

白木さんはそう言つて席を立たれ、戻つていらつした時は青少年白書を持っていらつした。その時お父様らしい方が入つていらつして

「青少年犯罪か：フウン：と」おっしゃつて御自分の手帳をめくりながら

「警視庁の調べでは大変多くの増加で、戦後十三倍に上つている。昭和十六年は十七万人だったのが現在は百三十万を越えている状態で凶悪犯は七%から三〇%にのぼつている。一方家庭裁判所の方では戦前も戦後も、あま

り変わらず、昭和二十六年は十二万人、現在は十四万人。しかし警視庁は大から小まで調べ上げているけれど、家庭裁判所の方は、大の方だけ調べているんだよ。まあ増えている事には間違いないな」そう言われて又出ていらつした。

—その原因の主なもの、何でしょうか、家庭環境の悪い家などじゃ起りやすいんでしょう。—

「それもあるね」

—マスコミ等は—

「特に週刊誌がひどいね」

—週刊誌等は青少年に対する悪影響を考えているんでしょうか—

「そりゃあ、考えていますよ。しかし売ること考えなけりゃ。近頃不良週刊誌が大分騒がれていますね」

—ええ、週間朝日のネリカンブルース、御存知ですか—

「あれなんか相当批判があつたそうですね」

—社会的不安から犯罪が、起る事もありますか—

「そんな事は無いんじゃないだろうか、しかし犯罪を犯す者は必ず不良ではありませんね。酒乱の父親を殺した姉妹、あれは全然不良じゃあないし。あの事知っていますか」

—ええ

「そういうのは例外だが非行少年と言われる者は個人の性格的な欠陥が大きいんですね」

—大学受験の為に不良化した場合なんかありますか—

「ありますね、近頃は受験が難しいから何かしつかりした目的を持たないと落ちた場合なんかくずれやすいですね。皇太子の結婚の時の投石少年なんかは大学浪人でしたし多摩川の投やり少年、あの少年は高校浪人でしたし

いろいろな原因が上げられたが、私達をもっと自己をみきわめる必要があるのではないだろうか、

—昔の明星はいかがでしたか—

「楽しかったですね。僕はあの学校へ行って良かったと思えますよ」

—どんな所が良かったんでしょうか—

「のんびりしていて強制されないで楽しめた事でしよう」

—では、いけなかったことは—

「矢張のんびりし過ぎた所かな」

—その頃の自治会は活発でしたか、今は三年生が受雇や就職の為、ほとんどタッチしないので不活発なんです

「僕の頃もそうでしたし、やむをえない事だと思えますよ」

—先生と生徒の間なんか、今は親密ではないんですがどうでしたか—

「とても親しかつたですね、僕等なんかよく先生の家へ押しかけて行きましたよ」

—高校時代に将来の目的なんか持っていましたか—

「ええ僕は記者になろうと思っていました。なれるかどうかはわからないが思っていました」

—記者になれてうれしかったでしょうね—

「まあね」

—私達の二、三年生が今の勉強は受験や就職の為の勉強で本当の勉強ではない。それをする事は妥協だと言っているんですが。—

「妥協じゃないでしょう。時代に順応して生きていかなければならないしそうするのがあたり前じゃないかな」

これが根本的に違つている所だ。現在は順応して行くべきではないか、今その問題を解決する事は不可能である。将来、立派な人になり解決出来る人物になる事が先決問題ではないのか。

「お坊さん」

九月四日 私達は宝昌寺の住職をして
る秦慧孝さんをお訪ねした。小さなお子さ
んが二人あり、私達がインタビューしてい
る最中、可愛い顔を時々見せてくれました。

氏 孝 慧 秦

—なぜ、今の職につかれたのですか—
学生時代にぼんやりとは今の職について
考えていましたし、終戦をシャムで迎え
たことが大きな影響を興えました。...

兄姉達は上智大の方へいきましたし、だ
れか父の職をつぐべきだと思いましたし、...

—その頃の明星の教育について（明星は自由な学校だと
いわれますがどのようなふんいきでしたか？）

入学した時も十八名で、メンバーが少しは変りました
が、卒業の時も十八名で、校内で一番少いクラスで
した。その為に家庭的なふんいきがあり、個性をいか
す教育がとれたのでしようし、先生方は高等師範を出
た方で個性のある先生でした。自由といっても、その
時代の範囲内でしたし、（ルーズになることはなかつ
た）

—（学力の方は）

学力の方は他校との交流がなかったのわからなかつ
たが、他の所へいった時、二百名中八十番以内に入
っていたようでした。又、自分の希望する大学にも今
程生存競争が激しくなかったからでしょうが...、入
ったようですし。

—明星の特徴を先生方に尋ねると特長のない所が特長だ
といわれますが。...

どこの職場でも順応し、使いやすいといわれますね。

上智大でも一時明星の生徒を優先的に
入れた事もあったように思います。英
語が盛んでしてね。

僕としては明星に育てられたといっ

よいと思いますし、学生時代をそこで過したのは今で
もよかったと思っています。友達の中には他校へいっ
て自分という物をつかんだという人もいますね。

—明星の生徒は中流家庭が多く、少しルーズだといわれ
ますが。

自分の子供は職の關係で土地の人との接觸等、又、い
ろいろな階級の子供との接觸をはかり、野育ちにしま
いとも考え、地もとの学校に入れようかなども考え
ている。今は公立でも明星と教育方針もさ程変らない。
ここで明星もはっきりとした特色をだすべき時期にき
ていると思う。又、先の事（就職）もありますし。

—明星精神は「強く、正しく、ほがらかに」ですが、現
在の社会にはマッチしない不都合な言葉という生徒がい
ますが...

その頃その言葉はなかった。確かに一面ではなりた
ないともいえるでしょう。

—明星では大部先生が卒業生出身だときいたが...

—三分の一位だと思いますが...

—先生方が明星っ子とか、明星精神とかつかいますが、
私達としても少し反撥を感じるのですが...

その頃、そのような言葉は聞かれなかった。父兄、卒
業生が社会へ出て同僚や上役にはめられたりして、卒
業生の間で起ったのでしよう。

—先生方は昔は先生と生徒間の接觸がもつとあったとい
う声があるが。...いかがでしたか？

—他校から調べれば確かにいえたでしよう。いつでも先
生と話し合う程、それ程ではないでしよう。先生とは
気軽に話しかけたが、全部の先生にはあてはまらない
し、性質によりますし。余り昔の事をもちだし、あれ

これといった、昔の明星にもう一度花を咲かせような
どとは、老人が明治の事をなつかしむ気持と共通する
ものですし、ですから余り卒業生をいれる事は賛成で
きない。

—受験、就職の今の現状をどうお考ですか。

人口過剰の現状ですから

—明星も近頃、コース別二期制にして、これから四・四・
四制にしようとも考えているような体制に対して、学校
の受験化という声もあるが...

現在の社会にマッチする体制にしてもよい。卒業生が
明星で先生になるという現状は仕方がないが優秀な先
生をどんどん入れるべきだ。卒業生にも秀れた人もい
る事だし、経済的に問題もあるだろう。自分の望んで
いる学校に入れないという現状は改めるべきだし、学
問に力をいれたからといって、明星のモットーが崩れ
るということはないと思う。

—四・四・四制について（はっきりと私達もわからない
が）

はつきりとはわからないが、よい案ともいえるが、独
自のものを作ると、他校との交流も図れないし、転校
入学の場合はどうなるか？

—現在三年はクラブ活動は受験の為にいそがしいとい
う事を名目で、不協力的なのだが

その頃クラブ活動はなかったが、人数が少いから、個
性を重んじた教育ができた。

—現在、明星は事務局を作り、自転車売りでしたが、
どう思いますか。

—学校で学用品及び学業関係の必需品を売ってもよいが
それ以上は

—青少年の不良化について
悪質な出版物、映画を廃止するべきだし、世論もおこ
すべきだ。

『サラリーマン』佐藤雄二氏

夏休みの終り頃、私は丸の内の石油会社の佐藤さんを支那部の厚かましいお願いをもってお訪ねした。佐藤さんはお忙がしい中を一時間、色々話してくださったがよく分るようにとそれらを手紙にして送って下さった。

以下はその文面です。

一、明星教育について

「貴方の人生観は」と聞かれると、速答が出来ないと同時に、「明星精神について」と問われると返答に窮します。

同窓の人は、「何だか分らない所が明星の良さ」と片付けてしまいます。さて私が明星に在学したのは戦争酣の昭和十八年より戦後の混乱期の二十三年迄の五年間前半は軍国主義が学園教育を支配し、後半は教える側も教えられる側も、日常生活に追われ、真の教育、又明星精神の体得には少々難かしい時代でありました。但し、今振り返って見て、私達の学んだ明星精神は、強く明るい自由の精神であると思います。

卒業後、十有余年、何時も朗らかに明るい希望を持って、自分の意志の下に日常の行動が出来るのは、自然に養われた明星精神であると信じています。この自由については、あくまで責任の裏付けがある処のものでなければなりません。自分の言動に自由が与えられたからには自分が生活している社会を構成する一員としての秩序を守り、与えられた義務と責任を果してこそ、自由の権利の行使が許容されます。

明星教育の一つとして個人の尊重を挙げる事が出来るでしょう。自分の才能を伸ばす事は大いに奨励すべきであります。余りに偏重し、学業を放擲し、他の人に迷惑を掛ける事はさげねばなりません。

文芸部のアンケートの中に「妥協性に強く、実行力にかけ、物事を甘く見る傾向がある」とありますが、これは明星生が、比較的、家庭的に恵まれていた事に起因して居ります。但し、これは大多数の方が上級学校に進学され、そこで他の高校生と一緒に勉学する事により、現実の社会をより一層身近に感じる様になるので、心配する必要はないと思います。全然世間と没交渉でも困りますが、高校生の時代より余りコセコセする様では人間の発展が止ってしまいます。

二、青少年の悪化について

これも文芸部の纏めた御意見によると「世代の違いに

「地」

高二 茶 郷 穰

土に、生えた木をむりやりに、

切り倒してビルディングをそこにたてたなら

地が怒るのを知っているだろうか。

よる考え方の相違及び社会不安」を挙げておられますが自分達が悪の道に走ったとて、社会や大人の責任にする理由はありません。悪に染まるのは自分の意志が薄弱である為であります。善悪の判断を養う手段として、道徳教育、宗教教育が必要であり、これにも増して、御両親の躰を守る事が大切であります。現代青少年が皆前述の明星精神で述べた様に「強く明るく自由な生活」を行えば、この様な問題は起らぬと思います。高校生の本文は勉学でありますから、これに専心され、余暇をスポーツや芸術、音楽的に費す事をお奨めします。

三、大学の進学について

楽しかるべき学生生活も中学、高校、大学、就職と入試の連続であります。

さて高校の皆様も大学の入試準備について、大きな矛盾を感じているとお聞きしました。それでは何故一般に云われる良い大学への入学を希望するかと云えば、卒業後これも一般的に云われる良い会社へ就職しうる可能性が大となるからであります。良い会社に入ると、給与水準が高く、将来性があり、又福利厚生面等で利点が多い事により、所謂、安定した文化生活が営めます。

この逆の積極的な生き方としては、自己の才能を伸ばすか、社会事業等に身を投ずる方法もあります。勿論前者にも社会に貢献しうる仕事は沢山ありますから、一概にどちらの生き方が正しいという事は出来ません。一般的に云って、高等学校迄の知識及び経験の集積では、社会の荒波を乗り切るには不十分であります。そこで大多数の明星生は上級学校進学の資格を持つ恵まれた環境にありますので、自分の進むべき方向を御両親、先生方と相談され、早い時期に決めるべきであります。

皆様の中には大学受験準備の為に高校生活がスポイルされると云われる方がいますが目を外に転ずると、進学したくとも出来ない環境にある人のことも忘れてはなりません。

最後に一言付け加えれば、勉学と遊びの区別をつけることです。例えば、月曜から土曜日は学び、日曜日は自分の許された範囲内で徹底的に遊ぶことです。

以上が手紙の内容でした。これをよんで文芸部で私達がまとめた意見とは大分喰い違いがあるのを感じましたけれど、それが当然なのかもしれません。十代と二十代という年令の差や、社会人と学生、そんな相違の中で一つの事を考えるのですから、違ってはなくてはおかしい位です。でもその中で、私達となにか共通した、あるものを感じれば、それでいいのだと思っています。

土居通芳氏 「新人映画監督として」

暑い日だった。祖師ヶ谷の駅からアスファルトの道をブラブラ歩いて一〇分程。畑の向うにステージが見えて来た。その畑にそって細い道を歩くと新東宝第一撮影所に出た。汚くない所だ。どこかの病院のような感じがする。入口で待たされると、いつもこんな役をしているらしい女の人が出て来てやたらにハンコを押した紙を持って土居さんの所へ案内してくれた。土居さんはスタッフ会議でもやるらしいせまい部屋で他の監督さん達と話をしていた。

「ああ君達ね」

女の人々がよく等の来た事を言うと、そう言って土居さんが出て来た。第一印象は大変気さくな人で話しやすそうな人だと思った。又写真で見た顔と同じ顔なのでやっぱり同じだ、と妙な事も思った。映画監督にどんな人でもいいから一度逢いたいと思っていたらこんなに簡単に逢えたのがなんだかおかしかった。

「こっちへいらっしやい」

土居さんはそう言って土居さんがおられたとなりの部屋へ案内してくれた。同じような小さな部屋でソファが三つ、大きな机を中央にして並んでいた。壁に毛利と言う監督の「水戸黄門」の製作経過を書きこむ紙が張ってあったが、八月一日以降はクランクアップをしたよう子もないのに書きこまれていない。

何から話をしようかと迷ったが、その内どうにかなるだろうと、先ず現在撮っておられる「婦系図」について質問を始めた。製作意図を聞くと――

「現在、不良映画が氾濫している中に、明治時代の美しい愛情の物語を現代の人にも解るよう描く」

「新解釈ですね」

「そう。それに明治時代の作品を映画化するにしろ、何

にしろ新解釈でやらなくては意味がありませんよ」

「けれど、明治時代の絵巻物風に撮ってもいいでしょう」

「それは三年前に他の社でやっていて、うちの社としてはやるわけに行かない」

日本映画は勿論、仏でもポーランドでも、新人監督達の頭の折から、新人監督としての抱負をうかがってみた。

「ホームドラマ系統の作品を撮りたい」

「新東宝にそう言う映画は少いですね」

「そう、今に出来ると思います」

新人監督として話題に上っている増村保造について質問すると、――

「あの人の技術は型にはまっていてつまらない。むしろ中平康の方がいい」

「でも、中平康の『その壁を砕け』なんか観ると今迄上昇して来た線が平行線に変わったように思いますが」

「誰でも昇りつ放しと言う人はいませんよ。上って止って前進する」

「第一回作品の『不如婦』を除いては全てワイドですが日本映画を観ると、あまりワイドをワイドらしく使った作品と言うのはありませんね。黒沢明の『隠し砦の三悪人』なんかその点はいまいと思いましたが」

「アメリカじゃ『エデンの東』なんか」

「そう、あまりありませんね、――しかし、グーッとパンでふりまわしたりするとスタンダードでは得られない迫力がある。それにテレビに対抗する意味もあって使用しているんですよ」

「ハリウッドなんかもうテレビ攻勢は去ったが日本は三十五、六年を頂点だと観る向きが多いようですが」

「そんな事はありませんよ。もうテレビの影響はこれ以上ないですよ、まあ、きつとうちなんか最後まで残りま

すよ」

イヤに楽観的だ。しかし週に二、三回映画を観て、テレビドラマを観ると、どうもテレビドラマの方が見応えがあるのが多い。――こうははっきり言われると無力な会社の強がりに感じられる。

「作品としては『隠し砦の三悪人』はあまり感心しない」

「そうですね、千秋実と藤原鎌足の使い方や殺陣なんか冗慢ですよ。しかし馬の使い方はうまいと思った」

「尊敬している監督は？」

「木下恵介。常に実験的意欲を持っている所を見習いたい」

「新東宝映画はよく等からみると、皆ナンセンス映画なんです、まず脚本に欠点があると思いますが」

「脚本と言うより、金がないんですよ。だからセットの杯数も少くなり、原稿料の高い優秀な脚本家には頼めない」

そう言へば、この頃の新東宝でちょっと名の知れた脚本を書いたのは「大東亜戦争と国際裁判」の館岡兼之助

「静かなり暁の戦場」の久板栄二郎位だ。

「土居さんは脚本はお書きになるんですか」

「ええ、大部分そうです」

「『戦艦ポチョムキン』を御覧になりましたか？」

「ブラッセルで史上ベストワンに選ばれています」

「あれは古い人達ばかりで選んだからあんなったんですよ」

「所謂懐古趣味でしょうね、――観ていてもテンポからして行けませんよ。古いんですよ。同じモンタージュ手法を踏襲していても『戦争と貞操』なんか実に新鮮ですからね」

「あれが現われた三〇年前は非常に驚異だったでしょうね」

「勿論そうですよ、それにあの手法はばくも見習っています」

最後に、上智大の経済学部を出ていながら、何故映画監督になられたか、その点が大いに疑問だったので聞いてみた。

「別に経済学部が目的だったわけじゃなくて、入れたから入っただけで元々新劇が好きだった。けれど映画の方が金になるから入った。助監督は学生時代からやっていて渡辺邦夫監督につき、一度『叛乱』で佐分利信のモチーフをやった」

一時から撮影があると言うので観せていただいた。新設した第五ステージで海でチカラが自殺する前の幻想の場面を撮っていた。

「ここが涼しいよ、——ちょっと『婦系図』を撮っているとは思えないでしょ」

土居さんはそう言って冷房装置の真下を教えてください。ひんやりつめたい空気が下りて来る。

「今迄観た日本映画でよかったと思う作品は何？」
今度は土居さんが質問した。

「『羅生門』それから『異母兄弟』」

あまり広いステージではない。それ一杯にチカラが住んでいるらしいお寺のようなセットが組まれてある。

このカットは天知茂フンする所のチカラが窓ギワの机に寄り掛りながら寝むつていて幻想に入る箇所。クレインを使って屋根からナナメにチカラに近づく。凡そ三〇秒位。

そのカットが終ると今度は幻想の場面。廊下から庭へ「チカラ」が駆け下りて梅の木の根方へ泣き伏す。幻想的な場面の為か、ミラー、ボールを使って雰囲気を出そうとしている。

土居さんの撮影が終了してから第四ステージでやっている曲谷監督のセットを観た。誰が監督だか解らないくらいに皆勝手な事をしやべっている。ほこりっぽいセッ

トだった。つまらないのでワンカット観て出て来てしまった。

土居さんはもつと学校の事について質問すると考えていたらしく「学校の事は聞かないの？」と言われた。何んだか映画の事はばかり聞いて申しわけないような気がした。土居さんは明日は都内ロケだそう。帰りぎわにお礼を言うと思ったが姿が見えないのでそのまま帰って来てしまった。土居さんが明星出と知っていれば作品を一本でも観ておくべきだったが、訪問した一行の内誰も一本も観ていなかった。

あらゆる分野においてその仕事にたずさわっている人を大きく分けると二つに分ける事が出来る。その仕事を手段にして喰っている人と、喰う事を手段にしてその仕事をしている人と。——映画でもそれが言えるだろう。

前者はパンとフィルムどちらが良いか、と聞かれればパンを取る「芸術家」であり、後者は「フィルム」を選らぶ「芸術家」である。後者には意欲的な作家が多いが前者にはあまりそう言う人は見かけられない。そんな人の映画と言うのは大抵形通りで、一〇本撮った内の二本を観ればその人の作風が解ってしまうような映画だ。脚本も安易で、やつつけ仕事で「ちよいとあそこを人力車走らせたいね」「しかし手に入りませんよ人力車は」

——「じゃあ自転車にしよう」——全てがこんな風な作り方だ。本番直前に「この場面の季節はいつだ」とか、助監督が行方不明になってさかしに行ったり、全体に何かたるんだ空気がある。日本映画の半分をいただく等と言っている社長が——彼は映画は商品で芸術ではない、とも言った。——劇場にテレビ用の映画を流してみたり一方「映画は芸術だ」とおっしゃる社長の作品をみると「鍵」だとか「歌麿をめぐる五人の女」等ととてもなくエゲツナイ映画をやったりする。一体彼等の頭はどうなのだろう。文芸映画専門と自称する会社も反社会的な「狐と狸」「貸し間あり」「男性飼育法」等の作品

を出し、それがたたかれれば「青春の情熱が何んのかん」ともつもらしい宣伝文句をつけたでっちゃん上げ映画を低製作費で新人監督に撮らせ、「誰にでも面白く見られメロドラマを作りましょう」と社長自ずからプロデューサーとなり話題をまいた会社も某映画会社の「お姐ちゃんシリーズ」とやらが大値りをとったりすると「銀座のお兄ちゃん挑戦す」等と凡そ、こっちがあきれてしまうような映画を次々に作り出す。全ったく観客は六社に馬鹿にされているようで腹が立って来る。三大巨匠と言われる今井、黒沢、木下の作品も今年は皆凡調。吉村公三郎内田吐夢、豊田四郎、市川崑、滝沢英輔、衣笠貞之助、成瀬巳喜男、松田定次もそれ程の仕事はしていない。わずかに新人の、関川秀夫、家城巴代治、小林正樹、増村保造、中平康、小林恒夫、沢島忠、村山新治、岡本喜八等がどうにかこうにかの作品を出したようなもので、昨年に比らば全ったくだらしない。いわゆる、名匠とか鬼才とか、言われる連中がこんな様子なのだから渡辺邦夫等の商業作家には望むのは無理な話なのかも知れない。二本立制になり、又大映が一本立にふみきったりしているいろいろな波乱の余波をくらったの事ではあるが、大体に作家の安易な態度と言うのが、この低調の問題点でもあり、今日、ここに取上げていっているマスコミの青少年に対する影響の問題点なのでもある。企業と言うワクの中でしられ、そこから飛び出せば首をくくらないてはならないのだから、与えられた脚本を蹴ったりは出来ないうちが、もうちょっと、良心的な態度で映画を撮る事は出来ないだろうか。先き程の、助監督が行方不明になったりするような事ではとうていいい映画と言うものはとれないし、本番の声が掛つてもクレインを押す掛りがべちゃべちゃしゃべっていたり、「梅の木が一本て言うのは変だ、二本にしよう」等と、その場、その場の御都合主義等で撮っていて、その映画が評判が悪いとお金がないのです、——何しろ、監督は企業の前には

無力なものでして——日本は資本主義社会ですからね”等と言っている。そんな態度で、どうして“いい映画”が出来ますかって言うんですよ。『明治天皇——』大偉業とか、栄光に輝く、全国民必見の感動ドラマ等は、まだ他愛もなく可愛らしいが、これが十代だ、等と言う“狂った欲望”とか、“斗争の広場”の類の安易な、キワもの、デッチ上げの作品は、“他愛もねえや”で、笑ってすますわけには行かない。そんな風な映画が、どんな影響を青少年に及ぼしているか、——映画製作者達は自分の子供の事を考えた事があるのだろうか。およそ“成人映画”とか“十八才未満の方は御遠慮下さい”等と言う文句のつく事じたいがおかしいのだ。映画に、特定の人しか見せてはいけない映画なんて言うのはない。だから“成人映画”とついたら、それは“成人映画”ではなく“成人活動写真”なのである。所謂の映画、——芸術は全ての人に见せる事が出来、楽しませる事が出来るものなのだ。——現在の各社の社長さん等はあまりに金もうけばかりを考えすぎる。うんとコストの安いを作り、うんともうけよう、等と考えている。冗談じゃない、やはり金をかけない映画はそれ以上のものにはない。アメリカのスタンリー、クレマーが良い例ではあるまいか。決して金もうけをしてはいけない、と言うのではありません。

日本は資本主義社会なので、金をもうけるな、とは申しません。海外に輸出して外貨がかせげれば御国の為に役立つ事にもなりますから。しかし、どうせもうけるならもうまいもうけ方がある筈です。誰にでも文句の言はれないもうけ方をしたらどうなのです。おシヤモジ族に文句を言われ、文部省から横槍をさされ、新聞に謝罪広告まで出してもらうより、賞められてもうけた方がとくでしょうし、後々まで客はついて来ますよ。某映画会社が今年も又“東海道四谷怪談”を作った客は“又か、あのアナクロニズムだ”と笑っているが

“こいつが仲々出来がいい”と言う事になれば皆観に行く。黒沢明や、ヒッチコックや、木下恵介の映画がいつも当るのは単に彼等の名前だけではなく、常に彼等が、観客の良心に訴えているからなんです。——映画制作者達は皆頭のいい人ばかりかと思っていいたら、案外馬鹿な人間が多い。何故そんな所に気がつかないんだらう。金もうけ、金もうけ、に偉い人達は没頭し、その下で働く給金芸術家達は“仕方がありませんよ、首をくくりたくありませんからね”等と考えているから映画が青少年犯罪の要因である等と言われるのだ。どんな題材をあつかったって、その材料に対する製作者達の態度で、その材料はどんな形にでもなり得る事を製作者達は知らない。

人間

中二 渡辺しのぶ

私はある問題を考えている。

私の年にして、この問題を考えるのが、早いか、おそいかは、わからない。ただ一心に考えている。

この問題とは人間はどんな事を目的として生きているのだろうか。そして何を楽しみとして生きているのだろうかと言う事である。

私は、自分は今、学校に来ていて何がおもしろくどんな事が楽しいかわからない。私には、学校に来てても楽しくもおもしろくない。私がみんなに聞いてみると、A子さん貴女学校に来ていて、楽しい？別に楽しくはないけど、楽しいわ。あいまいな返事である。

A子さんそれじゃ、人間は何のために生きているんだと思うA子、私、そんな事考えた事がないからわかんないわそんなくだらない事考えるのやめなさいよ。

それでいいのだろうか生まれて来て、小学校に行き中

学に入り、高校、大学に行き、大人になって、おじいさんおばあさんになって死んで行くだけでいいのだろうか。B子さん、学校来ていて何が楽しい。

B子、楽しいわよ、すぐ。B子、どんな事が、B子、はずかしくて言えないわ、私は、おどろいた。男子と話したり、ふざけたりする事がどうして楽しいのだろうか。明星は男女共学だから、男の人と話したり、相談したり、ふざけたり、遊んだりする事は、あたりまえではないか。D子、私は、おどろきの先生になる言う夢があるから生きているのが楽しい。夢たしかに夢があれば楽しい。でも夢だけの楽しさだけでまだほかにあるのではないのだろうか。私達は学校に来て、勉強をするという楽しみがあるけれど、大人になったらどんな事が楽しいのだろうか。

D子、やっぱり結婚して、子供を生んで育てるのが楽しいみんなちゃんないのC子、それだけで、それが最大のたのしみじゃないの、私は、ばかばかしいと思った。

人生は、五〇から六〇年ぐらいまでしかないから、私はその間に何か大きな事をしでかそうかしら。

私が小学校の時は先生に、世の中のために役立つ人になりなさいとよく聞かされたものだ。でも、どういう事が世の中のためにたつのだろうか。

学者とか言う人達は、世の中のために立っているかも知れないが、そうでない人はどうなのだろうか、世の中から見すてられたのだろうか、もしそうだとしたら私は、いやだそんな考え方を人をつきつする。

人間は、苦しいとか楽しいとか言う生活の波にのって一生をすごしていくのだろうか。ほんとうは目的があっても、それがわかってしまったら楽しみがなくなるからみんな考えないのだろうか、それとも、目的がなく、一人一人その事について考えて、結論が出ないまま死んでいくのだろうか、あなた方は、どう思いますか。何かあったら私に言って下さい。お願いします。

ている反面けじめがないなどの状態に生まれて、明星生気質の一つになってしまっているのです。

3. 社会状態の不安

今の混乱した社会に社する不安を最も的確に切実にとらえているのは、私達の年代の人々だと思います。その混乱状態の不安は、俗にジャーナリスティックに取り上げられさがわがれている青少年の不良化、犯罪でありましよう、しかし明星に於ては環境の為でしかそういう極端な行為に走る様な者はありませんが、やはりその影響は、特に明星生だけではありませんかと思ひます。それが前述の二要素にミックスされて明星生気質のようなものにある程度の現代青少年の持つ影を付けている事は確かでありましよう。

「両立するもの」

星野たづ子さん

先日高校の文芸部の方から、現代明星気質その他について意見を書くように云われました。文芸部で研究された項目を繰返し読んだのですが、良い意見を申し上げる自信は全然ありません。というのは、私は現在高二の長女が小学校に入学してから十年余り明星にお世話になり、中三と小二にも次女と三女がおりますので、或いは比較の明星を知っていると云えるかも知れませんが、何と云っても戦後派で、草分け時代のすばらしい明星の事は知りませんし、又子供の級友についても、ごく一部の人々のはかはあまりよく知りません。だから明星生気質の分析にしても、一応うなづけるものの、ピンと来ない面もあるわけですね。又この問題は太へん複雑ですから、ピタリとした答を出す事は不可能で、少しでもプラスになるかと思われ

以上が「1」の原因として揚げられた三つの要素ですが今迄の付いて、父兄として意見を御伺したいのです。1「1」の明星生の分析に付いてどう御考えになるでしようか。

2「2」の原因、理由の研究結果に付いてはどう御考えになるでしようか。

3 又これから一人特異な立場をとって行く明星の生徒に対して如何にあればいいか、希望なり助言なりが御座いましたらついでに御書き願いたいと思います
以上用件ですが、これで失礼致します

明星学園文芸部

三十五周年記念誌編集部

る考えを、あれこれ書き並べて見るにすぎません。

先ず「明星教育精神」について、文芸部では「受験一辺倒でない教育」へのTとPと生徒の歩調が揃っていないという疑問をなげています。たしかにその通りですが総ての先生、総ての父母、総ての生徒が同じ歩調でという事はなかなか出来ない事です。けれどもこれは是非歩調を合わせたものです。その為の努力ももっとされなければいけないと思います。

私はこう考えるのですが、どうでしようか。明星は個性を伸ばす教育をしていると云います。確かに昔の明星はそうだったでしよう。でも今、千数百人の生徒の一人一人が個性を伸ばす教育を受けているでしようか。

受験校では一人一人の個性は殆ど無視されています。公立校では、ややもすれば政治権力の一つの、それも民主的でない型の中にはめ込まれる危険があります。明星ではその心配がありません。私は明星は少くとも個性を又人間性を押しつぶさない教育をして下さっていると思ひ又その為に家庭経済の無理を承知で三女まで明星に入れました。今の明星の子供たちは世の中のいろいろの好ま

しくない事柄から離れて、個性を押しつぶされないで、生れたままのほかほかしたものをもったまま成長しているように思われます。だから「おっとりしているが、つきつめたものがない。実行力が足りない」ということになって来ます。

生徒数の増加によって一人一人の個性を伸ばす教育がむづかしくなり、又「先生と生徒の間が疎遠化」して来ます。今学校はこの問題を真剣に考えておられるし、四四四制等の新しい方針を定められました。私はこの成果に期待しています。

ここで高校生の皆さんに考えて頂きたいことは、受験一辺倒のガリ勉を排斥するあまり、真剣に勉強する事まで押しつけてはいけないう事です。只競争心をあおって、排他的、利己的になり、人を押しのける為にガリ勉する事は嫌な事です。けれども、大学へ進学したいなら、どうしてもきびしい受験の関門を突破しなければならぬのだし、又本当に学問をしたいのなら真剣に力一杯それと取り組まなければならないのだし、その為に努力する事は学生として当然の事だと思ひます。四四四制が本当に生かされたなら、個性を伸ばし、強く、正しく、朗らかな人間性をつくり、しかも学問に情熱をもった責任感の強い人々をつくり上げる事も出来ると思うのですが――。だから、明星教育と受験の力をつける事とは、それ程相反したものでないと云えるのではないでしようか。

又、自治活動や部活動に熱心な人は勉強しない人、という錯覚が、案外皆さんの常識になっているように思われますが、私はそれらの活動に責任をもってあたれる人は、自分の勉強にも責任をもつ人だと思ひます。

たしかに、今の社会は矛盾が多いのですが、受験の悪い面も随分反省されていますし、正しく勉強した人が、受験の時も正しく評価される傾向にだんだんなっていると思ひます。又そうなるように、私たち父母は先生方と

手をつないで正しい世論を作って行かなければならない
と思っています。

ここで一寸横道にそれますが許して頂きたいのです。
私がいつもいつも考える事なのです。中学生、高校生の
皆さんは先生や親が、自分達を理解していないという鬱
憤を多かれ少なかれもっているでしょう。それなら、そ
のような不満を打開する為に皆さんはどんな努力をして
いますか、先生とは話し合う機会もまたあるでしょうが
親とは余り話し合わない人が多いのではないでしょう
か。又、親が学校へ行き、親同志、又は先生と話し合う
事をさまたげていないでしょうか。国際間の理解の為に
も話し合いがなければならないように、先生と生徒、親
と子、先生と親の間でも話し合いが必要だという事を、
もう一度考えて見て下さい。

子供は親が古くて無理解だと決める事を止めてほしい
し、先生は、親が学校の方針を理解しないで只、受験勉強
へかりたてたがっている決めてかかる事をやめてほし
いと思います。先生へお願いしたいと考えている事は、
子供を甘やかさないでほしい事。云いかえればその子の
持っている能力を十分に出す迄努力させて頂きたいこ
と。「君の希望校へ入るには、もっと努力しなければだ
めだ」というような助言も高校二年位からして頂きたい
事。勉強にも、運動にも、自治活動にも、趣味にも、真
剣に打ち込む事によって、生きる喜びを感じるような人
間に導いて頂きたい事などです。

次の「中流家庭層の問題」はたしかにその通りで、明
星に子供を入れている私の悩みの一つでもあります。世
の中の事や生きる事に対する考えが甘いのです。この点
親の責任が大半です。考えてはいるのですが、その酷し
さの实感がありません。これは折にふれて、意識的に見
聞を広めて解決して行くほかにないでしょう。皆さんも真
剣に考えて下さい。明星生の甘やかされた「だらしな
さ」を追放したいものです。

最後の「社会状態の不安から来る影響」は明星の生徒
には少いと思います。これは簡単に好い事だと云い切る
事は出来ませんが、皆さんの今後の研究課題だと思いま
す。広い勉強をして、世の中の事にも正しい判断が下せ
るようになる事、又どうしたらよい社会になるかを考え
その為に少しでも役立つ人になる事、少くともそれに逆
行するような人間にはならない事、それを明星生の皆さ
んにお願ひします。

大学入試について

暑い日が続きますが、いかがお過ごしでいらっしま
した。未知の方にお便りを申し上げる失礼をお許し下さ
い。

私達明星学園高校文芸部では部活動の一つとして夏休
みに隔日に登校して、今自分達にとって一番身近な問題
である高校生の正しいあり方について討論しました。そ
して自分達で出した結論を社会人の一人である大人の方
に読んでいただいて後意見を聞かせていただくことと云う
事になりました。どうぞ御判読下さるようお願い致しま
す。

私達が今考えなければならない事は、私達がいかに真
実に生きてゆくかという事なのだと思います。真実に生
きようとする私達高校生の目前に立ちふさがっている大
きな不安飛びこえなければならぬ壁の一つは「受験」
だと思います。他にも色々ありましたが、今日私はこの
受験について話合ったことを書いて御意見をうかがいた
いと思います。

人生の中で、最も大切な教養を身につける高校時代に
どれだけ多くの人々自分の為になる勉強が出来なくて受
験勉強に精力を傾けている事でしょうか。もし受験勉強
が正しい方向に向いているいろいろな受験勉強は大いに結構
な事だと思います。高校時代は体力、情熱ともに最も盛
んな時なので、でも残念な事に現在の受験勉強は

るようになる事、又どうしたらよい社会になるかを考え
その為に少しでも役立つ人になる事、少くともそれに逆
行するような人間にはならない事、それを明星生の皆さ
んにお願ひします。

知識のつめ込み以外の何ものでもないと思います。例え
ば文学史に例をとってみても、著名な文学者の作品を読
みその文学思潮を考え、などという正しい方法をとった
のでは間に合わないで、ただ作者と作品名を並べて棒暗
記で結びつけるその文学思潮も何の思想もなくただそれ
が〇〇主義文学であるとおぼえ込む。他人より一つでも
多くの事を知っている事に努力する。こんな勉強は博識
の人は出来るでしょうが、それが何の教養になると云う
のでしょうか。まして人間味のある人格の養成なんて考え
られません。私達はそんな知識だけを持って教養のない
人間味のない人になりたくないのです。

又受験勉強はそれ自体が自己主義である為、それによ
って高校生活がひどく乱されるのです。二年、三年とな
るにつれて、自治会、クラブ活動の出席率が悪くなり、
従ってその活動が不活発になります。明星の様に自由教

やおやさん

一ノ四 宮川 木末

おもそうにやおやさんくるまをひいて行く
うしろすがたに夕陽が当って
汗でピカピカ光ったのはだ
せなかにはりついたシャツ
やさしいをひいて、
うれしくも、かなしくもないかおをして
又おもそうに車をひいていく

育をモットーとする学校においてもこの様な傾向が見られるのは本当に残念な事です。現在のふり落す事を目的として行われる入試に合格する為に出来た全国の受験準備高校の生徒達と勝負する為には、受験勉強は或程度仕方ない事と思わなければならないのでしょうか。

この様な受験勉強も将来自分はどういう仕事をしたから、その為にどの大学で学ぶ必要があるかと云う目的の為にされるのであれば悪いとは思いません。しかし今の大体の人々は違う様に思われます。大学が本来の目的を失って生活の為の一つの手段になっている「名のうれた大学」を出て良い肩書きを作れば何の障害もなく安楽な一生を送る事が出来る、出た大学の名が二流三流なら、その人の人生も二流三流になる、まして大学を出なければ生涯下積みであると云う。今の社会状態の中では、何でもただ「大学というところ」に入る為に受験勉強をもる様です。その事が我まん出来ないと私達は考えるのです。これらの事について指導者はその対策があるのでしょうか。

「あたりまえだよ」「時代の流れだもの」「人間が多すぎるんだもの仕方がないじゃないか」等という声を良く耳にします。そういう時私は「なぜあたりまえなんですか。なぜ仕方がないんです」と叫びたくなります。私は「仕方がないじゃないか」と言われてそれに黙って従うには若すぎます。何とか少しずつでも打開の道があるはずだと思えます。でもその方法は考え及びませんし今の私達にはその力もありません。

青少年不良化の問題も対策はさておきその原因を思い合いました。そしてこの問題も受験の問題と深い関係のあることだと思えます。

こういう事が深刻になって来たのも結局は日本が小さくその上戦争に敗れた事がその原因になっているでしょう。

お忙しい中を申しわけないと思いますが以上のような

事についてどの様にお考えかどうぞ御意見をお聞かせ下さい。お返事をおまちして居ります。

荒井なみ子さん

長い目で見て

お便り拝見、お返事おそくなってごめんなさい。じつは一寸重荷で、考えちゃったんです。さて何から御返事しましょう。私はもっともらしい事が言えないので、思いついた事を書きますから、そちらで判読して下さいね知識とか、教養とか、私は今の社会で使われているこの言葉が、余り好きじゃあないのです。ことに教養なんて言葉！

どこか少しづつ違つてきよに感じられる、コトバです、そう思いませんか？ 私はそんな風に大人が、しゃべっていると感じます。ですから此の事でも、ウチの子の問題として私は「道」のNO44の質問で相談した位です。

受験勉強これも変なコトバね、勉強は頭にこんな言葉をつけたくないですね、——勉強はたしかに違つたものになりつつあるようです。でも私は、ウチの子をふくめて、大学に入りたいならば受験勉強とやらも、少しはやつたらいと思えます。だって大学に入りたいんですよ！

哀しい事ですが自己主義にもなるでしょうね、でもね、私は自己主義のなり方が問題だと思ふんです。これは大切な問題だと思うの！ 自己のない、金魚のウンコみたいな——自由と云う名の高校生も哀しいです。だから私は、若い人の自己主義は、或る程度、健康的であれば仕方ないとも、思えます。

大学が本来の目的を失なっているとしても、貴方達全員が、革命家にもなるんなら、こんな社会、大学を、ボイコット出来るでしょうが、革命家だけで、世の中が変らない事は、御存知の通りです、私は思ふんですよ。

人間は自分の住んでいる土とか、青い空とか、隣の女中さんとかを、本当に愛さなくっちゃやあいけないんじゃないだろうか、この愛が宗教とか、教養なんかと違うのは、松川裁判における、広津さんの愛みたいなんじゃないかって！ こうなると、入試に合格するために出来た、受験生は、貴方達の敵ではないし、ましてや受験だけが人生の勝負の場なんて、考えないで下さい。隣の女中さんや、青い空を愛するために、自分の生きて行く場が必要ね。それは、受験勉強と言う形の中からも、クラブ活動と言う形の中からも、長い目でみて自分を生かす、すて石とは考えられないでしょうか、私此の間、NO3の星雲時代をよんで、とっても打たれましたよ、まあ毎日バッツを、きちんとつける程の、優等生に、ならなくてもいいから、やりたい事を考えてやりなさいな。ただやりたい事を、生かすためには、むだだと言われる事も、やらなければならぬ事もありますね。私は「時代の流れだもの」「あたりまえだよ」とも思いません。

人間を大切にしないと言う事に間違いは、社会にあるのでしよう。でもね、民主主義とは、時間がかかり、時間をかけるもんらしいですね。

最後に——

私も此の事では、頭が痛いんです。

ずい分、こんらんしているでしよう。年寄りっぽく言つたとも思いますが——

又、一緒に考えましょう。

徳照節子さん

「努力次第で」

前略御免下さいませ

御手紙正に拝読させて頂きました。

御文面中に溢れる「いかに直実に生きてゆくか」との非常な真剣な御調査に對しまして、何の御参考にもならないと存じますが、恥をおして簡単に私の考えを申し上げます。

さて御文面の御趣旨に依りますと、

一、直実に生きようとする我々高校生

人生中の最も大切な教養をつけるべき時代の高校生、その前に立ち塞がる壁は「受験」であると申されるので御さいますが、私も誠に同感で御さいまして、私自身の家庭や御近所の御子弟達を考えて見ましても、「受験制度」と云うものが若しなかったならと痛感する事が御さいます。それで私も世間で申されます通り現在の学校状況——即ち入学の定員に對して志願者が遙かに多い現在では止むを得ない」との考えで御さいますがここでもう一步積極的に考えて見まして、如何に受験勉強がため込み以外の何ものでなくとも、如何に受験勉強がそれ自体自己主義でありまして、それによって決して高校生活を乱さずにクラブ活動も活発にやり遂げる方法はないのでしょうか。

都合の良い考え方で御さいますが、それには、結局好き嫌いを問わず、つめ込み、棒暗記等も一応ファイトをもやしてやり乍ら、一方では、寸暇を惜しんで、例えば文学史であれば、貴女の云われる通り「著名な文学者の作品を読み、その文学思想を考え——等と云う正しい方法を学び取る様な方法は御さいませんでしょうか。

私達の小学校時代には必らず校庭に二宮尊徳の薪の像が御さいましたが、今から想いますと「寸暇をおしんで」とか「例へ睡眠時間を割いてでも」とか云う様な、異常なファイトが湧いて来る様に考えられるので、あなたが学窓を終えられて将来社会に進出された場合、あるいは御家庭にはいられた場合、必らずや、あなたの好きな或は、あなたの好みの、趣味通りに行くものとは限りません。或は、全くそれと正反対が多い場合も御さいましょ

う。その時は、あなたが高校時代にて於て、とても我慢の出来なかったいわゆるつめ込み主義（棒暗記等に要したつまらない努力や惜しかった時間も一概に「無意味」なものではなかったのではないかと思われる場合は御さいませんでしょうか。誠にとりとめのない事を申し上げますが、私見を申し上げたに過ぎません。何卒御笑いなく然しこのことは、今後私自身がよく研究しなければならぬ問題で御さいますので、まるであなたが私に御指導頂いたものの様に思はれます。その点、深く感謝致して居る次第で御さいます。有難う存じました。

文芸部のより一層の御活躍を御祈り申し上げます。

明星学園高校 文芸部様

親と子の家庭内の問題点

こよみの上ではもう立秋、月日のたつのは本当に早いもので十月には明星祭があります。十月十月と言う間にもすぐ来てしまいそうであるので十月の明星祭には三十五周年記念の文集を文芸部で出すことになっておりますので部員は毎日とても忙しいです。さて私がお手紙をここに書きましたのは、私も部員の一人であり、文集発行の一つの役に立てる為のものです。きまっている主題としましては「家庭の問題」が取り上げられておりますの

で題材に沿って記してまいりたいと思います。

父兄の方々の御意見もどうぞお聞かせ下さい。

家庭の問題でもっとも強く感じる事、それは親子の事だと思ひます。現代に生まれ、現代に育った私達は私より何十年余りも前に生まれ、育った考え方と、理想、思想の違う事は当然のことと思ひます。ですから私達は親の意見と衝突するのも当然の事と思ひます。

昭和十八年九月生まれ、戦争のもっとも烈しい時でしたので防空壕の中で育った様なものと皆に言われておりますが、私は何の覚えもありません。私がはつきり思ひ出せる頃はすべて戦争後の平和な世の中ばかりですし、外人の子供達と遊んだ思い出もあります。

ところが、父母は大正生まれで固い教育をされ小学一年生の時から親孝行、師弟の關係、忠義、等を厳しく習いその様な考えを植え付けられ、特に父は今なおその様な思想を強く持つておりとても頑固だと思われる点も随分多いのです。

しかし、私が頑固だと思ふ事は決して悪い事ばかりではありません。大勢の人達を使う仕事の上でもその頑固

「童子」

高二茶 郷 穰

シンデレラの話を聞いた時、女の子はキラキラ光るシャンデリアが見たくて貧しい子になったがった。

桃太郎の話を聞いた時、男の子は鬼の泣き声が聞きたくて九丸太って、腰に刀をさしたがつた。

かぐや姫が月に帰るのを聞いた時、誰もお姫さまを乗せる雲を信じなかった。

そのくせ猿飛佐助が雲に乗っても誰も異議を提げなはしなかった。

さが大いに役立っている様にも思われます。

父は「今の若い者は」とすぐに言いたいらしく会社以外で会った時、若い人達は素知らぬ顔で通り過ぎ去る事など「随分昔と変わったもんだナア」と不満をもらします。

私も今の者は利己主義的だとは思いますが、ガデモクラシーの世でしかも人口の多い日本で生きる為には、少々このことは旧世代に育った人達にも理解してほしいと思います。私にしても人の言うことを素直に聞き入れないと不機嫌な顔をされることが良く有ります。私は私なりに正しい事を言っているのです。

父とは余りにも世代の食違いが大きいのでそんなに口答えも出来ませんが母とは良くもめめます。でも母は私達の年頃の子供と友達の様になってくれるのもめてもすぐ直ります。母は学校へ行つて何時も思うのですが、先生と生徒が本当に親しくまるでお友達の様で何の遠慮もなく先生とおしゃべりをしている様子を見て驚きかつ幸せを感じるそうです。父母の無理解で家出をしたりしますが一体どの様な所が無理解なのでしょう。

両親揃って無理解なのならその無理解加減をこちらが理解しなくてはならないのではないのでしょうか。二・三十年の差はあるのですから決して何から何まで私達が大人を理解し、又理解してもらうことは絶対に出来ませんから何か親子は親子ですから一つ位通じ合うものが出来ていれば不良や家出者は出ないのではないかと思ひます。おじいさん、おばあさん、と父母、ここにも似たような差は有るでしょう。

今までの家庭は祖父母と同居が多かったのに今は別居が多いのもその例でしょう。

私の父は「若い者と同居は無理だ。」といつて居ります。母は少々気が弱いので「よばよばのおばあさんになつてたつた一人ばつちではあまりにも淋しくないかしら」と、今から心配して居ります。

私の祖母は今年七十九才になりましたがおじの家で過

ごしております。時々め事を起しますがすぐ直ります。これも親子だからなのでしょう。このようなことが昔から今日へ今日から未来へと繰返えされて行くのでしょうか。科学は新時代と共に進みますが人間関係はなかなか割り切れないものだと思ひます。

私はだいたいこの様な事を感じております。

まあうまく行っている

明星祭で文芸部の皆さんお忙しいことですね、さて御質問の「親と子の問題」ですが、御説の通り何年たつても依然問題が出る様です。我々も改めて聞かれると堂々と答える資格は余りない様な気がします。はつきり云うとよくわからないのです。

小西良清さん

かと云つて我々も子の親として余りいい加減では責任上相済まないわけですから、せめて独立の精神を養い、自分のことは自分でやる様に仕向けるつもりで居りますがこれも説教ばかりして居ても無意味です

又家庭は楽しくやる必要だと思ひます。

こんなわけで、私共では自然、友達の様な空気もあるし又親子の立場にも帰ると云つた状態です。何処の家庭にも通用するか、又それで困ることがありはしないか、とも思ひますが、我が家の例では、子供の方でもこうしたやり方を心得て居いて、まあうまく行っているのではないかと考えられます。

良く云えば子供の人格を大いに認めることになりすが、この場合、本人に独立心が強くなつて行かないと失敗するかも知れません。子供の方も相当責任が重いわけですね。何処の家庭でも同じではないですが、この

「お互いにやり方を心得ている」ということが大切で、それには、愛情が通つていなければならないと思ひます。

併し段々子供も大きくなれば社会に対する疑問や批判が出て来て、ある問題では親と意見が合はない場合があるかも知れません。

そこで「親の無理解」とか又親の方では今の若い者はり云うことが多かれ少なかれ起るわけですし、我々も亦昔は「今の若い者の対象」であつたのです。

殊に現在は、時代が進んだだけでなく、未だある面では、戦後の混乱から立直つた許りですから、昔の「しきたり」に馴れた目から見たら、「全く困つたものだ」と云うこともあるでしょう。

よく「親孝行」「忠義」と云う言葉が、頑迷固陋の代名の様に目の仇にされる様ですが之も長老、宗家に從つて行くことが自然で、平和に、物事が順序よく流れ、物心共に安定した生活を、保ち得る為になつた秩序なので、子供を圧迫したり、イジメたりする為に出来たものではないでしょう。

それが、之丈では、時代に会わなくなり、例へば、個人的立場をもつと認めて行かなければならなくなつたわけです。

併し、何と云つても親は社会生活の経験者であり、子供の成長に責任を持つて居るのですから、子供は出来るだけ、親に本当の気持ちを伝えて相談する様に、又親の手もそうなる様に、いつも手を差しのべていることが、望ましいと思ひます。

よく「子供が大きくなつたら、親を馬鹿にして相手にしない、口も余り聞かないが、一体何を考へているのだろうか？」等と首をかしげている親がありますが、青年期には、云い憎いこともあり、又余り子供扱いされたくないと思ひ云う気持もあるでしょう。親の方もある程度子供を一人前に扱わないところがありますが、少くとも

現実社会に処する技術といえますか、之には親の方が経験者ですから、親が子供を一人に扱って相談に乗れば、良い考え、適切な忠告が出来る筈だと思います。

もっとも今は大人自身が時代の移り変りに対し迷う位ですから、子供が種々と疑問を持ったり、悩んだりするのも無理はありません。親でも、わからない時は、子供と一緒に考え、問題を解決する様にして行けば良いでしょう。

尚、子供が成長して、吾々も年老いて行けば子供と別居するのも良いと思います。併し、その頃は、もう保護する必要も、教えることもないので、吾々も気分だけは若い人に負けない様にして、仲間に入れてもらいたいものだと思います。「老いては子に従へ」昔の人でもこう言っている居ります。

「三代同居」

氏之庸崎川

今日望ましい家庭のあり方については、議論の上ではいろいろにいえることでしょうが、実際に人々の家庭の内部に入ってみると、とてもすぐには割切れないむづかしい問題が沢山あると思います。ことに私の家などのように、七十才をすぎた老父母と私たち夫婦、それに子供たちという三代同居の形になっているような場合には、或る程度はじめから古風なものは古風なものなりに、そのしきたりを尊重するたてまえをたてておかないと、思いもよらぬことで老人に嘆きをかけるようなことができます。といって、それは子供たちにとっては全く意味のない場合がありすし、その間に立つて私どもがハラハラさせられるというような場面もできます。話しあえばたしかにわかる

ことだし、老人は私たちの行為を制肘しようなどとは夢にも考えないわけですが、自分が生涯大切にしてきたきたりがそのために打ちこわされるのがたまらないのです。

こんな例は一般的ではないかもしれませんが、それに三代同居というような形は今はあまり、みられなくなるでしょうから、こんな問題の出し方をする私自身に無理があるわけですが、私の家にとってはやはりこれが今日現実の問題の一つなのです。私自身としてはむしろ、子供たちがいたずらに周囲に気がねすることなくのびのびと育ってくれることを望みますが、同時にわが家の現実の問題に即していえば、君たちには一見無意味にみえるかもしれない古いしきたりも、実は君たちのおじいさんやおばあさんが、何十年もかかって生活をきづきあげてくる間におのづから身につけたもの、場合によってはその生活を内部から支える大事な役割を果してきたものなのだという事を考えて、古風なものは古風なものなりに尊重する寛容さをもってほしいと望みたいのです。

詩二題

高三 与 田 静

人と人とのつながり

誰でもが適当に他人を賛美することを知っていて誰でもがみな、自分の足音だけをたてて先を急いだそうして

私はいつも別のことを考えていたし相手もまた、そうだった

理解とか信頼とかのもっともらしいふるまいぎりぎりの人と人とのつながり

石段をのぼると海が広がっていておだやかな水の青さが痛かった両手をふって叫びたいようなしづけさもその時かぎりのなぐさめだったのか

砂漠色をした空が急に落ちてきてめっちゃめちゃな人と人との対立が黙ってぶっかりあう

おもい

もうおなか一杯ですから いりませんというのに せっかく あなたのために用意したのだから お食べなさい ときまどってきた この人は 一体どこまで私をからかう気なのだろう と思ってくやしかったが これも人が生きていく上で当然のことか と思って 何も言わずに座っていた

しばらくたつと 雨がポツポツ降ってきて どこかで 人の笑う声がした真暗な夕方 すると 理由もないのに涙がでてきて、愛する人を想ってみたりした 傷つけて傷つけて 私はそれでいいのだ 雨の間を 疲れた小鳥が飛んで来て 私の中に れんげの花を一つ おとしいった

座 談 会

他 校 生 を 囲 ん で

出席者

都立三鷹高校 二名

桐朋学園高校 三名

成蹊学園高校 二名

明星学園高校

九月十二日（土曜）

明星学園高等学校 会議室

司会 今日わざわざ遠い所をありがとうございます。明星の文芸部では創立三十五周年誌の一つの仕事として大学入試問題等について各方面の御意見をうかがっているのですが今日は同年輩の人達にお集り願って意見の交換をしたいと思います。

まず大学入試の問題ですが、この問題は理屈なしに私達の上に重くのしかかっています。そこで皆さんは大学受験に対してどんな考えを持っているのかまた学校の自治会などではどんな風

に問題が提起され討論されているか、それをお聞きしたいと思います。
まず、明星の方はどうですか？
壁は崩せない

明星 明星は否定的ね。

三鷹 受験のことは自治会では討論されません。各自でんばらばらで人のことなんかどうでもいいと言う感じですよ。

桐朋 僕達も同じです。ホーム・ルームではもつと現実的な事が討議されます。例えばお弁当の時間を早くしろ等と言うような。――受験は当り前の事とわり切って全然考えない。高二になると文科系と理科系に分れているから受験に対して疑問をはさまない。
成蹊 受験制度に反感を感じ何かをして物を売ってもらうようと思ったが、先生に現実を見ると言われ、成る程と受けて受験制度に順応した。

明星 ではあきらめてそれを肯定しているの？

成蹊 あきらめではない。人生の一つの過程としてそう言うものはあってもいいと思う。それに社会を批判するのは社会に出てからするつもりです。

司会 桐朋の方は？――肯定されておられるようですが。

桐朋 否定、肯定の問題ではなく、それを認めている。受験制度が僕達青少年に良くない影響を与えていることは確かだ。しかしはじめは批判している

明星と言う学校は「私立」でもあり、入学して来る生徒の生活程度も殆ど一定で、又小学校から高校まである為か、明星に入った生徒は所謂「明星っ子」になってしまふ。小学校に入学してから十二年間、明星と言うワクの中で明星と言うものしか知らずに育って来てしまふ。だから「明星は良いと思いますか？」「明星の特色は何ですか？」と聞かれても只「さあね」と首をかしげるだけだ。それでも「何んですか？」と聞かれれば苦しまぎれに「自由で個性を尊重する教育の方針でしょう」と答えるだけだ。しかし「自由」も「個性尊重」も言葉で知っているだけでどう言うものか全く解らない、言い変えれば「明星っ子」は他校はむろん、明星さえも知らないと言う事になってしまふ。全くつんばさじきにおかれたようなもので、時々他校から「文集を交換して欲しい」などと言う手紙を貰って「おやおや、他にも学校はあったんだな」と思うような次第だ。
そんな明星の中でわずか四時間とは言え、とにかく他校の生徒、――全く明星と接触を持たない人間達と身近な問題について話しあえた事は、単に意見の交換に終ってしまひはしたが非常に有意義な事だった。
同年代の人達なのだから自分達の意見に否応なく同意するだろうと思ひの他、しょつ鼻から「批判しても無駄だから勉強をするんだ」と言われて思はず面喰ひ、ちがうんだなあ、とつくづく思った。山の奥で育った人間が有楽町のガードの下に立たされたような気持ちだった。

が、してもこれはどうにもならない問題だ。そう解ったとき、批判する為のエネルギーが、どう入試をパスするかの方向に廻される。それに親を養わなくてはいけない。

成蹊 しかし、親とか何んとか言う事にとられるべきではないのではないだろうか。親を喜ばしてやろうなんて思わない。

明星 明星では、親の生活を保障する為に大学へ入れなどと言う親は軽蔑するね。

司会 大学入試に対して二つの異なった意見がありますね。批判的なのと肯定的なのと。

明星 あまりにも大学を就職の為の手段と考えている人が多すぎる。

桐朋 皆が皆そうとはいえない。

成蹊 自分が社会に出て一番楽しい生活をしたいと言う欲望があって、その理想を可能にする大学に入ろうとしているのだと思う。

桐朋 高校だって将来の為への準備ですよ。

明星 僕達が考えるのに、只、何んとか生きてうまい物喰って死んでしまうなんてつまらない人生だと思ふし、自分一人がよければ他人はかまわない、と言う意見には賛成しかねる。今迄の桐朋 成蹊両校の意見には多分にそう言う空気を感ずるが。

桐朋 そう言う人はそう言う人で良いんですよ、——見解の相違だな。

明星 見解の相違ですませる問題ではない。それに明星は大学入試を否定しているのではなく、それに伴う人間性の失なわれた人間を作ると言うような副産物を否定しているのだ。その点誤解のない様に。

明星 志望校を決めるのは、皆さんいつ頃？

桐朋 一年の時です。学校がその様な制度をとっているからそうすることが不自然だとは感じられません。

明星 それでは桐朋は入学率は良いでしょう

桐朋 大学という名前のあるところに入るのは現役では沢山います。

明星 三鷹は？

三鷹 決めるのは個人によって大変差があります。入学率は浪人の方が多いです。

明星 成蹊は？

成蹊 一年浪人を目標にして勉強しています。

成蹊 先程、明星は受験制度に否定的だといいましたがその様な人は高校をでてからどうなるの？

明星 否定していてもやはり現実はあるように行かない。否定しながらも現実にはソクして行く。自分の信念と違った行動をとらなければならないところに苦しむ。

明星 否定していても、しなくちゃならないわね。

明星 理想の高い人も沢山いるわ。

明星 明星は「自由教育」だが、自由をはきかえている人が多い、そういった事が暖昧な人間を生み受験の事にも影響している。

司会 話は変わるが成蹊の人は、大学があるのに何故自分の大学へ入らないのですか。

成蹊 ウチの様な大学は親やその他の関係で将来が決まっているのはゆけけど、そうでない人は大学を卒業しても重要なポストにはつけない。

司会 大学の問題について話しあった事はありませんか。

桐朋 個人々々では考えていてもお互に話しあった事はない。

成蹊 学校と言う単位の中で話し合った事はない。

全体に不活発

司会 受験の事はこれ位にして、今度は学校や自治会の状態について話してみたいと思います。

成蹊 一体自治会が何をしているかわからない。ホーム・ルームはないではない。クラスで親しい者が二、三人位ずつまとまってホーム・ルームティーチャーを訪ねていろんな話をする位。

桐朋 ホーム・ルームの結びつきよりクラブ活動の結びつきの方が盛んです。特に先生とは。

三鷹 私達は、ホーム・ルームはあまり活発ではありません。

司会 成蹊のクラブ活動はどうですか？

成蹊 盛んではありませんが、先生との結びつきはむしろ個人的なものです。

明星 クラスは何名位なの？

桐朋 六十五人

司会 男子だけですね。三鷹は？

三鷹 五十四人位——共学です。

司会 成蹊は？

成蹊 四十五人位、共学だけど女の子は少ない。

明星 どの学校でも二年生が自治会活動の主になってやっているでしょう。

明星 でもそうですが、その場合三年生は非常に責められます。他の学校ではその様な事はありませんか？

成蹊 学校側が三年生の自治会活動参加を奨励しないので、当り前になっている。

三鷹 私達も当り前になっているので問題は起こりません。

司会 桐朋は十分規則が厳しいと聞きましたが停学等がありますか？

桐朋 カンニングをするで一週間単位あります。

成蹊 僕達もカンニングがあります。昔は先生が監視しなかったけれど、この頃はする様になった。停学になった人もいます。修学旅行でビールを飲んで十日間。

司会 規則が厳しいと、かくれてやる人はいませんか？

成蹊 前は良く居たけど、この頃はいません。

桐朋 規則はホーム・ルームなどで作っ

で職員会などにかけてもらって僕達が行くから守られている。

クラスは成績順

司会 補習はありますか？

桐朋 ありません

司会 三鷹は？

三鷹 あります。

成蹊 希望者だけです。

明星 カンニングの話が出たんですが、やる人はどんな気持ちの人が多いんですか？ 点取りですか？ 単にスリルを楽しむだけですか。

桐朋 両方でしょうね。点取りの方にウエイトがかかっているかも知れません。

——僕達の学校では、クラス等は成績順によって決めますからね、そして一期ごとに入れ替えます。

(へえ——)と驚いた声——。

明星 出来る順に並べると、やはりカン

ニングはあるんじゃないの？。

桐朋 ありませんね、全然。

明星 劣等感などと言うことは？

桐朋 ありません。

成蹊 能力順にクラスを分けても劣等感を持つ様な事がなければ、仲々素晴らしいと思う。

桐朋 数字にあらわれた能力ですからね

明星 どうやって調べるの

桐朋 試験で。男の子だけでしよう、だから開けっぴろげなんです。

司会 各学校にモットーと言うようなものがあると思うのですが、皆さん、そ

れをどの様に受けとっておられるのですか？ ——まず成蹊の方は？

成蹊 ゆとりのある人間を作りだすのが目的らしいのですが創立当時はそれでも良かったが、今日では相当無理な事だと言う。

桐朋 質実剛健です。昔気質の先生がいまさらからね。——それに学生として悪い考えではないと思う。

明星 明星のモットーは「強く、正しく朗らかに」なんです。けれど、これも創立当時なら通じた事ですが、現在は相当無理があると思うんです。

司会 ここにおられるS先生は桐朋の出身だから、先生の見た桐朋高の雰囲気をお話ながいたいのですが——。

S先生 僕は高校三年の時は殆ど学校に出ないで坊主になった気持ちで受験勉強した。その分を大学で楽しんだが、桐朋は受験の為の学校と言うが、しかし活気がある。非常に活気があって自治会もクラブ活動も率直に言って明星よりは活発だった。ただ明星にくらべて問題意識が非常に低い。

原因は社会状態に

司会 この辺で青少年犯罪の問題に移りたいと思いますが。——まず明星の意見は？

明星 青少年犯罪の原因は、その青少年の先天的なものをぬけば全ては環境にあると思う。青少年には何の罪もな

い。
桐・成 同感。

明星 環境を分析してみると、親と子の意見とのくいちがいとマスコミのよう

に思われるが、まず親と子の考え方の違いは非常に重要だと思う。

成蹊 それ程重要だと思わない。

明星 戦前、戦後の教育や社会制度は一八〇度ひっくり返ったものだ。そこで育った親と現在の教育を受けた子供達の意見は相当くいちがいがある筈だが——例えば大人達が選んだ政府に対して私達は大変疑問を抱くが。——

明星 社会状態が悪いし、それに受験等も影響しているのじゃないかしら。

成蹊 現在の社会状態が悪いのは確かだが、大学入試と例えば非行少年の問題は結びつかない。家庭に多く原因があると思う。主婦連の人はしゃもじばかりふりまわさないで、家庭内に眼を向けるべきだ。

三鷹 親がいない、と言うのも非行少年の原因ですね。

明星 要求が充分満たされないと言う事もある。

三鷹 やはり環境ですね。

司会 桐朋の方は？

桐朋 あまり考えた事がない。

司会 桐朋に非行少年はいいますか？

桐朋 規則が大変厳しいのでいませぬね

明星 明星には乱暴少年がいるね。

桐朋 それは桐朋にもいます、体力の余っている奴が外部で暴れたりします。

成蹊 親と子の対立は考え方の相違より生活上の立場の相から生じている方が大きいように思うけれど。

桐朋 単に「違いがある」だけでなくそれをなくす為に働かせる事が必要じゃないかな。

生活の相違か

教育の相違か

明星 それは同感です。ウチでも大人に道徳教育をやらうと言う所まで行ったら成蹊 教育のズレによって生じた親子の考え方の相違と言うものは単にマスコミなどがそれだけをとり上げていてだけで、それ程非行少年とは関係ないと思います。

明星 しかし、多いからこそマスコミが取り上げるのではないですか。

司会 考え方のズレから問題が起きる例はありますか？

明星 ありますね、具体的な例では神とか戦争とかそれに例がないからそう言う事はないとは言えないでしょうさういふ事で日常、常にあるのではないですか「親に向かって口返答する」等要するに封建制度の名残ですね。

嫁と姑の関係等は農村には相当あるんでしよう。そう言うものが積み重なって「安保改定」反対、賛成になったり。もっともこれは個人々々の思想によるものですが。その他色々ありますが、体でじかに感じませんか？

成蹊 それは必ずしも考えのズレとは言えない。性格的なズレもあるのではないだろうか。

司会 男女共学から生じる交際の事などで親はいませんか？

三鷹 いません。

桐朋 ウチの学校ではあります。特に左翼的な思想の持ち主と右翼的な人とは違うが双方とも極端すぎて、いつも物別れになる。

成蹊 話し合う機会が少いので困る。

明星 桐朋の方に質問なんです、左翼的な人と右翼的な人の話しあいの相違点はどんな所なんですか？

桐朋 右翼的な方は子は親に服従、左翼は平等、と言った所です。

成蹊 やはり、自分の要求が満たされない、物質的な要求ですね、その為に非行少年になるのを新聞等が考え方の相違などとしてつけてるんですよ。結局単純なものなんです。

明星 細くわければきりがありませんよ
桐朋 古い世代と新しい世代の考え方の相違は当然起りますよ。それが複雑になって混乱した時に非行少年の様な形になって表われる。

司会 三鷹の人はいかがですか？

三鷹 考えた事ありません。

桐朋 現在の親子は互に極端で相手を攻め合っているような気がする。お互にもっと話し合う事が必要ですよ。

明星 そうですね。

明星 けれど話し合えば解決出来る家庭

もあるけれど、話し合いだけでは解決出来ない家庭もあると言う事を忘れてはいけないと思います。

司会 成蹊の方の意見は、親子の考えの相違と言うよりむしろ生活上の立場の相違が少年犯罪の原因であって、考えの相違と言う事はマスコミによって誇張されているだけだと言うのですが、明星、桐朋はやはり考え方の相違だと言うのですね。結局どちらにしてもよく話し合ってお互に理解しあう事が解決の道だと思っています。

憲法改正は反対

司会 それでは後時間のゆるすかぎり政治について話しあってみようと思います。

成蹊 いままでたつても政治は良くなりないうし、政権の取りつこばかりしているの、政治にはあきあきした。よい政治をする人がいたら支持したいとは思いますが政治には無関心です。

司会 明星は原高連に参加していましたか他校はどうですか。

三・桐・成、不参加です。

桐朋 父の關係から政治方面には関心があります。

司会 憲法改正については？

桐朋 不賛成です。第九条は是非残しておきたい。

明星 部分的には改正しても良い所はあるが、九条だけは是非守りたい。

明星 成蹊の人のはどういう過程をたど

つたにしても、無関心と言う態度は非常に危険だと思う。日本の歴史を見ても無関心があつた道をたどらせたのだと思う。

司会 自民党は自衛権が必要だと言っています。

明星 飛んでもない時代錯誤ですよ。

桐朋 やられるだけではくやしいから必要だと言う生徒もいる。

明星 政府は「大日本帝国」を夢見ているんだ、大野伴睦なんか。

明星 しかし実際に日本が侵略されそうになったらどうするだろうか。

明星 今の政府はそう言った幻影にまどわされている。

成蹊 政治方面に無関心になったとは言え、私はやはり平和は望んでいる。

明星 私、先生に第三次世界大戦があるかどうか聞いたけど解らなかつたわ。

成蹊 岸信介は外遊に行ったり、ゴルフをしたり政治家とは言えない態度だよ資本家をバック・ボーンにしているから、もし、もっと資本家が勢力を持つて来たら危険だ。

桐朋 聞いた話だが、日本人はもともと団結しにくからソ連のように革命が起きる可能性は少いそうですね。

明星 徳川幕府の士農工商・明治政府の家族制度等の政策の成功じゃないかな

司会 大変中途半端です、もっと話し合いたいのですが、外も大部暗くなつて来ましたので、この辺で終りたいと思います。

はねだのこと

小3 中西 貴光

ぼくは、はねだに、おとうさんをおおくりにいきました。ぼくが、いったときにはおとうさんがちょうどひこうきにのるところだった。そのとき中央大学のせいとたちが中西先生ばんざいといった。おとうさんは、ひこうきのかいだんの上にとった。ぼくは、なんだか、かなしかった。ひこうきはプロペラをまわし、だんだん「スピード」をましてやがてとびたつた。そのときぼくは、「もうおとうさんとあえないから、かなしいなあ」と思った。それからうちにかえつた。一日たつたら、おとうさんのしゃしんが、しんぶんに出た。おとうさんのなまえもしんぶんに出た。

おとうさんのなまえは、中西旭と言うなまえだ。そのとき、「おとうさんてえらいんだなあ」と思った。おとうさんは、まえに日本から「アメリカ」えんきようをならいにいった。こんどは、「アメリカ」から「ニューヨーク」えんきように行くのです。おとうさんのいるホテルは、「とってもきもちのいい」ところだそうです。よくえんきようもできると、おとうさんからぼくへの手紙がきた。おとうさんは、むこうはんとしぐらい、いるそうですね。

ぼくもいつしうけんめいえんきようして、おとうさんにまけないようなりつて、おとうさんになりたいと思います。

きやんぶごっこ

ふでばこ

小五 新田 保

ぼくは、みんなが持っているような、チャックのついたふでばこがほしい。チャックがジジジと、気持のいい音をたててあけられると、ぼくはほんとにほしくなる。

でも、この間、箱のやつを買ってしまった。

ぼくは、それでも、チャックのふでばこがほしくてほしくて、たまらなかつたきのう、思いきって、おかあさんにそのことを話した。

「こんなむだをしちゃあだめですよ。ふでばこがほしい人だって、たくさんあるんですよ。」

といわれてしまった。ぼくは、なんでもかと思つた。それから、おとうさんに言つてみようと思つて、いつてみた。いいと言ふどころか、

「保、おまえは、そんなことをほんきでいうのか。どうしてそんなむだをするのだ。」と、おかあさんの百倍もおこつた。

なあんだ、だめか、つまらないの。

ぼくは早くこのふでばこが、こわれちゃいばいいなあと思つた。

早く、こわれなかなあ。

ふろたき

小三 夏目 敏

きょう、おふろをわかつた。まきをも

つてくる時、足にくぎがさつた。ヨーチンをつけて、ほうたいをまいた。そうして、うんとおふろを、わかつた。

やっと、おわつたとおもつたら、まだだめだったので、がつちりした。でも、

がんばつてわかつた。なかなかもえなかつたけど、まきや、かんなくすを、おふろにつめこんだ。しばらく、はなしをしていたので、火がきえたので、あわてて、まきや、かんなくすを、おふろにいれた。

そしたら、よくもえたので、目が、いなくなつた。それに、かおがあつくなつた。まきが、おふろのかまにはいるなごさになつたので、ぎゅうつと、おしこんで、そのままおふろのかまの、ふたをしめて、そのままにして、テレビを見た。あと、おふろにはいつたら、あつていききもちになつた。

自然の中へ

高二 茶郷 穰

高慢な人間よ

生まれた赤子は、夕に死ぬかげろうを思へ

赤い血をしたたらせて牛の肉を食う時
激闘する野獣の絶叫を聞け

高慢な人間よ

お前らは集団になつたが
もうお前らはお互にあきあきしている
ではないか。

高慢な人間よ。

広い草原を思え。

泉で水を飲み
肉が食いたかつたらお前の手でそれを
得て、もう一度自然に従つてみよ。

広い肩と分厚い筋肉を黒い土の上でつ
ちかえ。

高慢な人間よ

お前も一度、あのライオンの様に
たて髪をふるわせてはえてみよ。

きやんぶごっこ

小二 石山 鐘

二十六日にくまがやからかえつてきました。二十八日の朝ごはんの時に、ボーイ・スカウトの事をテレビでやっていて、ぼくがやりたくなつたので、みねろうお兄ちゃんをさそつて、きやんぶごっこをやりはじめました。大きなあなと小さなあなをほつてから、おかあさんにもちあみをかりて、小さいあなの上にもちあみをのせて、大きなあなから火をたいて、おかあさんかおこめをもらつて、なべに入れて、もちあみにのせて、ごはんをたいしたら、おかずがないから、しゃけのかんずめとみかんのかんずめを買いに行きました。買ってきてすこししたら、お昼ごはんのおすしをたべていたら、ごはんがたけたので、ぶどうだなの下でたべましたが、おすしをたべすぎて、ごはんがたべられなくなりました。このごはんはぼくが生れたはじめてたいたごはんです。これを夕ごはんにおかあさんとたべました。 七月三十日(木)

おとなりのおじさん

小三 住多 栄子

おとなりのおじさんは、大学の先生です。あたまは、はげていますが、とってもいいおじさんです。

それで、私のあそびあいてです。おとなりの家には、おばちゃんと、おじちゃんと、小さな子どもがいます。その子の名は、ふみちゃんといいます。私がおじちゃんの家に行くと、ふみちゃんは、とってもよろこんで、私の手をひっぱつて「あがりなさい」といつているようで、私も、ふみちゃんが大好きです。おばちゃんもとってもやさしく、私をかわいがつてくれます。おじちゃんのべんききょうべやへ行くと、本がずらりと本立にならんでいます。私は「まんが本がないからつまらないね」と言うとおじちゃんや、おばちゃんがわらいます。それで、ふみちゃんは、赤ちゃんの時から、たんぜんが大好きで、ちよつとつまらないことがあると、そのたんぜんで、何かやっています。おばちゃんが、おちちをくれる時、きているのです。だから家のおかあさんがおちちのにおいがするのです。う。とよく言います。おじちゃんや、おばちゃんはふみちゃんを、とってもへいきで、ふみちゃんがころんだりしても、へいきです。そしてふみちゃんが、ねている時、かぎをかつて、おつかいに行つても、ふみちゃんは、へいきです。私はおかあさんというものは、きつくするも

んだ。と思いました。夜十二時ごろで、いっしょうけんめいばんきょうして、います。私も、おじちゃんにまけないように、ばんきょうしますが、おじちゃんにはかないません。「先生というものはあんなにばんきょうして、せいにしておしえるのか」と考えると、先生というものは、たいへんです。おばちゃんも、夜おそく、きんじょの人に、教えています。だからおじちゃんも、おばちゃんもたいへんだと思います。

初島キャンプ

小六 宮崎 吉明

八月十五日(曇)

今日はまことにまったキャンプへ行く日だ。行く場所は熱海市の初島だ。伊東から船で約四〇分のはなれ島だ。人口約三〇〇名あまり。大きい島ではない。

朝の九時半の初島行第十八竜宮丸に乗った。行く人は、ぼくに、兄に、石井君兄弟、館岡君の五人だ。初島についた。

初島の海はとっても、きれいだ。でも、島だから四米位行くと、もうせいがたたない。とっても、おつかない。まだバンガローに入れるかもわからないので、石井君の、しんせきの家で昼食をすませ荷物をおいて海へでかけた。じゅんが体操をすまして海へ入った。サザエがあつたけど、とても深く取っても取れそうもない。でも、石井君のお兄さんは、サザエを五つ取った。その中、小さいのを三つまで食べた。はじめてなまで食べ

たけれど、とてもおいしいので、おどろいてしまった。

三時頃までに、やっと四つ位とれたので、バンガローに入れるかききに行つたら、六号があいていたので、すぐ入った。そしてすぐ夜食のしたくにかかった。

ぼくは、たまねぎをむくのとじやがいをむく役目だ。ごはんは、カレーライス。とてもおいしかった。とってきたサザエを肉のかわりにした。サザエのカレーライスなんか、東京でなんか食べられやしないだろう？

夜はうたをうたつてよこになった。でも、つまらないのでランプの光でランプをした。ランプはぜんぜん明るくない。だつてランプの中はろうそくなんだから、の。しばらくやっていてたけど、つまらないのでねることにした。真夜中、なん時は時計をもつていかないからわからなかったけど、とつぜん、ランプがもえた。なぜって、ろうそくをけさないでねてしまったからだ。

みんな、起きてやつと消したが、ランプはまっ黒にこげてしまった。ぼく達はまだみな起きた。いちばん最初に、石井君が起きて、「たいへんだ、たいへんだ」なんていったので、みんな起きてしまった。けして、ねようとすると、となりのバンガローから、「うるさいぞ」と、どなっていたのでねた。みんな起きなかつたら、いま頃は、もうぼくらは、やけ死んでいただろう。

八月十六日(晴)

朝、起きて、すぐごはんを食べた。あと、またサザエを、取りに行った。今日パパやママ妹やおばあちゃん達が、この島へ来るそう。サザエを取つてごちそうをしようと思つたけど、五つしかとれなかつたので、石井君の家のしんせきで十位もらつて来た。昼食はサザエどんぶりを食べた。うんと泳いで、五時頃熱海へ行つた。行きは、伊東から行って帰りは船がこなかつたので、熱海行に乗った。

青い大きな海

中三 上条 永子

青い大きな海
なんと素敵な言葉でしょう
青い大きな海
まるで私の顔をそよ風が渡る様な
青い大きな海
雄大な青い大きな海は
私を安らかにさせてくれる

雨

高二 茶郷 穰

雨が降った日私はふと思う。
この雨がマンゴの森林の中にも落ちて
いるのかと
この雨がマンハッタンの摩天楼をも濡
らすのかと
雨は民族の違いなど知りもしない
そんな雨を誰が考えよう
長い歴史の中であえていた人間は

己れの目の前を降る雨しか知りもしない
雨よ、たまには違った色の雨も降らせてやれ

矛盾

高二 高橋乃利恵

生きて何になる平凡な毎日をつまらない夢を追いか
ほんの小さな幸をつかめないで
何の楽しみもなく……

考えて何になる変りやしない
どうしようもないではないか
若い心で割りきれない矛盾を
死より他に何もない

死んで何になる？ 名もない私が
空にちる小さな星が
一つ流れた様に誰も知りもしない

生きる……
考える……

死ぬ事すらできない
私には勇気が！ 勇気がないからなのか

ねこのひとりごと

小一 今村かおる

ぼくの生まれたのは、おとしの一月のはじめごろでした。道にすてられ、さむくてこえていた所を、ちょうど通

りかかった子供にひろわれました。

「家には遠くて持って行けないからおまえにやるよ」

「だめだよ。家においたって、おこられてするよりしかたないもん」

「君んとは？」

「いいかもしれないよ。犬がいるからわかんないけどね」

ということで、今村という家へつれて行かれました。この男の子は、ぼくのために電車に乗らないで、歩いて帰りました。人間の電車に、動物を乗せることはいけないらしいのです。ぼくは、この犬を見た時は、強そうなので、ビクッとしたけど、あれのことは満足でした。いつもごはんをくれるし、かわいがってくれるし、夜ねる時は、兄弟でぼくをフトンの中に入れる競争をしていました。

ぼくが「ニヤオーン」となると、「ニヤオーン」と山ピコのような、なき声でしたので、変だなと思ったら、フトンの中へおびきよせるための手でした。ぼくの声とそっくりでした。夏は、ぼくの毛がぬけるので、みんなあまりあいてにしてくれませんか。だけど、時々、鼻に毛が入らないようにしてから、せ中をぐしごしこすってくれる所があります。すると、毛がパツとちって、すずしくなるので、いつも感謝しています。

土曜の夜など、スライドをして楽しんでいますが、その時、ぼくが写真に出ると、

「ウワー。ずいぶん小さかったんだな

」。リュウのヒゲが巨木に見えるよ。」

「大きくなったものね。」

などと言ってはぼくを見たりなでたりしますが、ぼくはなでられるとくすぐられるような感じなので、外に出てしましました。

特に親切にしてくれるのは、兄キの方です。夜フトンから出たくなると、いつでも出してくれるけど、弟の方はそうはいきません。

ひっかかないと出さないので。

お母さんは、ぼくがかわいくなると、ギョッと顔をおしつけるけど、おこると外へほうり出して、入れてくれません。

お父さんは、ぼくがみんなの食事中にテーブルに登ると、すぐワサビかカラシを鼻の頭にぬりつけます。手もとにない時は、ドンとテーブルからつき落します。小さい時はフクロの中に入れていたけど、もう僕が大きくなってだめなので、フロバにとじこめるか、ワサビのどっちかです。

このごろは犬のタマともなかなよしになったので、タマのごはんを取らないかぎり安心です。ぼくの名はルルといって、カゼ薬の名と同じです。だから、ぼくが来てから、ビールスなどが逃げてしまったりしいので、家中病気をしてません。だから、みんなよろこんでます。

これからも病気の菌を近よらせないつもりです。

病 気

小五 新田 保

びようきは
ずるいあくまだ
人をころしたり

苦しめても平気でいる
びようきは ずるい わるいあくまだ
僕のジョリもころした

観 察 記 録

「みつけた！」

小二 せきさない

四月十三日▼夕方きれいなうらごもを見た。

四月十六日▼赤いレンゲをとって、かびんにさしておいたらおまめになった。

四月二十日▼れんげの色はよるねます。

れんげのはっぱはとんぼみたいで。

四月二十三日▼先生からもらった虫メガネでとおくを見たらさかさまに見えた。

手を見たら大きく見えた。

四月二十六日▼け虫のすの大きいのがありました。クモのすとおよとにいます。わたみたいでふくろみたいで。け虫が中にいたいそうしているみたいです。モチツツジの花が一つきました。

「私の好きなどうぶつ」

小二 いとうその子

四月二十八日▼スズメのヒナがうちのやねの上でしんでいました。ちずを見ると、東京はおなかみたい。

五月八日▼えんそくにいったら、シヤガそのの花が二本さいっていました。パンのにおいがしました。

五月十一日▼よる、ガがありをとりにきました。ばたばたあばれました。でん気をけしたら、目が金いろに光りました。

五月十八日▼ハエはさむがりだから、でん気がまにとまります。ねるときはてんじようにとまります。どうしてハエは、てんじようにとまっていられるか。足のさきに、すいづくものがあるから。足にけがいっぱいはえている。めだまがぎよろぎよろしている。

そして、驚く。あるときは、おのれの貧しさに、またあるときは、おのれの豊かさに

人は書物を読むことによって、おのれの胸のおくふかくされていた未知なるものをさぐりあてる。そこに、おのれの素顔を見出す。

鈴木 満男

『狭き門』(アンドレ・ジイド)

中三 谷村 遙

要約

ル・アールで医者をしていた父が、ジェロームがまだ十二にもなっていない頃死に、母は色々な都合から、友人のミス・アミューバートンと一緒にパリに移り住むことになった。叔父のビュコランは毎夏フォングーズマールの彼の家敷に呼んでくれる。彼の家には、ジェロームより二つ年上のアリサ、一つ下のジュリエット、それに末のローベルと三人の子供が居た。母がいつも衷服姿で居たのに比べて、ビュコランの叔母ははでな物を身につけ、生活にもだらしがなく、その上時々ヒステリーの発作をおこすため、母と叔母は仲が悪かった。

ローベルはこれといった特徴のない男の子であり、ジュリエットは非常に美しい女の子であったが、アリサはもっと意味深い美しさをもっていた。他の二人が叔母にかわいがられるのに対して、アリサはいつも一人か、あるいは静かな叔父と話をしていることが多かった。ある日、ビュコラン家の近くに住む母の姉、プランティエの叔母の家に行った時、急にアリサに会いたくなり、ビュコラン家に入るが、四階のアリサの部屋に行く途中、三階のドアをあけ放された叔母と見知らぬ男の馬鹿馬鹿しい芝居のようなものを見てしまった。大人の世界にはこのことについて何か秘密があるらしい。それから幾日か後、叔母がビュコラン家を家出したのを知った。

ル・アールの教会に行くと、「力を尽して狭き門より入れ、滅びにいたる門は……」を牧師が読んでいた。ジェロームはそれを聞きながら夢を描く。「広き路」幾日

か前の叔母の部屋「之より入る者多し」浮れた様子で行列を作って歩く、多くの着飾った人々。「狭き門」その門はアリサの部屋につながっている。アリサの心と自分の心が一つに溶け合い、手を取り合って同じ目的に進み行くのだ。「見いだす者少なし」——自分はその一人になるだろう……。

その時十四才であったジェロームの心はアリサに対する恋の気持で一ぱいになり、すべての行動を彼女に気づかせないように神秘的な気持でアリサに捧げるのだった。母は前からわづらっていた心臓病がますます悪化し、ついに「主がおまえ方二人をお守り下さるよう」と願いながら、ジェロームとミスアミューバートンの見守る中に死んで行った。

ある日アリサが「ジェロームが死んだ夢を見た。そして二人は一生別れていなければならないような気がする。けれども、あなたは死んだら二人別々になってしまふとお思いかもしれないが、私は死んだらかえって近づけると思う」とジェロームに言ったが、この言葉は何かを意見しているようだった。

ジェローム自信結婚は必要がないと思っているが、ふとしたきっかけからアリサに話してみるとやはり反対され、又二人の結婚ということに関してはもう少し世の中を知ってから考えた方が良くと言われた。ジェロームはこのようなアリサの言葉に苦しんで二つ年上の学友アベルを相談相手とする。アベルはジュリエットを愛し、彼女に失恋するがその時も良くジェロームの相談につてくれた。おせっかいやきのプランティエ叔母の二人の世話を良くやってくれた。けれどもそれは余りにも度を過ぎてかえって不愉快をもたらすことがあった。

一時、ジュリエットが自分に対して申し込み人であるテシールを愛さず、ジェロームが好きだと言い、アリサも自分を犠牲にすることを承知したが、結核はテシールと結ばれ、大変幸福になった。

ジェロームによこすアリサの手紙にも熱意がこめられてきた。ジェロームは兵役に服してナンシーにやられたりするが、アリサのことを考えるとこのつらい規律生活もきわめて軽く耐えられる。二人の心も一致し、幸福の日も近いように思われた。

ところが、ジュリエットに産産が聞かないというので叔父とジュリエットのところに行ったアリサから、この家庭を見て幸福というものの価値のなさ、不愉快さを感じた、と手紙をよこした。この時からアリサの気持は又乱れがちとなった。久しぶりに二人で会っても、気まずいことが多く、話もうまく進まない。

「一緒に居ると最大の幸福を感じるが、二人は幸福になるために生れてきたのではない。魂は幸福以上に聖らかなさを好むのだ」とアリサは考え、しばらく文通をやめようとまで言ってきた。アリサの部屋には、二人が一緒に興味を向け互いに読み合いながらためた小さな文庫が全部取り除かれ、変りに卑俗な信仰書が少し並べられた。変りはでた彼女を見てジェロームはなげき、なんとかして前のアリサにもどそうとするが無駄だった。

やせ細ったアリサと、それから三年後、叔父の死後、ビュコラン家の庭の外で面会をしそれを最後とした。一ヶ月とたたないうちにジュリエットから彼女の死を知らせてきたのだ。ジェロームに関するアリサの日記が送られてきた。神につかえたいという気持から、一人でパリに旅立ち、そこで病にたおれ、死を望みながら死んでいく、彼女自身の心の移りが書かれてあった。

いまだに結婚する気になれないジェロームは、それから十年後、ジュリエットの家を訪ずれ、昨年生れたという彼女の五番目の子供に「アリサ」という名前をつけてやった。

(感想)

要約を書き終ってもまだ、わかったのかわからないのかはつきりしない。要約のつかみ方も変だし、それに長

くなり過ぎてしまった。ジイドのものは「背徳者」をこの前に「女の学校」を今、読んでいるが、それらは「狭き門」以上、私にとっては無駄読みのようだ。

作者を十二才以来はほとんど一人で育てた母は父と正反對の性格、熱心なカトリック信者であったため、ジイドはその自己犠牲や禁欲主義的なものの考え方から、常に抜け出ようとしていた。実際マドウリースという従姉があつてそれをアリサで言い表わそうとしているが、彼自身、恰度アリサのような自分から抜け出ようと苦しんでいる最中だという。自己犠牲や禁欲主義のものの考え方は良くわかった。けれども「主」とはいつたい、どういうふう想像したら良いのだろう。キリストのことか、神様のことか。神様というのはいくつものなのだろうか。その得ても知れない「主」が自己犠牲や禁欲を教えた！？私にはそれがわからないので、作者がそこから抜け出ようとする気持、反抗する気持も良くわからない。

今まで、皆が、幸福になることを望んでいたとばかり思っていたが、アリサが「魂は幸福以上に聖らかさを好む」と言った。世の中にはそのような考え方もあるのかと始めて気がつき、又無意識に「幸福」という言葉が何であるか疑えてきた。ただ単なる「しあわせ」や「さいわい」だけではすまされないような気がする。

「狭き門」という題は、それに関する部分がいくつあったが、それではなく、始めからおしまいまでの作者の言おうとしていることと深く結びついているらしい。つまり「狭き門」に対する疑いというようなのがジイドにはあるのではないだろうか。

とにかく私は、ジイドの考えていることが言葉に言い表わせないほどボートと頭に入つたようだ。しいて作者自身に興味は感じなかったが、私自身の疑問が又増えてきた。

(先生の批評)

◎ジイドは幸福とはなにかということを追求していま

す。この「狭き門」を書く七年ほど前に「背徳者」という小説を書いていきますね。これは「狭き門」とは正反對に生きるよろこびとは精神的なものではなく、肉体的な享樂だという考えで、道徳も愛も無視して生きて行く男のことが書かれていますね。「狭き門」の場合は、愛人のジェロームを妹のジュリエットにゆずりその犠牲の中によろこびと、至高の徳をみだし、独りしづかに死んで行くアリサの生き方を作者が肯定しているのです。ジイドは、このように真実の生き方についてたえず苦しみなやみ、光をみいだそうとしていたんです。ともかく、すぐれた小説を多くよみ、多く考えてください。

◎神とか主とかいうものが一体何であるか、これは結論のさせぬ問題で、自分でふかく考えて行くべきことですね。

『巴里に死す』を読んで

岡野里美

現在、私達が読む本で、手紙や日記、手記等の形で作られた本は、たくさんあります。この「巴里に死す」もある博士婦人の死の直前に、書いた手記なのです。

が、私は、この本から「足長おじさん」のような、明るい楽しさも、そうかといって「アンネの日記」のような、くらさも感じませんでした。この二つとまったく違ったどちらかと言うと「こころ」にあるような、暗い、さびしさを感じました。

「こころ」と「巴里に死す」を比較してみると、同じ、手記といっても、かた方は自殺でもう一方は、病死ではあるが、二つとも、死ぬ、直前に、死を知って、書いた事や、主人公に男女のちがいは、ありますが、だれにもうあけられない、又、わかつてもらえない、と言う心

のなやみを残した。

こういう点で、この二つの本は、共通しているのではないのでしょうか、

そして、この本の主人公、伸子が持った様ないろいろななやみ、事に、夫に対して、自分が劣っているのではないか、という劣等感や、夫と自分の気持の、ずれへのなやみ等は、ほとんどの国の女性、特に、日本の女性が、感じている物ではないでしょうか、

それに、伸子は、「赤ちゃんを生めば、自分の体が弱って死んでしまうかもしれない」、と医者にせん告された時も、「自分のために、子供をころしてまで、自分が、たすかりたくはない」と、いつていますが、外国では、おどろく事であっても、日本では、ありえない事では、ありません。

つまり伸子は、ごくふつうの、日本人だったわけで、特別自分が、すぐれているわけでも、劣っているわけでもないのです。

それを、外国夫人の中に、入って苦しむという事は、伸子の様な状態で、外国へ行けば、だれでも、経験する事ではないでしょうか、この本を読み終って、すぐ私は日本語って、本当にいいなあと思いました。

なぜなら「巴里に死す」を英語で言うのと、パリで死んだ、という一つの事実にしかな見えませんが、「巴里に死す」と日本語で、発音してみると、その裏に何か、深い意味を、ふくんでいるようにも、とれます。

何んて日本語は、ステキなんだろう
私はその時、つくづく思った。

『聖書』を読んで

中 三 飯 田 能 子

私の好きな本で最も尊い書物は「聖書」である、一週間に一度日曜日しか開かない聖書であるがおそらくこ

れ程人を思慮の世界に導びき深い感銘を与えるものはないだろうと私は信じる。読書感想といっても、私は新旧約とも全部読んだわけではない、おそらく三分の一も読んでいないだろう。Old Testament は「創世記」に始まり「マラキ書」で千二百二十六ページ New Testament は「マタイ」による福音書から「ヨハネ」の黙示録で終り四百九ページ Holy Bible は合わせて約千七百三十五ページとなり本の厚さは五センチメートル以上、文字どおり大書物といえる。聖書の一章いや一節に味わうべき事柄が隠されている、感じ方も味わい方も実際の経験もこれからたどるべき人生も人によってまちまちである。しかし、私が日曜日礼拝で一番深く印象に残っている節について考えてみたい。

教会学校の夏期生活で誰かこんな事を言った。「聖書って読んでいてもつまらないな、もっと面白く書いてくれないかな」実に、私もそう思う、内容面でも美しい文章であるが、実際面白味がない、面白味が湧いてこそ、聖書を理解した時かもしれない、しかし旧約聖書は文学面ですぐれた書物の一つであるという。「マタイ」による福音書の第五章三節からイエスが群衆にむかつていわれた言葉がある。

これは「山頂の垂訓」といわれるもので有名な箇所である。

心の貧しい人達はさいわいである

天国は彼らのものである

悲しんでいる人たちはさいわいである

彼らは慰められるであろう

柔和な人達はさいわいである

彼らは地を受けつぐであろう

義に飢えかわいている人達はさいわいである

彼らは飽き足りるようになるであろう

あわれみ深い人達はさいわいである

彼らはあわれみを受けるであろう

心の清い人達はさいわいである

彼らは神を見るであろう

平和をつくり出す人達はさいわいである

彼らは神の子と呼ばれるであろう

義のために迫害されてきた人達は幸いである

天国は彼らのものである

理屈をぬきにして、美しい文章だと素直に感じられるそれだけでない、いったいこれは何を意味しているのだろうかと考え余地が沢山ある、これを行なえば、いったいどんな人間が存在するだろうか、実に不思議だと思つた。「マルコ」による福音書第二章にイエスが取税人や罪人と食事していると人々は「なぜそんな人々と食事をするのか」と尋ねた、イエスはこれに対してこう答へられた「丈夫な人には医者はいらない、いるのは病人である、私が来たのは義人を招くためではなく罪人を招くためである」私が最も感銘のうける場所の一つである。聖書を通じて、「信仰」という言葉が私の疑問の一つ

になっている、教会の夏期学校のデイスカッションに質問した(信仰も不思議であるがキリストを信じる人と信じない人との間にいったい人間の尊い人格の上でどれだけのひらきがあるのか、神の言葉は聖書を通してしか私たちに与えられていないのにそれが信じられるか)数々の疑問が私の頭を混乱させ、いったい自分は何だろうか

と人間の科学の力では及ばない人生への疑問は数限りなくうかんでくる、二年生のAさんは「聖書に書いてある奇蹟が信じられない」と、聖書には数々の奇蹟が書かれている、例えば、イエスが死人をよみがえらせた、盲人の目をあけさせた、水をぶどう酒に変らせた、水の上を歩かれ七つの魚を何千という数にふやされた、どうして信じられるだろうか、しかし先生は「奇蹟に感謝して信じればそこに信仰が生まれる」と、「実際にすべてのものに直面し悲愁苦悩を味わってみなければ、ある意味では聖書の意味がわからない、信仰はきびしいものだ」と

おっしゃった。デイスカッションは夜の十二時までも続いた。テントの中でランプをつけ、組立てベッドの上で熱心に質問し合った夜をけつしてわすれられない、翌朝先生は「昨日の質問はテープにとっておいてもいい程立派な質問だったよ、君達でも、あんなに熱心な顔になるのかと思つたよ」と冗談まじりにおっしゃった。

創世記にもどるが聖書はこんな事をいっている。天地創造から始まる旧約聖書の創世記は神が「光あれ」といわれて昼と夜を造つた。「水の間に大空があつて水と水とをわけよ」そこで天をつくつた。陸を造り、動物の種類にしたがって創造し、神は自分の形に人を創造され男と女とに創造された。こうして天と地と、その万象が完成し、第七日目にその業を終えられて、休まれた……

進化論の進む世の中で未知の世界をさぐるうと、意気燃える若者にこれが信じられるだろうか、この中に何が何を教えるようにしているのか、これから、私の学ばなければならぬ唯一の疑問である。教会でのデイスカッションは本当に楽しい、U君がこんな事を言った、「聖書を書いたのが先生だったら沢山質問するけれど、ちがうからしょうがないよ」

結局、多少の事柄を先生と話合う他、自分で考えなければ出ない結論である。

キリストの立場である川原先生からとてもうれしいハガキをいただいた。……「デイスカッションやファイアードで楽しみながら厳しい人生の戦に強く勝利を得ようとなさる心意気を感じ心からうれしくなりました」私は実のところこんな気持でやってはいなかった。しかし夏期生活には同年の三年生は一人もいず心から話合える友達、仲の良い友達もいなかったがその中で楽しく過でし、色々の友達と話合い、共に生活のできた事がうれし、というのも千倉や香掛の班分けて、同じ学年で勉強し、話あつていながら「あの人ではいいやだ」とお互い言ひあつた自分や泣いたりした友達を見ると、明星の子に

はこんな気の狭い欠点があると感じ自分でここから脱した意味でうれしかったのである。教会学校でキリスト教や聖書にふれると同時に学校では味わえないものを百倍も味わった気がする。人生とは、どんなものかよくわからないが多くの人々が社会に立って一番古いキリスト教がおとろえずに現在なお続くのを見て人々の中にキリスト教が深く刻まれているのを感じる。

今年の夏は、聖書と私に於いて今までにない一つの課題を得ることが出来た。クラスのお友達と、これらの事や自分達各々の考えを話あったり先生方の意見をききたい。

鼻

中 三 小 寺 熙 士

禅智内供の鼻といえは、池の尾で知らない者はない。長さ五六寸あって上唇クナビルの上から顎アゴの下まで下っている。五十才を越えた内供、沙弥の昔から内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んでいた、しかし顔には表わさぬように努めていた。それは自分が、鼻の事を気にしている事を他人に知らせたくなかったからである。日常談話で鼻という語が出て来るのを何よりも惧れていた。実際食事をする時でも弟子を膳の前に坐らせ板で鼻を持ち上げていなければならなかった。一度この弟子の代わりをした中童子が、くしゃみをした瞬間お粥の中へ鼻が、落ちてしまった。これが当時京都にまで宣伝されたが、内供にとって決して鼻を苦しめた重大理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心の為に苦しんだのだ。内供が第一に考えたのは、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。それから内供は人の鼻を絶えず見て一人でも自分の様な鼻のある人間を見つけて安心しようとした。しかし内供のよう

な鼻は見当らない。最後には、内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して自分の心やりにしようと思つた事があるが目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの経文にも書いていない。どうにかして長い鼻を短くしようと思つたのは言う迄もない。出来るだけの事をしたが、五六寸位垂れ下っている鼻は、一向に変わらない。所が或年の秋、内供の用を兼ねて京へ上つた弟子の僧が、知辺の医者から長い鼻を短くする方法を教つてきた。その医者の言うには、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませるといふ簡単なものだが、鼻などは、氣にかけていない風をしてすぐにはやらなかった。しかしそれに対する反感よりは、内供のそういう策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。そして弟子の僧はこの法の試みる事を勧め出した。内供も結局この熱心な勧告に聴従する事になった。湯は寺の湯屋で、沸しているのを汲んできた。指もつけられないような熱い湯なので折敷へ穴をあけて湯氣で顔を火傷しないようにして鼻を茹でた。鼻が蒸されたので折敷から鼻を出した。それから弟子に鼻を踏んでもらった。しばらく踏んでみると、粟粒のようなものが、鼻に出来て来た。これを鑷子でぬくそうだ。内供は、不足らしい顔をしたが、僧のやるとうりしていた。やがて一通りすむと一息ついてまたそれを鑷子でとり始めた。それが終ると又鼻を茹でた。さて鼻を出して見ると不思議！ 顎の下まであった鼻が、今では普通の人の鼻と一つも変りがない程短かくなっている。内供はのびのびとしていた。所が二三日たつと、内供は以外な事実を発見した。それは、用事があつて池の尾の寺を訪れた侍が、前より一層おかしそうな顔をして話もせずじろろと鼻かばりを見ていた。そればかりか、そのような事が何度となく起つた。そこで内供は日毎に機嫌が悪くなった。誰でも意地悪く叱りつけたり内供の鼻の治療をした弟子の僧さえ「内供は法體貪の罪を受けられるぞ」と陰口さ

えきく程になった。内供は反つて恨めしくなった。すると或夜の事である。日が暮れて急に風が出たと見えて塔の風鈴の鳴る音がうるさい程枕に通つて来た。その上寒さもめつきり加わつたので、老年の内供は寝つこうとしても寝つけない。そこで床の中でもじもじしていると鼻がむづ痒いの気づいた。手をあてて見ると水氣が来たようにむくんでいる。無理に短かくしたので病が起つたのかもしれない。内供は鼻に手をやったりすると、きのうのような短かい鼻ではなく、五六寸もある長い鼻だ。それとともに短かくなつた時と同じように晴々しい心になった。

(感 想)

芥川竜之介の作品の中でも珍らしい喜劇の作品である。鼻の中で鳥爪を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。という所があるが、こんな所など芥川竜之介の作品等には少なく思つた。なんとなく夏目漱石の文章を思い出す。最初に喜劇と言つてしまつたが、深く読んで行くと喜劇とは、とれなくなつてしまふ。それは、この作品で一番大切だと思われる所に人間の心に矛盾した二つの感情があると言ふことが書いてある。それは——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論誰でも、他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切り抜ける事が出来ると、今度はこっちでもの足りないような心もちがする。少し誇張して言えは、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような氣にさえる。こうした何時の間にか、消極的ではあるが或敵意をその人に對して抱くような事になる。——芥川竜之介が人間について深く書いてあるのがいっぱいあるがこの文もその一つである。この例はいっぱいある。人間と言えは欲がある。欲が無い人は、周囲の人にとってみれば、立派な人だ、偉大だと言われる。偉人でも欲がないわけではない。こ

の鼻に出て来る坊さんは本当に偉い人か？ 悪い人か？ 坊さんというものは、朝早く起きお経を唱え人の冥福を祈る職業としては立派なものだ。しかしこの内供は本当に立派な人だったかということが、問題になる。確かに欲はあった。結局それが人に笑われる原因になった。一度欲が出ると止まらないという訳だ。例をあげるともし交通事故で死にそうな時まあ命さえ助かればいいと思っている。命が助かるとびっこになつていなければいいと思う。身体が、どうもなくなると今度は金が、安くすめばいいかと、欲というものはきりがなくなってしまう。だから乞食が三日やるとやめられないと言うが、これは自分の生命の欲を考えずに、ただ死にさしななければいいと思つてゐるらしい。だからばくは本当に乞食が居ても金をめぐんであげようと思つたのは小さい時だけだった。だから欲張りということは、ただ悪いと解決出来なくなる。内供は鼻の事でさうとう苦労している。短かくなりたいのはあたりまえだ。しかし短かくなつても世間というものはうるさいもので簡単に言えば、世間が許されなかった。そこで欲が出た。しかし内供は、不斷の行いがいいのか、幸い又元どりの鼻に戻つた。これで内供の心は、すっきりしたという。人間の心は、複雑のようで実に単純なものである。結局人間というものは、生まれてただ自然に生き抜いていくことが一番幸福であるということだ。

(先生の批評)

◎たいへんおもしろい感想でした。人間というものは、一部の人間か考えているほど、すばらしいものでもないし、また他の一部の人間が考えているほど、くだらないものでもないという言葉がありますが、あじわうべき言葉ですね。

アメリカ黒人歌手の自伝

ここに私は立つ

中 三 高 梨 苗 子

私は、ポール・ロブソンの自伝「ここに私は立つ」を読んだ。内容は、アメリカの白人と黒人についての事が書かれている、つまりアメリカの自由主義と民主主義とに矛盾した人種問題についてである。

私は本を読み終つて、ため息をついた。とても良い本だからだ。初め読む前はなんだか面白くなさそうで、やめようか……とも考えたが半分ほどまで来て見るともう面白くてやめられない。感じた事は、アメリカでは、黒人問題を、深刻に考え何事にも黒人であるという肩書によって、行動を許されなかったり、白人との共学を嫌ったりしている。つまり人種差別待遇である。リトル・ロックス事件、容疑者であるだけで、その黒人はリンチで殺されてしまった。

なぜ皮膚の色のちがいを理由に、黒人に対してアメリカ人たちは白人は、冷たいのだろうか？ 答は簡単である、それは、白人の優越感による、おまけにアメリカは南北戦争で犠牲者を出してまで、ドレイ制度を廃止したはずなのに、この本を読むと、南部の一部はまだドレイ制度の精神が残されている。黒人の大部分は、労働者である、が、彼等は、白人の労働者よりも低賃金である、なぜ同じ労働をしても賃金が少ないのか？ アメリカ人はひきょうなのか？ アメリカは矛盾ではあるが、民主主義を、世界に示しているはずではないか？ いろいろの競技等に出ているアメリカ選手の中には必らず、黒人が入っている、そして彼らは優秀な選手でもある。アメリカ人は彼らの活躍によっていくらかの点を採っているはずではないか？ アメリカ人は、ずるかしこい、なぜならば競技会等では、アメリカの力を表わすのに黒人をつかっているが、学校で一緒に勉強するのは、いやだと

いい暴力をふるう。近代社会のアメリカにおいてこのような人権を無視したやばんな事があるとはおどろいた。この様な事をロブソン達黒人がなくそうとつとめてゐるがこれは、所詮無理な事で、不可能に近い。

彼らが言っている代表的な意見は、「あのリトル・ロックス事件の核心は、フォーバス知事や暴徒どもが行つたことでもアイゼンハワー大統領がやむなくとつた措置でもない。重要な事は、九人の黒人少年少女が、両親や、町の黒人社会や、その指導者達にバックされてセントラル・ハイスクールに入学する権利を、要求する決心をしたという事にある。この若者達が、この要求をするのに示したすばらしい勇氣と自尊心とは、アメリカの一般市民の賞賛の的となつた、彼らの「行動」は、民主的な思想を持った白人の同情と支持とを得るうえに「寛容」を説く百万ペンのお説教よりもはるかに力があつた」これが彼らの代表的な意見だ、又この本には、「アフリカ彫刻の愛好者が、この傑作をその手で作り出した民族に対してまったく冷淡であることがあうる。ことにアメリカでは、黒人の音楽を賞賛し、さらにひょうせつさえしながら、当の黒人に対しては侮蔑の念しか抱かないものが多い。私の場合では、民謡の優美さによって、精神的にヨーロッパの庶民に強くひかれたわけであるが、一方当時の歴史の不吉な太鼓の響が私を肉体的に彼らの中に導いたのであつた。」本主にこの通りだと私は思っている。リトル・ロックス事件のように、黒人が勇氣を持って勇敢に行動し、又それを支持する正義と自由主義を信じている白人たちだけの力が、この人種問題を解決する糸口になるであらう。

アンネの日記

中 一 宮 川 木 末

アンネ・フランクという私達と同じ年の人が書いた日

記です。

私は、先に本を読んでいたのです。すじは、わかっていなければ、とても感心しました。

本を読んでから最初に思った事は、私等に比べて「おませ」な感じがしました。

けれども二年間も、かくれ家生活が続けて大人達のものに、争いを見ていけば、そうなるかも知れません。

私達は、とても幸福だと思います、アンネの様に戦争の苦しみを味わなくても良いのです。それにしても

その頃のユダヤ人に対するうちは、ひどいものだと思います。胸に「黄色い星」をつけなければ、つかまっ

てしまい、電車にも乗れず、一つ一つ事をとりたてられては、しかられるのです。日記の中には、そのはげしい

にくしみが表われています。かくれ家生活は、とてもひどいものです、下に工場の人々が来ている間（九時間位）

は、物音一つたててはいけないのです。くつはぬぎ、はだしで歩き、台所等で水を流すのもいけなくて、お手洗

いさえ入れないのです。

けれども工場の人達が帰るとそれを見届けてから、みんなは、やっと息をつきます。アンネは、急にうるさく

なります。すると又、大人達がアンネをおこるので、アンネは、「子供あつかいにしないでよ！」と反抗的にな

ります。それでいて、大人あつかいにすると、又おこるのです。皆それまでは、神経をとがらせていたのです。

だから、悪い事は全部アンネのせいになせられます。一緒に住んでいるファン・ダーン家には、ピーターと

言う、十六才男の子が居ます。ピーターは、「ムーシ」というネコを飼っています、アンネは父とは仲良く出来

るのですが母とは、どうもうまくいきません。ピーターもやっぱ愛情にうえていたのです。そして、そのはけ

口をムーシに求めていたのです。ピーターもアンネを「ガーガー娘」といって仲が悪かったのですが、ピーターは、本当は、やっぱ大人達の争いをいやがって何か

言おうと思っていたのですけれど、口がへたで言いたい事も言えなかったのです。そして、二人は互に、だんだん仲良くなっていっていったのです。

ある夜、ファン・ダーンの主人が、皆のパンを盗みました。だからみんなは、出て行ってくれと言いました。

食べもののこととなると、人間でも、こんなにひどい争いになるかと思うと、私はとても恐ろしい気持ちになりました。

ハスカ祭りをしてる最中に、下の事務所に、泥棒が入ります。上に自分達の居る事がわかってしまうかも知れません。一べんに歌うのをやめて、そうとくつをぬ

ぎます。しーんとした中で金庫を開ける音だけが「ガチャガチャガチャ」と不気味にひびきます。その時保安警

察官が二人きてかくれ家の下に入りました、だんだん皆の方へ近づいて来ますけれども、ネコは思うとうりには

出来ません、あるき始めました、何かを食べます。プチャプチャという音に警官は、かくれ家のドアになっている、本箱に、かい中電灯をあてます。本箱のすき間から

光が入り、ピーターと、アンネの顔に一番光がさします。その気味の悪さといったら何とも言い様がありません

手に汗をにぎってしまいました。

大変な事が起きました、ムーシがいたのです。けれどもそれがかえって、効果をあげて、警官達は「ネコだ」といって安心して帰って行きました。

その日は、無事にすぎましたが、ほんのぐうぜんにすぎないので、ムーシは、他の家へ連れていかれました。

警官が帰った時、すごいきん張がとけて、思わず、「ホー」とためいきが出ました。

ある日みんなで、戦争のけいせきが良くなって喜んでいたら時、又あの不景気な足音が聞こえてきて、この二

家族と一人は、バラバラに別れてしまうのです。

映画では、お父さん（オットー・フランク氏）が、アンネの日記を見つけて、それを読んで居るところから始

まります。そして又、それで終わります。

私が本でよんで考えていたイメージと、映画のアンネは、全々違っていました。映画の方が迫力があつた点等で良かったと思います。

赤毛のアン

中 二 風 早 多 美 子

アンの物語はまだこの他に続きが何冊か、出ているが私が読んだのは一番最初の、アンの少女時代のことである。

この小説の主人公アンの、私達と異なっているところは、アメリカ人ということ、孤児ということだけで、他は普通の一少女の生活が描かれている。しかし、それだけだったら、古くから世界の人々に愛され、広く読まれていると言うことにはあてはまらない。何か、感動深いものがあるのだろう。そう思っている本を読んだのです。特別に強い感動は受けなかったが、私ととにかく共通なものがあるし、興味深いので、夢中で読みました。

そばかすだらけの顔と赤毛を持つ、孤児アンが果樹園に住むクスパート兄妹（兄はマミューと言ひ、妹はマリラと言ひ）にひきとられてからの話。クスパート兄妹は、孤児院から男の子を一人ひきとるつもりだったのに、年のわりに、ばかに口の達者な赤毛の少女が現れたのでびっくり仰天。初め、何がなんでもアンを孤児院に送り帰そうとしたクスパート兄妹も、アンの一所懸命な態度と愛らしい姿に根負けして、とうとう自分の家におくことにした。しゃべらせておけば何時間でもおしゃべりするアンが、黙りこくっているほど孤児院に帰りがたがないところを見ると、孤児院でのアンはあまり幸福でなかった様だ。私はそんなアンの気持がわかるような気がする。考えてもごらんさい。私達の様に両親のもとで

限らない愛情に包まれて暮してきたのではなくて、孤児院で自分と同じ様な境遇の子供達と、食物も満足にもらえず、そんなことはまだいいとして、お母さんの暖い心のこもった食事などしたことがなく、いつもかたくるしい生活をおくってきたアンなのですから、孤児院に帰りがたらないのは当然ではないか。私達がいくら誰かがひきとってくれるといったって、行きたがらないのは、それはやはり家庭がどんなに良いものかを示されている。アンは家庭のありがたさを味わったことがなかったのだ。私は、もしかしてアンが孤児院につき帰されやしないかと、はらはらして読んでいたが、ひきとってくれることになって、自分のことの様に嬉しくほっとした。その日からアンの新しい生活が始まる。

私は読んでいて、アンほど幸福な少女はないと思っただけで、今ではおじさんやおばさん、沢山の友達がいるし、学校の成績だって素晴らしく良い。それよりもっとアンにとって幸福なことは、豊かな想像力と、何事にも負けない強い心、清らかな心を持っていることだと思う。それによって、おじさんやおばさんを若がえらせ、生きがいを感じさせたのだから、おじさんとおばさんは二人共結婚したことがなくて、今まで子供を育てたことがなかった。だから子供というものは、良いしつけをすれば、一人でやっていくと思っていたのだと思う。アンを育てていく内に、考えも深くなって、かたくなになった心がやわらいでいった様だ。むろん、クスパート兄妹が悪者だった訳ではない。しかし、年とつたせいもあるが、長い間夢を忘れていたのだと思う。もし、アンが来なかったら、彼らは、生きがいのない生涯をおくったに違いない。アンはそんなに魅力のある少女なのです。

アンの物語の書かれた時代は、今の日本などとは違う五十年前のアメリカのことです。もし、アンのような少女が今の日本に生きていたら、そして私達のよ

うに明星学園の中学二年だとしたら、アンはどんな風に勉強し、どんなお友達をつくっていたでしょうか。私はそんなことを考えながら、これを読み終りました。

にあんちゃん

風 早 多 美 子

この広い世界には不幸な人がどんなに沢山住んでいることでしょう、

広い土地を持ち、何一つ不自由ない暮らしをしている人がいると思えばせまき所で大勢が固まって生活している人や貧しい生活に追われ、毎日をひもじい思いをして暮している人もいます、けれども幸福な日々を送っている人もいます、けれども幸福な日々を送っていても不幸な人のことなど少しも考えず自分や身内のことばかり思っている人もどんなに多くいることでしょう。

自分だけ立派な暮らしをする人よりも金持ちでなくてもどんな苦勞にも負けないで一生懸命働いて正しい心で生きていく人の方がはるかに立派です。世の中にもそういう人が多勢います。その一人が「にあんちゃん」を書いた安本末子という少女です、にあんちゃんといってもそれを題として作った文章ではなく、当時小学四年の少女が書いた日記なのです、それには二番目の兄さんのことがよく書かれてあるので編集者が「にあんちゃん」という題で出版したのでしょう、

作者は大変かわいそうな境遇で、三つの時母に死なれ三年生の冬に父にも死に別れ、長兄の喜一が炭鉱で働いて一家「兄弟四人」の暮らしをたてている、その仕事も、兄が朝人鮮だということでもあまりいい職業につけません。給料もよくありません、御飯もたべられないで、水としょう油などで間に合やすことも度々あるほどです。このように生活の苦しさは私達の想像にもつかないほどです、どんな子でもこんなに親との縁がうすく貧しかった

ら、少しはひがみもでていけない子になりがちなのに、そりゃあ心の中では自分の不幸に泣いているのだろけど、少しも不平をいわないでいつも自分を反省して一生懸命勉強しているのです。読んでいて、のんびり暮しているのに勉強などすっぱかしにしてきた自分が恥かしくなりました。本当に末子さんはえらいと思います。

もう一つ感じたことは作文や日記等は、いくら上手に書く力があっても、末子さんのように小さい時から苦勞して自然と身についてきた暖い心がなければ、心から胸をうたれる様な文は書けないという事です、実際末子さんは、ほんとうのことではなくていいからなるたけうまく書こうという意識は全くなく、ほんとうにありのままの自分の経験や感じたことを書いたから、それであんなにうまく書けるのだと思います。

ある日、風呂屋で何の関係もない人達に、いやがらせの言葉をかけられていた乞食の親子に心から同情して自分の不幸なことも忘れて小さな心をため、心配そうに見送ったことが書いてありました、そんなことぐらい当り前だといえはそれきりですが、一般の人々は案外同情することよりも、その気の毒な人をあざ笑ったりしかめつらしてしまうのではないのでしょうか。

又ある時、学校に持っていくおべんとうが一つしかないで、自分は学校が早く終るからいいけど、六年生のにあんちゃんは、六時間間なのでお腹がすぐだろうと思っ持っていかせようとすると「今日は四時間だからいいよ」といってにあんちゃんはおべんとうを妹に渡ししました。学校にいつから自分のためについたうさどとわかって手をつけないで家に持って帰りました。そんな兄を思う妹のいじらしさ、妹をいたわろうとする優しいお兄さんとの兄弟愛はほんとうにすばらしいものです。

このように、一人一人がお互いにいたわり合いなぐさめあって生きていったら、きっとこの世の中に不幸せというものがなくなるでしょう。それから末子さん兄妹を

幸せにしてあげるには、一日も早く朝鮮に返してあげる
といひではないでしょうか、新しく生まれ変わった朝鮮
(末子さんの故郷)はきつと末子さんを幸せにくれ
るにちがいないと私は思います。

『次郎物語』

中 二 山 村 邦 子

この本を読んでまず感激した事は、朝倉先生の人格、
又、無法の権力の時代の中で朝倉先生が叫ぶ「人間の真
実」と良心の自由を知った事だ。そして、その朝倉先生
の生徒としてふさわしい次郎の正義感である。

しかし、その感激の中で一面こういうふうにも感じ
た。それは、朝倉先生も時勢とはいくら防ごうと努力し
た所で、いく所までは行くのだ、とは言っていた。しか
し、そんな事がわかっていながら、なぜ言っても通るは
ずがない時勢に、正義を叫ぼうとするのだろう。時勢が
行く所まで行ってしまうから叫んで国を救ったらしい
ではないか。絶対通らない事を確認していながら正義を
叫ぶのは、自分が損をするだけではないか。時勢がとこ
とんまで追いつめられ、やっと国民が正義と国民の自由
に目ざめた時は、朝倉先生の信念がとり入れられ、大いに
認められるだろう。そういうチャンスというものをと
と考えた方が利口だと思ふ。どんな時でも正義は正義だ
が、時勢というものを考えると、必ずしも正義は通ると
いうものではないと思ふ。

そう思うと、中学校の入学式の後の行事で次郎が皆
の前でとった態度の「英雄」にも疑問が出てくる。次郎
は自分で正しいと思つたからなのだろうが、もし相手
も自分で正しいと思つたのならばけんかになるのでは
ないか。それが国と国だったら戦争になるではない
か。又五・一五事件の事でも朝倉先生は軍人のいる前で

民主的な事は遠慮した方がよかつたと思ふ。言つても何
にもならないのだから。留任運動で次郎はよく考え本當
に努力した。しかし、これもただの努力で朝倉先生の退
職はどうする事もできなかったのである。

しかし、こういったからといって、朝倉先生や次郎、
俊亮の言つたり行なつたりする事に感心してないのでは
ない。朝倉先生、次郎の態度、努力、勇氣、信念に対し
て非常に感激している。次郎の身を捨てても正義を守ろ
うとする、燃えるような正義感はどうい真似ができな
い、これは父、朝倉先生、権田原先生、徹太郎、恭一等
の真実の愛、真実の教えによって守り育てられてきたも
のだと思ふ。

父の教育法はお民とは正反対である。父は愛によつて
正しく育て、母はただ一心にしつけしつけとおしつける
だけで「愛」を与える事に気付かなかつた。俊亮は本當
に理想的な父である。こんな父は数多くいるものではな
い。俊亮は幸せだと思ふ。子供の教育法をよく知つて
いたし、子供からも理解されて慕われた。父に対してか
わいそうなのはお民である。結核になって死ぬ前にやっ
と「愛」に気が付いたのだから。次郎だけは、いつもあ
たしのそばにいてももらえるわね、と涙をためて言つた時
などは本當にかわいそうで涙がでた。

祖母は又、次郎を憎む事しか知らないようだ。そして
世間の目を気にして屁理屈ばかり言っているどうもこの
祖母は氣にくわれない。「本當に意地の悪い敵」という氣
がする。でも、「愛せられる喜び」から「愛する喜び」
へ変つた頃の次郎にいわれて考えてみると、やっぱりか
わいそうだ、とも思ふ。彼女は非常に弱い人間なのだ。
それは、次郎が友愛塾の生活で自分の弱さを強く感じ、
自己嫌悪におちいった時と同様にあわれに思ふ。人間の
弱さというものがよくわかるような氣がした。

恭一は正義感も強く、兄としての愛情もあり、非常に
良い人だと思ふ。恭一がいなかったら次郎はこんなに正

しい、真実を守る人間になつていなかったかもしれない。
次郎が道江との恋愛で苦しんでいた時でも恭一は兄
としての弟に対する愛情を忘れていない。本當に兄弟愛
というものは美しいと思つた。

しかし、次郎はどうして兄の愛情に満ちた手紙がきた
時に心にもないうそを書いたのだろう。あんなにうそを
書かないでくれと書いてあつたのに。道江の事だからと
いつてうそを書く必要はない。愛しているなら愛してい
るとはつきり書いた方が自分のためにも、恭一のためにも
よかつたのに。何かで何まで次郎は人間の真実につい
て考え、戦つてきたのではないか。でも「人間の真実」
が頭にはいつてこれないほどに大きな苦しみだったのか
もしれない。

道江への恋から、まして大河無門の前において自己嫌
悪におちいり、生まれてから今までにない自分のみぐる
しさを恥じている次郎の姿は何ともいえないいたしい
姿だ。この時の彼の苦しさも少しわかるような氣もし
た。自分のみぐるしさを知り、自己嫌悪におちいった時
ほど、みじめで苦しい事はない。学生が自殺したりする
のも、こういう事からではないかと思ふ。

私はこの本から第一に「人間の真実」と「良心の自由」
第二に「運命」「愛」「永遠」「実社会」「時勢」「無
計画の計画」等について良く考えてみようと思ふ。

この中の「運命」「愛」は自分でも時々考える事であ
るが、「永遠」というものがどうしてもわからない。ど
ういうふうに考えていいのかわからない。そのうちにだ
れかに教えてもらおうと思ふ。私は、「人間の真実」と
「良心の自由」については特によく考えて朝倉先生ほど
はいかなくても、努力し、守ろうと思ふ。

『高瀬舟』

中 二 正 宗

この話に出い来る床兵衛と言う人は、京都で島流しに

されると決った罪人を、高瀬舟と呼ばれる小舟で大阪まで護送する役人である。

床兵衛はある日、珍しい罪人を護送した、それは喜助と言って弟殺しの罪で島流しにされることになったものだが、島流しにされることを少しも悲しんだりしている様子がなく、むしろ喜こんでいるようなのだ。床兵衛は不思議に思った。(今までこの高瀬舟に乗せられた罪人はみな島に行くのを悲しがっていた。それなのにこの男は) と思っていたまらなくなつて聞いてみると、喜助は島流しになつて悲しむのは世間で楽をしていたからだ、私のように、これ以上の苦しみはないと思われる程の苦しみを味わつて来た者はないでしょう。どこいつて自分の居ていい所はなかったのが慈悲で命を助けてもらい、島流しにされる。また、二百文のお金をもらつたし体も丈夫な方だから島で楽しむつもりだと言つた。そして「それまでは、仕事をしてもしても思う存分に食べられたことはなかったのにお牢に入つてからは、仕事をせずに食べさせてもらつて満足した」と言つた。

つい最近見た映画モダンタイムズにもこんな話があつた。チャップリンはどこで働いてもすぐクビになつてしまい、ふらふらしているうちに何かのことから留置場に入れられてしまうが、彼はこの生活がすっかり気に入つて、留置場破りをつかまえたため留置場から出られる時になると、その部長に「もう一週間居ちゃいけませんか」と言う。

高瀬舟の話の方だが、床兵衛は、喜助の言つたことを聞いて、自分の生活は、ちゃんと仕事もあり、食べていけるが、それもまああの所で、それに満足したことはない、それなのにこの男は自分の生活に満足していると思つた。

そして、ただばくぜんと、人の一生というようなことを思つてみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食つていかれたら

らと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考へてみれば、人はどこまでいつて踏み止まることが出来るものやらわからない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だ(本文を写した)と思つた。

これについての私の感想は、喜助、あるいはチャップリンはすぐくつらい思いをして、これ以上苦しいことはない位になつたから、今の自分は楽しいのだ、と満足したような気がする。喜助が、床兵衛のような、または床兵衛以上の裕福な生活をしていて、果してその生活に満足するだろうか、しないだろう、現に床兵衛は、喜助より裕福な生活をしていながら、その生活に少しも満足していない。でもそれではいけないのだ、裕福な生活をしていけば、それだけに、その生活に満足しなければならぬ、と言うより、私は満足した方がよいと思うのだ。裕福な生活で満足するのと、あまり裕福でない生活を満足するのと、どちらがよいかと言うことはわからないただ、その生活に満足しないより、した方がよいと思う。

『高瀬舟』

中 二 角 尾 美 耶 子

私はこの文をよんでいてある疑問をいだいた。それは自殺をして死にきれないで苦んでいる弟を楽に死なせてやつたために殺人罪となり島に送られて行く喜助についてである。喜助は島に送られる事を悲しんでいるわけではない喜助はかえつてうれし事と思つている。喜助には親類の人は一人もいないし島にいつてもこれまで以上に苦しい事はないから島に行くことは喜助にとって悲し

い事ではない。もしここで喜助に親類がいたとしてみると喜助が苦しんで死を待つている弟を殺して楽にさせてやつたことが悪いことだろうか、どうせその弟は死ぬのにそれを楽に死なせてやるのが罪になるだろうか。そこがむずかしい疑問のてんなのである。喜助が島送りになるのを親類の人(いた場合)はどう思うだろう。親類の人は喜助が島送りになるほどの大きな罪になつたことになつとくがいくだろうか。喜助にとつてたつた一人の弟をころすことは死ぬほどつらかつた。だが苦しみながら死をまつている弟のたのみをきかないわけにはいかなかった。喜助はどれほどためらつたかしのれない。だが喜助は目をつぶつて弟を殺してやつた。喜助は弟をどうにでもしてなおしてやりたかつた。ただそれができなかったためにこんな悲しい事がおこつてしまつた。

私はこの文を読んで生きていくためには大きな困なんがあるが、それぞれに正しい判断をして正しく生きていかなければならぬことをはつきりと感じた。この場合の喜助の判断は正しいと思う。又弟が苦しんでいる所を読んでいる時はその情景が目の前にうかびなにか気持ち悪いような感じがした。なんだか文が生ききているようだった。

あらしのまえ・あらしのあと

中 二 江 藤 朋 子

一九三〇年の秋から翌年の夏にかけて……。それはちょうど第二次世界大戦から、翌年ドイツが大攻勢に出るまでの間のフォンオルト家。これがあらしのまえとあらしのあとのお話なのです。

フォンオルト家の人々はオランダの「レヴェル・ランド」とよばれる屋敷に住んでいるのです。お医者さんのお父さんと、やさしいお母さん、いつもピアノの練習を

しているヤシ、姉さんのミープ、女中のゲッシュ、これらがフォン・オルト家の人であります。

勉強がらみのヤシがある晩お父さんと一緒にかん者さんの家に行き、そこでお父さんの仕事ぶりや、おちつて大人をとくふせる言葉を聞いた時、お父さんのようになりたいたいと思つて、勉強しようと思つた事。そしてヤシの勉強がもう学校についていけないで、校長先生は退学の事をいわれた時、ルトが大好きなお兄さんヤシのために校長先生の所まで行つたのむ事。そして、ドイツでヒットラーのひきいるナチス党が政治をとるようになり、ユダヤ人を迫害しはじめたので、ユダヤ人の少年ヴェルネルがオランダへにげてきて、フォン・オルト家の人々と一緒にくらすようになった事等、いろいろな事があるのです。

あらしのまえ、あらしのあとという題名のあらしは戦争のことなのです。あらしのまえのフォン・オルト家はもちろん、ふつの家のように、それ以上に楽しかつたのでした。前に言つたような事や、それぞれ一人一人の事など、いろいろな事があります。そして家のくらしは豊かだつたでしょう。それからあらしのあとは、やつぱり楽しくないといえませんでした。でも、戦争のためにヤシは死んでしまつたのです。そしていたずらでおちゃめだつたピーター・ビムは、それとまるで反対の、陰気な少年になつてしまいました。第二次大戦という大きな戦争のために、フォン・オルト家はずいぶんかわりました。でもやつぱり楽しい家庭でした。こんな大きな戦争があつた後で、希望を持つということはずかしい事だと思ひます。大きなショックをうけて、その後すぐ元のようになる、というのはむずかしい事と同じなのです。私達は終戦の年に生まれて、戦争にはあいませんでした。でも、戦争がどんなにつらいかという事は、家の人に聞いたり本で読んで知つています。誰だつて戦争はいやでしょうね、でもルトは絵の才能があるという

事がわかり、ヤップはピアニストとして成功して、ピーター・ビムはヴァイオリンをひく事に決めたのです。もちろんそうなる人々は幸福だつたでしょう。

幸福は、自分でつかまなければやつてきません。だまつていたつて、幸福はやつてこないのです。みんな一人一人で幸せをみつけたのです。

フォン・オルト家々人のにくらべて、大きなショックもうけなく、心配事もなく（もちろん小さな心配は誰にでもあるでしょうけれど）だまつていても幸福に暮している私達は、幸せです。もちろん戦争が、あつたら、その時は今はちがうでしょうけれども……。

『動物園夜話』林寿郎著

高一 大島 卓

実に楽しい書であつた。

申すまでもなく著者の林さんは日本動物界の第一人者であり、又そのなしとげた成果の偉大な事は誰も周知であらう。文中先生が上野動物園での昔から現在にいたる迄の動物との体験記であつてそこには数知れぬ悲喜劇哀話がつづられている。

全体にすつきりとしていて読みやすく、無精者の心ですら最後まであきさずにとらえていると云う事からみても、すすめられる書である。モクジを開くと先ず冷汗物語と出て来る。中でもヒグマと相部屋したM氏など興を引く。例の如く飼育係のM氏ヒグマの運動場の掃除のためやつてきた。M氏に限ずこの様な事は長年の習慣と云うもので目をつむつていても事は進むそうだ。M氏の役はこのヒグマの運動場をホウキで掃きホースで水をまくのである。ヒグマと云えど猛獣であるからして一緒にいる事さえ出来ないものである、その日は、前日檻の鍵をかけ忘れたのが原因らしく掃除をしているM氏の目前に

いた。彼の驚いたの何のと書きたてる事もないが本人はひどく気を失い、一日中ただ、真蒼の顔を両手で抱き何事も云わず椅子にもたれていた。実に本人には気毒であるが、やはり、それを餌にしているせいでもあるうが、逃足も達者だなど思った。

次の項目が夜の動物園。動物もいったん檻へいれられると夜行性のものも、一般並に夜は眠る様になるとの事である。すなわち餌は昼間に定められた量を定められた時間に与えられるのであるから、ただ彼等はそれ彼つだけが良いのである。であるから動物園の生活は彼等に夜の睡眠を教えたのであつた。それはともかく、ヨヨーテなどは夜の動物だ。中天をあおぎおごそかな詩を読みあげる。その声は実に感動的で詠嘆調であると云う。僕は別にそれを聞いたわけでもないから知らぬが実に神び的な静かなしらべであらうなあとと思う。

次は動物の恐怖心「大鼓におびえるチンパンジー他」それから動物の愛情余話これなどいつ聞いても快いものである。変つたところで動物と酒。酒と猿カメそしてクマと仲々ノンベエとは人間以外にもあるとは酒会社も宣伝に一苦労の事であらう。くだらぬ心配はさておき次は動物のいか物食い。人間様にもガラスやクギを食べる人もおるそうだが負けずに、ハンドバッグを食べた犀。毛布を食べた王蛇。針を食べるバイソン。カンサシ食べたヒクイドリ。どれもまあよくやつたもの。いや恐れ入りました。次は珍病奇病。月曜病、これなど全般的動物に云える事で前日の日曜お客さんからもつた餌かおおすぎ腹をこわすものが多いとか。題して月曜病などと、良いお身分ですわ。そして四季の動物たち。米国を育てた野牛。ダム建設技師「ビーバー」など書ききれぬほど書かれてある。最後にこの本情を読んで一人でも多くの人か動物にをよせる様な事かおこれば林先生も嬉しい事であらう。

カラマーゾフの兄弟

ローランド・ラング
室谷幸子訳

芸術作品や文学作品に「偉大なもの」として知られている特性となっているものが何であるか、人は各々それについて独自の見解を持っている。私はというと、その本がこの特性を持つ時は、我々がその本を毎日の世界での経験に照らして読むことが出来、「これが真実なんだ」と言う事が出来る時であると思う。「真実」と言ったのは現実の人間や事件をありのままに記さなければいけないというのではなく、登場人物や事柄が人間的であり、信じることの出来るものでないといけないというのである。

以上のような事が「カラマーゾフの兄弟」にびつたりとあてはまるのだ。この本を読みながら、誰でも登場人物のような人々を知っているように思う。そしておそろく自分自身がこういった人間なのではないかということを感じる。そこに出てくる人々は、単に「善」と「悪」の比喩的なシンボルではなく、人間をいわゆる人間らしくする欠点と美德とがこみいって、まじりあっている、複雑な人間の姿なのだ。

父がいる。彼は明らかに卑劣であり利己的な人間で、おそらくは読者の多くから軽蔑されているであろう。彼は他人に及ぼす影響のことなどかまわずに自分自身の欲望の満足を探して歩いているような男だ。彼の態度を大目に見ることは難しいけれども、それにもかかわらず彼には少しも偽善という面がないということで、彼はいくらか救われていると思う。

兄弟達。彼等は三人の個人を表わしているとまでは言えないが、人間の性格の三つの側面を表わしていると思う。次兄は、人間の知的面を描写している。それは、理

性と論理によって完全に支配された生活をしたという望みである。この物語からわかるように、このような論理的な生活をしようとする願望は、決して実現されることはない。なぜなら、人間には理性的な心があるだけでなく、論理の声を聞き入れない感情的な心というものがあるからである。

一番目の兄。もしかしたらこの本の主人公として考えられることが出来るかもしれない。この兄は、感覚的な喜びの追求に一生を費したいという我々の願望の代表者である。彼は自分自身にだけ通用する道徳観を持っているが意志の弱い男だ。彼は、知的な弟よりも、もっと深く人生を生きているということが出来るけれども、彼は自分の善良な意志にもかかわらずいつも判断を誤ってよくよしている。少しも自分を押えることができず激情に酔ってしまう、非常に単純で素朴な人間である。

もしも次男が理性を、長男が感情的な心を表現しているなら、三番目の息子は人間の魂を表現していると言えるであろう。自分の誠実と信仰とを置くことの出来る神とか、心のふるさととかを探し求める人間の本能に生きている。人間自身を超越するという事が出来るような神又は理想を求めている。

この三番目の息子は、我々が自分自身の神、又は神々を見つけないといけないということを示していると思う。なぜなら信仰の中にたとえどのような慰めを見出し、ても、それは純粹にその人の主観なのであり、そして我々のまわりの人々に伝えられないものである。

貴女は、私がアメリカ人なのにロシア人によって書かれたこの小説をどうして好きなのですかと尋ねたが、それは、どちらかと言えば愚問であると思う。今日、ロシアと合衆国の間に存在する摩擦は、イデオロギーの相違に原因がありそのイデオロギーの相違は、二国間に於ける経済と政治が非常に異なった働きをしているためである。それは又、貴女がいつか国際関係の中で学ぶだろう

が、他のいろいろな政治的考慮に原因しているのである。この摩擦は、ロシア人がアメリカ人を嫌いであるとか又アメリカ人がロシア人を嫌いであるとか、そういったものを意味しているのではない。このような事は要点からはずれている。なぜなら一人の作家は、その作品によって判断されるが、一方、その作品はその作家によって判断されてはならないのだ。

芸術作品や文学作品を鑑賞するには作家とか芸術家の国籍とか宗教とか、政治的なイデオロギーとかによるものではないし、又よるものではあつてはいけない。偉大な芸術とは、普遍的な真理を明らかにするためにとりあげられた問題を掘りさげて考えてみることなのだ。そうしてそれだからこそ、あらゆる国において、いつの時代の人々に対しても訴える力を持つものである。

過去の時代において、そして同様に今日においても自分自身の目的に役立てるために真理をゆがめて、芸術を宣伝運動の道具として使おうとする人々がいる。

このような試みは、偉大な文学を生み出しはしない。なぜなら真の芸術的なインスピレーションは、人間の最も深い内部から湧き出るべきものであつて、政治的な考慮によって書かれるものではないのだ。「カラマーゾフの兄弟」は、あきらかに偉大な本である。そしてそれだからこそあらゆる国の人々の心の中に共感を呼びおこすのだ。「カラマーゾフの兄弟」に描かれている人間の問題に興味をもつ人がいる限り、この作品は人の心に訴えつつけることであろう。

カラマーゾフの兄弟

高 二 室 谷 幸 子

いつの頃からか私は生命に対して不安な気持を抱くようになっていた。自分の育てた小鳥の死や、幼い頃の友

達の自殺が、それを一層強めた。更に大学受験という問題にぶつかって、私は始めて、日本の社会の何もかもがめちやくちやだということに気がついたのだ。世の中に對する不安と「自分が生きていく」という事に對する疑いが、私の心の中で入り混じって、私は、やりきれないような棄てばならぬ氣持に襲われることが、たびたびあった。この世の中で、何か絶対的なもの、完全に信じることの出来るものを私は求めた。教会に通うようになって、私はやはり以前の自分であり、そして信じることの出来るものを得ることは出来なかった。

だから「カラマーゾフの兄弟」を読んだ時、私が一番興味をひかれたのは、三番目の息子アリョーシャであった。なぜなら彼が、私の求める「絶対的なもの」を持っていたからだ。アリョーシャは、完全に神を信じ込んでいた。彼のすべての行動は、その信じるという源から発生していた。

彼も、今、私のまわりをとりまいている人達と同じように、現実のあらゆる醜い闘争を見ていた。兄弟達の中に潜む悪も見ていた。それにもかかわらず、彼はそれらすべてを、ごく自然に、高遠で清浄な何ものかに変えて自己の中にとり入れるのである。

アリョーシャは、すべての人から愛されていた。そして、彼もすべての人を愛していた。しかし、人々の彼に感じる愛の中には、人間に感じる愛と異なったものがあるように私には思える。

たとえば、彼を愛し、生涯を共にすると約束していた少女リーザは成長するにしたがつて、自分の中に、彼の清浄な愛ではがまん出来ない、狂暴的なものが存在しているということに気がつく。そしてリーザは、彼の兄であるイワンの悪魔的なものに強くひかれていってしまうのである。リーザの心の中には精神的な愛と、悪魔的な欲望との闘いがはじまったのである。私は、このリーザの悩みこそ、現代の自分達の中にも存在している、最

も人間的なものではないかと思う。私は、自分の中にもリーザのような闘いがあることを感じるのだ。そして今自分の感じている愛の中に、アリョーシャの持つような清浄の醜さのない愛しか存在しないということはありえないと思うのだ。

しかし、このアリョーシャこそ、ドフトエフスキーの求めていた完成像であると思う。彼は、アリョーシャの父や兄達の中に、人間の持つ弱さと、悪魔を描いた。彼は、理性とか精神で簡単に解決することの出来ない、人間の本性をあばいているのだ。そしてそれにもかかわらず、ドフトエフスキーは、神を盲目的に信じている。彼は、ギリシヤ正教に傾倒し、そして人間の持つ悪魔を認め、それを許し、それをのりこえる神の存在をアリョーシャの中に描いたのである。

しかし悲しい事に、私はアリョーシャが理解出来なかった。彼は、私にとっては全く小説中の人物であり、夢だった。

この小説の筋は、ごく単純である。一人の男がいる。彼は初めは、居候だったが小地主にまでのしあがった。彼は、無神論者で、人生を無意味な空虚なものと、見切

ってしまっている。そしてその空虚さを満たすために、

彼は肉体的快楽を唯一の目的としたのだ。ところが彼はもう老年で、そして息子が三人と私生児が一人いるのである。息子三人のうちの三番目が、先に述べたアリョーシャなのだが、この父親は、自分の息子も愛していない。私は、この父親の姿の中に淋しさを見出したのだ。絶えず欲情に苦しめられ、それでいて彼の心の中からは、思いがけず悔恨の情が時々頭をもたげているのだ。彼は、最後まで、魂の純なものを押しつぶして道化で通したのだ。彼の無神論は、息子イワンの無神論のように体系づけたものではなかった。だから老年になつて、彼は自分の救いを神に求めようかとも思うので

ある。

彼は、そういった精神的な空虚さを道化で隠し、そのままある夜、殺されてしまったのだ。こういった道化は現代にも沢山いる。私は、自分の狭い生活範囲の粋の中でも、そういった道化師に会い、そして彼等の淋しさを時々ふつと感じる。そんな時、自分だけは、決して道化になるまいなどと思うのだ。

父を殺した疑いをうけたのは、第一番目の息子、ドミトリーである。私は、この小説の中でドミトリーが一番好きだった。彼はカラマーゾフ家の長男であり、純粹で正直で情熱家であり、意志の弱いために放縱の生活をおくっている。ところが彼は、その放縱さを徹底できなかった。

高ぶり、威張っているカチュリーナが、彼の卑劣な計画にひっかかって、父の名誉のために、自分の体とお金を換えようとした時にも、彼はその計画を最後までやり通すことができなかった。彼は、結局お金を彼女に与え指一本触れないで彼女を帰してやるのである。

彼の内には、自分の激しい欲情と理性との闘いがあった。そして、欲情に燃え狂っている時でも、最後に魂のどこかにある人間的な涙が、それをおしとどめてしまうのだ。

大昔から文化や文明は進歩したが、人間の心の中の戦いは続けられ、人間はその苦しさを味わい続けた。この長兄は、苦しみの象徴だ。一人の奪い合いのために彼が父を殺そうと思った時にも、最後のところになってそれが出来なかった。彼は自分が殺したのでないことを弁護した。しかし、牢獄の中で見た夢によって、彼は、人類の苦しみを悟るのである。彼は、親殺しという大罪を犯ることによって、これまでの放縱な生活から自分を救い出そうとしたのだ。

彼の父を殺したのは、私生児のスメルジャコフだった。だいたい、カラマーゾフ家の家系図は少し混乱して、

長兄が先妻の息子で、二番目と三番目が後妻の子で、第四番目が私生児だった。この私生児は、ずるくて卑劣で私は、厭で厭でたまらなかった。彼は、自分の私生児の境遇を恨んで父を殺し、金を奪いそれを長兄の罪に転嫁してしまうのである。

彼は「自分が殺したのだ」という事を、二番目の兄イワンに話す。そして、イワンが共犯者であると言う。イワン——彼は、この小説の思想的中核である、無神論を唱えているのだが——は、それを聞いて仰天する。スメルジャコフは、「イワンが父の死を望んでいた、それは財産の相続を望んでいたからだ」と言う。そしてイワンは、それを否定しながらも、良心のどこかで完全に否定しきれないものを感じるのだ。彼は、その時から自己を失なつて、スメルジャコフに支配されるようになってしまふのである。

以上が「カラマーゾフの兄弟」の概略であるが、結末は、長兄ドミトリが牢に、次男のイワンが発狂状態にそしてスメルジャコフは病気で死ぬ。三番目の息子アリョーシャは再び僧院に帰って行くのだが、ここにもドフトエフスキーが、無神論を否認し、キリスト教を肯定する態度が表われているように思った。

※ どの外国小説を読んでもそうだったが、必ず最後にぶつかつて戸迷うのが宗教の問題だった。ヨーロッパ人・ロシア人・アメリカ人の生活感情には、宗教がごく自然に溶け込み、生活の習慣と宗教とがマッチしているようだ。日本には、それが無い。キリスト教も神道も仏教も新興宗教も現在においては、あらゆるものが信じることを許されているのに、それらを信じているのは国民の一部であり、更にそれらが、外国におけるように物の考え方、見方、生活のしきたり、そういったものまでにごく自然に溶け込んでいくという例は限られてしまつてゐる。その他の多くの人々の生活には、神などが存

在しない。それでいて、特別何でもないのだ。外国流に言えば、無神論が多いのかもしれない。しかし私のまわりの人々の生活を見ていると「無神論」などと体系ずけて神の問題を考えている人はいないようだ。

無神論というのは、一度は神の存在を認めたからこそくるものであり、日本の宗教をもたない人々の多くは、神について深く考えてみようとしなない、つまり無関心なのだ。日本にある共通した宗教がないこと、これが現在のめちやめちな社会を、正常なものにする事の出来ない一つの原因であると思う。

ところがイワンの無神論は、彼の自然科学的な立場から始まり、思想的な裏づけがあった。彼は、良心とか善行とか神とか不死とか、そういった抽象的なものを認めなかった。したがって、彼は人を愛するということも認めないのだ。ところが彼は、自分の出したこの結論に安定していることが出来なかった。彼の中にある、もう一方の人間的なものが、たえずその結論をおびやかしたのである。

たとえば、彼の理論で愛を認めていないにもかかわらず、カチエリーナを愛してしまうのである。彼は、その事実が、自分の信念を崩すのを恐れた。そして、彼はついに、自分の愛をすてようと思うのである。

彼のこういった動揺と共に、地上に存する「涙と血の苦しみ」のことを思つて彼は、更に悩むのである。それはドフトエフスキーの悩みであつたかもしれない。

当時十九世紀のロシアは、農奴が生産のない手であり、ツァーが君臨していた。何千万という農奴が、土地と共に売買される悲惨な状態の中から、西洋との接触によつて目ざめた階級によつて、社会改革運動がおこつたのも当然と思う。農民の猛烈な反抗運動がおこなわれていた。それが、みんな神の創造した世の中で行われたのである。

そしてついにイワンは「神を否定はしないが、認めも

しないという境地に落入つていったのである。

ドストエフスキーが、この小説を書いたその一つには同時代のトルストイの影響がある。彼は自分の好敵手であるトルストイの「戦争と平和」に及ぶ大作を書きたいと思つたのだ。そして、この本は、まさに大作であつた。この小説が発表された時、ロシアの一般社会の受けた衝動は非常なものだつたそうである。彼等は「カラマーゾフシチナ」という新語を作り、ロシア国民、の一面を啓示したもとしたのだ。

この本は、人間の内部に深く目を注いでいるが、描かれているのはロシア人である。そして、雄大なスケールの底流には、ロシアに対する誇りと愛情がみなぎっている。彼等が言う「母なるロシア」の言葉には少しも不自然さが見られない。ところが、私が今「母なる日本」といつたらどうだろうか私は、くすぐったいような変な気になる。日本に心から愛着を感じているくせに、日本を誇りに思うことが出来ないのが淋しく思った。

(カラマーゾフの兄弟解説参考)

初 冬 に

高 二 杉 本 和 子

風が吹いて、また木の葉が揺れるとくすんだ銀色の外套が、早い冬の訪れを告げる。

いつてしまったもの、いこうとしているものに私の心もあわただしい

公園の木がみんな散ってしまったら

胸いっぱい落葉をかかえ落葉の中に自分を忘れて

ただあてどなく、落葉の中を歩いていきたい

あたりがだんだんと冷たくなって

今日という日が過去になる

それは首筋に寒さがしみる、もう冬の気配……

童 心

水爆実験

——映画「福竜丸」を見て——

小二 石 井 きよ子

日ようびに、おかあさんに「アイスクリーム買って」っていった。そしたらおかあさんが「目をつぶっていたら」っていった。だから目をつぶった。そしたら一円だった。おかあさんがわらった。そして十円ととりかえた。そしてアイスクリームをかった。だからお母さんのお金がなくなっちゃうと思って心配した。

小二 中 山 ま り

きのう、じてんしゃにのってあそんでいた。ペタルのところがへんだと思ったらこわれてた。そして、じてんしゃやさんだと思って、もって行って「ここをなおして下さい」といったら「うちはオートバイだけなおしているんです。じてんしゃならもう少しとあるよ」っていった。わたしははずかしくて、かおがまっかになっちゃった。そして少しいったらあった。また「ここをなおして下さい」と思いつきりいった。そしたら、こんどはなおしてくれた。だけど、ねじをつけるだけだったので、とってもやすかった。五円だった。とっても光ったねじになった。わたしはこれからこわさないようにしなくちゃ。

六年 稲 葉 康 子

1 アメリカ人が死ぬべきだ

水爆実験

だれがしたんだ

何のためにしたんだ

久保山さんを見ろ

久保山さんのおくさんや子どもを見ろ

アメリカ人がしたくせに

水爆の実験がわかればいいのか

アメリカ人は人ごろし

日本の人が死ぬのなら

自分たちの実験が成功すれば

それでいいのだ

アメリカでやった実験だから

アメリカ人が死ぬべきなんだ

2 水 爆

実験をするなら

人間のじゃまにならない実験をしろ

人にめいわくのかかる実験は

悪まの実験なんだ

日本人がみんな

こんなに苦しんでいるのをみないのか

しまいに死の灰が、地球を包む

実験をしたものも、死ぬ時がくる

そんなら

何のために実験をやるのか

実験をして、人が死ぬ

水爆実験が成功して
死んだ人間を生き返えせるか

3 アメリカ人

アメリカ人が

日本に来て

水爆にあった人を見た

一言も言わず

だまって、見ているだけだ

悪かったと思っているのか

実験の結果だけを知りだがつてるのか

その目には

「すまない」という心が、チットモ見えない。

患者を見せろというだけで

日本のみなさん、すみませんと、言わないのだ

患者を見ても

下等動物を見ているようだ

日本人は実験動物ではないのだ

人の命をきずつけて

すまないと思わないのか

思っているのか

恥知らず

何にも言えないくらいのことを

アメリカ人はやったのだぞ

海にいく時の電車と

ディゼルカーのようす

2年ふよう

松 井 昭 彦

家を十一時すぎに出ます。ディゼル

カーには、二時間と三十分のりです。電車は新宿まで中央線と、井ノ頭線にのります。

ぼくは楽しみでしようがありません。

まず井ノ頭線では、ぼくの大すきな新車にのれなくて、ざん念でした。それから

吉祥寺でおりて中央線の駅へ、行きました。おかあさんは、準急行券と、のりま

きをかけて、二番線のホームへきました。しばらくすると、東京行の電車がき

きました。それもやはりぼろ車でした。でもディゼルカーにのれるのだから、くや

しくありませんでした。まちどしくて

たまりませんでした。荻窪だ！と、思

うと西荻窪でした。そのはんたいに、高

円寺だ！と、思うと中野だった事もあ

りました。いろいろ考えているうちに、

新宿へ、つきました。かいだんを、おり

ていくと、白字に黒く、二とかいた前に、

十三時十九分とかいて、その下に安房か

も川ゆき、とかいた所を、上っていつ

しばらく電車がくるのを待ちました。そ

の間は二十分もあります。ぼくたちの、

後の人は本とは、女の子だけど、男の子

みたいな人が、祥子もっている水とう

をどうにかとうとして、おかあさんが

人と話をしているときに、祥子の水とう

をとろうとすると、おかあさんがとめて

又話をする、とりにきて、そういう事

が三・四回つきました。時々アナウン

サーが「準急行券は、駅の中までうって

います」と、いうとたびたび、「くるの

かな」と、ぼくがいますとやっ、ほ

うそうが「間もなくまいります」と、いました。新宿駅を間もなく出発します。チーンというブザーがなると出発しました。

わりあいいい音でした。急行のように早く走って、秋葉原に止って、小しすると両国に止って、しばらく止らないで、千葉へつきました。千葉から、ぎゃくもどりをしました。両国からは、おすもうさんのつてきました。二人ずれです。両方まくしたの方のすもうさんです。両国をすぎて千葉になると、大きい駅があって、アイスクリーム屋。おすしや。本屋。お茶屋。のみの屋。だいたい、東京のぐらいにぎやかでした。千葉を、すぎると、だいぶんいなかっぽくなって、何回も大きなトンネルに入りました。中でも一番大きいのは、のこぎり山のとんねるです。のこぎり山というのは、岩がのこぎりのようにぎしぎしなっている山です。すると車掌さんが、「館山に間もなくとうちやくします」といきました。三時間位車にのっていたのが、プラットホームへ出ると、すずしくていい気持ちでした。(八月十三日~十四日)

芝生の秋

田 中 一 水

広々とした芝生の上で少年と少女は走り廻っていた。少年は追いかけていた。少女は逃げていた。いやいや違う。少年

が逃げていたのだ。そして少女は、細そりとした少女は黒い髪を揺らして追いかけていた。

サザンカの花は散っていた。桃色の花弁は、黄色のしべは穂の熟れた芝の上を飾っていた。広い芝生の片隅で、細いサザンカの梢は静か風に揺れていた。

少年は逃げ廻った。少女は追いかけて。二人の息はずんだった。四つの白い運動靴は柔らかにとびはねて……誰も見ていない人はいなかった。

夕べの鐘が森のかなたで鳴った。少年はサザンカの幹を揺すった。

「ごらんよ！ 何てきれいなんだろう。花弁が寂びげに、重たそうに散っているじゃないか」

「そんなことをしても駄目よ。さあつかまえた！」

少女は少年の片手をつかまえた。二人は乱舞した。めがまわるまで廻った。

とび散ったリボンを拾いあげて、芝生の上にぐず折れた少女を見やりながら、少年は静かに歩いた。

夕べの鐘が森のかなたで鳴った。少年はサザンカの幹を揺すった。もう一度……ひとしきり桃色の花弁は音もなく散った。

黒岩号

小六 福井幸子

五月二十六日私にとって又とないような、かなしい事がおこった。はじめから話さなければわからない。話をう。

二十三日の日から、私のうちの犬、クロのおなか、あかちゃんがいるように大きくなってきた。でもクロはオスなのだ。

ごはんもほしがらず、苦しそうな息をして、じっと、ねそべっている。

お父さんは、

「すぐ、なれるさ」

と言って平気だ。おかあさんは、

「ふくまくえんをおこしているのではないかしら」

と言っている。

二十五日の夜は、ずっと大きくなってしまい、大根のようにかたい。

今にも死んでしまいそうなあらい息。とてもあわれなすがただった。

おかあさんは、明日私の父母会に行く。それで、きょうだい(お姉さん、お兄さん、私)で、お医者さまをよび、い

つしよに、かんびようすることに決めた。

ちようど、二十七日が、私の修学旅行なので、真ちゃんと、何時ごろ行くか、相談するつもりでした。

二十六日、私がお医者さまをよびに行くとちゆうに真ちゃんにあった。クロが

病気だ。と言うと、いっしょにお医者さまをよびにいってくれた。

だいぶ前、クロがジステンバーになった時やっぱり、このお医者さまに治していただいたので、お医者さまは、よくおぼえていてくださった。ちよびヒゲはやし、黒いめがねをかけたやさしいお医者さまです。

クロのおなか急に大きくふくらんだと話す、ひたいにしわをよせ、顔をしかめて、何だか、じっと考えていたが、

「すぐいきましよう」

と言って、おくへ入っていった。

その時、私の心がドキドキなっているのを感じた。なぜだろう。何だか、おそろしいような、心の底からふるえてくるような、気持だった。

真ちゃんと、電車の時間表を見たりしているうちに、クロの診察はすんでいた。

お兄さんは、おちついて、小さな声でさびしうに言った。

「クロは二、三日で死ぬんだって」と。

私は、ギクッとした。

お兄さんの話しによるとこうだった。

二、三年前に「ヒリヤ」というばい菌をもったかが、たくさんクロをさした。それでおなかの中に、十五センチメートルぐらいの虫が三十びき以上いて、

肝臓や胃の中に入りこんで、おまけに、おなかの下の方に水がいっぱいたまる。

春になり、気候が、あたたかくなってきたので、おなかかふくらんでくる。ふ

くらんできたなら、もう助からないのだそう。

真ちゃんとわかれた時、ちょうど、父母会がすんでおかあさんが帰っていらっしやう。

クロのことをだいたい話しながら、うら門から入って行った。クロのそばへ行くとおかあさんは、しゃがんで、クロのおなべのような頭をなぜながら言った。

「ああ、ああ、これでもう目をつぶってしまうのだからねえ、かわいそうに、ああ」

と目になみださうかべて、ためいきをつきながら何度も言った。

おかあさんの言葉を聞いているうち、私のむねはひきしまつてくるようだった

私は、家の中に入ったり、クロのそばへいつたりそわそわと歩きまわっていた。だって、そうでもしなけりや、なみだが出て、こまるから。そつと二階の自分のへやへいつて、ずつとないていた。かなしくつて、かなしくつて、どうしたらいいか、わからないほどだった。

二十七、二十八日の箱根、清水の修学旅行もクロのことを考えると、早く帰りがたかった。家へ帰って、クロが死んじやっていたらと思うと、むねがドキドキした。二十八日の夜、大急ぎで、クロのところへいつた。クロは、しっぽをふつて、私の手に、頭をすりつけてきた。ああ、私はどんなに、うれしかっただろう。いや、その時はかなしくつたんだ。病気で体が重いのに、ピンピンしっぽを

ふり、かわいいおなべ頭をすりよせてくる。それはほんとに、ほんとにうれしかった。それだけに、クロが死んでしまうと思うと、悲しい、悲しい、悲しい。

そして、とうとう、最後の時がやってきたのだ。

五月二十九日だった。うら門から走りこんでくると、目の前に、ごさがしいてあった。その、ごさのすみから……すみから、やわらかい、しっぽの毛がのぞいている。

「ああ、死んじやった」

そこに立ちすくんでしまった。

茶の間に入っていくと、おかあさん、お兄さん、それに、一度もほえられなかった、あき子ちゃんのおばさんが、しずんだ顔ですわっていた。おかあさんはいつた。

「早く、おせんこうを立ててやりさい」

お兄さんもあきちゃんのおばさんも、クロのそばにきた。おせんこうに火をつけながら、お兄さんは、私に言った。

「なくなよ」

それはひやかしたことばだった。しかし、顔は何でもないようでも、その声はひじょうにかなしい、私の気持と同じような声だった。私は、

「わあああ、ヒクヒク、ククク」

とめても、とめても出てくる声を、おさえて、おばさんのよこをとおり、おかあさんに見られない、戸口から入った、

二階で、声をあげてなきまわった。

「死んじやった。いなくなつちやった」

思えば思うほど、かなしくなることばだ。

一時間くらいたって、クロのそばへいつた。天国にいつて、花と形のわからない友達だていいから自由にかきまわり、いつか又、この頭をなぜさせておくれ、クロ、クロ「そう心でさけびつづけるながら、ごさをおさえてやった」。

クロは十二時過ぎにしんだのだそう。おかあさんは、みんな話してくださつた。

重たいおなかののに、歩いてきて、水をのもうとしたので、クロのおちゃわんを、きれいにあらってやった。それをじつとみつめていて、つめたーい井戸水をガブガブいっばいのんだ。そして、苦しうにためいきを、二、三度ついたと思

うとパツと首がたれてしまった。足を長々とのばして、かわいい顔をして、静かにしんでしまったというのだった。

三十日に、お父さんとお兄さんが深いあなをほり、クロをごさのにせた。口から赤い血がたらたらとたれた。

お墓はしばふのよこのむこうで、あじさいや、つつじの花がいつぱいさいている、美しいところなのだ。私の目からもおかあさんの目からもしだいに、なみだがでてくる。ほかの人たちは、ないてはいないが、心の中で、なきつづけているのだろう。

小さなお墓に、ふわふわのこけ、それにカガミモチの半分ぐらいの石をおきりつぽなお墓にした。その日、一日みんな

な暗い顔をしていた。ふとんの中でないて、まくらカバーが、びしょびしょになったほどだった。

ほんととは黒岩号という勇ましいりつばな名の秋田犬である。大きな体、やさしい、愛らしい目しかし、その目も、もう二度とみられない。どうしても。

しばふに大の字になってねころぶ、青い空の中にまっ白な雲がうかんできいる。どの雲も、みんな犬に見える。ああ、おまえはどこへいつてしまったんだ、遠い、だれもしらない所へ、たましいがとんでいくの。それともきえてなくなつてしまふ。

悲しい。けれども、人間というものは死というものを、どんなものよりも、シツカリと見つめなければならないものである。したがって、その悲しみをじつとこらえられる強い力を持たなければいけない。この死の悲しみをこらえなければいけないのだ。

いつも、とてもさびしい。でも、けつしてよくよしない、がまん強い、りっぱな人になるのだ。

影

男の影は腰から上がなかった。

その部分はすでに金で買われていた

やがて下の部分も売らなくてはならない

事を

彼は知っていた。

学ぶ自由と怠ける自由

押 川 昌 一

創立二十五周年記念号の「明星」が編集された時、橋先生と一緒に私は文芸部の手助けをした。こんど三十五周年記念誌が出るにあたって、十年前の思い出を書かないかとのことである。けれどもそれだけの思い出はあまり意味がありそうに思われないので、むしろこの機会に私の明星生活から見た明星学園について書いてみようと思う。私ももう明星の人間といってよいだろう。私は明星の悪口をきくと自然に腹が立つてくるし、明星のことをほめられるといつの間にかいい気持になっている。自分を明星の人間といってよからうという証拠を、私はこの辺におく。

私は明星学園の教師になってよかったと思っている。昨秋亡くられた杉山清先生のお世話で明星に来るまで、私は二つの職場を棄てて来ている。しかし明星では私には、明星を立ち去らなければならないような理由も事情も一度もおこらなかった。この年月を、おおむね安らかに働き学び、かつ私なりに自分を鍛えさえもするこゝとができた。

なぜ私は明星に来てよかったか？

私は自分のささやかな個性を、ささやかなりに思うまま歩くことができたのだ。個性というのは自分の前に開けている一本道だ。それは目的地ではなくて、目的地に行くための自分の唯一の道路と思えばいいだろう。デコボコの悪路だからといってよそのコースにはかえられない自分の道が個性だ。私は明星に来てから、自分の道を自分の歩調で歩くことができた。他から自分の歩調

を乱されたりまた、歩くこと自体を妨げられたりしたとは一度もない。私は教師だが、明星においては、教師も生徒も自由に自分の道を歩くことができる。明星の「自由」というヤツは、ガクブチに飾ってある文字などではなくて、教師と生徒とかその中で生きているところの、空気なのである。だから、積極的に働こうとか学ぼうとかいった意欲に立っている限り、これほど理想的な場所はないわけである。この年月を私はいそいそと働くことができた。

けれども、明星の「自由」は、怠ける者にとってもまた天国であることを見逃せない。例を挙げよう。たとえばホームルームの協力といったことを力説する者がある。彼の提案に従って全員がホームルームの美化運動を始め教室のまわりの草むしりをやり出したとする。ところがその時になると当の提案者はどこかに消えてなくなってしまう。つまり彼は、ホームルームの協力というこの提案者であるが、草むしりというホームルームの協力の具体的な運動の労力提供者にはなっていない。この、提案するだけの労力不提供者という現象はすぐ次のようなことに続いている。大学の受験についての苦悩や恐怖をしきりに訴える者がいる。ところが彼において実力が中学二年ぐらいしかない学科の力を補おうとする実際の勉強の方はまるで手をつけようとしなない。前の場合の「提案」もこの場合の「訴え」も本人にとってはウソではないのだが、客観的には実行力を伴っていないから「口先だけ」ということになるわけで、私はこれを怠ける者といっている

るのである。つまり、いわゆる「口舌の徒」である。

私もまた、今でもそうだが昔はもっとひどい「口舌の徒」だった。自分の言説に実行の裏打ちをする段になると逃げまわった。こうした、客観的にみれば無責任な、自己の無力ということを徹底的に叩きつけられたのは戦争という巨大な力からであったが、考えてみると「口舌の徒」的生活ほど無意味無内容な人生はない。不渡手形を発行しながら事業の経営をしようとしている人と同じだからだ。そして、明星にはことばの不渡が平気で横行しているのではなからうか。私は、そういうインチキ手形をつかまされるたびに腹を立てていたが、やがて腹を立てることにもくたびれ果てたすえに「ああ、これじゃ明星もオシマイだなあ」とあきらめてしまうようになった。しかし、もしこの実感があたっているとすれば、インチキ手形の横行を評している「自由な明星」が自分自身を——よき明星の「自由」を、その首を絞めてオシマイにしようとしていることになる。そうではないか。

今の例でいえば、自ら学力を鍛えることをしない受験生などという怪物が多くなれば、明星はやがて死んでしまっただろう。なぜなら、わが日本の現行の大学制度よりも、自ら学ぶことをしない者の方が一層無意味だからである。さらに前の例でいえば、よき提案をした者のことばに従って働き始めた者は、一緒に働き出さないその提案者を人間として信じなくなるだろう。そして自分も働くことをやめてしまふかもしれない。そうなればこの提案者は、実質的には自分の仲間、人間に対する不信と働く者に怠けることの二つを与えたことになるが、そういうことでどうしてわれわれの明星の「自由」が生きつけられよう。

「牛のように歩く」ということがあるが、これくらい明星から遠いことばはないだろう。今の明星にはネオンサインの広告のような明滅が多すぎるように思う。いやいや、私は自分をタナにあげてえらそうな批判をいうつも

りはない。私の中に『自由』に脅かされている『自由』という不吉な予感があるために、なんとかこの辺で自分も人も『牛のように歩き』出さなくっちゃとあせっているせいである。

以上が、私の明星生活から見た明星である。私は思うすこしや思い違いをしているかもしれない。けれどもこれが既に私の明星に対する『思い』であることは間違いない。私は明星において、生活は楽ではなかったが、幸福でだけはあった、

影と少年

高 二 原 田 励

潔は確に聞いた。あれは確に人の声だ。それも女の人、助けを求めている声だ。低い悲し気な泣き声だ。「助けて、助けて」と言っているのだ。

潔がそれを聞いたのは、となりの小森さんの倉庫の地下室だった。丁度駅前の通りに面したこの辺には子供の遊び場所がないのだ。潔の家は果物屋、——小森さんの家は家具屋さん。——見つければ怒られるのだが、この辺で遊び場所らしい所は小森さんの倉庫の地下室しかなかった。地下室はいつも冷たく、初めは潔も気味が悪かったが、この頃は慣れて何んともなくなつた。潔がその声を聞いた日、そと、潔の家と、小森さんの家との間のせまい、体を横にしなくては子供でも通れない様な路地をウラへ抜けて線路に面した倉庫へ入った時、何んともなく倉庫の中がいつもより変つて見えた。それは夏の半頃にすでに冬物を用意して一杯荷物が積んであったのかも知れない。潔がその声を聞いたのは地下室へ入ってビー玉を転がす為の穴を掘っている時だった。最初には猫の鳴き声の様だった。しかしそれはすぐに女の人の声である事も、それがすぐ下の土の中から苦しうに助

けを求めている声である事も解つた。

「助けて、——出して」

女の人はそう言っているのだ。

「今、人を呼んで来ます。」

潔はびくりしていたが、突嗟にそう言うのと、彼がとなりの時計屋の真ちゃんに「赤いサンゴと取り換えて」と言われても渡さなかった水色の大きなビー玉を放り出して家へ帰つた。父も母も二、三の店員も客の応待に忙しい時だった。

「父さん、——来て、ちょっと」

父は相手になつてくれなかった。

「母さん、——来て、ちょっと、大変なの」

母も相手になつてくれず、「これで遊んどいで」と潔に黒くなつた一〇円銅貨をまゑ掛のポケットから手渡し

た。「ねえ、次郎さん、——女の人の声がしたの、——土の中から」

「うらめしやーってか？」

次郎さんはいつも潔をからかう。

潔は家を飛び出して、時計屋の真ちゃんを呼んだ。

「真ちゃん、——真ちゃんはばくの言う事を信用してくれるね？」

「うん、——ビー玉くれるかい？」

「——うん——」

「何？」

「女の人の声がしたの、——小森さんの倉庫の中で」

「君の父さん知ってるの？」

「話しても聞いてくれないんだ」

「誰か言つてたよ、——昔、あそこで女の人が首を吊つたんだって——お化けかな」

「嘘だよ、——ぼくに助けてくれって言ったもの——誰も信用しないんだ、——ちょっと来てくれよ」

「——うん、本当にビー玉おくれよ」

「うん」

二度目に倉庫に入った時、潔は又さつきと倉庫が変つていて見えた。それは真ちゃんが「お化けかな」と言つた言葉が強く印象に残っていた為かも知れない。

真ちゃんは倉庫へ入る前に「先行けよ」とぐいと潔を押した。潔はいやだったがあの女の人が可哀想だったので思い切つて踏みこんだ。

「ね、——やっぱり聞えるだろう？」

「うん、——聞える。——助けて——出して——」

土にピタリと耳をつけると確に聞える。時々土を「カリカリ」とかく様な音も聞える。

「どうしようか？——誰かに知らせよう」

「おまわりさんがいいね」

「うん——」

二人が倉庫を出ようとした時、背後にヌツと黒い影が立った。

「又来てるな——来ると言つたらろ——！——今度来たらなぐると言つた筈だ——」

小森さんだった。

「あつ、——ちょっと、——聞えるんだ、——女の人の声が、——この土の中から、——助けて——」

「何——！——そんな事言つてこのわしをだまそうとするのか——！——聞えん、そんなものは耳のせえだ、——早く出て行け——！——さつきと出て行け——！——」

「本当に聞えるんだ、——泣いてるよ」

「出てけ——！——」

元陸軍中将だった小森さんの声は、広い冷めたい地下室にワンワンとひびいた。

潔は真ちゃんと線路つ端へ出た。小森さんの地下室が駄目な時にはこの路線つ端で、通る電車がどこ行きか當つこをするのだ。潔は大抵よく當つた。

「確に真ちゃん聞いたよね」

「うん、聞いた。女の人の声、——悲しそうな声だった」

「お化けぢやないね」

「お化けぢやないよ、——けど、小森さんには聞えなかったらしいよ、——」

「うん、——何故だろう？——年のせえかな？」

「あの人がいつ？」

「もう六〇過ぎてるよ、——あつ、そうだ、あの中にいるのは小森さんの奥さんだ、——そうだよ、小森さんの奥さんだよ、——だから小森さんはぼく等が地下室へ入ると怒るんだ、見附るとまずいもんね、——それに自分が埋めたもんだから聞えないふりしてんだよ、——そう言え、何んだかビクビクしてたようだったよ、——警察へ知らせよう」

交番は線路を渡って向う側だった。二人のおまわりさんが暇そうに将ギを指していた。

「おい、行くのかい？」

「うん？——うん、まあ子供の言う事だから当にはならないが、こう真剣に言ってるんだから放つとくのも可哀想だ」

二人のおまわりさんは最初に取り合つてはくれなかったが潔と真ちゃんがあまり真剣に言うのでちよつと敗けそうになっていたおまわりさんがそう言つて腰を上げた。残ったおまわりさんは、

「小僧、——嘘をつくとロウ屋へ入れてしまふぞ」

と言つてへらへら笑つた。

「本当だよ、——嘘ぢやないよ」

ロウ屋へ入れられては大変なので潔と真ちゃんは言つた。

「さ、どこだい、——どこの地下室だい」

「小森さんの奥さんが埋められてるの」

「小森さんてどの家だい？」

「家具屋さん、——家のとなり」

おまわりさんは地下室へ行かずに小森さんの家へ寄つた。

「御免下さい。——お宅に奥さんおられますか？」

いきなりおまわりさんが店に入つて来てそんな質問をするので小森さんは面喰つたようだった。

「何故ですか？——おりますが」

「ああ、そうですか——それならば結構なんです」

「家内が何か——」

「いえ、——この子供達がお宅の奥さんが地下室に埋つていゝ何んて言うもんですからね」

「この小僧達！——飛んでもない事を言いやがる！——今おばさんは買物に行つてゐるんだ」

小森さんがそう怒鳴つてゐる時に奥さんが買物籠を下げて帰つて来た。

「どうしたの？」

「いたずらばかりして」

「君等、妙ないたずらしちゃ駄目だよ——警察は暇ぢやないんだから、——じゃ、どうも。」

「——」

しかし潔は確に聞いた。真ちゃんも聞いた。

「聞いたんだ——本当なんだよ」

「君の家どこ？」

急におまわりさんは恐い顔になると潔に言つた。

「——となりの果物屋」

「そう、ちよつとおいで」

おまわりさんは潔の腕をぐいつと引つ張つて表へ出た。店の中の人は「それど覧」と言う顔で見ていたが、

「人騒せな——」

小森さんはそう言つて奥へ入つて行つた。

「真ちゃん、馬鹿だね、——おいで」

時計屋のおばさんが恐い顔でそう言つて真ちゃんを家へ連れて行つた。

「馬鹿だねえ、全く人騒わがせだよ、——今日の御飯は食べさせないよ、——外へ出さないからね。人が埋つてゐるなんて——母さんに恥かかないでくれ」

「だって本当に聞かえたんだよ、——助けて——」

「まだ言うの！」

おばさんの手と、真ちゃんの泥のついたホッペタの間でパチンと音がした。

おまわりさんは潔を家へ連れて行く。

「困りますね、——少々悪いですよ、子供だからと思つていましたからね。女の人が埋つてゐる等と、——しかも小森さんの奥さんなんて、まるで小森さんが犯人の様な口振りをするんですからね。しっかりしてくれなきゃ困りますね、大人の人が」

「はい、——どうもすみません、——何しろ店が忙しいものでついうっかり」

「気を附けて下さいよ」

「はい、——充分しかりますから、——さ、潔あやまりなさい——お騒せしてすみませんでした——さ」

「いやだよ、——聞かえたんだもの、——本当に聞かえたんだもの」

「何言つてんの！——小森さんの奥さんだつてちゃんといるし、小森さんだつて聞かなかったそうぢやないか」

「真ちゃんは聞いたよ」

「子供の言う事等あてにならない、——すぐに親に口返答をする、——何故もつと素直になれないんだ、——さ、あやまりなさい、おまわりさんに」

「いえ、いいんですよ——まあ今後気を附けて下さい」

「はい、——何んとも、——どうも」

おまわりさんは敬礼して店を出て行つた。

「潔！——こつちへ来い——」

父は顔を真っ赤にして潔を奥へ連れて行つた。母も怒つていた。店のおまわりさんに怒られたのと、小森さんを、人殺しにしてしまったのが父と母とを怒らし

た。

「お前馬鹿な事言うんじゃないよ、——人が土の中に埋っているなら、お前達が手を出さなくても大人の人がちゃんと始末をつけるんだから」

「本当に埋ってるんだよ」

潔は泣き止まなくなったが泣かなかった。絶対泣くものかと思つた。

「強情な——まだ言ってるのか！」

父は潔の頭をおさえると畳の上に倒した。

「本当に何故素直になれないのかね」

母はそう言つて店へ出て行つた。

「よく反省しろ！」

父もそう言つて店へ出て行つた。

次郎さんがそつとやつて来た。

「泣くなよ——誰でも聞きまぢがえはあるよ」

「ちがうよ、——聞きまぢがえじゃないよ、本当だよ」

潔の目にこらえきれず涙がフツとかんだ。

「ああそうだよ、本当だよ、な」

「うそだ、——次郎さん信じてないよ——」

次郎さんは潔にそう言われると困つた様に頭をかき、潔の頭をなでて店へ出て行つた。潔は急に悲しくなつた。目の前がもやもやして来るとワツと泣き出した。泣きながら思つた。

「絶対聞きまぢがえじゃない。本当に埋ってるんだ」

そして埋つて一人ぼっちの女の人が可哀想になつた。

潔は涙をふくと外へ出た。

倉庫の戸は閉つていた。けれど別の秘密の入口を潔は知っている。石を動かす時大きな音がした。小森さんに聞えたかと思つたが、丁度電車が通つたのでその音は消された。地下室はさっきの様に広く冷たかつた。土にピタリと耳をつけると確に聞える。確に言っている。女の人が、助けを求めている。

「助けて、——この暗い所から出して」

確に言っている。確に呼んでいる。

潔は土にピタリと口びるをつけると囁くように言つた。

「助けますよ。——ぼくが絶対助けますよ、——待つて下さい。」

考えたこと

高 三 浜 谷 共

生まれてからずっと「素直であれ」と教わつてきたように思う。しかし、一生素直であるのではなく、ある一面は、素直であることが必要な時期はもう過ぎてしまつた。一人の人間が学校と異つた社会に出るには、何とぶ厚い化粧が必要なのであろうか。その厚さなどのさしで計れるものではない。

私は夏休みに、N協会とB出版社の就職試験を受けた。何とかまあ筆記試験は通つたがその後が悪い。

まずN協会の面接。

「貴女はこんどの松川裁判についてどう思いますか？」

「疑わしい点が残っているのだから死刑にならなくてよかつたと思う」。当りさわりのないように答えた算りだつたが言い終えてからハツとした。全く絶望的であつた。なぜなら試験官が、私にでさえ判るような厭な顔をしてジロジロと見るから。

そして同日の午後からB出版社の面接。同じ松川裁判の事を問われ、同じ答えをしたと言えど誰でもバカだと思ふであらう。私も三、四時間の間迷つていたのだ。そんな短い間に私の考えが変わるはずはないし、いくらその時間に嘘(?)をつく練習をしたとしても、試験官の前に出たバラレしてしまうにちがいないと思つて、何にもしないで同じ答えをしてしまったのだ。その後が又悪い。

「貴女は週刊誌は何を読んでいますか」さて困つた。B

社からは、「週刊B」を出しているが、そんなもの一度しかお目にかかつたことがない。それより「週刊A」の方を読む機会の方が多い。考えに考えを重ねたあげく、「週刊Aを読みます」と答えてしまつた。その時はもうヤブレカブレという調子。予期していた通りに翌日B出版社から不合格の通知が来た。その前に、割合親しくしている、日本文学協会の存していられつしやる方の所へ行つて出版社でのことを話したら「あそこは、B出版社協会の「松川を守る会」に属していないから」と言われた。それから一週間程たつて協会からも同じ通知が来た。でも不合格と来ても何ということもなかつた。しかし回りの大家族たるや全くいやになつてしまふ。来る人毎に面接の様子を聞き「バカネー」と言う。そして後に必ず「あまり正直すぎるのよ。その場その場の調子に合わせなくては……」くやしいと言うか、腹立たしいと言うか幾つかの気持が混合して複雑であつた。いかなる場合でも自分の思っていることを素直に言うことが正しいのだと思つていた。まして面接の時等は特にそれが要求されるのだと思つていた。事実面接試験の心得にもそう書いてある。それなのに、それを言つてどこが悪いのだらう。何故バカなのだろう。私は自分の考えを試験官——資本家——に合わせる必要はないと思う。素直に言えと教えながら、実際には巧みに嘘をつかなければならないなんてずい分矛盾した話である。ある都立高校では、思想、政治関係のことをきかれたら、「判りません」と答えろと教えたそう。私はこんなやり方は嫌いだが、一番正当であらう。だてに「素直に言え」などと言うよりずっといいと思う。人間の口ほど自由なものはなく、そして人間程勝手なものはない。

私は大人の社会を心から憎む。そして永久的に子供でありたい。一歩でもけがれた大人の社会に入つて行きたくないのだ。大人は、「青少年不良化防止」などとわめ

きたてているが、そんなことを言う丈の権利なんてないと思う。大人の社会が嘘でこりかたまっているから、子供に嘘をつけと教えるようになってしまふのだと思う。もっと、大人の社会から直してもらいたいものだ。

ここまで書いて来て明星はいいな———と思った。明星の面接試験の時、「貴女は都立とことと両方パスしたらどちらに行きますか」と問われた。「もちろん都立に行きます。」経済的にも、時間的にも都立の方がよかったのだ、そう答えたのだ。この前と同様にみんなに「バカネー」と言われた。でもパスしたのだ。（但し都立はダメだったが）明星についてとても良く知っていたらむしろ方が時々いらして「明星の社会が本当の社会になればいいわね。なかなかないけど……」とおっしゃる。そんな事ピンと来なかった私であるが本当に経験した今は、早くそうなれば良いと思っている。

富士登山

高 一戸 島 久 子

七月三十日は室谷さんに誘われて、思いもかけなかった富士登山の機会を得る事が出来た。まだ乗車する人の少い五時五十七分の浅川行に乗り、終点浅川駅で下車し、七時十二分発の浅川発大月発河口湖行で富士吉田で下車し、馬返しまでバスを利用してそこから登った。予定は河口湖まで乗車し五合目までバスで行くのだったが学生割引のキロが足りなくて、予定変更にはなったのだが、馬返しから登山した方が、登山するのでも五合目からよりずっとかがある様な気がする。浅川まで行く電車に乗っていた時、一時は数十米のさきも見える事を妨げた霧も晴れ、登山するのには暑苦しい程に晴れてしまった。

馬返しで一息入れて、そこで昼食をとらず歩き始め

た。私達の一行は室谷さんのおじさん、室谷さんの従兄弟のむつおさん、室谷さん、同年齢のひろみさん、室谷さんの弟の哲ちゃんに私の六人である。私達が発する、他の幾人かの人々が登山し始めた。やはり男子が多く、みんな高校生以上の年頃の人々だった。しかし、その中にたった女子二人の登山者がいた。姉妹のようだ。妹と思われる人はスカートをはいて、ほんとうに登れるかしらと疑ってみたくなる様ないでたちである。おじさんがお尋ねになると「ええ、私達二人だけです。どうぞよろしく願ひ致します」と言う返事だった。それにしてもほんとうに勇敢である。登ってすぐの所に神社があり、そこでのりとをあげられ、おはらいをした。神聖なる富士に、登山する人々を清める為だろう。それまではまあ良かったのだが、富士吉田に着いた時、駅前の富士屋というお土産の店で強引に買わされた杖に、焼印を押されて十円を取られてしまった。この事は、私達をおこらせたが、押してしまつた以上は仕方がないので十円払って、ぶすか文句を言いながらもそこを出発した。その辺は松が多く、松の木々を透して見える空の色と、松の葉と、その幹の色とがマッチし、とてもきれいに見える。そしてこれからさきどんな苦しい道を行くのか知らないけれどそれらを見ると気持ちが一層晴々として元気づけられる様な気がした。

三合目辺りになると、そろそろおながすいて来たので、今は水がない川の、岩のゴツゴツとしている所に腰掛けて、昼食をとった。その間何人かの登山者が私達の前を通り過ぎたが、白衣に地下足袋をはいて、鈴を腰につけた、いわゆる信仰で登山する人々もいた。富士は昔から信仰で登山する山であったが、今日はそれとは切り離され登山を楽しむ目的で登る観光客がふえ、紙屑等で富士山をよごされると、数日前の新聞で読んだが頂上に近づくにつれて、ほんとうにそうだと思った。私なんかも、すぐに何の気もなく紙屑を捨ててしまふが、一人

一人気をつければ日本の象徴の山としても、ただ普通の山としても恥しくなく、みんな気持ちよく登山出来るであらう。富士は日本一高いごみ捨て場だなんて、全くひねくって言ったものだ。

食事が終り、そこで少し休んで出発した。四合目に着くと、展望が開け、なんか明るくなった様な気がした。その日は天気が大変恵まれ、こんなによく展望が開けた事は、ここ数日なかったと土地の人が言っていた。五合目も過ぎ、六合目になるともう背の低い灌木地帯も終って草が所々にあるばかりだ。七合目もすぐ目の前であるのだが、勾配がだんだんと大きくなったのでちょっと行くたびに疲れてしまい、なかなか七合目まで大変である。けれども急いでも仕方がない、まあゆっくり行こうと言うので、休みながらゆっくりと歩いた。その途中、ケルンに腰掛けて目の前に黒々とそびえたつ富士の頂を入れて写真を写した。

七合目に着いたのはもう四時頃だった。八合目で一泊する予定を切り上げてここに泊る事にした。後から後から来る登山者が、その七合目の宿屋を通り過ぎ頂上をめざして登って行く後姿を見てなんだか私もまだ登りたい気がした。そこは二千九百米なので河口湖の向岸の山々より一段と高く、そして御殿湯の辺りから山中湖の辺りにかけてずっと、厚い雲が張っていて、山の頂がそこから頭だけをのぞかせていた。それが丁度うまい具合に山の頂の所に雲がびっちりつまっているの、山の頂を陸として雲が海の様に見えた。夕日を受けた富士の影がその雲の所に落ちていた。夕食を済ませ、何もする事もないので私達はそうしたすばらしい景色を見ていた。

これから六合目までは全くすぐ目の下なのである。そして、夕闇がせまってくる中を杖の鈴を鳴らしながら登ってくる人は絶え間がなかった。その宿屋の小さい子が花火を持って来てやりだした。私はただのお客様相手の山小屋でそんな光景を見て、自分が小さかった時姉や妹と

家の庭でよく花火をやった事を懐しく思い、そして又なんだか家が恋しくなってしまった。だんだんと辺りが薄暗くなると、河口湖町や富士吉田の町のが一つ二つともりだした。そして私達は空に一番星を見つけた。しばらくして山小屋の一番良い所を陣取って疲れた体を横たえた、するとすぐに疲れが襲って来ていつの間にか眠ってしまった。人の声に目をさました時はまだ十一時だった。外に出て星を見た、初めに見に行った時は、もやが何かに邪魔されて少ししか見えなかったが、ほんの少し立っておじさんに呼ばれて行くと見ると、さっきまでのもやが一瞬のうちに、かき消された様になくなり、寶石をちりばめた様とでも言うのか、五月に学校で行ったプラネタリウムの様に星が輝いていた。私は寒さも眠さも忘れて星を見つめた。今までにこんな沢山の星を見た事がなかったし、こんなに明るく美しい星を見た事が無い。私の家の辺りも、わりと空気が澄み、星空はすばらしいがなんと言っても比べものにならない。ただただその美しさにひきつけられるばかりであった。天頂には天ノ川が横たわりいつもより大きく地平線低くひしゃくを描いている北斗七星そうして北極星、まだまだ沢山名の知らぬ星、それから生まれて初めて流れ星を見た。それらの物はほんというにすばらしい山の夜空の魅力である。

翌日三時に起床し朝食を済ませて出発した時は、まだ星は空一杯に輝やいている、天頂近くに三日月がやはりいつもより黄色く美しく輝いていた。ひっそりとした静けさを破って、かすかな鈴の音と共に明りを灯しながら登って来る登山者はさっきに比べてまれにはなかったがとぎれる事はなかった。外は十度と言う低気温ではあったが私達は元氣よく進んだ。八合目辺りまでは岩のゴツゴツとしている所である。下を見ると目がかくくらしとして足がすくんでしまう、その上山火弾の砕けたのがまるで道に敷いたじやりの様になっているので氣をつけて歩

かないとするとすべり出すので、私等はまだ慣れぬうちは四つんばいになって歩いた。だんだんと明るくなつた中を透して見ると氷った様な静けさが裾野の町々にあり、なんとなく寒々としている。山中湖にもやがかかっているらしく湖の水が高く盛り上って氷っている様に見えた。それでも私は疲れると、一息入れながら、そつとそんな無表情な景色を見つめては登った。御来光は私がまだ八合目にたどりつく前に、夕日の様な太陽が雲の間に見え始めた。そして私が八合目によりやくたどり着いてから少しして、ばあっとさんごの光を投げかけた。全くあつと言う瞬間の出来事の様であった。その日もすごく良いお天気であった。私達は少しづつ休みながらも進んだ。しかし上に行くに従って勾配も大きくなるし、

なかなか頂上も見えないので、ほんとうに頂上までたどり着くかと心細く思った事が何度かあった。そしてやはり日本一高い山だけに苦しいなど富士山を見直したりもした。「富士山は二度登るばかりに、登らぬばか」って言うのよ」と室谷さんが言っていたのを聞いたがほんとうにそうだなとも思った。そういうわけで私達はすぐにばらばらになって足の強い人はさきに登ってしまう。哲ちゃんは一歩初めにばてるかと想像していたがさにあらず一番前にいて、どんどん登って行く。やはり外人の子供が親は五合目位でばててしまったが子供の方は上に登りたくて他の人と登ったと言う事を、富士山から帰って来た後室谷さんのおじさんに聞いたし、山小屋のおじさんもそんな話を私達にしてくれた。そうすると小さい子の方が足が強いらしい。

こういう風に私達がやつの事で頂上に着いた時は八時になっていた。しかしその途中「今日わ」と言いあいながら他の登山者と行きあったり「もう少しですよ頂上は」と励してくれた人もいるが、それは登山する人だけに通じるものではほんとうに氣持が良いと思う。頂上での空の色は又格別すばしかった。登山しているさい中は

空を見ているところではなかったただ景色のすばらしい事だけが疲れを休めるものであったが然し頂上から見た景色とは違っているみたいな氣がした。ぼうっとかすんで見える河口湖の向岸の三峠は一年生歓迎の時山行に参加して富士山のすばらしかった事に驚いたが、今度は三峠を見てあの時は随分苦勞して登山したのに、富士山と比べて月とすっぽん位に小さい山なんだと思いがら見つめている自分がおかしくなった。富士五湖のうち四湖が見えた。なんて言っても日本一高い所から見た景色のすばらしい事はここに取上げて言うまでもない。

富士山を逆さにしたみたいと言うのがむつおさんの説ではあるが噴火口の大きい事にとても驚いた。だが富士山の頂上はと言うと、良く絵で見るとは、とても想像する事が出来ない。噴火口と言い、その周りの岸と言いつてもかしこも醜い岩はだがゴツゴツとし、小石の様な火山弾と万年雪だけがそれをおおい、又色どる唯一の物ののだ。そして噴火口の向うにぼつねんと立っている測候所と、いくつもあるケルンがよいけ頂上の氣候の烈しさ、厳しさを物語っている様である。

私はごろつと横になって目をつぶった。烈しいが春の様な日ざしが降りかかって来て私の体を温かく包んだ。とても氣持が良かった。昨夜余り眠らなかったせいか、今登山する緊張がとけて急に眠たさが出て来た。そして又そんな日ざしを受けたので一層眠むたくなったのである。目を開けると空に雲——がどんどん上昇して行くのがわかったが、その雲を見ていると目が変になってしまふのでないかと思う位だ。と思っているうちに下の方で雷の音がして、頂上にも山雲が集って来て雨が降りそうになった。そして氣持の悪い風が吹いて来て、私達を一層不安にさせた。こんな所で雨に降られてはたまらないので、私達は急いで山小屋のある方へ行つた。おはち廻りをしようかと迷っていた私達は疲れて、そんな氣力もないし、こんな天氣の具合になったのでそれを断念

木下 順二作

彦市ばなし

— 演出おぼえ書きより —

高 三 い い な ゆ き を

これは、明星に新しい演劇の基礎を築こうと、あくまでも上演を目的に「彦市ばなし」上演に於ける私達の理想の型としてまとめられたものの中の一部です。しかしそれは諸般の都合により上演不可能となつたため、この誌上をもって、その意図のいく分なりとも判ってもらえたらと考え掲載させていただきました。

してすぐに下山する事に決めた。下山する前に私達は雪を見つけたので、きれいな部分を選んで、水とうやはんごうに入れておいた。登山していた時もおじさんとむつおさんで雪溪の所まで降りて行って雪を取って来て下さった。その雪の冷たくておいしかったのが忘れられなかったのである。そして後はキューリをつけておいて頂上に着いて食べたのだが、これもやはりおいしかった。しばらくそこで人がその雪の上をすべっているのを見て遊んでいた。雲は相変わらず、山はだに沿って上昇して来る。そしてそれにあたるとジャンパーを着ていても寒いと思つたが、もう雨を降らせようとする気配はなかった。私達は御殿場の方に下山した。七合目辺りまでは階段式で思つたより順調に降りた。こんな所がずっとあるのなら良いとは思つたが、なかなか思う通りにはならず、七合目から二合目までが砂走りで初めは砂がソファの様でその上、勾配が大きいので勢いがつくと、なんか雲を渡つて天下りでもしている様な気がしておもしろかつたけれど、砂がバスケットシューズでも靴の中に入つて来るし、又そこを一時間以上も通つて来たので汗をかいた所に砂ばかりで体や洋服もよごれてしまったのでしまいは気が狂うのではないかとさえも思つた。いったい富士山をもぐらエレベーターをつけて頂上につかせる計画をしているとか聞か、そんな事をする位ならこの砂走りでもちよつとは完備してくれば良いのにと思つた。そんなわけで二合目に着いた時は全くほっとした。思えば今までぶつ続けで降りて来て途中昼食もとらなかつたのですぐおなかがついていると言う事さえも忘れていた昼食を取つた後満員バスに揺られて御殿場まで行つた。

御殿場からの汽車で窓から見た富士山は晴れていて、夕暮の中を悠然とそびえていた。こんな富士を見てやはり日本一美しい山だと思つた。

ものがたり

「彦市ばなし」は、木下順二氏が現在でも熊本県八代市を中心とした地方に語り伝えられ親しまれている民話の主人公——嘘の名人彦市にまつわる話をモチーフとして劇化したものです。

或る晩、彦市はかかにせきたてられて晩飯のかずに川つぶちへ魚釣りに来ました。するとどうでしょう。どこからともなく不思議な掛声が聞えて来ます。声はすれども姿は見えず……天狗の子が隠れ蓑を着て、剣術の稽古の真最中なのです。

「一ちよ俺が得意の嘘でだまして、隠れ蓑は取り上げて呉りゅう。」彦市は早速釣竿を眼にあてて騒ぎ出しますそして、天狗の子はまんまと彦市にだまされ、只の釣竿と隠れ蓑を取り替えてしまいました。

さて、彦市はうまく隠れ蓑はうまくだまし取つたものの、親天狗の仕返しは恐いし、腕をこまねいて一思案……。そこへ、天狗の面ばかりで、そろっと城ば出て現れた殿様を早く追払おうとついた災がもとで、却って河童釣りの大約束させられてしまいました。しかし、知恵のたくみな彦市はこれしきのことではこたれません。天

狗のハツ裂きか、殿様のお手討か、命をかけた大ばくちを切り抜けるうまい計略を考え出しました。まず「殿さんからあの天狗の面と鯨の肉とば両方とも、うまい工合に貰うてしまふ。そこで親天狗が来たら……」首尾上々殿様をうまく誤魔化したものの、油断大敵、天狗の子に見事横取りされてしまいました。

悪い時には悪いことが重なるもの、隠れ蓑もかか（女房）に燃されてしまいました。苦勞心配のしどおしで忠から底から疲れてしまった彦市は、灰を塗って姿を隠し只の酒を呑みに出かけましたが……。

酔つて川つぶちにやって来た彦市は折悪しく、天狗の子に出合い、たちまち川の中で、組んずはくれつの大乱闘、そこへ様子を眼に來た殿様は、彦市が河童を捕まえた大喜び……。

「このような民話とは」

寒い夜の炬燵で、螢とびかう蚊帳の中で、おじいさんおばあさんの口から、孫たちへそして小供達へと語り伝えられていった素朴な物語の数々、それが民話でした。それは長い歴史の中で多くの人々が体験し学びつつ積

み上げて来た生活の知恵を小供達に伝え教育する生きた教訓でもあったのです。民話は私達の祖先の苦しい現実の生活から生まれて来ました。生活の向上を目指し、暗い現実を何とかしようとする意欲とそこに描き出される人々の夢は民話をより豊かな物語に創り上げ、更に新しい物語りを生み出して行きました。

こうして、常に現実の生活と密着して生まれて来た民話は、その現実生活の苦しみを反映して幾分逃避的であり、空想的であります。現実には不可能なことを飛躍して手ぐり寄せる強引さ、偶然性を骨格にした民話の構成法は、それが民話の限界となりながら、反面、民話を生み出した人々の夢と笑いを忘れない力強さ、たくましさ物語っています。

『彦市はなし』に於る主題

封建社会。その反デモグラフィックな圧迫と貧困の生活の中から、民衆は悪と戦う術を学んだ。

彦市と嘘——それは反道徳的とするのではなく、むしろ、民衆が長い歴史の中で学びとった支配者に対する、生活を苦しめる者に対する抵抗の手段を反映している。そして、彦市の不屈強靱な闘争精神と、苦しい中でも絶望を知らない楽天性とは、民衆の誇りである（歴史的に蓄積された民衆の持つ生活の知恵）である。

『本質と現代の結びつき』

民話劇は「舞台で語られる民話」でなければならぬ。私達の祖先が、民話の世界に、自分達の夢を描き出したように、私達は「彦市はなし」の舞台に私達の夢を描き出さなければならない。それも現在の日本の現実から目をそむけることなく、私達の当面する問題を一つ一つかみしめて考え、その中で現実の重圧にくじけない希望を持続させる。その明るい希望こそ私達の夢であります。

民話としての「彦市はなし」が昔日持っていた生々した力と感動を私達の肌で感じとり、舞台を通じて表現できたら——、それは民話劇の大きな意味「日本のテーマを発見する」仕事となると思うのです。

彦市が祖先の主人公であったように、私達の主人公になったら、天狗の子が、殿様が私達の夢を背負って舞台をはねまわったら——その世界はきっと、私達に、明日への希望を与えてくれるでしょう。

『限られたものであつてはならない』

これ迄、私達に民話と「彦市はなし」について検討して来ました。しかし、ここで私達は更に重要なことを考えなければならなくなりました。それは演劇の根本的な問題——この基本的なものが、明星に於て一番軽視されて来ました。——演劇とは何か、それはどうあるべきか。こうして、私達は、一つの結論を得たのです。

誠実に生きぬく人達が幸福になる美しい日本の明日を創る私達は、演劇を通じて、現実の日本をみつめ、その中から正しいものと正しくないものを見きわめる知性と、そこに立つて力強く行動する勇気とをみがくために活動しようと思ひました。

私達は、政治や教育が、多くの人々のためにあらねばならないように、演劇もまた、限られた人々のものであつてはならないと信じます。

人々が、日々の生活に苦しむのなら、社会の不合理に憤るのなら、平和を希むものならば、演劇もまた、それを訴え、叫び、呼びかけなければならないと考えます。

そして、多くの人々と私達の願いの込められた演劇、舞台（私達）と観客（多くの人）とが一つになり、ゆれ合い、結ばれ、共に高められる演劇を創らなければなりません。

断章

高 一 はやし 典子

「郷愁」ふとこんな言葉が心にうかんだ。

真夏の太陽の刺す様な光も、人々のざわめきも、いつの間にか、何のあと型もなく、消えてしまった。

一

露にぬれた草むらに、虫の音が、むなしくひびく、今は、誰も虫の音に耳を、心を、かたむける様な、予備は無い。ただ、せわしない日々なのだ。そんな時、ふと我にかえり、庭に咲く、白萩のこぼれる様な花を、ながめ夕風にそよぐ、ねこじらしの穂を、なつかしみ、若いすすきの濡れた様に、つややかな穂の、白く老いて行く美しさを、思う。一人歩いて行く足もとに、風もないのに、黄色く、染まった桜の葉が一枚、静かに散る。路端に落ちた緑い栗のいがは、誰であろう、土にまみれて、踏みしだかれ、

こうして、すべてが風に依って、一変した。夏の太陽の強烈な輝りは、秋の夜の冴えた月の光りと変り、人々の胸には、静かな、落着きが、よみがえる。

秋虫は、その短い命を、長い夜に燃やし続ける。

郷愁、こうした秋の一日の、木の葉の色や、虫の音の静かな美しさを、思う時、それは、遠い古里を思う様な懐しく、淋しい、つまり郷愁なのだ。

二

鳴き切れぬ、ウマオイの調子ハズレの上ずった声が、寝静まった家の静寂を破る。

一人、灯の下に居ると、窓の外の黒い影が、夜風のま

まに揺れている。のびきった藤づるは、春のソノままに
ゆらゆらと揺れている。その藤づるの悲しげな様子は、
妙に強く、私を揺する。

空虚とか、孤独とか、そんな言葉には、当てはまらな
い、強い何か、私を支配している。

無意味に時間と、自分を浪費して、お前は一体、ナン
ノ為に生きているのだ。しかし、どんな時にも、答えは
ない。

だから、困まるんだ。

イツソの事、メンドクサイから、死んじやおうか、突
発事故でも起きれば、簡単だし、別に、思い残す様な事
も、何も無い。でも現実、思う様には行かないのが常
だから、そんな訳にも、行かないけれど……。

トニカク、何も彼もメンドクサイ。

時間は、一刻一刻、みんな過去になってしまふ。その
中に生きた生命は、かえりみる時には、ただ一時の幻に
なってしまう。

その中で私は、生きているのだ。沢山の人間、沢山の
命、種々な人生と共に、しかし、それ等は、みんな、死
へ向う一すじの道を、たどっている。

存在する為に生れ、死ぬ為に生きるのだろうか。日日
の生活を、苦しみ、悩み、そして生きねばならないし、
生きていると云う事実は大きな疑問だ。

しかし……、メンドクサクなってきた。とにかく、何
をするのも、メンドクサイし、わからない。

バラ色の人生とか、美しき人生とか、一体どんな事な
のだろう。

こうしているうちにも、もう明日がくる。明かるくな
ったら、「オハヨウ」と言つて、何となく、新しい何か
が始まるのだ。

三

あたりが夕もやに、つつまれ、落ち葉を焚く、うす煙

が、あの懐しい秋の、焚火の香が、むせる様に漂う頃――
比叡の山が紫にけむり、寺のカワラ屋根が、黒く輝り
静かな葉もれ日の中に、鐘の音がひびく。

円山公園の雪洞に灯が点り、祇園の町に、ざわめきが
流れ、花簪とダラリの帯が、濡れた様な黒髪にゆれる。

苔寺も竜安寺も、雨の日の夕暮れは美しい。分厚い油
土塀に雨が、しみる様に降る。

南禅寺の湯豆腐も、木の芽の料理も、裏山のインクラ
インへぬける小道も……。

星も見えない、東京の濁った空の下で、まるで、昨日
の事の様に思い出している。そんな時が私は好きだ。

新しく開けた街を除けば、すべてが古い京の風物、町
も寺も美しい。古くから、その形を変えず、もの言わぬ

中に人の世のすべてを語る、沈黙の中に秘められた様々
の喜怒哀楽、そうしたもの織りなす、深い影と静と動

の交差。京の町は、秋の夕暮れの様に、いつも静かで美
しい。

懐しいという言葉が、びったりする様な、遠い町だ。
秋の夕暮れは、無性に人をほめたくなる、とある先生

が言つた。

ねこじゃらしや、赤まんまが、肌寒い風の中で、ゆれ
ている。そんな時は本当に、楽しくなつて、何でもなり

たくなってしまう。そして、たえきれない程淋しくな
る。理由もないのに、涙が流れて泣いてみたり。黙つて

ばやつとしていたり。何も考えないで考えこんだり。
空は高く美しく、広い。木々は炎の様に、紅く、染ま

つて行く。月もさえているし虫も鳴く。不思議なやさし
い声で、力一杯鳴いている。彼等の小さな生命は、ただ

鳴くという美しい義務の為に、夜の闇の中で、草むらの
中で、火を燃やしているのだ。

なんと云う、はかない生命。だから虫は、力の限り、
その悲しみを歌う。渴いたノドを、草に宿る一しずくの
露にうるおし、いかなる抵抗も許されない運命に、美し

い音と、悲しい響きとをもって、抵抗するのだ。
秋の夜よ、長かれ、秋の月よ、その光をいつまでも、
哀しい虫の願いの為に、夜露の上に注ぎたまへ、

秋の夜の郷愁は、果てることなく、ひろがつて行くか。
思いつくままに郷愁をたどる。秋の夜の一時は、楽し
い。

悪夢

高 一 森 本 栄 子

岩樹文子、彼女は、いつも知人に会うたびに自分が何
にをして良いのか解らない。私は神様にすまないと思つ
ている。せつかくこの世に生れて来たのに何にも出来や
しない彼女は、何についても絶望的な思想しか持つてい
なかった。知人はよく「人間というものは、誰だって、
そんなようなものなんだ」

と言つて彼女をなぐさめた。私は彼女に可愛いがられ
ていた。私も兄二人で、女の子は私一人であつたため彼
女に姉のような感情を持っていた。

彼女の母は彼女が高校時代に病死し、父は会社の関係
で彼女が高校三年の時にニューヨークに渡つた。その後
父は叔母の世話で再婚した。文子は高校だけは、日本で
過したいと言つて、叔母の家へ預けられた。彼女は、日
本の大学へ進学した。彼女の父が仕事で、日本へ帰つて
くるたびにアメリカに来る事を勧めたが、彼女は「お父
様とお母様と私が居るとまづくなるとこまるし、私は日
本の方が好きですもの」と言つた。彼女の死んだ母と私
の母が親しかったため、文子とは幼い時から、私と遊ん
だ。彼女の母が死んでからは、私の母は彼女に家庭的に

寂しい思いは、させたくないと言って、以前よりも、親しくして彼女を家に宿めたりした。彼女は大学を出ると父の居る、ニューヨークへと渡った。しかしデザイナーの勉強をして一年ぐらいで、日本へ帰ってきてしまった。その後しばらくとデザイナーの学校へ通っていた。しかしそれも身に入っていないようであった。不思議な事に彼女には、ボーイフレンドと言うような人は全然いなかった。又女の友達も、あまり居なかった。

彼女は美しかった。しかし彼女はどこか皮肉で、感情性を顔に出さず、他人に冷たかった。彼女は、こういう自分の欠点に気がつかず、自信を失っていた。私が彼女のアパートによく宿まった、そういう時、きまつて彼女は「もう寝ちゃったの？」と声を掛ける。「ううん、まだ寝てないわ」と私が答えると。彼女は昔し話をぼつぼつと話し始める。私は、大人の話を聞くのが好きであった。私が黙って聞いていると、彼女の声がだんだんかすんで、震えて彼女が泣いていることを感じた。彼女の話は常に未来を絶望し昔を懐しがった。

私にこんな話しをしてくれたことがあった。それは彼女が高校時代に秘そかに思っていた男の人がいた。しかし彼女の親友も、その人を好きということを知って、彼女はその人を忘れようと心がけた。そして、彼女は、私に「貴方がもし、こういう事があっても、あきらめちゃいけないわよ」とつけたした。このように彼女は私に時々アドバイスをしてくれた。私は彼女の話しを聞く事によって、大人の世界をのぞき見をするようで、楽しかった。このようなことが彼女の日常の生活であった。

それが、今年の春、私がアパートに彼女を訪ねると、彼女は、蒸気した顔でドアを開けた。私が部屋の中を見ると男の人がテーブルに向って腰掛けていた。彼女は私を「私の妹よ。なんて妹みたいな三国くみさんよ」「初めまして、どうぞよろしく」「この方はね、私の友達の前豊さん」と彼女が紹介すると原と言う男は、ニコツと

笑って会釈した。私は、あまりにも変った情景にしばらくは、あつてにとられていた。文子は、みちがえったように、こまめに動きまわっていた。その間私と豊は、学校の事や、あまりおもしろくない、きまりきった、初対面の話しをしていた。私は、その間豊を観察した。何んとなく、陰気で、いつも何にか、他の事を考えているようであった。私達は三人で夕食を、すませた。豊は九時頃、帰っていった。

私と文子が床についたのは、もう十二時頃であった。彼女は「くみちゃん、あの方どう思っただけなんだか、あの人が私に自信をつけてくれるような気がするのよ……」「どんな職業?」「あのね、そうつまり銀座やなんかのお店のショウインダーの飾りつけのデザインをやっているのよ」「へえ、私がデザインを習いに行っている店があるでしょう。あそこによくいらつしやるのよ」「そう……」私はあまりに彼女が楽しそうなので、私が見た豊の印象を話すことが出来なかった。つまり、それは、私の印象が悪かったからである。彼女は今は幸福である。私がその幸福の中に水をそぐことは出来なかった。彼女の身辺にそういう問題が起っている時、私は学校の試験とぶつかって、彼女を一ヶ月ぐらい訪ねなかった。そう、五月末頃であったであろうか、彼女は豊を連れて、私の家を訪ねてきた。

日曜日だったので父も家にいた。彼女は豊と結婚すると報告したのである。父も母も喜んでしたが、私は豊と文子の間に何にか壁があつて、二人は、まだその壁に気がついていないようであった。二人六月二十日に結婚式をあげた。彼女の両親もニューヨークから帰ってきて盛大な式であった。私は、その式の二・三日前に豊に「文子お姉様を本当に愛していられつしやるの?」と聞くと「結婚するくらいだもの好きだよ。君は文子さんの本当の妹みたいな事を言うのだね」と笑いながら彼は言った

その言葉は、私を一時的に安心させた。しかし何か口では言えない、不安が私が、文子の結婚に対して心の底から喜ぶことは出来なかった。結婚後二人は高級アパートに引越していった。私は以前みたいに彼女を訪ねなかった。十月の初め頃であった。豊は私の家にやって来て、応接間で父と母と三時間ぐらいであるか話しをしていた。彼は以前より一層暗い影があつた。

私は彼が帰った後で母に「何にか、あつたの」聞いた。母は「うまくいっていないらしいのよ」と溜息をついた。「豊さんはああいうお仕事でしょ。だから、女の方のお友達も多いのよ。……文子さん、もうちょっと大人になつてもらわなくてわね」と母は言った。私は、「この話を聞いた時、文子が、高校生の時文子が好きだった人を、彼女の親友も好だと言う事を知って忘れるように心がけた。そして彼女は私に「貴方をこんなことが有っても、あきらめちゃだめよ」と言った事を思い出した。

私は、その翌日、文子を訪ねた。彼女の目は以前のようになく、澄んではいなかった。何にか熱っぽく、入り混されたような感じであった。私は以前のように気軽に話しをする事が出来なかった。彼女と話すことが、まるでガンガンと燃えている石炭を、素手で、かきまわすような気がして、彼女が私に声を掛けるたびに私は、びくびくしていた。

十一月十日、朝五時私の家に文子の住んでいるアパートの管理人から電話で豊死亡の知らせを受けた。私達が病院にかけつけた時はもう彼の顔には白い布がかぶせられていた。文子は、病院の窓から空を見つめて、私達の方には、顔を向けようとしなかった。豊の死亡原因は強力な睡眠薬の飲み過ぎと解った。

警察側は、彼が知人に絶望的なことばかりを言っていた事から、彼は自殺を図ったと断言した。しかし私は豊が飲んだ薬は、いつも文子が使用していた事を知っていた。

た。そして豊は近眼であつたが家にいる時は、たいいていメガネをはずしていた。したがって、彼が、いつも飲んでる薬と、文子在使用している強力な薬とすり変えておいても豊には強力な薬には、ネイムが入っているのが見えない。したがって彼は強力な薬とは知らず、いつもと同じ分量を飲んでしまったのではないかと私は疑い始めた。

しかし私は警察に豊が飲んだ薬はいつも文子在使用している物と言うことは出来なかった。もし私の感が正しかったとしても、彼女が最後に抵抗した勇気を崩したくなかつたのだ。

私は豊が死んだからちやうど一ヶ月たった十一月十日に花束を持って彼女を訪ねた。私がドアをノックしても何んの返事もなかつた。部屋の中に入つていつて見るとテーブルはきれいに整頓されて誰の姿も見えなかつた。私がお花をかざっていると、寝室から文子が出てきた。「なんだ、貴方だったの」と言いながら、彼女は水色のガウンを着て立つていた。

以前より落着き、平凡な人間に近づいたような彼女がそこに立つていた。「寝てらしたの？」と私が尋ねると「ええ、何んだか頭が痛くて」と彼女は答えた。「今日は宿つていつてくれるでしょう？」と彼女は、お茶の支度をしながら尋ねた。「ええ、それでもいいわ。家には、電話をかけて、おけばよいから」と私は答えた。

私は彼女のそばに居ることがつらかつた。「貴方が豊さんを殺したのじゃないの」と叫びそうで、自分の口を閉めておくために、全身が硬くなつていった。

彼女は夕食の時に「そう、一週間ぐらい前だったかしら、父から手紙でね。ニューヨークに適当な店があるから、買ってやつてもよいって言ってきたのよ。私もね、今日本ブームでしょ。だから、東洋的な品物を置いたらけっこうやつていけるのではないかしらと思うのよ。少しは親孝行もしたいから」と笑いながら彼女は言った。

私は、想像もしなかつた。この言葉を聞いた。

文子は、年が開けて一月二十八日に日本を去つていった。私達が彼女を羽田に見送つた時、母は私の隣りでやつと、文子さんも大人になつてくれたわ」と呟いた。それからもう半年、私の心に、夫婦ならば夫が妻の薬を飲んで自殺を図つたつて何んの不思議はないではないか。人を疑つて、人を傷つけてはいけない。と言いきかせるのである。しかし時々私を悪夢のように締めつけるのである。私は私の心に罪を犯したのであるうか。

伯父の家

高 一 柳 沢 槇 江

私は夏休みの始め神奈川県に在に住む伯父の家に行つた。山と川に囲まれて近くを流れる相模川もきれいに澄んで居た。緑一色と言うのが都会育ちの私にとって、心の片隅のふるさとに帰つたかの様で嬉しかつた。家具の置方、庭の様子一つ二年前訪ずれた時と變つて居ない。なだらかで濃い緑の山を背景にして、桑畑と稲の広い耕地。家畜の音がにぎやかに聞こえて来る。伯父の家は近所でも割合手広く農業をやつて居ます。丁度養蚕が始まつていて、農家の人にとっては休む暇はない忙しい毎日です。ここ何年間が養蚕で賞状を取つてゐるとかで伯父はすごい方だつた。今日も健ちゃんも桑取りに行つて留守なので伯母が一人で広い台所をかけめぐりながら母と私を歓待してくれた。私は従兄の鉄ちゃんも裏の家畜小屋に行つてみた。鉄ちゃんは私と同年の高校一年生である。

「豚つて可愛い者ね。とても無邪気で愛きよう者だわ」十四の仔豚と二匹の親豚にべんに「ブーブー」やられた時はビックリして、「ウーウー」と大声を出してしまつた。見れば見る程尾と言ひ、顔と言ひ、歩き方と

言い滑稽で思わず吹き出してしまふ。いつかはこの豚も生命がたたれ、人間の栄養食になるのは「残酷だなあ」と思つて豚が可哀そうに見えてきた。

X X X

やがて夜！

テーブルを囲んでとてもなごやかな夕食が始まつた。ここだけに螢光灯と呼ぶ近代的な物がついて明るい。でも農家のおおいかぶさる様な大きな屋根に、古い伝統的な封建制が感じられる。が今はにぎやかな笑いで部屋は包まれている。一日を汗と埃にまみれて働き、今やつと休む時間を持つ。このなごやかさも当然なのでしょう。従兄弟の顔は陽焼けして、光の反射をうけてかとてもきれいに光つて居る。その体は逞しいとは言えないが、健康美にあふれて居る。みんなの食べつぷりがあまり良いのでお箸を持つたまま「ポカーン」としてしまつた。伯母さんもさぞかし大変だろう。

夕食後私は従兄弟達と二年ぶりにあつて、楽しい話に花を咲かせ夢中になつてゐる所へ伯父がきて

「鉄夫勉強しているか？」

と強い調子で尋ねます。伯父は子供達の中で成績の良い鉄ちゃんに自分の理想を全部押しつけてゐる様で、勉強させようと夢中になつて居るのです。

「——」

「鉄夫？忙がしい時なのに時間をさいてお前にやつて居る。遊んではかりいては——」とくどくどと始めました。

鉄ちゃんはうつむいてゐるばかり。伯父は何時もこんな風に鉄ちゃんに勉強を……とかましく言つてゐるらしい。現在高三の健ちゃんは聞きかねたらしく「余り勉強勉強と言われると、するのがいやになるものだよ、いつもそんなに言われると反抗したくなるよ。鉄夫はちゃんと勉強してるから安心して良いよ。」

「反抗したくなるのなら学校はどうでも良いと言うことなのか？面白くて勉強しろと言うて居るのではない。心配だから言うのだよ」

「気まずい雰囲気の中で二人のチビは騒いで居る。伯父は静かに」

「お前は勉強する気があるのか」

「――」

鉄ちゃんは何も言わない。私は今まで知らないふりをして伯母と話を居たが、鉄ちゃんの自由が束縛されて居るのを聞いて思わず口をはさんだ。

「伯父さん、鉄ちゃんだけが思ってる事ではないのよ。都立に行ったお友達も学校で勉強勉強と騒がれ家で又勉強と言われると反抗したくなるって。遊ぶ時間もなくなり学生時代の思出が残らないって誰もが言ってるわ。私もその立場にあったら反抗してしまうわ」

「皆そう言うよなあ。鉄夫だけの事じゃないんだから時間さえ与えておけば良いんだよ」

「お前達の事が色々心配なんだよ。親の気持も少しは考えたらどうなんだ」

夕食の後かたづけをしなが

「今の若い人は割切っているからねえ。鉄夫に時間さえ与えておけば良い様にするよ」

伯母も伯父の長い言葉にたえかねたのでしよう。端から口をはさんできた。伯母は後から私に「教育に熱しん過ぎて、しつこくなる」と伯父を弁護して居たが本当に教育に熱しんすぎるのかしら。何でも自分の思っている事をとうそうとする伯父。田舎独得の家長の意識が強すぎるのではないかしら。私の伯父の事だから教育に熱しん過ぎて、こんな状態が起ころのどと思うがもう少し家族の話あいが行われて良いのではないかと思った。この事だけでなく、もの事が伯父の一方的な意見で運ばれている様だから。

× × ×

「健ちゃん！起きなさい」

――五時半ごろかしら――

私は伯母の声で目がさめたが夕べ遅く迄本にかじりついていたので眠むたい。

「……ウーン……」

ねむいだろうな。鉄ちゃんも健ちゃんも本を読んでいたのでから――

「健ちゃん――」伯母の声

「ウーン……」

健ちゃんは長男なので一番働かなくてはならない。家畜の朝食があるからだ。伯父もとくに起きて蚕の部屋に入っている。東京の人は農村の人に比べて幸せだと思ふ。時間的にもゆとり出て、朝もこんなに早く起きないでもすむ。私は今さらながら自分の毎日を思わずには居られない。一時間近くしてチビ達が起き始めた。私のいる間だけで女の子の居ないこの家庭を手伝って、みんなの仕事を少くしてあげよう。私のする仕事なんか決まっているけど、伯母さんに少しでも休む時間を作って喜んでもらえたら嬉しい。そして朝の内に良ちゃん、和夫ちゃん相手に机にむかう。頼りない先生であるが簡単なこと位は判るだろう。二人のチビは私の言う事を良く聞くので、田舎にきた時は何時も勉強相手になるのだ。

いつの間に再び降り出したのかもうすで凡ての物をぬらし尽していた。幸い静かで霧の様な雨だったので、傘も必要なく小川の方に出てみると二人の従兄が榮んにネギを洗って居る。小川と言ってもきれいな川で食器を除いて洗濯等をするのだ。このネギは汚ない衣をはがし、根を洗い、先を揃えて束にして包んで組合に出すそう。夕方伯母が食事の仕度をしながら私に言った。

「ああして二人が雨にぬれながらネギを作ったって、ろくなお金にならないんだからねえ。農業なんていやな仕事だわ。あれだけの時報を告げた――」

――ラジオが六時の時報を告げた――

まだ雨は降って居る。

細かい霧の様な雨が……

私は今まで野菜がお店にならべられる迄の経過を考えた事がない。ただお金を出して買い、食べる事しか知らなかった私。野菜一つ一つはお百姓さんが汗水流して造りあげた結晶なのです。ここで作りあげたネギも、雨にぬれながら二人の少年が一生懸命に作った賜なのです。

誰か食べるか判かりませんが、こんな労力が含まれているとは思っても居ないでしょう。私は思った。――お店にならんで居る凡ての物には、私達に見えない労力が積み重ねられているのだと――。

畑から帰った伯父を始め、みんなが揃い、お風呂から出た頃夕食が始まります。良く食べる従兄弟たち。今夜もにぎやかな笑いが食卓を包んで居る。兄弟のいない私にはこんな事がとても楽しみでめずらしい。私までいつもより余計食べられた。食事も終ってチビ二人が近所にテレビを見に行き、私は従兄と他の部屋で話に夢中になっていた。愛読書の事から自然に将来の事に発展して。健ちゃん

「南米に移民したいな」

「と言いながらパンフレットを見せてくれた。昨日だったかその事は鉄ちゃんに聞いたばかりだったと思いついたが、健ちゃんがパンフレットまで集めている熱意さに驚ろいた。それには規則がやかましく色々書いてあったが、〃向こうに永住できる方〃としてあったのを覚えて居る。

「大変ねえ。行くとなれば……」

「長男だから実現はむずかしいな」と鉄ちゃん

「でも俺は開拓事業がしたいよ。まだ親爺には言っていないけど、反対するに決まっているからね。ブラジルよりアルゼンチンが良いな」

「ブラジルの方が良いわ。コーヒーの産地だもの」

「良いよなあ、コーヒー送ってくれよ」

私と鉄ちゃんのがん気な事を言う
「実現も実行も生やさしいものじゃないんだぞ。お前たちは良いよ。家に縛られる事がないからなあ……」

……そうだ是は深刻な問題なのだ。健ちゃんはこの家に取っては長男で、伯父にとってはかけがえのない後次だった。

「健ちゃんは後次ね。でも形式ばらずに良ちゃんと和夫ちゃんが次いだって良いじゃない」

「チビには向かないよ。良三はいたすらで活発だからむくと思うけど、畑がきらいですぐいやがるからな」

「兄さんには無理な夢だ。実現は不可能だよ。でも協力するよ」

「……俺は何とも言わないよ」

と言いつながら真白いきれいな歯を出して笑った顔は、永久に開拓の夢を持ち続けると言っているかの様で私にはとても頼もしく感じられた。健ちゃんは遠い国に思いをよせながら毎日こうして元気で働いているのです。

× × ×

昨日の昼頃、私は蚤のこもを洗いに相模川に行った。この川は昔から「さあ」の名産地として知られて居る。水はゆるやかに流れ、大きな石がすきとおって見えて水のきれいな事が良くわかる。空は真青に晴れあがり、遠い山も白いヴェールがはぎとられたかの様にはっきりと見え、眼の前の山は深い緑におおわれて、凡てが調和し静かなリズムをかなで居る。私達以外は誰も居ず、ただ渡し舟が一つ浮かんで居た。チビ達は新しい海水着で泳いで居る。良ちゃんは学校の水泳大会で優勝した最年少者。きれいに水をきって泳いで居る。「伯父は私に遊んで居なさい」と言うが余り流れがきれいなので、川に入りこもを洗った。やわらかい水が足にぶつかり、泳ぐ様によけていく。

メエ——！山羊の声

なごやかな昼時です。

東京ではこの風景を望めないが、私は今それに好きだに接し、自分の心も体も水とスバラシイ緑の山にとけて居られる。

水は足にたわむれ、

太陽はてり輝いている。

家に帰って食べたお茶の味とトウモロコシの柔かな香は真の田舎の味である。ツブツブに光った新鮮な味は、毎日食べていてもあきることはない。

牛も山羊も鳴いている。

蟬がたえまなく声をはりあげて、夏を訴えている。

——静かななあ——

× × ×

小さな田舎の村で、一人は大学に、一人は南国に希望をもやして居る従兄弟達。

これからの長い将来、兄弟のいない私の良い相談相手になってくれるでしょう。

私も何かの時には力になりたい。私の力と言っても範圍は知れて居るけど、やって出きない事はないと思つて居る。何日間かの滞在中、農村の狀態が手に取る様にわかつたし、羨ましくなる様な兄弟愛もみてきた。何もかもが良い勉強になり、そして楽しかった。二人の従兄の希望が実現する様に祈りながら、あらゆるものに別れを告げ帰ってきた。今もにぎやかな笑い声が山を越え、雲を越え私の耳に聞こえてくるようだ。

寂しい時には思出す。

楽しかった田舎の思出——。

又逢える日まで、さようなら——。

偽善者

今日は、上級生のO君から、意外な事を云われた。

「君は、偽善者だ。Hも云っていたよ」

私が、「偽善者」だろうか。どんな理由から、「偽善者」なんて云うのだろうか。私は尋ねた。

「どうして？」

「自分で考えてみるよ」

「私、わからないわ。自分の気持ちに、うそをついた事ないわ」

「じゃ云うよ。どうして、僕とHとへ出した手紙の内容が同じなんだろうか」

私は、ここまで聞いて「偽善者」と云われた理由がわかつたのだ。私は、確かに同じ文句の手紙を二人に出した。しかし、重要な内容ではなかつたのだ。ピクニックへ行つた時のお札に書いたものだった。次の様な内容だと記憶している。

今日は、楽しい一日でした。

(この後その時遊んだ感想などを述べてたと記憶している)

一生懸命勉強して希望校に入って下さい。祈っています。(この最後の文句が気にさわつたらしい)

「黙っていないで何か云えよ」

「云うわ。あなた達にとって、それ程、重要な手紙だったかしら。私は、お札の手紙を出したのよ。同じ内容でもないでしょう」

「良くないよ。僕とHとは親友だぜ。Hが昨日、君から来た手紙を持って僕の家に来んだ。やつは喜んでいったんだ。しかし、僕の所へも来ていると知り、お互いに、交換して読んだら、全く同じではないか。全く君は、ひどい人だよ」

「私も、貴方達の様な人、大嫌いだわ」

某月某日

高三上田紀子

某月某日

「偽善者」と云われてから、一週間過ぎた。私は、シヨックだった。O君とH君とに、毎日学校で顔を合わせるのがいやでたまらない。会いたくない時にかぎって、一日に何回も、顔を合わせるものである。今日だって、五回位会ってしまった。

某月某日

O君が、部会の時、

「帰り、話があるから、一緒に帰ってくれないか」と云った。

「何の話なの」私は、O君の顔を見ると気持ちが悪くなった。今までも、重要な話ではないのに、マイクで部の名前を使って、呼び出し、一緒に帰らされた。最初は「部の事で話がある」と云われ、素直な気持ちで残り、一緒に帰ったが、部活動の事など全く関係のない、個人的な事とか、人生観などを聞かされた。初めの数回は、おもしろかったが、O君は、あまりにもしつこかった。又お友達に、

「O君と仲が良いのね」と云われ、全く変な気持ちがした。そして、夢中で弁解した。

「うそよ。あんな人と仲良くないわ。部の事を話しているのよ」

「だって、この頃、一緒に帰るじゃないの」

「本当だわ。本当だわ。私、この頃一緒に帰るわね」自分自身驚いた。

「何、とばけているのよ」

こんな事があってから、私は誤解される恐ろしさに、O君とは、絶対に帰らない事にした。O君は、性質が暗く、素直でなかった。だから、話も暗く、健康的な感じを受けないし（考え方が健康的ではないのである）私には、理解出来ないのだ。

「帰る時、話をするよ」

「私、一緒に帰るのいやよ。今、話して下さらないかし

ら」

「しかたがない。Hの事なんだ」

「H君、どうかしたの」

「うん、彼、今悩んでいるんだ。君のことでね」

「私のことで」

「彼、死にたいなんて本気で云ってたよ」

「どうしてかしら」

「君の正体を知りたいと云ってる」

「私の正体ですって」

「彼は、かわい想だよ。そこで、お願いがあるんだ。今度、彼の所へ遊びに行ってくれないか」

「……」

「元気つけてやってくれよ」

「私、いやだわ。H君を元氣付ける力など、持っていないわ」

「君は、持っているんだよ」

「持っていないわ」

「持っている」

「持っていない」

「君は、馬鹿だよ。H悲しむだろうなあ」

「私、何も知らないわ」

某月某日

今日、学校でH君の姿が見えなかったので、心配だった。O君から、あんな事を聞いて、私は、随分考えた。私は、H君の気持ちを良くわかっていた。しかし、特別な友達には、なりたくない。だけど、H君は、良い人だ。H君の性質を、私は好きなんだけれど。

H君の身体は、普通の人と違っている。だけど、私と話をする時は、全く、ひねくれる様な事は、なかった。明かるく、親切で、芸術家であり、ピアノを弾いている姿など、とても生々とし、熱心な態度で、非常に立派であるから、私は、何時も感心していた。しかし劣等感が強

く、そのために、H自身を劣等感のかたまりにする様で私は、つらかった。その結果、H君に親切になろうと思った。H君の家にも遊びに行き、妹さん達とも仲良くなった。しかし特別な感情など、無かったと思っているし、あったら困るのだ。私には、尊敬している人がいるからである。

某月某日

私は、すべてを解決するために、O君と一緒に、H君の家に行った。O君と一緒に行ったので、H君は、驚いた顔をした。私は、何時もと違って緊張していた。妹さんの顔まで、何時もの元氣さが無い様に感じられた。

室に入ってから、私達は三人共、黙ってしまった。H君は、にが笑いをしたり、溜息ばかりついていった。O君は窓の外を見ている。私は、二人の態度を見ていた。その内、O君が陽気な声で、

「空がきれいだね。こんな時、ボートに乗りたいたいね。三人で行かないか」

「おれは行かないぜ。二人で行って来いよ」

「私、行きたくないわ」

三人共、全く、けんかごしになってしまった。H君は本をいじったり、ぶったり、落着きがなかった。私は、こんな雰囲気の中にいるのが苦しかった。

「私、これで失礼するわ」と立ちかけた。

「待ってくれよ。僕、話があるんだ」とH君が引きとめた。

「私だって、貴方にお話があって来たのよ。だけど、こんな雰囲気の中で話をする勇気がないわ」私は本当に帰るつもりだった。

「僕が、僕の話の内容を具体的に云うと、つまり、君の正体を知りたいのだ」

「正体、普通の人間よ」少しおかしかった。

「真剣なんだ。僕は、君を『その妹』に出てくる静子の様

な人だと思っているのだ。Oとも意見が一致したんだだけだ」

「静子の様な人間ですって、とんでもないわ。静子の様に、優しくないしあんなに美しい心の持主ではないわ。それに自分を犠牲にしてまで、兄の幸福を願う様な人間ではないわ。どんなに兄を愛していたにしても」

「そんな事ないよ。僕達には、静子の様な人に見えるんだ」

「困るわ、本当に困るわ」

「僕、この間、『三四郎』を読んだんだ。三四郎の気持、なんだか良くわかったよ。あの本いい本だなあ」

「私、三四郎の様な所は、だれでも持っていると思うの。今の私達の囲りは、三四郎の様な気持を持っている人が沢山いると思えると思うわ」

「そうかも知れないね」

私達は、やっと何時もの調子にもどったようであつた

「君の話って何なの」

「云えなくなつてしまつたわ」私は、自分の心の中を、はつきり云つつもりだつた。そうする事によつて、正体もわかつてくれると思つたのだ。しかし、好きな人がいるなんて、どうしても云えなかつた。私は、偽善者かも知れない。そう思われても仕方が無いかも知れない。

某月某日

今日は私の好きな人が遊びに来た。この頃、小さな溝が二人の間に出来た様だ。私は、理解している様で、理解出来ない事が、沢山生じて来た様に感じるのである。話をしている時、時々、その事とは、全く別な事を考えている自分を発見するのである。以前は、全く、そんな余裕が精神的になかつた。そして、又もとの話にもどる時、そこに流れる空気程、私の胸を重くするものはない。きつと相手の人も、他の事を考えていたのに、違いないからである。今日は、話が進まず、気分が全然晴れなかつた。

某月某日

好きな人に、一ヶ月以上会わない。どうしたのだろう。私を嫌いになつたんだろうか。疑う事は、私の嫌いな事である。絶対疑いを持つ事はしまいと思つてた。しかし、信じていればいる程、すべてに疑いを持ち始めてしまった。私には、本当に人を信じる事は、出来ないのであらうか。あまりにも矛盾だけの様だ。

某月某日

なんだか、一人ぼっちになつてしまつた様に淋しい。感情の動物に、生まれた事に感謝しながらも、時々、反対な気持になることがある。その時は、自分の弱さが、はつきりとわかつた場合と、自分自身に全く自信のない時である。私の場合は、そうだった。

今日、H君から手紙をもらった。H君の気持が、素直に告白されていた。胸がドキドキし、顔だけが熱くなる様に感じた。しかし、私は、素直に受け取る事は、出来なかつた。私は、家に帰ると、母に話して、H君の家に رفت。そして、はつきりと自分の気持をのべて来た。「君は、今まで僕に同情していただろう。すべて、同情から生まれたんだ。僕は、誤解していた」

「……」私は、云うべき言葉がなかつた。ただ、うなだれてしまつた。

「同情なんて、して欲しくないよ」

「同情ではないわ。だけど私にも、わからない」

「僕は、同情しかされない。わかつているんだ」

「そんな事ないわ。でも、確かに、初めは同情したわ。そして、親切にしてあげようと思つたわ。だけど、貴方の性格に暗い所が、あまり無いので驚いたの。それから本当に同情してお友達になつていたのではないわ。本当なのよ。信じて下さらないでしょうけど」

「……」

「貴方は、自分から消壺の中へ入って行く様だわ。だれ

もが貴方の思っている程、同情してなくてよ」

「うん、そうかも知れない。しかし、僕は、本当の愛を受ける事など出来ないのだ。常に同情の上に成っているからだ」

私は、この時程、淋しさを感じた事がなかつた。そして、手紙の内容を素直に受け取る事を決心しようかと思つたが。しかし同情から、又同情の上になつてしまふ。それに自分の気持を偽つてまで、そんな事をする必要があるだろうか。H君のためにも悪い事だ。自分自身しかりしなくては。

「これからも、今まで通りのお友達でいましょうね。私これを云いに来たのよ」

「うん、ありがとう。でも本当に、僕の様な者から、手紙をもらつて、自尊心をきずつけなかつた」

「なんのために。そんな必要があつて」

某月某日

一日一日と私とH君とは離れて行く様だ。H君は、私の顔を見ない様につとめているかの様に思えた。やはり川岸の阿端を歩いている様だ。私から離れて行こうとするH君の姿を見ると、涙が出そうになる。原因は、自分でもわからないが、親しい人が、一人減つて行く淋しさなのだろうか。実に複雑な矛盾だらけの気持をしていた。その中には、何か割り切れないものがある様に思える。

某月某日

あれから一年位立つた。H君の事も思い出として残る様になつた。会いたいとは思わないが、どうしているだろうかとは、時々思う。幸福に生活を送っているだろうか。必要以上の劣等感を持たないでいるだろうか。私には、無関係な事かも知れないが、やはり、色々考えさせられた友達であるから、私は、わすれる事がないだろ

う。

私は、一年前の私と変化がなく、物足りなく思っているが、しかし、何事もない時の方が幸福である。私の場合など、全くその通りだから。

純ちゃん

高三 金井三知

朝子は信じています。朝子と純ちゃんとの間には友情が通っていた、と。

朝子の大好きな純ちゃんは朝子の住む東京からずっと遠い瀬戸内海に住む高校三年の少年です。朝子が純ちゃんを知ったのは中三の十一月。そうです。今から三年前でした。

風で学校をお休みしていて退屈だった朝子の眼にとまっていたのは中学生新聞の文通欄：男女問わず：そこに何が書かれてあったか今の朝子は覚えていません。唯何となく純一という名と瀬戸内海に引かれて始めてお便りしたのです。確か可愛らしいピンクの便箋：内容は想い出ません。そして純ちゃんからのお便りは朝子が半分忘れかけた頃来ました。

〃拝啓、お便り有難うございました。

そちらは大部寒くなったでしょうね。僕の町ではまだかなり暖い日が続いています。町は前に燈灘国立公園葛島を抱き後に紫雲山を控えた平和で美しい町です。貴方の町もさぞ美しいでしょうね、ここで自己紹介をします。

生年月日 昭和十六年七月二十日

好・課目 数学・国語・社会・音楽・体育

趣味 スポーツ

好・色 白・紺

身長 五尺六寸

又学校の様子は生徒数八百八、各学年五組校舎は緑の木々に囲まれた静かな学校です。写真を送りたいですが適当なのがなく送れません。次回には送ります。

今試験中なのでこのへんでペンを置きます。乱筆乱文をお許し下さい。

朝子さんへ

純一ヨリ

朝子は暫くは彼を理解出来ませんでした。くそまじめで：でも面白半分も手伝い朝子は書きました。それから一年余り沢山の手紙が交換されました。時のたつ間に朝子にはなくてはならない友と変りました。感情的な朝子の文に対し純ちゃんは何時も静かなお便りを下さいました。高校生になってからバスケット部にはいった事、そして純ちゃんは、学校の部内でも必要とされていきました。練習で疲れるらしくお便りの回数もへりました。朝子は何通でも書きたかったのですが、純ちゃんは駄目でした。朝子は嫌われてしまった様でした。そんなアル日朝子の元に

お手紙おくれて済みません。

度々、この様に遅れては貴女に悪いし僕も苦痛なのです。何故ならバスケットの練習が六時に終り帰って来て七時机の前にすわるのが八時、練習で疲れるのでせいぜい二、三時間しか勉強出来ません、二三時間では復習も満足に出来ません。だから手紙を書く時間がなかなかとれません。ここで文通を止めようと言うと貴は写真を送ったら止められたと思うでしょう。僕もそれが辛いから続け様と思っていましたが本当は貴女以外二、三人の人と交換していましたが皆んなにも訳を言って止めました。又それらの人から写真はもらっていませんでしたし僕も送っていませんでした。自分勝手だと言わないで下さい。貴女がもし運動部にはいなかった時この気持が判ってもらえると思います。文通を始めて一年半ですが、そして手紙の上で交際して一年半ですが貴女と別れねばなりません。

これからもお元気で、幸福にお暮し下さい。

朝子へ

純一

その時の朝子は悲しくて涙がポロポロ出て来たのを覚えていました。純ちゃんは他のお友達より朝子を最後まで残して下ったのです。それなのに断わって来たのですから判って上げたいと思いましたが、朝子はお別れしたくありませんでした。そして二、三通を変させ様と書き送りましたが唯

再参のお便り受け取りました。なるべく書く様にします。云々……

と来ただけで待っても来ませんでした。その間朝子はくだわらないお便りを出していましたが朝子は思いきって別れる決心をしました。そして悲しい気持でお便りを出しました。それから一週間後、思いがけず純ちゃんから返事が来ました。

朝子

今日朝子からの手紙が届いた。この様に長い間便りをしなかったのだから当然来るべきだったかも知れないがいざ絶交状をつきつけられて見るにいたたまれない気持だ。僕のがままを何とおわびしたら良いのだろう。近いなら朝子、君の所にとんで行って謝りたい、そうすればこの僕の今の淋しい気持がおさまるかも知れない。朝子にも以前この様な気持にさせたのだからそれと思うとやりきれない。弁解めいてしまったが許して下さい。最後に君にふしだらな僕ではあるが許してくれるなら返事を待つ、でもこんな淋しい手紙はごめんだ。君らしい又僕らしい明るく楽しい手紙を交換しよう。

純一

朝子は浮び上げる様な喜びにつつまれてしまいました。そしてこの時から又楽しい文通が始まったのです。本当の友情が生じていたとしたら、それはこの頃からでしょう。朝子は純ちゃんをお兄さんの様に思い何でも書きます。

した。そして朝子は沢山知りました。純チャンの性質、学校での生活、ガールフレンドの事、オートバイに乗って居る事、そして瀬戸の沿岸を走る素晴らしい朝子は純チャンのお手紙で、実感の様に知りました。でも今年の始めだったかしら、又少しづつ違くなってしまいました。でも受験が控えていますから朝子は決して純チャンを責めない決心をしていました。朝子は時々手紙と、様々の夢によって満足出来ました。朝子だって勉強しなくてはならなかったので純チャンの気持は良く判りました。そして七月になって朝子は毎日少しずつ時間を作り純チャンのお誕生日のプレゼントのためにレース編みを始めました。

毎日朝子は楽しく編み続けました。そして二十日になってしまいました。小さなテールブルクロスが出来上がりました。でも朝子はその次の日から旅行に出かけてしまったのです。

出掛けにはプレゼントの遅れる事を書いて送り旅行先でも絵葉書きを何枚か送りました。そして帰って急いでレース編み、そしてお手紙と写真も送りましたが純チャンは朝子がどんなに待ってもお返事を下さいませんでした。朝子はあんなに：毎日編んだのに、毎日ポストを見て：急がしいから、とがまんして待っていました。けれども何日たっても純チャンからの喜びの、お手紙は来ませんでした。朝子は次第に口惜しさを覚ええました。いくら勉強でも葉書き一本・何故かと――。

その口惜しさと淋しさとで、朝子はまたお別れする決心をしました。そして今考えると、馬鹿な手納を書きました。

純一サマ

私は貴方がいくらお便り下さらなくても何も言わないと決心しました。でも私は貴方がこんなに冷酷な方だとは思っても居ませんでした。旅行は絵葉書き、帰ってから、そして心をこめたレース編み。

私は貴方を良く知りません。でもお手紙の上では三年

目、貴方を良い方だと思っています。そして私は三年間楽しかったわ。これから先は貴方が私との交通に何かを得るなら、そして続けたいと思っ下さるならば何時までもお友達でありたいと思います。でも貴方は今では私との交通が重荷……。

書きたくて書くのではなく義務的になってしまいました。そんな思いまでさせてお便りいただきたくありません。誤解なさらないでね、お便りが遅いからではないの、私は貴方に喜んで欲しかったのです。それらに貴方は余りにも冷たいのが悲しいのです。こんな事は責めても仕様がありません。結果として私が貴方にとってそれ程重要な人間ではなかったのです。責めません。許して差し上げます。でも、お便りを、文通をやめる時期の様です。ここでお便りを止めても私は何時までもお友達と思っています。そして三年間のお便りに感謝します。ごめんなさい、本当に今までありがとうございます。

可能であるなら私はもっとお友達でいたい、今すぐ淋しい気持です。

私も感情的でわがままで、悪かったわ、ごめんなさい。

貴方が来年の四月から笑顔で大学生になられます様心からお祈りしています。

純チャン、貴方の事は決して忘れられません。御多幸を祈ります。 朝子

朝子は馬鹿でした。これで前の様に「続けよう」と書いて来るかとはかない願いをかけていました。「朝子の大事なお友達の純チャン、時々でいいのお便りを……」そう祈っていました。半分後悔しつつ――。

返事は来ませんでした。朝子の願いを無視して、朝子の気持ちを少しも理解しないで。

朝子

昨日朝子からのお便り手にしました。

朝子のお怒りになるのは最もだと思えます。絵葉書き写真、レース編み本当に嬉しく受け取りました。そのお札の手紙を怠けていたのではありません。夏休みの始め主任の先生が家に来しました。そして今のままでは――と無茶苦茶に言われました。父母は怒りと落胆のため大学へ行かさないと言いました。でも今では関西の私立なら……と言っています。僕もそのつもりで一生懸命勉強しています。就職は父の手引きでOKなのです。どこの大学を出ても……その変り条件を出されました。今から試験の終るまで女友達との交際を止める

と 貴方への手紙が延び延びになっている時、貴方からの絶交状が届きました。僕は貴方と文通を止める機会を得ました。父母との約束を守るためにも貴女の希望にそう為にもさっぱり別れましょう。

貴女はどちらかと言うと文学少女ですね、僕は現実的だと云われます。

この様に正反対の二人が三年間交際出来たのはこの間一度も会わなかったからでしょう。東京と香川と遠く離れていた事が幸いだったと思えます。試験のため君も僕も君をすぐ忘れてしまおうでしょう。一人の進む道は異つても二人共世間の波にもまれます。僕は負けません。朝子だって負けないでしょうね。

僕は平凡なサラリーマンは嫌いです。だから商業の世界にはいるつもりです。そして自分の力と運をためします。これが僕の希望です。貴女も立派な奥さんにそして理解ある母親になって下さい。

あこがれの都、東京に住む 朝子へ

波静かな瀬戸の純一

この時の朝子の気持、誰に分るでしょうか。胸の中に小さな穴があいてそれがだんだん大きくなる様な思いでした。

戦後の日本の行き方、恋愛について、純チャンは朝子

に書いて来ていました。様々の事を……でもその純チャンが、今は朝子を振り返りもしないと思えた時の淋しさとして又ペンを取りました。

お便り拝見しました。やっぱり淋しいわ。貴方のためにも私自身のためにも、もう書くべきではありません。でもこれだけ。朝子は絶交状を書いたのではありません。朝子は何時までもお友達のもりです。貴方は朝子を好き？

大学生になったら又お便り下さいますか？

それまで決して書かないとお約束します。私は又貴方と楽しい日々を再現出来る日を夢みています。朝子は貴方が好きです。

文通は危険だと誰かが言ったわ。相手のすべてを知らずに好きになってしまう。本当かも知れません。友情と愛情との境はむずかしいわ。朝子には判りません。でも好きなんです。こんな事書くのはいけないわね。でも今は最後ですもの。貴方が二度とお便り下さらない事を知っています。

純チャン、貴方は貴方の御両親の戒しめを守らねばなりません。貴方は今まで楽しみ過ぎたの。朝子にもそう思えます。

朝子は今後何時までも貴方を忘れたくありません。私にとっては素晴らしい思い出ですもの、朝子は遠い東京の空の下で、貴方が見ているのと同じ太陽や星を見上げて、貴方の幸福を祈っている少女の実在する事を忘れてはしくありません。

今度こそ本当にお別れね。

貴方の御希望の道が貴方の真の力によって開かれます様祈っています。がんばって！

サヨウナラ

朝子より

これが最後でした。朝子は本当に暫く書かないつもりです。朝子は嫌われてしまったのです。朝子は淋しい。何かあると純チャンに書きたくなくなってしまいます。でも

書いてはいけません。お別れした事はきつと良い事なのでしようね。今は悲しいけれど朝子は純チャンとお友達になって良かったと思っています。来年の四月、多分お便りは下さらないでしょう。でも朝子は待っています。

例へ来なくても朝子はいいんです。遠い香川と東京の間に三年間通った友情。

この友情、今は消えてしまっているとしても一時なりとも真の友情が生まれて居たと信じて朝子はそれで満足出来ます。

不良のくせに正直ではにかみ屋(?)で弱虫でオシャレで朝子には何時もやさしかった純チャンを朝子は長くわすれる事は出来ません。

いいんです。そして多分朝子は本当に純チャンを好きなのです。でも愛ではなく友情で、とどまりたいと思います。

朝子は文通を危険だなんて思いません。反対に素晴らしい事なのです。

朝子は純チャンのおかげで瀬戸内海を知りました。何

河のある下町

高 二 原 田 励

時か行つて見たいと思います。

そして機会があれば会いたいと思っています。朝子は何時までも二人の間に生じた友情を育てて行きたかったのです。でもそれは不可能でした。それでも朝子は朝子自身の中にその友情を育てて行きます。何時までも。

この先唯の一通のお便りを下さらなくても朝子はがまん出来ます。

今純チャンからの朝子を楽しませ、力づけ悲しませたお便りが机の中の水色の小箱にぎっしりつまっています。朝子は何時までもこれを大事にします。

純チャンは今ではもう朝子の事等忘れてしまっているでしょうか。例えそうであっても、朝子はがまんしなければなりません。純チャンとの間の友情を信じる事によってすべてをがまん出来ます。

朝子は純チャンを恋していませんもの。純チャンなんて平気です。

「唯、朝子は今も純チャンとお友達でいたかったのです。」

が、たった〇〇反の田の百姓では到底それは無理な望みだった。とし江はどうしても行きたかったのだが、――

「母さんの言う事聞いておくれ」

母にそう言われると、父に「女のくせに大学へ行く等と生意気な」と太いまきでたたかされて「行きたい」と言ったらとし江もそれ以上さからう事が出来なかった。とし江は「高校へ行きたい」と言った時も父になぐられ

た。その時も、母は「とし江がああ言うし、学校の先生もすめて下さるのだから」と父になぐられるとし江をかばいながら言った。高校まではどうにか行けたが、大学は到底とし江の家にとっては無理な話だった。高校を卒業すると、とし江は広島紡績工場へ女工として就職したが、翌年、操短のあおりをくらって解コになった。家へ帰ってもとし江はすぐに働き口を探さなくてはならなかった。とし江一人が家にいる事はとし江の家にとっては大きな負担なのだ。とし江は東京に出てYと言う家へ女中として住みこんだ。決して楽しい生活ではなかった。そんな生活はとし江にはすでに子供の頃から慣れていた事だが「女中」と言う仕事に彼女の一日が完全に沫殺されてしまうのだ。二十四時間の内、彼女に与えられている自由の時間はわずか六時間の睡眠時間だけだった。とし江は月わずかの給料の中からその大部分を広島の家へ送っていた。その為彼女がY家へ来て三月目に「チチシス」の電報が届いた時も、旅費がなく国へ帰る事が出来なかった。とし江や母を、事ある度になぐり、その度毎に「死んでしまえ」と何度も思った父ではあったが、「チチシス」のわずか四文字の電報を受取った時とし江は暗い女中部屋の布団の中で声を忍んで泣いた。

Yさんの家へ住みこんで四年、——Yさんが会社の都合で金沢へ移る事になり「是非連れて行って下さい」と頼んだが、とし江の願いは聞き届けられず、ひまを出された。

とし江が河を見たのは、新聞に出ているそば屋の「だまされ屋」の広告を見て、洲崎橋の側で都電を下りた時だった。下町特有のあるにおいの様なものが河から立ちのぼり街全体をつつんでいる様にとし江には都電を下りて河を見ながら道路を横切るとき感じられた。河にそった坂を下ってすぐ右側が。とし江の住みこんだ「だまされ屋」と言う店だった。「だまされたつもりで一度喰べてみな」と言う意味なのだそう。

とし江が古くなったのれんを分けて暗い、すぐ奥に調理場の見える店へ踏みこんだ時、鉢巻きをしてカウターの側で、新聞を読んでいた背の高い若い男が大きい声で——

「らっしやい」

と言った。

「広告を見て来たんです」

とし江は持つて来た新聞の広告の場所を突き出して言った。

「ああそうかい、——はじめっからそう言いねえな」

若い男は、後で、この「だまされ屋」でその時までたった一人の店員だった安三郎だ、と解ったが、——早口にそう言っ——

「旦那さん」

と奥に声をかけた。

「マスターは今忙がしいよ」

男の声に答えたのは旦那さんの声ではなく、その声が小柄な体を予想させるおかみさんの志津だった。

「ああ、おかみさん、——住み込みが来てるんです」

「おや、そうかい、速いねえ、——当節は余程人があまつてるんだね」

手をふきながら店と調理場の間に垂れている縄のれんの下をぐぐっておかみさんが出て来た。

「この子かい？」

「塩崎とし江です」

とし江は軽くおじぎをした。

おかみさんは漸くとし江を見ていたが、

「いいだろう。——家じゃ、保証人だの何だのむづかしい事は言わないけれど、給料は安いよ——かまわかないい？」

「ええ」

「ちよっと、お前さん、今日からこの子に働いてもらおうよ」

おかみさんはその位置から首だけ奥へ向けて怒鳴った「ああ、いいやな、——お前が決めりゃいいよ」奥から旦那の吉之助の声だけがした。

主人の吉之助は浪曲が好きで、近くの寄席に浪花節が掛るとすぐに掛け出て行き、帰って来てはその節をうなりながらそばを作るのだ。その為志津は始終「もうける金は皆、浪曲と仕出しでなくなってしまう」とこぼしていた。

「俺の金で俺が楽しむんだから文句あるめえ」

吉之助はそんな志津にそう言っていた。とし江はそれはどこかで見た男の姿だ、と思った。志津ばかりではなく、吉之助も、安三郎も志津が言った様に戸籍調べの様な事はしなかったが、その代り、志津が言ったように給料も安く、Yさんの家よりは三〇〇〇円ばかり安かった。その為、父が死んでから働き手が減って余計金が必要な家へ送る額も少なくなってしまった。時々、学生がこの店にもやって来る事があったが、とし江はこの頃そんなものに無関心になってしまった。あれだけ大学へ行きたい、と思った彼女の願いも一年間紡績工場に務め、四年間住み込み女中として働いている内に薄れて行ってしまったのだ。——うすれた、と言うより、彼女には到底不可能な望みなので、明きらめてしまい、その諦めが無関心にこの頃は変って来たのだ。——不可能な事を諦め、——その諦めが無関心に、——それはとし江の性格であつたかも知れないし、そうするのが最上の策だ、と言う彼女の信念に似たものであつたかも知れない。

父が死んで間もなく、母もその後を追う様に死んでしまった。父も母と同じように仕事に急死したのだそう。それは自動車の修理工場に働いている次兄からの長い手紙で知った。「ハハシス」の電報を受取った時、父の時と同様に「高校へ行きたい」と言って父に火箸でなぐられるとし江をかばった母の姿が思い出された。母の

葬式の時も、店の仕事で忙がしくして帰れなかった。おかみさんや、旦那は「帰ってもいい」と言ってくれた。とし江自身も帰らなかったのだが、何故か彼女は帰らなかった。とし江はソット橋の上から河をながめた。濁った泥と油の河の水の中には、その濁った中に、何か美しい、きらきら光るものが誰の目にも見えない所で輝いている様な気が、とし江にはするのだった。父が死んで、母が死んでから、とし江は国へ金を送るのを止めてしまった。それは止めようとして止めたのではなく、気が附いたら止めていたのだ。その為か、国から来る手紙も回数が段々減ってこの頃は来ないようになってしまった。帰りたくても帰る事も出来ず、——逢いたくても逢えず彼女が大学に、あきらめか無関心になった様に広島島の事もあきらめと、そして両親の死が、彼女を広島へ対して無関心にさせ、その内とし江は広島のことを忘れる様になって来た。それは彼女が忘れようと務めた為かも知れない。おかみさんに、「国はどこ？」と聞かれた時、「忘れしましたわ」と彼女はぼんやり答えた。とし江はおかみさんに言った様に本当にヒロシマを忘れてしまった。とし江はボンボンじよう汽に乗るのが好きだった。たまの休みにはよく船で河を上下した。濁った河の上を焼玉エンジンの「ボンボン」と言う単調な音と、エンジンの焼けるにおいとガソリンのにおいをかいでいると、ある何かを思い出すのだ。それが何であるかとし江自身にもよく解らなかつた。或いはそれは、とし江自身は忘れてしまったと思っているヒロシマの事であつたかも知れない。始終鉢巻をして歌を歌っている安三郎さんは休みには野球を観に行った。特に大毎のファンだそう。朝早くから弁当を持って出掛けて行き、夜おそく帰って来る。野球を観てその後で映画を観て来るのだそうだ。「ああ、腹が減った」と、いつも大声でそう言っ帰ってくる。「よそでおそばでも食べてくればいいのに」ととし江がそ

う言うと、——

「馬つ鹿野郎！よそのそばなんか、まずくって喰へるけえ」安三郎さんはそう言つてのれんをくぐつて行つた。そばを喰つた後が大変だ。とし江を前にして野球と映画の話をはじめるのだ。それがごっちゃになつてしまい、何が何だか解らなくなつてしまふのだが、とし江にはそれが楽しかつた。安三郎が野球と映画へ行つてる間にとし江は船で河を上下して来るので、安三郎がいる時はいつもとし江は店にいた。その為休みの日にとし江が何をしているのか不思議だつたらしく「としちゃんは休みの日何をしてんだい」と安三郎が聞いた事が一度あつた。

「船に乗つての」——そうとし江は答へた。そんなとし江に、——

「としちゃんは河が好きだねえ、——きっと大阪ぢやないのかい？——生れが、——」

とし江は、——

「そうですね、——私、大阪で生れたんです、道頓堀の近くのお菓子屋で生れたんです」と言つた。とし江は何故自分がそんな事を言つたのか不思議だつた。

それを聞いていた安三郎がその時、こう言つた。

「としちゃん、今度の休みには一緒に映画へ行かないか——たまには映画も観なよ、船ばかり取つて、——舟虫ぢやあるまいし」

しかし、とし江は映画は嫌いだった。その時もおかみさんが

「そうだよ、としちゃん行つていね、——あたしがお金出して上げるから」と言つてくれたが、——

「私嫌いなんです」

とし江はどんぶりを洗ひながらそう答へた。

「そうかい、——おかしな子だねえ、——映画と言へばこの位の女の子なら飛びつきのにねえ」

おかみさんはそんなとし江にそう言つた。

「いいやな、人間誰にも好き嫌いはあるさ、それ、お前が浪花節が嫌いなように」

旦那さんは皮肉に言つた。実際とし江に映画はつまらないものだった。昔、よく兄が連れて行つてくれたが、暗いせまい人の多くさんいる所でうすっぱな画面に映るもの等そう興味がなかつた。それにとし江はにぎやかな場所は余り好のまなかつた。

とし江が最初に潔を見たのは彼女が「だまされ屋」の裏にある「パチンコ屋」へ出前持ちに行つて店へ帰つて来た時だった。とし江は初じめの内はもっぱら出前だけだったが、この頃は店の方の仕事も手伝つていた。この頃、河に面してずらり並んでいた倉庫の一部が改造され貸し事務所が出来たので店は忙がしくなつていた。昼間や夕方は、おかみさんを総動員しても少々と忙がしい様子だ。とし江が潔に逢つたのは旦那の吉之助が「もう一人手が欲しいな」と言つた二、三日後だった。とし江が潔に逢つた時、とし江は潔を客かと思つた。とし江がのれんを分けて店へ入つた時、出会がしらに潔とぶつかつた。とし江の持つていたお盆の上のどんぶりが店の土間に落ちてわれた。

「あつ！ すいません」

潔があわててそれを拾うとした。

「いえ、お客さん、いいんです。——あたしがやりますから」

とし江もあわててそれを拾うとした。その時のれんの間から一度出て行つた安三郎が顔を出した。

「あつ、この野郎、やつたな、——まあいい、ついて来い」

とし江にはなぜ安三郎がお客の潔にそんな言い方をしたのかよく解らなかつた。その時ばかりでなく、潔が店

で働く事になったと知ってからもし江はよく潔を客とまちがえた。よく潔はせまい店の机の前で、お客が余り来ない時ばんやり考えている事があった。そんな時、とし江は店の奥からのれん越しに見附て、——

「いらっしやいませ」

と店へ出て行く事が何度もあった。

「何んだ、潔ちゃんじゃないの、——いつもまちがえてしまいわ、——少しもお店の人らしくないのね」

とし江がそう言うのと、決って潔はニヤッと照れくさそうに笑って並んだ机をふいたり、店の掃除をしたりするのだ。潔が店で働く事になったのは彼が「だまれ屋」でそばを食べた時だった。店の内部にもはってあった。

「求ム店員」を潔は見たのだ。潔はそば代二十五円を払ってから、店の中に何故かぐずぐずしていた。

「何ですか？ お客さん」

安三郎が、——それが安三郎のくせなのだが、——ぶつさらばうに言うのと、

「あのう、——広告見たんです、——『求ム店員』の」と小さな声で言った。

「何？」

安三郎かのれんを分けて店へ出て来ると、潔は顔を真っ赤にして一層小さな声で言った。

「働きたいんです」

「ほうっ、——そうかい、——少つと旦那」

安三郎がじろじろ潔を見ながら奥へ怒鳴った。

「何んでえ」

吉之助が頭の手ぬぐいを取りながら出て来た。

「働きてえんですと、——この小僧が」

「ほう」

吉之助はそう言って潔をじろじろ見ていたが、

「まあいいだらう、——働いてくん、——給料は安いぜ」

そう言ってさっさと奥へ行ってしまった。

「はあ、——すいません」

潔は余計顔を赤らめるとびよこんとおじぎをした。

「おい丁度いいや、これ持ってついて来な」

安三郎はそう言って橋の向うの林さんの家へ持つて行く井を五つ重さねたまま渡した。

「はい」

潔はあわてて手に持つていた帽子をその場へおいてその井を受取った。

「ちえっ、——トウシロウだな、——駄目だよそんなじゃ、——ついて来な」

安三郎は井を持つたとたんによろけた潔にそう言うとその井をひたたくる様にして外へ出て行つた。とし江がパチンコ屋から帰って来たのはその時だった。

潔は無口だった。いつもおどおどして何かにおびている様だったし、又いつも何かを考えこんでいる様だった。

「潔ちゃんは学者かなんかになればいいのに、——いつも何か考えていて」

とし江は一度そう言った事がある。すると潔はいつものそれがくせで、ニヤッと照れた様な苦が笑いをして店の奥へ入つて行つた。潔は出前をしても、家をまちがへたり、井を落したりする事がよくあった。その度に安三郎は、——それがくせなのだが、——「間抜け！」とか「ドジ！」とか端で見ている方がはらはらする様な怒り方をした。

「安三郎さん、——そんな言い方するもんじゃないわ」なるべくとし江は潔をかばった。いつも何かにおびえている様な小さな潔をとし江には突つ放す事は出来なかった。

安三郎は大低、

「この野郎——女の子にかばつて貰つてデレデレするんじゃねえぞ」

と、さっさと行つてしまふのだ。潔は店の主人の吉之

助にも志津には名前は「潔」としか言わなかった苗字はあるのだらうが、名前しか言わなかった。東京へ来る前には大阪にいたと言う。

「おや、そうかい、それじゃとしちゃんと同じだねえ」

それを聞いて志津がそう言った。更に志津が「道頓堀りの側のお菓子屋さん知ってるかい？」と言つたが「行つた事がないから知らない」と潔は言つていた。

とし江は店が閉つてから残つたそばやうどんを暗い店で喰べながら、よく潔と話をした。

「家飛び出して来たんだ」

「馬鹿な事するもんじゃないわ」

「東京へ出ればどうにかなると思つてさ」

「どうにもならなかったでしよ、——いつ出て来たの」

「——三年前」

「今迄どこにいたの？」

「いろんな所、——うんと金もうけて、自動車の修理工場持つんだ」

「そう——じゃ、お金貯めなくちゃね」

潔の眼はそんな時だけ、普段と違ってキラキラ輝いていた。

「あら、——天ぷらうどんの残りがあつたわ、——えびよ

——ほら、喰べなさい」

「そば屋なんていいね」

「どうして？」

「始終うまいもの喰つてられるもん」

潔はそう言って「フフ」と笑つた。

とし江もつられて一緒に笑つた。

潔の給料はそれ程高いものではなかったがそれでも手取り、二、三千円は貰つていた様子だった。食費も何も別で二千円もらえれば、潔のような子供には余る筈なのにどこでどう使うのかいつも給料日の五日程前には全部使い果してしまふらしい。別に「自動車修理工場」の為

の貯金をしている様子もない。

「貯金をして工場を買うんだ」と口ぐせの様に言っているが、その様子がないのだ。その内、潔が仕事をしていたの最中や、休みの時等に一目でそれと解る街の与太者風の男が、

「よう、ちょっと潔呼んでくれねえかなあ」

と、店の表や裏口からとし江に言う事がよくあった。

与太者風の男がよく潔に逢いに来るようになってから潔が店をあける事が度々あったし、又、夜遅くなって帰って来る事もあった。

「潔ちゃん、気を附けなくちゃいけないわ、——変な人と付き合ったりすると困るわよ、——それにお店の仕事もまじめにしくちゃ」

とし江は、或る晩そつと遅く帰って来た潔にそう言った。

「いいよ、放つといてくれよ、——偉らそうな面して説教なんかすんない」

潔はわざと不貞くされた様に言った。

「あら、お説教じゃないわ、——それにお金貯めなくちゃ工場も買えないわよ」

「いいよ、——先きはまだ長いんだ、あわてる必要はないさ」

「——でも、お店の仕事だけはちゃんとやらなくちゃ、どこでもこう簡単に働きの口があるなんて思ったら間違いないよ」

「おや、いやに大人っぽい事おっしゃいますね」

潔はそう言つてとし江をを横目で見ると、わざと大げさにポケットから煙草を出した。とし江は驚いたがわざと知らん顔をして自分の部屋の二階へ上がつて行った。部屋へ入る時に階段の下り口からのぞくと潔が煙草にむせんだらしく苦しうにせきをしていた。

潔が店の仕事を休んだり、夜遅く帰って来たりするのに気が附いているのは勿論とし江だけではなく、主人の

吉之助も、志津も、安三郎も氣附いていたらしく時々注意している声とし江は聞いたが、その度に潔は「すいません、これから気を附けます」と言っていた。そして頭をかきながら部屋を出て来ると、とし江をじろりと怒った様な眼で見て店へ出て行くのだ。一度、映画館の前で与太者達とブラブラしているのをそっちの方へ出前に行った安三郎に連れてこられた時はわけもなくとし江にアタツた。

それは気のよい潔がとし江を一番頼りにしている証拠だ、と思つてそんな潔にいやな顔がとし江には出来なかった。とし江が潔に対してそんな感情を抱き、潔がとし江を頼りにしていたのは、自分の故郷を忘れた人間と自分の故郷を捨てた人間が、何か互に共通なものを見附け、それが同情めいたものになった、結び付きであつたのかも知れない。

とし江や吉之助や志津や安三郎が何度同じ事を言つても潔が店の仕事を怠けたり夜おそくまで外を出歩いたりするくせはなおならなかった。そればかりか以前より激しくなった。潔が与太者達と付き合うようになったのは、彼が「だまされ屋」に住みこむ以前から東京へ出て来ての三年間と、大阪に住んでいた頃からそんな人間達と付き合つていた為にもそんな仲間に入つてしまったのだ。そう言う仲間での生活は何度も彼が経験したようにひどく金を浪費する社会だった。家にいた頃はどうかいろいろな場所から都合を附ける事が出来たが他人の間に出来てからはそうはいかない、月々の給料以外には何んの収入もないのだ。

その日は朝から曇り空だった。潔は昨日「すいません気を附けます」と吉之助に言つたばかりなのに昼間から店を開つ放しにしていた。

「あんた、もうあの子にはやめてもらおうよ、——こう怠らけたんじや。店が忙しういって言うのに」

「そうよ、——俺もそれを考えていたんだ、子供だと思

つて甘く見ていりゃあ」

先き程まで吉之助と志津が店の奥でそう話し合っていた。安三郎は弁天橋の方へ出前に行つていた。店には事所の男が帰りらしく一人そばを喰べていた。

「いらつしやい」

とし江はそう言いかけて、

「あら、又お客さんかと思つた。——ちつともお店の人らしくないんだもの」

と笑つた。昼頃出て行つた潔がばんやり帰つて来たのだ。カウンターの側で雑誌を読んでいたとし江にはそれがお客に見えた。潔は黙つて椅子に腰掛けた。

「どうしたの?——いやだわ」

とし江がそう言つた時、——

「おい、勘定」

客が腰を浮しながら言つた。

「ありがとうございます。——三五円いただきます」

「これでツリくれよ」

客はそう言つて口をふきながら千円札を出した。

「あのう、こまかいのないんですか?」

「うん」

とし江はカウンターから百円札を数へて客に渡した。

こまかい札がないと困るのだが、客は千円札を出した事を何か誇らしく思っているらしくたつた。

「九六五円のおつりです。——毎度ありがとうございました」

客は百円札と十円玉を数えながらポケットにねじこんだ。潔はそれを見つと見ていた。

「おい、少つと来てくんねえか」

奥から吉之助がとし江を呼んだ。

「はい、——ちつとお店頼むわね」

とし江は潔にそう言つて奥へ入つて行つた。潔の眼が店の奥を見てキラリと光つた。潔は引張られる様にカウンターに近附くと引き出しを開け、一瞬ためらつたが

その中の数枚の百円札を素早くポケットにねじこんだ。弁天橋の方へ行った安三郎が帰って来たのは四時頃だった。

「潔どうしたい」

「あら、さっき帰って来たのよ——ぼんやりしてたわ」

「仕様がねえなあ、——今帰り掛けに弁天堂の所でぼんやり腰掛けている小僧が潔に似ているから声を掛けたんだ、——あの野郎、俺の顔見てあわてて逃げ出したんだ、何かあったんじゃないか？」

「あら、——別に、——又怒られると思ったのよ」

「図々しいな、——全く、仕事しねえで金もらおうって言うんだから」

「あら、とうとう降って来たわ」

安三郎が弁天橋の方へ行く時「降りそうだなあ」と言っていたが、今その雨が降って来た。

「運がよかったわね」

「そうさ、——こちらら、ここんとこア、ツイてるんだ」

「大毎が勝ってるしね」

「あたぼうよ」

安三郎はそう言って笑いながら奥へ入って行った。

「帰って来た所をすまねえが、あの四丁目の村山さんへもり五つ、急いでくれ」

「この雨であの子どうしているかしら」と心配気に外をのぞいているとし江の耳に吉之助が安三郎にそう言ってる声が聞えた。

「ちえーっ、恐ろしく降って来やがったなあ」

安三郎はそう言いながらゴムの合羽を引っ掛けると、雨がもうもうと水煙を上げる様に降っている道を駆け出して行った。河の面に雨傘を上から見た様な波紋がいくつもいくつも広がっていた。

「燈りつけとくれ」

志津がとし江に言った。

「はい」

とし江が螢光燈のスイッチを入れた時、びしょぬれの潔がよろめく様に入ってきた。

「まあ、どうしたの、——びしょぬれよ、——こんな雨の中を——」

「——」

「さ、ぬぎなさいよ、——乾してあげるわ」

「いいよ、放つといてくれよ」

「そっけなく潔は言った。」

「だって風邪引くわよ、——早くぬぎなさい」

とし江はタオルを渡しながらか言った。

「潔は肩で大きく息をしていた。」

「これ返えすよ」

「潔はポケットからぬれた百円札を机の上に出した。」

「やっぱり、——ひどい人」

「私、さっき気がついて、どうしようかと思ったわ——でも、何かまちがいないかと思って、奥には黙ってたの——よかったわ」

とし江はその札を素早く前掛けの下にかくすと奥を気にしながら言った。

「どうしてこんな事したの？」

「どうしてって、——病気になったんだ、大阪の姉さんが」

「本当——お姉さんいるの」

「——うん——」

潔はとし江の顔から視線を外して行った。とし江には解っていた。潔が嘘を言ってる事が、——けれどとし江はそれを追求する気にはなれなかった。

「そう、——お姉さんが——」

「でももういらなくなつたんだ」

「タオルを机にたたきつけた。」

「どうして？」

「ふん、病気じゃなかったのさ」

「そう」

「もう、いいんだ」

とし江には解っていた。きつと潔は恐くなつてもどつて来たのだ。

潔はわざとそれを隠す為に不貞くされているのだ。

その晩、潔は吉之助から「やめてくれ」と言われた。

「働かないで金ばかりとられているのはこっちも困る。やめてくれ」と言うのだ。

「すいません。本当に、これから働きます、まじめにやりますから」

今迄何度も言った様に今日も潔は言った。

「駄目だね、——その言葉は何ども聞いたんだ」

吉之助はいつもの様にはゆるしてくれなかった。

「旦那さん、どうか働かせて下さい、——私からもお願いします——私が働かせる様にしますから」

とし江は思わず、潔をそう言ってかばった。吉之助は「駄目だ」と言って仲々とし江の言う事を聞いてくれなかったが「あたしが責任を持ちます」と言うとうやうやく承知してくれた。

潔が居なくなつたのはその翌日だった。

屋頂出て行って帰って来なくなつたのだ。とし江が気が附いた時、カウンターから千円がなくなっていた。昨日の様に帰って来るだろうと待っていたが街がネオンで飾られる頃になつても帰って来なかった。とし江は自分の財布から千円札をソツとカウンターにしまった。潔が帰って来ないと解つた時、とし江は橋の上から、何故か河をながめたかった。河は最初にとし江が見た様に黒い帯の様にゆっくりゆっくり海へ向って動いていた。その面にネオンが映ってゆれていた。とし江はやっぱり濁った水の底にはきれいなものはなかったのだ、と思ったが、水の底にはきれいなものがあるのだ、とまだ思っていた。河を下って行くボンボン蒸気を見ながら「ヒロシマへ帰ってみようかな」とフト思った。

或る女

原田 励

直子にとって滝田賀津夫は二度目の夫だった。直子が滝田賀津夫と知り合ったのは、彼女が最初にとついだ大阪の旅館の「浪花荘」での事だった。直子が「浪花荘」の園井広介の嫁に來たのは彼女の意志ではなかった。半ば強制的に來させられたのだ。直子は広介の家へ来るまで広介がどんな顔の男であるかも知らなかったし、又広介の方も直子がどんな女であるかも知らなかった様子だった。広介にとつて直子は二度目の妻だった。広介の先妻とし江は、つい二月程前に治療の甲斐なく肺病でこの世を去った。

広介と、とし江の結婚は明治の中期の当時としてはわりあい自由な方だった。当時の結婚と言へば、個人対個人と言うより、むしろ家対家の關係が重要視されたものだった。しかしその中で広介と、とし江の結婚は、家の意志と個人の意志が「偶然」にうまく合致したものだった。その広介達の結婚も「病氣」によって断ちやぶられ、その後へ彼の何んの意志もなく、只、こちらの両親と、先方の両親のみの話し合いだけで直子と言う女が「園井家」の嫁として堺の町からやつて來たのだ。広介にはその直子が、金を目当に、園井家の財産だけを目当にやつて來た女に思えて仕方がなかった。

彼の先妻のとし江を計画的に殺し、その後へ財産を目当に入りこんで來た、——それは、なにも、広介がひねくれ者だ、と言う事なのではなく、それだけ広介にとつてとし江の死は大きな痛手だったのだ。直子にはそんな広介の気持ちには解りすぎる程解っているのだが、「お前は

悪女だ、——とし江を殺し、園井家の財産を狙つて來た女だ。」と事ある毎に言われ、後妻の為か店の者からも冷めたい目で見られ、直子の生活はきゅうくつな耐え難いものであった。もち論直子はいくら家へ好んで來たわけではない。半ば強制的に來させられたのだ。「半ば強制的」と言うのは、園井家へ行くと親に言われ何度かいいやだ、と拒み続けながらも最期には彼女もあきらめて「園井家」へ行つたからだ。直子の家は堺の街の旅館だった。それ程大きな旅館ではないが、数年前に明治天皇行幸のおりにこの店で水を飲んだ、と言うのが大變父親の自慢でその茶わんが大切に神棚に乗つていた。天皇がこの旅館で休んだ時直子は十九才だった。直子には彼女より五つ年上の兄の清之助と、二つ違いの弟の清二郎、弟より一つ下の朋子がいた。彼女が十九才の時、すでに兄の清之助は直子より二つ年上の近くの同じ旅館業者の娘の千加子を嫁に貰つていた。

初めて「園井さんの家へお嫁に行きなさい」と父母に言われた時、直子ははっきりと「いやです」と答へた。二度目も三度もそう答へた。結婚と言う一生の重大事を、只、両親と先き方の親の話し合いだけで決める事はいやだった。彼女の相手の「園井広介」がどんな男であるかも直子は知らないし、又園井広介も直子がどんな女であるか知る筈もない。そんな、お互に何も知らない同志が「結婚」——と言うそれも本人の意志ではなく、「親」と言う全く無關係の人間達によつて決められた場合、果してそこにはどんな結果が生れるのだろう。直子

にはそれが恐ろしかった。それがいやだった。しかし、母の言葉に対して「いやです」と首をふつた直子に、父と母と兄と千加子の眼は冷めたかった。

「親の意見に従わないとは親不孝だ」

「お前は誰に育てられたと思つてゐるね——その恩を仇で返えそう言うのか、——恐しい子や」

「親の決めた相手に何んの不足があるんね、——お金持ちやし、商売は繁昌しておるし、家の商売かてもつとりようなるんや」

「親の決た相手が不服なら、他に好きな人でもでけたんか、——親の許さぬ不義いたずら言うて、——恐しい子や」

母は、直子が母の話に対して「いやです」と答へた時何かひどく驚いたような、その反面おびえたような顔をしてゐた。母にとつて——ばかりではなく、父にとつても、兄にとつても、千加子にとつても、まさか直子が彼等の推する相手に対してそんな返事をするとは予想にもしてゐなかつた。母も今の父のもとに嫁に來た時は、母の両親と父の両親との話し合いだけで、彼等の意志に問題なく決められたのだ。兄と千加子もそうだったし、父の両親も、母の両親もそうだった。今までがそうだったのだから今度もそうあるべきだ、と彼等は考へてゐた。しかしそれに対して直子の返事は「いやです」と言うものだった。この返事は一瞬彼等を面喰らわせた。

父と母に、そして兄にそんな風に言われると直子にはそれ以上拒み続ける事は出来なかつた。直子は畳の上に眼を落して「承知しました」と言つた。直子を罪人のようにぐるりと取り囲んでゐた一同の間にほつとため息がもれた。

「はようそう言えばええのや、——ほんまにせわやかせて——」

母は父を見ながら申しわけをするように言つた。
「ええのんか?——姉さん、——ほんまにええのんか」

父と母と兄と義姉の前で「承知しました」と言ってから直子は全てが終ってしまった、と思った。もうこれ自分の一生が他人のものになってしまったと思った。しかし、それで家の商売がうまく行つて育てられた恩の返しが出来るならそれでもいいと思った。直子は自分の部屋でぼんやりしていた。二階の彼女の部屋の下に堀が黒く濁つてよどんでいた。そつと戸を開けて入つて来たのは弟の清二郎だった。

「本当にええのんか？」

「何が？」

「あの話を承知して——」

「何んや、あんたら子供には解らん事や」

「何言うんね姉さん、ぼくはもう子供やあらへん、——」

姉さん、——本当にええのんか——」

「仕方がないわ」

「何故やね」

「父さんと母さんには育てられた恩もあるし、——親不孝な真似はでけへん」

「そやかて姉さん、——」

姉さんの一生がだいなしになるかも知れんので」

「清ちゃん、言わんといて、——姉さん、よう考えた末の事なんね、——」

よう考えて決心したんや、——姉さん一人我慢すれば、それで全てもう行くんや、——」

姉さん一人我慢すれば、それでええのや」

「姉さん、何言うんね、——」

何んで姉さん一人我慢せならんね、——それやったら姉さんがあまり可哀そうや」

「清ちゃん——」

直子は涙を清二郎に見せまいと外を向いた。

「わがままは言えへん、——父さんや母さんには育てられた恩がある——それを仇で返すような恐い事」

「——」

「清ちゃん、解つてえな、決心したんや——」

姉さんの気が

持ちぐらつかすような事せんといて、——な、ごしようやさかい」

「——解つた、——姉さん、よう解つた。もう何も言わへん、——」

けどなあ姉さん、何かあったらすぐぼくの所へ相談に来てや、——ぼくはもう子供やあらへんで——」

あんじようするよつて、——な、——いつでも相談に来てや」

「清ちゃん、——おおきに、——おおきに」

直子は清二郎の手をとつて初めて泣いた。

直子は清二郎に「相談に来てや」と言われた時、清二郎の言う気持ちはありがたかったが、自分の問題も自分だけで処理したい、と思つたし、又処理して行けると思つた。しかし、実際に園井家へ来ての孤立した生活は、直子を段々清二郎に頼らせて行つた。清二郎からは、大休月に一度は手紙が来た。園井家へといつてからの直子の、それがたった一つの楽しみだった。直子はどんな小さな事でも困つた事があつた時は清二郎に相談した。直子は外出を赦されなかつたからその相談は手紙でするよりなかつた。その手紙も直子の所に来る手紙は全て広介の母の利江の眼を通しては直子には渡されなかつた。一度小遣の事で利江ともめた事で清二郎に手紙を出した時は、「この嫁はわざわざ私の恥を世間に知らそうとしている」と言つてひどく、利江や広介にせめられた。そんな事は度々あつた。

直子が滝田賀津夫と知り合ったのは園井家へ来て三年程経つた時の事だった。一度決心したからにはどんな事でも自分で解決しようと思つた直子の気持ちがあつた。出出した頃だった。滝田賀津夫が「浪花荘」へやつて来たのはいゆる旅行シーズンも終つて旅館の仕事がいくらかひまな頃のことだった。

「少し長くなりますよ」

部屋へ案内した直子に賀津夫はそう言った。はじめ、直子は賀津夫の仕事が解らなかつた。彼女が賀津夫の部

屋へ食事を運んだり、用を頼まれて行つた時、大抵賀津夫は窓際の机に向つて何か書いていた。

「お客さんはいつても何をなさっているんですか？」

大抵、——それは誰が作意をしたわけでもなかつたのだが、自然といつたのまにか賀津夫の部屋の世話は直子がするようになつていた。

「ええ、原稿です」

「本をお書きになるんですか？」

賀津夫の言葉使いで東京の人間だと解つた。

「失礼ですが何とおっしゃるのですか？」

「滝田賀津夫、——あまり売れた名ではありませんよ」

賀津夫の言う通り滝田賀津夫と言う小説家の名前はあまり直子も知らない。もつとも直子は本などあまり読む方ではなかつたし、又、もし本を読んだりなどしていれば、必ず利江の冷たい眼がどこかで光っているのだ。

「まだお若いんですもの、——今お書きになつてゐるの

は？」

「ええ、——ちよつと友達がやつてる雑誌から頼まれましてね、——」

ぼくには、初めての頼まれた原稿なんです

よ」

「そうですか、そりやよございましたわね、——本が出たら是非拝見させていただきます」

「ええ、是非お願いします」

賀津夫はうれしそうに言つた。賀津夫には解つていた。この人の「拝見させていただきます」と言つた言葉は普通の、商売の人が職業上から言うお世辞ではなく、——そう言つたらこの人は本当に読んでくれる人だ。あまり、旅館の女主人にありながら飾り気の、ない直子の態度が賀津夫にそれを感じさせた。賀津夫にはそれがうれしかった。

直子にはその賀津夫の笑い顔が何か非常に暖いものに

つつまれていふように思え、彼女も思わず笑つた。それは園井家へ来て初めての笑いだつた。

「何日お泊りになるんですか？」

「そう、——あと二週間ばかり」

「大変なんですね」

「いやあ、仕事ですからね」

「そうですか、——では御用のおありの節はお呼び下さい」

直子はそつとフスマをしめて廊下に出た。廊下を歩きながら直子の口から思わず笑いがもれた。

直子はその滝田賀津夫から「結婚してくれ」と言われたのは賀津夫が東京へ発つ五日程前だった。直子はそう言われた時、おもわず叫び声を上げた。急にそんな事を言われおどろい為なのかも知れないし、又うれしかった為なのかも知れない。

「直子さん、——お願いします」

賀津夫は一語そう言った。

日露戦争がはじまったのは翌々年だった。賀津夫の書いた「その影」と言う小説が反戦を主題にしたものの為に「アカ」だと言われいろいろな方面に相当話題をまき壮士風の男が「国賊を退治してやる！」と叫びながら賀津夫達の家になぐりこんで来た事もあったし、共感した学生達が家の前で「滝田賀津夫先生万才！」などと叫んで行く事もあった。賀津夫と直子は東中野の駅の近くに小さな家を持っていた。そこは賀津夫達五、六人の「赤い雲」の同人達が会合する場所であったが、賀津夫が「その影」を発表してから月に二、三度、思想調査だと言って刑事が来る事もあったし、会合の席に土足のまま「臨検」だと言って上りこんで来る事もあった。「その影」がいろいろな反響を呼んだ時、(勿論「赤い雲」の同人達は支持してくれた)大阪から直子の兄が来た。親の決めた相手と結婚しながら「アカ」の思想の男とだまって駆け落ち等してとひどく怒っていた。

直子は賀津夫に「結婚してくれ」と言われた時それに

どう返事をしてよいかまよった。直子は賀津夫と結婚すれば彼女が望んでいたような幸せがやってくると思つた。だから賀津夫と結婚したかった。けれど今直子は園井広介の妻である。それに、親の決めた家へといでいながら他の男と結婚したりしたら世間は一切どう言う目で堺の家を見るだろう。あれが男と逃げた悪い女の家だと言つて、父や母は迷惑するにちがいない。自己を殺し家の為につくすのがいいのか、自分の幸せの為に家を捨てればいいのか。園井家にいれば直子は毎日毎日暗い日々の中に段々年をとり、うとまねながら死んで行くのだ。完全に彼女の人間性と言うものは抹殺され、一個の動く肉のかたまりとしてしか存在しないのだ。しかし、——好きな人と結婚するのが何故悪い事なのだろう。何故親の言う通りになり、「悪女」とまで言われて嫁いで行くのが美德なのだろう、——自分のした事が正しければどんなゆにがんだ眼で見られてもかまわないのではないだろうか——直子は決心した。どんな事があっても滝田賀津夫と結婚しようと思つた。この事は父母達に知らせれば勿論反対するに決つてゐる。しかし清二郎だけには知らせなかった。直子はようやく頼みこむと外出の赦しを得た。それは直子にとって初めての園井家へ来てからの外出だった。十二時に通天閣の上で待ち合せる事にした。「そりゃよかった、姉さんよう決心した、それでこそ姉さんや——、姉さん、がんばつてえな、——家の方はぼくがうまくやるよつて、姉さん、幸せになつてや、——そうや、そうと知つたら何かお礼するんやつた」

「何んや、清ちゃん、かまへんそんな事、——けどうれしいわ、清ちゃんにそんなによろこんでもらえると、——姉さん、本当によかった、あなたにあつて」

「やっぱ子供やあらへんやろ」「ほんまにそうや」

「で、いつ東京へ行くんね」「私の気持が決まり次第や」

「えろう早でましやなんね、——送りたいけど店の事もあつた、勘忍してや」

「かまへん、——清ちゃんがそんな風に言ってくればもう心丈夫や、姉さん何んにも恐いものあらへん。——そうや、あなたおるし粉好きやつたな、——姉さんおごつたるわ」

「ほんまかあ」

「何んやおどろいて、——そんな所はまだ子供やなあ」直子と清二郎は顔を見合せると思ひっきり笑つた。

直子が賀津夫と共に大阪を去つた時、堺の家は園井家からひどくイヤ味を言われたそう。兄はその事を「天皇さまが御水を御飲みになった由緒ある家名に泥を塗つた」と怒つた。同業者や近所の者からも「親の育て方が悪いからあんな娘が出来るのだ」と言われたり、親類関係からも、堺の家だけの恥ではなく、自分達も世間へ顔向けが出来ない、と言われたりして、客足にもひびいたそう。特に千加子の里方の両親は顔を真っ赤にして堺の家へ怒鳴りこんで来たと言う。それに対して、父と母と、兄の清之助は、ただ、「申しわけありません、何んとか致します」

と平あやまりにあやまるだけだった。清二郎はそんな両親達をだらしがない、と怒つて

「お前までが直子の肩を持つのか！」と父と母がとめなければあぶなく清之助と取組み合いの喧嘩になる所だったと言う。その両親達を更に困らせたのは賀津夫の書いた「その影」だった。ああ言う男に自分の娘を嫁にする家の思想を調査すると一時は刑事が家に入りするまでになったそう。

「兄さん、私は今でもはつきり言えます。滝田と結婚した事は少しも間違つておりません」

「何を言うんね、この娘は、——お前がカケ落ちた為にか！」

「兄さんは家と人間とどちらが大切なんですか、——家名がなんです」

「阿呆！ 家とお前とくらべられるかい！」

賀津夫は二人の話をじつとフスマのとなりで聞いていた。

「兄さん、兄さんは結婚と言うものがどう言うものなのか知っているんですか、——もし私が園井広介さんとあんな結婚の仕方をしなければお互に幸福になれたのかも知れません。けれど、あの無理矢理な結婚が私と園井さんをどんなに傷つけたか御存知なんですか、——私達はお互に理解しあえず苦しい毎日を送って来たんです、——大変な苦労だったんですよ」

「あたり前や！ 何んやね『苦労した』とけつたくその悪い、——お前のような恐い、親の言う事も素直にきけんような奴は苦勞するのあたりまえや！ 業のむくいや！ お前のような悪い女には当然の報いや！」

「——兄さん！」

「兄さん、おやめなさい」

「何んや、あんた誰や！——わてはあんたのような者に

『兄さん』呼ばれるおばえはおまへんで」

「滝田です、——兄さん、おんびんにすむように黙っておりましたが、あんまりなおしやりようじゃありませんか」

「何んや、何があんまりや、——えっ——あんたら方があんまりやないか、——直子をだまして『赤い』思想を吹きこんでケツかって、——ああ、あんたやね『その影』つちゅうえろう恐い本書いたんは、——おかげでうちの清二郎までかぶれてしまったは、——あんたらおかげでわいらがどれ程の迷惑をこうむったか知つとるのか——世間から後指さされ、ええっ——ほんまに恐い事や」

「——兄さん、——お帰り下さい」

「何んや！ 『帰れ』——帰れとは何んやね、——直子を連れて帰れ言うのか——」

「兄さん、何で直子が悪い女なんですか、——ぼくは一年間直子の生活を見てどんな暮しをしていたか知っています。外出も禁じられ、話す事さえ出来なかったんですよ、——毎日冷めたい眼で周囲から見られ、——何故そんな苦しみを味わうのが直子にとって当然なんです——兄さんのおっしゃりようはあんまりじゃありませんか」

「何ぬかすねん、——人が大人しくしとればつけ上がり——どうかすいません、赦して下さい、とても言うて疊に手をついてあやまる思たら『帰れ』とは何んやね、帰れとは。——ええ、帰たる、帰つたるは！ 頼まれてもこんな所にいたるかい！——けどなあ、直子、今日限り兄弟の縁切つたで、勘当やつ！ 堺の父さんも言つとつたは、勘当やつ！ ええか、今日限り兄でもない、妹でもない、家の敷居はまたがせへんぞっ！ おぼいときっ！」

兄は、捨科白のようにそう言うて疊を蹴って出て行った。

「すみません、——赦してやって下さい」

直子は清之助が出て行ってから賀津夫にそう言った。

「いや、かまわないよ、何度もあんな事は言われて来たから、——けれど君には悪い事をしてしまった、兄さんをあんな風に恐らせてしまつて」もう少しおだやかに話しあえば、こんな風にはならなかったろうに、と直子は後悔をした。いくらあんな兄でも、父でも母でも縁を切られる事はやはり直子には辛かった。

「——かまいません」

直子は疊に目を落すとポツリと言った。

清二郎から手紙が来たのは清之助が「勘当だつ！」と言つて帰ってから二月程経つた時だった。父は、直子が賀津夫と結婚した当時から、体がよわつていて、店は大

体、清之助と清二郎にまかせつきりだったのだが、二日程前にとうとう息を引きとつたそう。清二郎は度々の手紙で父の様子を直子に知らせて来ていたが、一週間程前の手紙では少しづつ快方に向つてると書かれてあつた。病人は死ぬ少し前には必ずと言ってよい程よくなつて、その反動のようにすぐ死んでしまうそう。直子はやはりあの清二郎の手紙に書かれてあつたのはその時の事だったのだな、と思つた。清二郎の手紙には葬式は二月の十五日だから是非来るようにと書いてあつた。

直子は困つた。父の死はやはり悲しいものだったから父の葬式には列席したかつた。しかし兄は「二度と家の敷居はまたがせない」と言つた。父も勘当だ、と言つたそう。だからきつと、清二郎の手紙も彼が秘そかに投函したに違いない。家へ言つたら兄が何んと言うだろううまく父に逢えるだろうか、——直子はまよつたが、こんな事でまよふのは愚かな事だと思つた。賀津夫も「勘当されても、直子の縁などは勘当だけで切れるものじゃないんだから列席するのがあたりまえだ」と言つた。

直子にとつて四年目の堺の街は懐しかった。汽車が堺に入つたのは、もう街が灯でかざられる頃だった。汽車が街に近づいた時、直子は、ある種の特有な、堺の街を包んでいる「におい」のようなものを感じ、涙で自然と目の前がかすんで来た。街は、一本一本の路地から、そびえ立つ煙突まで、何一つ変つたものはなかった。只夜の為か、それとも四年ぶりの為か、妙に街の風景が直子に対してよそよそしい感じがした。或いはそれは先日の勝戦を祝つた提灯行列のはでやかな興奮がまだ街全体に残つていた為なのかも知れない。

「姉さん、よう来てくれた。——さ、上つてえな、——なんでうらから入つてなど来るんね、——堂々とおもてから入つてもええのんに、——さ、丁度今、皆さん御焼香すまはつた所や、——こつちや、あつ、足元くらいからきいつけてや」

直子はなるべく人に気づかれぬように線香を上げて、そっとして帰ってきた。もし、兄に見つかりでもしたらせつかくの父の葬式がめっちゃめっちゃになってしまう。

「私すぐ帰るわ——兄さんは？」

「奥におる、——気にせんかてええやないか」

父のイガイは顔に白い布を被ったまま布団にねかされて奥の八畳の部屋におかれてあった。間のフスマを払い各部屋を続け、その凡そ二〇畳あまりの部屋に、親類関係や同業者達が十五、六人程かたまっていた。部屋は線香の煙が充滿しないように、いくら寒くはあったが、まわりの戸を払ってあった。二〇畳の部屋に、五つばかり銅製の火鉢がおかれ、うす暗い闇の中でその炭火が異様に赤く光っていた。その風景は六年程前に清之助の許へ、千加子が嫁に来た日のそれと同じような光景だった。通夜の客達はその火鉢のまわりに手をかざしそれぞれ輪をつくりながら、故人の思出ばなしに時を費していた。母は黒い喪服に身をつつんで、その客達の応待に忙し気だった。右手にかくすように持っている小さくたたんだ白いハンカチが直子には妙に印象深かった。兄はその母の側で、一人の男と話をしていた。男は盛んに手の甲で涙をふいていた。客の中には神戸の伯父もいたし、和歌山の伯母もいた。千加子の里方の両親も来ていたし、直子の知らない顔の客も来ていた。

「御焼香させていただきます」

直子は部屋の入り口の敷居に両手を突いて伏し目勝ちにその部屋にいる人間達の誰へともなくそう言うと、素早く父のイガイへ、人に顔を見られないように歩み寄った。一瞬人々は、この予想しない、——ひどく時間外れのこの通夜の客に好奇の眼を寄せた。誰ともなく囁いた。「直子はんや、ほれ、男と東京へ逃げた直子はんや」——どの面下げて帰って来たんや、——いけすかんおなごや」

直子はその人々の視線を体全体がびりびりする程に感

じて仏段に向った。

「直子っ！ 何しに来たんやっ！」

とたんに背後から声がした。——兄である。清之助である。

「兄さん、お願いです、どうか、どうか、お線香だけ上げさせて下さい。——お願いです」

「何ぬかす、この恥さらしが、——ぬけぬけようも帰って来られたもんや、——大勢のお客はんの前へ、——出てけっ！」

「兄さん、——お願いです」

「ここは皆さんの前や、——ちよっとこちへこい、こちの部屋へ来いと言うんや！」

清之助は直子をひきずるようにしてはなれへ引っ張って行った。

「さあ、皆さん、何んにもごさいませんが、お口よごしに一つ。——どうぞ」

白氣切った一座を取りもつように母が言った。

「お利江はん、——直子はんですな、——ちよっと言ってやりたい事がありますんね、——ちよっと御免やす」

そう言って千加子の母が、利江をおしのけるようにして清之助を追った。母は泣き出しそうな顔でそれを見送った。

「さあ、何んとか言えつ、お前とわいとはあの時以来兄妹(きょうだい)の縁を切った筈や——二度と家の敷居はまたがさん、言った筈や、どあほうっ！ 恥さらしがつ！」

「兄さん、お願いします。お線香だけ上げさせて下さいお線香さえ上げたらすぐ帰りますさかい」

「ああ、あかん、あかん、——あかん言うたらあかんのやつ！」

「兄さん、——私は兄さんと兄妹の縁を切ったかもしりまへん、けど、父さんと親子の縁は切ったおぼえあらし

まへん」

「あほうっ！ 父さんかて「勘当」やはっきり言わはったは」

「うそや、私は聞いてまへん、そんな事、父さんの口からはつきり聞かな承知出来まへん」

「兄さん、何しとんね、——姉さんが何かしたのか」

「清二郎、お前やな！ 直子に父さんの葬式の事知らせたんわ。あれ程いかんきつう言っとなやないかっ！」

声を聞きつけたのか、それとも誰かが知らせたのか、何かやりかけていた仕事をそのままのよう子で清二郎がかけこんで来た。

「そうや。ええやないか。父親の葬式にんで娘が線香上げに来たらあかんね」

「あは、親子の縁はとくに切れてるんや、父さんが言っとなやないか」

「父さんかて死ぬまぎわには赦す、言いなはったわ」

「父さんが赦したかてわいがゆるせん。こんな、家に泥を塗らたくったような女、ゆるせん」

「何んでや、何んで姉さんが家に泥塗ったんね」

「清二郎、お前は黙っとれ」

「いや、だまらしまへん、言わしとくれやす」

「清二郎さん、あなたは黙ってなさい」

千加子の母もやって来た。

「こんな恐しい女、勘当があたりまえやっ！」

「おぼさん、兄さん、何言うんね」

「清二郎っ！——お前は次男やないか、わいの弟やないか、父さんが死んでから、この家のあるじはこのわいや。そのあるじにお前はさからうんか！」

「お願いします、どうかお願いします、お線香だけはあげさせて下さい、——そうすれば、もう二度とこの家の敷居はまたぎませんから、——どうかお願いします」

「だめや、あかん、あかんっ！」

「兄さん、ええやないか、な、ええやないか」

「清二郎、お前、兄のわしの言う事ようきかんのか——」

出て行け、出て行け、あるじの言う事が聞けんような奴は出て行け！」

「兄さん、——何言うんね」

「清ちゃん、あんたは黙つとり。——姉さんだけの問題やから。——兄さん、——いいです、仕方ありません。」

——帰ります」

直子は下を向くと言った。

「姉さん、——ここで帰ってしまつたら何もかもおしまいやないか、——さ、線香あげてきなはれ、かまわんよ、——いつまでここでごちゃごちゃ言うともも分らん人には分らんや、な、姉さん」

「清二郎、何を言うんだ、お前は！ 勘当や、出てけつ！ とつと出てけつ！ もう兄でもない、弟でもない！」

「兄さん、よう分りました。出て行きます。こちらから兄弟の縁は切らせてもらいます。——さ、姉さん、行こう、こんな家出て行こう」

「清ちゃん、何もあんたが——」

「いいんや、どうせいつかは出てこおもてたんや、——この家」

「——」

「兄さん、伯母さん、長い間お世話になりました。——今日限り二度とお逢いする事もないでしょう、——お達者で。——でも兄さん、あなたはすぐわれない人ですね」

「何？」

「さ、姉さん、行きましょう」

「清ちゃん。——！！——」

直子は清二郎に従つてその部屋を出て行くより方法がなかった。長い廊下を渡つて行く清二郎の後姿は直子には一段と大きく見えた。

「清ちゃん、あんたどうすんね——これから？」

「東京で働くわ」

「そうか、——でも、苦勞が多いで」

「分つてるよ」

汽車の窓から遠去かつて行く堺の街の灯を見ながら清二郎はつぶやいた。

赤ちゃん

海津 脩

「お芽出とうございます。お坊ちゃんでございます」と看護婦さんに言われて見てみたら、何だ、お祖父さんじやないか、と思った。写真で見せてもらった家内のお父さんに似ていると思ったからだ。言われた瞬間には嬉しいとは別に思わず、母体を心配してうろろしていたのだが、よく人は猿みたいで最初に見たときは、がっかりするものだと思っていたが、猿ではなくお祖父さんだった。割にととのつた顔つきだしへえーと言うような氣持だった。男の子だったことは実は大変残念だった。自分でも男なんか生れて損したと、半ば本氣で思っているし、女の子の方が、男ばかりの兄弟で育つて来た私には、何か異性の一生を見られるようで楽しみだったので一寸がっかりした訳だ。

親父になったのだとは、なかなか実感できなかった。でも、見る見る大きくなって、近頃のように、訳のわからぬ声を発したり、にっこり笑いかけたりして来ると、どうやら「ほら坊や、お父さんだよ」などと言って人が見たら氣狂いかしらと思ひそうな声であやしてみたり、モーツアルトやブラームス、シューベルトの子守唄を、犬の遠吠えのような調子で口ずさんだり、逆立ちしてワンと言ってみたりする。子供にすれば何か物体が動いているくらいにしか感ぜられぬだろうに、こちらは人なき客席に向つてわめく道化役者みたいに一人で喜んでゐる。

家内の方は、直接授乳するし、血を分けた感覚がじかにある訳だから、落着いてみるからに楽しそうだ。子供

の方でも時間がくるとおいしい御馳走を出し、ふつくと氣持よく頭をもたせかけられる腕や胸のある人だけは自分に必要なものだ、と本能的にわかるらしい。きつと高校生諸君の、親父とは財布の口を開くものなり、と思つているのと同程度のもののように思う。

さて、これからこの泣き顔が私によく似た稚を、家内と二人で協力して如何に育てるべきかを考えるとやや茫然となる。本音は、質実剛健に成長してほしいのだが、おとなしいけれど、どこか神経質そうな顔を見ると、必ずしも、親の理想図のようにうまくは行きそうもない。平和を愛し、人に迷惑をかけない、独立独立歩でできる子。これだけは私の方から押しつけた条件だ。先ずこちらがふところいつも風の吹きぬける素寒びんだけに、早く自分で食べるように強くなつてくれぬことには可哀想だと思ふ。

案外子供のことには冷い、と家の人々は私のことを思っているらしい。もつとも、一寸泣くと居ても立ってもいらぬというような父の目から見れば、いくら泣いてもさほど氣の動かぬ私など冷血漢かも知れないが、私は赤ん坊は泣きたいから泣くのだと思う。耳に涙の入らぬように氣をつけてやつて、心おきなく泣かせればよいと思ふ。そのくらい図太い神経でなくてはこの騒しい世の中に平氣で乗出せるものかと思ふ。

年寄にすると孫は余程可愛らしいし、食ひ初めとか、五月の鯉のぼりとか、よく氣にかけてくれる。私は鯉のぼりなど未だ見えないのだし、そういう形で男の子を祝うような考えに反対なので何もしないつもりだったのに、早速一番大型のを買つてきて、竿も十二米もある一人では支えきれないようなのを立ててしまつて、鯉ばかり立派で家が添物みたいになつた。

親と子の關係は鳶と鷹のようなものではなくて、豚と猪のようなものだと思う。血は水より濃いと言うが、やはりよく似た太い線が相互にあるようだ。盲目的愛情は

見ておるうちに間違うてしまふらしい。そのうちに又悪い事に夏の事で夕立がやってまいりました。さあ夢中で大きな木の下に逃げ込みましてな。まあはつとするうに一時強かった雷鳴もやむかと思ふ間に又暑い陽が、濡れた木の葉をまぶしく見せはじめました。私もはつとしましてな、あき早く道を見つけねばと歩き始めました。所がどうした事か私が歩き出すのを待っていた様に、又蟬が鳴き出してな。それも私が歩く度に増々ふえるように耳の中がガンガンとしましたわい。

私はその時どうして蟬はこんなに鳴くのじゃろうと思いました。しばらく歩くうちに、ふと右手の大きな木の向うに農家らしいものが眼に入りました。こんな山奥に又もの好きな者もいるものじゃと思いましたが、こういう時には有難い方が先ですぐそこへ行ってみましたのじゃ。粗末な家でしたが、戸をたたくと中から娘が出て来ました。いやその時の驚いたの驚かないの。若い方の前じゃがあれ程の美しい人は都でも余り見た事が無い位のものじゃった。髪は後へ束ねてあったが、透とおるような眼、このようあばら家に住むには品が有りすぎる様に思えたのじゃが……だがその表情は何んとも悲しげでござった。何か淋しそうであつたのじゃ。私はというと、もうボーとしてしばらく口も聞けなかつた位じゃ。

何だか氣味が悪い様でもあつたが、昼から妖怪でもあるまいと思うたので、思い切つて問うたのじゃ。すると娘はな「今から参るには遠すぎます。ここは滅多に人も来ない所。父も喜びましょう。汚い所ですがどうぞ今宵はお泊り下さいませ」と言うてくれた。娘は何か素晴らしい香りが室に充満していてそれは私を疲れから解放してくれるようじゃった。間もなくその娘の父親も帰つて来たか、父も私を全く氣持よく迎えてくれたのじゃ。夕飯の時に親娘はわしに、先に娘がつくつていたものを振舞つてくれた。それは酒のように思えた。娘のおやじ様の話では、それは何んとかいう木から取る汁で高価なもの

のだという事じゃった。全くその香り、その味、わしにはこの世のものとは思えぬ様じゃった。親娘はこれを作つて里で売つてゐるという事じゃった。先程までうるさい程鳴いていた日暮しもさすがにもう鳴きやんだつた。わしは道に迷うも又一興じゃなと浅はかにも思つた事じやつた。翌朝目がさめると親父様はもう出掛けていた。

「親父様は働き者じゃな」と娘に言うたら、娘は「こちらの者は皆そうです」と答えた。わしは驚いて「何、ここは部落か?」と言うと娘は笑うばかりではつきりした返事をせなんだ。娘の名は多実と言つた。何かれと話しているうちに娘も大分うち解けて話してくれるようになったものじゃ。矢張り若い者同志という事がそうさせたのかもしれない。私は何だかもう一日いたくなつた。そこで思い切つてたのんでみた。多実も「親父様もそのお積りで」といふ「私もつと貴男とお話したい」と言うてくれたものじゃ。私はちよつと照れ臭うなつたので「散歩して来る」と言うて家を出た。娘は後から「余り遠くへは行かないように」と云つた。小高い丘に登つて四方を見ると全くこころは木が多く人が住んでいるようには見えなかつた。ふと下の方に誰かが木に向かつて何かをしているのが見えた。わしはよく見ようと思ひ氣付かぬよう下におりた。その人は木を削つて汁を集めていたのじゃ。だが不思議な事に読経しながら涙をこぼしているのじゃ。それに氣が付いて又よく見ると遠くの方からも同じ様な声がして来るのじゃ。私はそれを尋ねようと思ひ前に行こうとするとき後からつれもどされた。いつの間にか娘が来ておつたのじゃ。娘はどうした事か目に涙をためながらわしについて来るように目で示した。娘はわしを古びた社の前まで引張つて言つてなかなうな事をわしに話してくれたのじゃ。「随分不思議とお思ひでしょうね。雅清様貴男にはそのまま黙つていようと思ひましたが今日貴男が見てしまわれたのでお話ししよう。私達の部落の者は普通の人と違うので御座居ます。

私達の祖先がどのような事をしたか判りませんがそのために我々は毎日あの様に働きながら神のお許しを願つて居らねばならないのでございます。然も私達は生れるとすぐ地の底に落され七年間暗闇で過ぎなければならぬようにされてゐるのでございます」「何故又、その様にせねばならないのです?」「それは……神様のお怒りのためでございます。どのような事でお怒りになつたのか私ははつきりとは存じません。ただ私達の祖先が赤児の血を吸つたとか、又それを地の底に埋めたとか伝えられております。何んという呪わしい事でございましょう。私達は唯、神様のお許しを願うより仕方がないので御座居ます……」と言つた。多実は恐ろしうに肩をふるわせ両手で天を仰いで、もうそれ以上何を聞いても返事をしてくれななだのじゃ。しばらくして私達は立ち上つて、家の方へ歩き出してゐたのじゃ。私はその時何故か娘が不憫でたまらなくなつたのじゃ。わしはそのままするずると何日も居つづけてしもつた。多実とわしはどこへ行くにも一緒に行つた。その間にわしは色々は発見をした。この部落の者はお互に顔を合せても余り多く口をきかなかつた。そして何時も悲しげな顔をしておつた。いつかの多実の話が矢張本当なかと私は思わざるを得なくなつたのじゃ。又不思議な事に、この部落では、実に身分の上下が整然としていた。それぞれの身分によつてその着物が異なるらしいのじゃ。一番身分のある者は黒、次に緑、次が茶というように別れ、又その形も異つていた。そればかりでなく、人の姿、背の高さまでも身分によつて違つてゐるのじゃ。だがそれだからといって身分のあるものが良い家に住んでいる訳ではない。皆同じように古びた家に住んでいるのじゃ。不思議に見えたものじゃ。多実とその親父様は緑色の着物を着ておつた。それが又多実には実に似合うのじゃ。長い間こうしてゐるうちにわしは多実にだんだん好感を持つようになつた。わしは多実にわしの国へ行こうと何度か言

創立十周年の追想

―創業の精神を新に生かそう―

原 田 満 寿 郎

二十五年前、若葉揺ぐ学園の五月は、十年の栄光に映えて、この月の十五日は、記念の式典が挙げられた。

永井柳太郎拓務大臣、皇太子御養育掛長藤井練太郎氏自由学園々長羽仁もと女史が臨席された。

来会者約二百名、それに三部（小、中、女）の職員と児童生徒で、現在の小学校の狭い講堂は鮎詰めとなり、寿ぐ者も、祝われるものも今日の佳き日の興奮を感じた。

最初、赤井園長の創立前後の回顧より将来の待望に亘る式辞があり、「明星の歌」（明星学園行進歌ではない）の合唱に終了した。

園長は次のような挨拶をされた。

「大正十三年五月十五日に開校した時は、児童は小学一年七、二年五、三年九、合計二十一名、職員は照井先生夫妻、山本先生と私の四人、校地は千坪、校舎百十坪、それだけで総てだった。今は小、中、女三部で三百五十名卒業生小学部二百名、中女六十五名、職員三十名、校地三千坪、校舎六百五十坪、かう比較してみると、随分発展したものといわねばならぬ。……………云々」

×

×

記念式典のあと、小学部の職員室（今の事務局室は、この職員室を修理増築したもの）に集ったのは、平職員の私ども五人と、創立者の一人照井げん先生だった。よもやまの話の中、開校当日の模様を、げん先生が話され

た。

その話によると――五月十五日は大変な荒天で、朝から冷い雨が止まずに降りつづいていた。

淋しい公園の水溜りの道を、皆歩いて出席された。然し校舎はやっと半出来で、周囲には窓一つなく、床板も仮張りでがたがた、それでも屋根はふいてあつてたすかった。せめて今日だけでも明らかな天気を恵んでくれたらと、薄暗い空をうらめしく、何度あおいだことか……。

そして話は、開校当時の父兄におよび――麦畑の明星学園建設敷地という棒杭一本を見た丈で、唯々学園の創立趣意を信じ、武蔵野の大自然を愛好して、一、二、三年生合計二十一名の大事なお子さんを入学させようと決心せられ、学園に永遠の礎を据えて下さったあの当時の父兄の方々に對する感激は、教育理想の実現欲と相俟って、その期待を裏切らぬよう努力せねばと力強く語られた。

そして更に話は、これから学園の歩む道について語られた――学園の誕生は、今は故人となられた茶郷氏の後援によつて、案外案に出来たが、さてこれを哺育育て行く苦心は、又決して容易なものではなかった。その意味に於て開校の日の嵐は吾々に、そうした暗示と覚悟を与え、兎角誇らしげになり勝な人間の心に、強い鞭をあて、謙譲と反省と同情とを支えてくれたものかもしれない……とつきない話の中にも、いましめ励げまし合っ

たものだ。職員室に居あわせた六人ではあつたが。今はこの六人も、四人は遠い昔、学園を去ってしまった。

×

×

▽記念学芸会（音楽、舞踊、演劇の会）

記念式典について、記念学芸会が十九日神宮外苑の日本青年館で予定通り公演され、来場者凡そ二千名に達した。

当日のプログラムは次の通り

第一部・音楽 指導 関口典之 照井げん子

1 合 唱 五月 小学部四年

2 合 唱 浜辺 女学部生徒

雀 新興日本少女の歌

希望のささやき

3 合 唱 小学部五・六年女

かくれんぼ

山彦

山彦

山彦

詩 永井 花木
曲 中山 晋平
曲 福井 直秋
詩 川路 柳虹
曲 山田 耕作

尋常小学唱歌
編曲 宮原 慎次
詩 渡辺 蝶作
曲 近衛 秀磨

詩 中群 第一節
曲 細谷 一郎

4	独 唱	小学部一年
5	合 唱	小学部五・六年
6	合 唱	小学部有志
7	独 唱	小学部二年
8	合 唱	小学部三年
9	合 唱	小学部四年
10	合 唱	小学部五年
11	合 唱	小学部六年
12	合 唱	小学部四・五年
13	合 唱	小学部四・五年
14	合 唱	小学部四・五年
15	合 唱	小学部四・五年
16	合 唱	小学部四・五年
17	合 唱	小学部四・五年
18	合 唱	小学部四・五年
19	合 唱	小学部四・五年
20	合 唱	小学部四・五年
21	合 唱	小学部四・五年
22	合 唱	小学部四・五年
23	合 唱	小学部四・五年
24	合 唱	小学部四・五年
25	合 唱	小学部四・五年
26	合 唱	小学部四・五年
27	合 唱	小学部四・五年
28	合 唱	小学部四・五年
29	合 唱	小学部四・五年
30	合 唱	小学部四・五年
31	合 唱	小学部四・五年
32	合 唱	小学部四・五年
33	合 唱	小学部四・五年
34	合 唱	小学部四・五年
35	合 唱	小学部四・五年
36	合 唱	小学部四・五年
37	合 唱	小学部四・五年
38	合 唱	小学部四・五年
39	合 唱	小学部四・五年
40	合 唱	小学部四・五年
41	合 唱	小学部四・五年
42	合 唱	小学部四・五年
43	合 唱	小学部四・五年
44	合 唱	小学部四・五年
45	合 唱	小学部四・五年
46	合 唱	小学部四・五年
47	合 唱	小学部四・五年
48	合 唱	小学部四・五年
49	合 唱	小学部四・五年
50	合 唱	小学部四・五年
51	合 唱	小学部四・五年
52	合 唱	小学部四・五年
53	合 唱	小学部四・五年
54	合 唱	小学部四・五年
55	合 唱	小学部四・五年
56	合 唱	小学部四・五年
57	合 唱	小学部四・五年
58	合 唱	小学部四・五年
59	合 唱	小学部四・五年
60	合 唱	小学部四・五年
61	合 唱	小学部四・五年
62	合 唱	小学部四・五年
63	合 唱	小学部四・五年
64	合 唱	小学部四・五年
65	合 唱	小学部四・五年
66	合 唱	小学部四・五年
67	合 唱	小学部四・五年
68	合 唱	小学部四・五年
69	合 唱	小学部四・五年
70	合 唱	小学部四・五年
71	合 唱	小学部四・五年
72	合 唱	小学部四・五年
73	合 唱	小学部四・五年
74	合 唱	小学部四・五年
75	合 唱	小学部四・五年
76	合 唱	小学部四・五年
77	合 唱	小学部四・五年
78	合 唱	小学部四・五年
79	合 唱	小学部四・五年
80	合 唱	小学部四・五年
81	合 唱	小学部四・五年
82	合 唱	小学部四・五年
83	合 唱	小学部四・五年
84	合 唱	小学部四・五年
85	合 唱	小学部四・五年
86	合 唱	小学部四・五年
87	合 唱	小学部四・五年
88	合 唱	小学部四・五年
89	合 唱	小学部四・五年
90	合 唱	小学部四・五年
91	合 唱	小学部四・五年
92	合 唱	小学部四・五年
93	合 唱	小学部四・五年
94	合 唱	小学部四・五年
95	合 唱	小学部四・五年
96	合 唱	小学部四・五年
97	合 唱	小学部四・五年
98	合 唱	小学部四・五年
99	合 唱	小学部四・五年
100	合 唱	小学部四・五年

1	独 唱	小学部一年
2	独 唱	小学部二年
3	独 唱	小学部三年
4	独 唱	小学部四年
5	独 唱	小学部五年
6	独 唱	小学部六年
7	独 唱	小学部四・五年
8	独 唱	小学部四・五年
9	独 唱	小学部四・五年
10	独 唱	小学部四・五年
11	独 唱	小学部四・五年
12	独 唱	小学部四・五年
13	独 唱	小学部四・五年
14	独 唱	小学部四・五年
15	独 唱	小学部四・五年
16	独 唱	小学部四・五年
17	独 唱	小学部四・五年
18	独 唱	小学部四・五年
19	独 唱	小学部四・五年
20	独 唱	小学部四・五年
21	独 唱	小学部四・五年
22	独 唱	小学部四・五年
23	独 唱	小学部四・五年
24	独 唱	小学部四・五年
25	独 唱	小学部四・五年
26	独 唱	小学部四・五年
27	独 唱	小学部四・五年
28	独 唱	小学部四・五年
29	独 唱	小学部四・五年
30	独 唱	小学部四・五年
31	独 唱	小学部四・五年
32	独 唱	小学部四・五年
33	独 唱	小学部四・五年
34	独 唱	小学部四・五年
35	独 唱	小学部四・五年
36	独 唱	小学部四・五年
37	独 唱	小学部四・五年
38	独 唱	小学部四・五年
39	独 唱	小学部四・五年
40	独 唱	小学部四・五年
41	独 唱	小学部四・五年
42	独 唱	小学部四・五年
43	独 唱	小学部四・五年
44	独 唱	小学部四・五年
45	独 唱	小学部四・五年
46	独 唱	小学部四・五年
47	独 唱	小学部四・五年
48	独 唱	小学部四・五年
49	独 唱	小学部四・五年
50	独 唱	小学部四・五年
51	独 唱	小学部四・五年
52	独 唱	小学部四・五年
53	独 唱	小学部四・五年
54	独 唱	小学部四・五年
55	独 唱	小学部四・五年
56	独 唱	小学部四・五年
57	独 唱	小学部四・五年
58	独 唱	小学部四・五年
59	独 唱	小学部四・五年
60	独 唱	小学部四・五年
61	独 唱	小学部四・五年
62	独 唱	小学部四・五年
63	独 唱	小学部四・五年
64	独 唱	小学部四・五年
65	独 唱	小学部四・五年
66	独 唱	小学部四・五年
67	独 唱	小学部四・五年
68	独 唱	小学部四・五年
69	独 唱	小学部四・五年
70	独 唱	小学部四・五年
71	独 唱	小学部四・五年
72	独 唱	小学部四・五年
73	独 唱	小学部四・五年
74	独 唱	小学部四・五年
75	独 唱	小学部四・五年
76	独 唱	小学部四・五年
77	独 唱	小学部四・五年
78	独 唱	小学部四・五年
79	独 唱	小学部四・五年
80	独 唱	小学部四・五年
81	独 唱	小学部四・五年
82	独 唱	小学部四・五年
83	独 唱	小学部四・五年
84	独 唱	小学部四・五年
85	独 唱	小学部四・五年
86	独 唱	小学部四・五年
87	独 唱	小学部四・五年
88	独 唱	小学部四・五年
89	独 唱	小学部四・五年
90	独 唱	小学部四・五年
91	独 唱	小学部四・五年
92	独 唱	小学部四・五年
93	独 唱	小学部四・五年
94	独 唱	小学部四・五年
95	独 唱	小学部四・五年
96	独 唱	小学部四・五年
97	独 唱	小学部四・五年
98	独 唱	小学部四・五年
99	独 唱	小学部四・五年
100	独 唱	小学部四・五年

第一景 朝の森

明朗な朝の気分を無邪気でユーモアリスクな子

供の生活

出る者

太郎 二年男 朝子(太郎の妹) 二年女

春子 四年女 一郎(春子の弟) 二年男

第二景 昼の森

物皆気だるい昼の日盛りを行くダレ切った蟻の

行列。何の自覚も統整もない集団が慣習でのみ

動いて居るナンセンス

出る者

蟻の大將 四年男 黒蟻の兵隊大勢(男)

二、三年男 赤蟻の兵隊大勢(女)二、三年女

第三景 夜の森

グロテスクな夜の一スナップ。道義と安息と飽

満のない自悲界の縮図

出る者

めくら蜘蛛の親 五年男 その子(女) 五年女

火取虫 四年男 蛾 三年女

かまきり 四年男 梟 三年男

2 粟 畑(二幕二場) 所要時間四十五分

作及指導 照井猪一郎

曲 吉原 規

舞踊振付 石井 小浪

出演児童 小学部児童

出る者

百姓のお父さん 六年生 その子(男) 六年男

同その子(女) 五年女 牡鶏 六年男

牝鶏 六年女 雛子(五羽) 二年男女

ボチ 六年男 蓑 六年男

案山子 六年男 雀大勢三・四・五男女

父雁 六年男 子雁(五羽) 二年男女

▽十周年記念事業

第一期として左の増築が計画された。

一、中学部、講堂一棟(八〇坪)

作業室(二〇坪)

二、女学部・普通教室二つ(四五坪)

理科室(二五坪)

三、小学部・科学館一棟(五〇坪)

記念出版

三部の職員が協力して、学園教育の全貌を紹介するた

めの出版が企劃され、内容は、学園教育問題の展望(赤

井米吉) 小学校に於ける学級経営並に自然科の意義とそ

の仕事(照井猪一郎) 感覚教育としてのリトミック(照

井げん子) 青年期の教育問題(上田八一郎) 等教科の問

題。児童期の教育、女子教育、青年期の教育、学級経営

の問題、見学旅行、夏季生活指導等に亘って問題をとり

あげ、著書は分冊版として二、三冊出版されただけで了

った。この著書によって明星十年の教育成果を報告し併

せて将来への動きについて、了解を求めたものだけに、

完成せず未刊に了ったことは、今日学園の第三、第四の

誕生期に際し、重要な文献のなきことが、おしまれてな

らぬ。

以上二十五年前の十周年記念前後の学園の姿の或る面

を、紹介した私の意図は、いたずらに回顧する感傷だけ

ではない。「温故知新」は特に私私達に示された命題で

あるからだ。明日への躍進を思念する一つの契機ともな

ればと思つてのことである。

× ×

十周年の記念日を迎えた当日の私は、着任早々のこと

とて、自分で骨折らなかつただけに「草分け」をなされ

た方々のように、しみじみ来し方を回想するというよう

なことは出来なかつた。しかしあれから二十五年経ち、

そしてここで暮して来た私は、創業に精魂傾けて努力な

出演児童

曲 吉原 規

作及指導 照井猪一郎

第三部・児童劇

お地蔵さんは知っているか(所要時間二十分)

された方々の偉大さが、時の経るにつれて、しみじみ解かってきた。

私立学校の創業は、公立学校の開校とは全然異って、何等の背景を持たず、しかも高い理想、高邁な健学の精神によって、全く文学通りの草分けをなされ、血みどろの生活に於て始めて建設されるものであらう。

十年は経ても創業の仕事未だ完成せず、ようやくその緒につき、しかも第二期の理想に強力に踏み出したのが十周年であった。その意味において、この十周年は画期的なものであった。第二の誕生をめざしたこの大行進の原動力となったものは、「何が学園を今まで育ててきたか」「今日の吾々は如何なる使命を果しつつあるか」「それは果して国家社会の待望に添うものであるか、然も将来への発展的生命を宿す体のものであるか否か」を吟味し、反省にあった。そして同人的な職員の団結にあった。

今日学園の躍進を思念する時、学園の歴史を愛慕することが、要請されることと思う。今日、三十周年、二十周年、十周年そして開校の日を偲ぶことによって、もう一度創業の精神を見直し、只管に草創の精神を新に生かして、将来の建設に踏み出したい。否な、踏み出している。このことは学園を組み立てているすべての人達の氣持もそのようであらうと思う。そして創立三十五年の今日、第四の誕生を睹む第四の創業は、今学園を耕しつつあるあらゆる人々によって営まれなければならない。否な営まれている。逞しき地響が明日へに向かって拡げられている。

帰り道

大勢の人混みか

みんな自分自身の生活をして

せいっぱい生きている。

その一日、一日が

あの人の生活で
私の生活なんだ

アスファルトの道の曲り角で

女学生と、婦人と、男の人に会った

みんなお互いに知らない人

みんな自分のことを考えていて

つんとして通りすぎた。

楽しそうな冷たさが

私の心をとらえた

ふりかえると

冷たい夕方の風の中を

三人はばらばらの

後姿を残していった。

夕方の灯がついて

もう誰もいなかった

心の中も空っぽだった

白いアスファルトの道がさびしかった

何を悲しむんだろう

人は、誰でも一人なんだ

だから私も一人なんだ

いくら寂しくても

自分で歩かなくてはならなかった

カバンが重かった。

一杯のスープのために

中一 中園 美似子

ソ連映画「戦艦ポチョムキン」は今までに見たいくつ

かの映画とはちがったものだった。

三十四年も前につくられた無声映画でありながら現在の進んだ映画以上のものが感じられた。戦艦ポチョムキンの中で英雄的な反乱がおこったのだ。水兵には、うじのついた腐った肉のスープを食べさせ艦医は「それは死んだハエの子だ。海水で洗い落せばいいのだ」と言って平気である。怒った水兵は、食事の時に出されたスープを飲まなかった。艦長の命令で水兵や士官達は甲板に出た。艦長からスープに満足なものは二歩前へ、と言われ怒った水兵は列を離れ砲塔へ向った。一部の水兵は艦首に残っている。艦長は衛兵に命令をした。「やつらにシートをかぶせろ！」とそして「射て!!」と命令したがついに衛兵は銃を下してしまった。一杯のスープが不満だからと言っただけなのになぜ殺されなければならないのだ。私は衛兵が銃を下して本当に良かったと思う。なぜ今まで艦長や士官達の命令を聞いていた衛兵が銃をうつのをやめたのだろう。

きっと同僚達がひどい目にあっているのに我慢できなかったのだろう。同僚だけでなく自分達もひどい目にあったのだから。一番印象に残ったのは反乱の時にその先頭に立ち犠牲者となった水兵を仲間の水兵がオデッサ港へと運こんで行き防波堤上のアントに置いた。その犠牲となった水兵の手の下に一枚の紙片が置かれそれには「一杯のスープのために」と書かれてある。テントの前には貧しい服装の男や女たちが通る。みなうなだれて女たちは泣きながらかみこんでいる。

この人々はただこの水兵に同情したのではないと思う。自分達をいつも苦しめるのが軍隊だと思つていたのにその中にも自分達と同じ境遇、同じ考えの仲間がいると知つたためだと思う。

×

×

×

明星学園略年表 (註(就)(退)は職員の就任退任を示す。(配)は配属将校)

文芸部製作

3 年 (1928)	昭和 2 年 (1927)	昭和 15 年 昭和元年 (1926)	14 年 (1925)	大 正 13 年 (1924)	年度
三月三十一日 四月一日 (就) 霜島 昇平 (第一回卒業式挙行 (二十七名))	四月一日 四月四日 (就) 松枝 良作 音楽・美術室五十坪建築成 る 後援会成る (就) 垂水 繁光	一月八日 三月三十一日 四月一日 (就) 菱田 秀 校舎三十八坪増築 (就) 須田 寧	七月十五日 四月一日 (就) 霜田 利平 大高 義一 小松崎三枝 逝去	二月三十七日 五月十五日 九月六日 (就) 武鬼一(常直員) (就) 井草完二(校医) (就) 松岡正雄 開校式、入学式挙行 (二十一名) 照井げんの四氏 山本徳行 赤井米吉 照井猪一郎 学園創立の議成る 同人、	小 学 校
四月五日 四月九日 (就) 赤井 米吉 寺田すすむ 多湖 実輝 吉原 規 山下 重輔 井草 完二(校医)					女 学 校
四月二十日 女学校設立許可					中 学 校
四月二十日 中学校設立認可					社 会 状 勢
一月 二月 御大札 最初の普選法に基づく選挙行 われ、無産派八名当選	三月 四月 五月 六月 金融恐慌の発端、銀行多数休 業 田中内閣成立 〔英ソ国交断絶〕 〔張作霖、奉天駅附近で爆死 す。北伐完了〕	一月 五月 七月 十二月 (京大学生事件)起る (イギリスにゼネスト起る) (蔣介石北伐開始) 大正天皇崩御	三月 (孫文、北京に客死す) 治安維持法制定、普選法成立	一月 東宮(現天皇)御結婚	

9 年 (1934)	8 年 (1933)	7 年 (1932)	6 年 (1931)	5 年 (1930)	4 年 (1929)
三月三十一日 四月一日 五月十五日	三月三十一日 三月三十一日 四月一日	三月三十一日 三月三十一日 四月一日	一月三十一日 三月三十一日 四月一日 十二月八日	三月三十一日 四月一日	三月三十一日 六月十日
第七回卒業式挙行(一九名) 創立十周年記念	第六回卒業式挙行(三十一名) (退) 松枝 良作 (就) 牧 均	第五回卒業式挙行(三〇名) (退) 須田 寧 (就) 中村 勇	(退) 菱田 秀 第四回卒業式挙行(二六名) (就) 安藤 正義 宮内ノブ子 (就) 石井 小浪 (舞踊科教師)	第三回卒業式挙行(二七名) (就) 五十嵐重虎	第二回卒業式挙行(二七名) (退) 山本 徳行 講堂建築落成
一月二十日 二月二十八日 三月四日 四月一日 五月十五日 十月三十日	三月三十一日 三月三十一日 四月一日 三月三十一日	一月十日 二月一日 十一月三十一日 十二月十日	一月三十一日 三月三十一日 四月一日	三月三十一日 四月一日 七月三十一日	三月三十一日 四月一日 六月十日 九月三十一日
(就) 洪谷 直 (退) 片山信四郎 第二回卒業式挙行(二二名) (就) 中島 勇 石川 強 創立十周年記念 女学部一教室(二坪)増築落成	第一回卒業式挙行(一〇名) (退) 望月 操 (就) 藤森 崩夫 松岡 正雄 青木ふみ子 金子金次郎 宮内ノブ子	(退) 木川 靖 (就) 関口宇之裕 片山信四郎 尾形 鶴吉 杉山 清	(退) 菱田 秀 (就) 望月 操 丹羽よし子 (退) 吉村 節子 柏井すすむ 宮内ノブ子 (就) 越知 忠良 吉田賢次 岩沢富士雄	(退) 山下 重輔 (就) 尾形 鶴吉 伊藤 至郎 吉原 規 木川 靖	(退) 垂水 繁光 (就) 前島 治吉 佐々木アサ 講堂建築落成 (就) 宇野 節子
三月四日 四月一日 五月十五日 五月十八日	一月八日 三月三十一日 三月三十一日 四月一日 十月三十一日	一月十日 二月一日 十一月三十一日 十二月十日	三月三十一日 四月一日 五月十二日	三月三十一日 四月一日 七月三十一日	一月八日 三月三十一日 四月一日 六月十日
第二回卒業式挙行(一八名) 創立十周年記念 (就) 森口 一江 (退) 前田 重作	校舍四五坪増築す 第一回卒業式挙行(一八名) (退) 伊藤 至郎 松岡 正雄 前田 重作 (就) 芳賀 栄政(配)	(退) 木川 靖 (就) 関口宇之裕 尾形 鶴吉 杉山 清	(退) 岡 邦雄 (十) 越知 忠良 富山国之助 岩瀬富士雄 (就) 瀬川孫兵衛(配)	(退) 山下 重輔 (就) 尾形 鶴吉 伊藤 至郎 吉原 規 木川 靖	(就) 内野 健児 (退) 垂水 繁光 (就) 前島 治吉 中学部校臥九〇坪(教室四)増築落成
六月 九月 十二月	二月 三月 四月 十二月	一月 二月 三月 五月 十一月	九月 十二月	一月 四月 十一月	七月
飯米キキンの叫び農村に起る 未曾有の凶作 (実収五二〇〇万石) 小農「キガ」に瀕す 室戸颱風関西へ、大災害 ワシントン条約	「ヒットラー権力をにぎる」 国際連盟を脱退す 滝川事件おこる 皇太子誕生 未曾有の大豊作 (実収七〇〇万石)	桜田門不祥事件 井上蔵相暗殺 満洲建国宣言 (五・一五)事件、大義首相暗殺さる (ルーズベルト 大統領当選)	満洲事変始まる (イギリス金本位制停止) 金輸出再禁止	金輸出解禁 (インドに排英運動) ロンドン海軍軍縮条約成る 東京市電ゼネスト 浜口首相狙撃され重傷を負う	「中国、国交断絶」 張作霖事件に関連して田中内閣辞職 浜口内閣成立

15 年 (1940)	14 年 (1939)	13 年 (1938)	12 年 (1937)	11 年 (1936)	10 年 (1935)
三月十一日 四月三十日 〃	三月二十一日 三月三十一日 四月一日	三月二十二日 三月三十一日 四月一日	三月二十二日 三月三十一日 三月	三月二十二日 四月一日	三月二十日 三月三十日 四月一日
(就) 鎌田貞之助 (退) 高橋律之助 (名) 第十三回卒業式挙行(三八)	(就) 東久保照子 (退) 堀井ミヨ子 (名) 第十二回卒業式挙行(三四)	(就) 橋正薫 (退) 佐々木金之助 (名) 第十一回卒業式挙行(二八)	(就) 武鬼一(常直員) (退) 安藤 正義 (昭和二十一年逝去)	(就) 明田川 孝 (退) 第九回卒業式挙行(三六名)	(就) 伏見 頼二 (退) 五十嵐重虎 (第八回卒業式挙行(三二名))
八月三十一日 四月一日 三月五日	三月三十一日 三月五日 二月一日	十二月三十一日 五月十五日 四月一日	九月一日 八月十六日 五月一日	九月十一日 八月三十一日 三月五日	四月一日 三月三十一日 三月五日
(退) 森 恒三郎 (就) 森 キヨ子 (退) 第八回卒業式挙行(二六名)	(退) 金子金次郎 (就) 横山 光子 (退) 第七回卒業式挙行(二四名)	(退) 荒井 つる (就) 森恒三郎 (退) 第六回卒業式挙行(一三名)	(就) 竜崎 恭子 (退) 越智 忠良 (就) 第五回卒業式挙行(一九名)	(就) 佐藤 徳雄 (退) 加月 秋芳 (退) 第四回卒業式挙行(一九名)	(就) 加井 秋芳 (退) 前島 治吉 (退) 第三回卒業式挙行(八名)
十一月十九日 八月二十日 三月五日	七月一日 六月三日 五月三十一日	九月二十七日 九月六日 四月十二日	九月一日 八月十六日 四月八日	十二月一日 九月三十一日 八月一日	八月十一日 五月十五日 三月三十一日
(就) 永嶋 行雄(配) (就) 鈴木 光治(配) (就) 第八回卒業式挙行(二七名)	(退) 中島 勇 (就) 佐伯 昌延 (就) 佐藤 尊邦 (就) 第七回卒業式挙行(二二名)	(就) 中山 貞次 (就) 三輪 益二 (就) 末綱 卓一 (退) 第六回卒業式挙行(二四名)	(就) 青木 茂則 (退) 越智 忠良 (就) 第五回卒業式挙行(二一名)	(就) 長野 栄二(配) (退) 佐藤 徳雄 (退) 加月 秋芳 (就) 第四回卒業式挙行(一七名)	(就) 足立 幾喜(配) (退) 今福 義治 (就) 加月 秋芳 (退) 前島 治吉 (退) 第三回卒業式挙行(二六名)
六月 五月 三月	十一月 九月 八月	十月 九月 八月	十二月 十一月 九月	十二月 七月 二月	八月 六月 三月
止 アメリカ対日工作機械輸出禁 配給制となる 砂糖、マツチ、切符制、ビール ツに降伏) (オランダ・ベルギー、ドイツ 東京市の飯米に外米混入さる	上海にて抗日テロ続発 (第二次世界大戦の開始) (独ソ不可侵条約成立) 国民徴用令公布 ノモンハン事件拡大 の勝利となる) (スペインの内乱、フランコ (ドイツ、チェコを併合) 平沼内閣成立	(武漢三鎮を占領) (ミュンヘン会議成立) (張鼓峰事件起る) 国家総動員法成立 (アメリカの失業者一〇〇〇 万)	南京陥落 設置 日・独・伊防共協定、大本營 (ルーツベェルト、ニューデ イルの遂行宣言) 日支事変起る 近衛内閣成立	(二・二六)事件起る (スペインにフランコの反乱 起る) 日独防共協定 蔣介石、張学良に逮捕さる	天皇機関脱告発さる (ドイツ再軍備宣言) (帝人事件)公判始まる 相沢事件起る

1 8 (1943)	年	1 7 (1942)	年	1 6 (1941)	年
三月十四日 三月二十一日 四月一日	(退) 曾我 英吉 第十六回卒業式挙行(三九名) (就) 高橋 幸一 森田徳之助	三月二十一日 三月二十一日 四月一日	第十五回卒業式挙行 (退) 井草 完二(校医) 鎌田 貞二 大平 馨 松井吉次郎(校医)	三月二十一日 三月二十一日 四月一日	第十四回卒業式挙行(三十六名) (退) 吉田小次郎 明星学園小学校を初等部と改称し、国民学校令による認定学校として認可 (就) 桑原 正三 浦口善之助
三月 四月 五月 七月一日	第十一回卒業式挙行(二四名) (就) 山岡 幸子 平林 偕行 戸塚二三枝 宮田今太郎	一月八日 三月二十一日 三月五日 四月一日 八月二十一日 二月二十一日	(就) 恩地 邦郎 (退) 井草 完二(校医) 第十回卒業式挙行 (就) 松井吉次郎(校医) 小出 悦蔵 吉田 賢次	三月五日 三月二十一日 四月 十月 十月一日	第九回卒業式挙行(三一名) (退) 佐々木アヤ (就) 浦口 善之 (退) 浦口 善之 宮田今太郎 大阿久登市
一月十一日 三月二十七日 三月 四月七日	(就) 坂部勝太郎 (退) 白井伝三郎 第十一回卒業式挙行(三一名) (退) 小関 尚志 坂部勝太郎 田口 武丸 黒柳 政幸 (就) 堀 淳二 皆方 定吉 鈴木 弘道 青木 藤重(配)	一月八日 三月五日 三月二十一日 四月一日 八月二十一日 九月一日 十月三十一日 十一月一日 十一月九日	(就) 恩地 邦郎 第十回卒業式挙行(三十名) (退) 植木 稔三 (退) 井草 完二(校医) (就) 古屋 道雄 (退) 太田 理一 (就) 鈴木 俊紀 (退) 末綱 道雄 富永 定吉 皆方 定吉 富永 三郎 逝去	一月二十八日 二月二日 二月二十日 三月五日 三月二十一日 四月十四日 四月二十一日 八月二十一日 九月一日	(就) 諸岡 孝(配) (就) 下野清太郎 (就) 太田 理一 第九回卒業式挙行(二五名) (退) 佐伯 昌延 理科室建築落成 (就) 白井伝三郎 (就) 植木 稔三 (退) 安部 綱義 (就) 小関 尚志
二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十一月 十二月	ガダルカナル退却 「スターリングラードの独軍全滅す」 アッツ玉砕 「コミンテルンの解散」 学徒動員体制確立要綱決定す 「ムッソリーニ辞任、パドリオ内閣」 「ケベック会談」 「イタリヤ降伏」 鳥取震災 「カイロ・テヘラン会談」 徴兵適齢一年下げらる	一月 二月 三月 四月 五月 六月 八月	「ワシントンにて21ヶ国大西洋憲章を確認」 六大都市で味噌、醤油の通帳実施 シンガポール陥落 関門トンネル開通 永代借地制度解錠 「英印会談決裂」 ミッドウエーの敗戦 中・高等学校学年短縮決定 「モスクワ会談開始」	一月 二月 三月 四月 五月 六月 八月 十月 十二月	新聞紙等掲載制限令公布 国防保安令成立 日ソ中立条約成立 「ユーゴー、ギリシャ降伏」 六大都市米の通帳制実施 改正治安維持法成立 「ドイツ、ソ連に侵入」 「伊、ソに宣戦布告」 仏印に進駐す 「米英、大西洋憲章公表」 東条内閣成立 日本英米に宣戦布告 「独、米に宣戦布告」

2 0 年 (1945)						1 9 年 (1944)					
三月十八日	三月三十日	六月三十日	十月一日	十月二十日		三月二十一日	三月二十五日	四月三十日	五月一日	五月三日	五月十八日
第十八回卒業式挙行(四四名)	大平 馨 (退)	高橋 圭一 (退)	高橋律之助 (就)	関口 常春 (退)	関口 常春 (退)	第十七回卒業式挙行(三七名)	白地 米蔵(常直員) (退)	高橋 秀作(常直員) (就)	高橋律之助 (就)	阪下 正三(助手) (就)	坂本 初枝 (就)
三月	五月	六月	七月	九月		三月	五月十八日	九月	十月	十一月	
(退) 小出 悦蔵 (就) 辻森 秀英 第十三回卒業式(五年制三六名)	(退) 辻森 秀英 (就) 武田 勘治 (退) 神谷 広子 (退) 平林 偕行 (退) 三輪 和敏 (就) 高須 いち 第十四回卒業式(四年制三二名)					(就) 館谷米利子 第十二回卒業式挙行(三六名)	大島 愛子 (就)	横山 光子 (退)	神谷 広子 (就)	青木フミ子 (退)	大島 愛子 (退)
三月十八日	三月二十八日	五月一日	六月十三日	六月三十日	七月十六日	三月五日	三月二十日	四月一日	四月十二日	五月十日	五月十八日
(退) 田辺 次郎 第十三回卒業式(五年制二五名)	(就) 村本 起 (就) 平林 偕行 (退) 高橋律之助 (就) 二村 圭一 (就) 藤田 達夫 (就) 末光 深海 (就) 上田 八郎 (退) 二村 圭一 (就) 三輪 伸雄 (退) 藤田 達夫 第十四回卒業式(四年制三一名)					(退) 富山国之助 (退) 岩瀬富士雄 校舎四教室増築落成	横川 武 (就)	横川 尚 (就)	門川 沢吉 (退)	内野 健児 (退)	高橋律之助 (就)
二月	三月	四月	五月	七月	八月	六月	七月	八月	十月	十一月	
〔ヤルタ会談〕 機動部隊日本に米襲 硫黄島に上陸 東京大空襲(西平焼失) ルーズベルト死去、トルーマン大統領となる 小磯内閣辞職、日ソ条約廃棄 鈴木内閣成立 〔ドイツ降伏す〕 〔ポツダム会談〕 広島に原爆投下 ソ対日宣戦布告 ポツダム宣言受諾 鈴木内閣辞職、東久邇内閣 米軍日本に進駐 降伏文書に調印 幣原内閣成立 SCAP四大財閥解体指令	米空軍初の東京米襲 〔ルーズベルト、大統領四選確定す〕	満十七才以上兵役に編入 レイテに米軍上陸 〔国際機構の成立に関する提案発表〕 米空軍初の東京米襲 〔ルーズベルト、大統領四選確定す〕	一億総武装決定 〔ポーランド新政府樹立〕 〔ルーマニア・ブルガリア対ソ降伏〕	聯合軍マールシャル群島に上陸 サイパンに上陸 北九州に米空軍来襲 聯合軍ノルマンディーに上陸 東条内閣崩壊、小磯・米内内閣成立 〔ポーランド新政府樹立〕 一億総武装決定 〔ルーマニア・ブルガリア対ソ降伏〕	聯合軍マールシャル群島に上陸 サイパンに上陸 北九州に米空軍来襲 聯合軍ノルマンディーに上陸 東条内閣崩壊、小磯・米内内閣成立 〔ポーランド新政府樹立〕 一億総武装決定 〔ルーマニア・ブルガリア対ソ降伏〕						

2 2 年 (1947)		2 1 年 (1946)	
十一月七日 (就) 高木 彊	七月 明星学園後援会及び母姉の会発足	一月八日 (就) 善方 国男 高橋 保 中田伊佐夫 阿部 幸毅	三月二十日 第十九回卒業式挙行(五九 名)
四月六日 (就) 佐藤 徹 鈴木 満男 伊藤 迪	三月二十日 第二十回卒業式挙行(五五 名)	六月三十日 (退) 高橋 保 中田伊佐夫 (就) 亀井 松竹 室谷 幸吉	四月 三月 一月
七月 後援会及び母姉の会発足	四月 新制中学校 旧制明星学園女学校を新制 中学校校舎として、男女共 学となる(第二十回生のみ) 照井猪一郎中学校長となる (退) 武田 勘治 (就) 原田満寿郎 (就) 伊藤 迪 (就) 角館 喜和	三月十三日 (退) 赤井園長	三月二十日 (退) 館谷米利子 (就) 吉川喜美代 第十五回卒業式挙行(三四 名)
三月五日 第十五回卒業式(五年制) 「二五名」	三月十三日 (退) 赤井園長 四月十日 (退) 三輪 伸雄 五月十五日 (就) 土屋 浩 七月 後援会母姉の会発足す	三月五日 (退) 末光 深海 第十五回卒業式挙行(四年 制十名)	四月一日 (就) 酒井 求女 藤田 瑞穂 四月十日 (就) 宮城 弘 九月十六日 (就) 常直員 井上万二郎 逝去
三月 「モスクワ会談」	四月 第二回総選挙(社会党一位)	九月 新憲法成立	一月 年頭詔書換発 SCAP軍国主義者の公職追 放指令 新門切換
五月 新憲法施行、吉田内閣倒る	六月 片山内閣成立	十月 極東委員会、日本労組の十六 原則採択	二月 労組法施行 三月 総選挙施行、幣原内閣倒る 四月 メイデー復活、吉田内閣成立 五月 「イタリア王制廃止」 六月 「パリ外相会談」 九月 「パリ平和会議開かる」
八月 「マシーナル・プランの声明」	十月 日本民間貿易再開許可		
十一月 「ロンドン外相会議成立」	十二月 石炭国管法成立		

2 4 年 (1949)				2 3 年 (1948)			
十月三十一日 から十一月 六日まで	九月 十五日	八月三十一日	四月十七日	四月一日	三月三十一日	第二十一回卒業式挙行(八 九名)	
創立二十五周年記念 明星祭挙行	父母と教師の会発足 (退) 藤井千鶴子	(退) 高橋 幸子	(就) 藤井千鶴子 (就) 伊藤 迪疆 (退) 片桐 太一 (退) 高木 太一	(退) 亀井 登夫 (就) 寒川 道夫 (就) 吉田 登夫	三月三十一日	第二十一回卒業式挙行(八 九名)	
三月 四月 七月 九月				四月 九月	三月 二月二十八日	中学校校舎増築落成 新制中学としての第一回卒業式	
第二回卒業式挙行 (退) 田中 龜藏 (退) 須藤 文雄 (就) 羽鳥 誠一 理科室新築 父母と教師の会発足				(退) 新井 鎮夫 (退) 清水 正高 (就) 田中 正高 (退) 小笠原良一 (退) 片桐 大一 (退) 吉田 登夫 (退) 榎本 法達 (退) 須藤 龜藏 (退) 木村 鉄雄 (就) 橋 正薫 完全共学制となる	四月 三月	中学校校舎増築落成 新制中学としての第一回卒業式	
上に同じ				五月一日 六月三十日 九月一日	三月 二月二十八日	特別教室(二室)増築落成 第十六回(五年制)卒業(中 二六名)(女三二名)卒業 式を行わず	
九月二十五日	九月一日	六月十一日	四月一日	三月五日	四月一日	新制高等学校	
父母と教師の会結成	(就) 加藤 福子 藤田 端穂 逝去 宮田今太郎 岸 すみれ 角館 喜和 大庭 重信 武者小路 穰 (就) 土屋 浩	新制高等学校の第一回卒業 式挙行旧中・女十七名卒業 中(二名)女(十四名)	(退) 山下 むつ (退) 中(二名)女(十四名)	(退) 酒井 昌一 (退) 坂本 初枝 (退) 高須 いち (退) 押川 昌一 (退) 尾崎 暢煥 (就) 城本 光秋(常直員)	明星学園新制高等学校発足 (男女共学) 校長 上田八一郎 (就) 柳沢 義明 人見 進夫 御喜 晶子 片桐 大一 小笠原良一 山下 むつ 坂本 初枝 高須 いち 酒井 昌一 押川 昌一 尾崎 暢煥 城本 光秋(常直員)	新制高等学校	特別教室(二室)増築落成 第十六回(五年制)卒業(中 二六名)(女三二名)卒業 式を行わず
上に同じ				十一月 十二月	一月 二月	〔ガンジール暗殺さる〕 片山内閣辭職 芦田内閣成立 (チエコ政変) 全通ゼネスト (チエコ外相自殺) (欧州援助成立) 近畿地方官憲と朝鮮人衝突す イスラエル共和国独立 (ベルリン封鎖) (コミンフォルム、ユーゴー除 名) 公務員法改正 政令スト 昭電事件發生 芦田内閣辭職、吉田内閣成立 〔中共満州征覇〕 〔トルーマン大統領に当選〕 東京裁判判決下る 〔蔣介石下野表明〕	
衆議院選挙 〔中共華北を解放〕 第二次吉田内閣成立 ドッジ案表明 〔北太平洋条約の成立〕 湯川博士ノーベル賞受賞 〔対日講和具体化す〕				十一月 十二月	一月 二月	〔ガンジール暗殺さる〕 片山内閣辭職 芦田内閣成立 (チエコ政変) 全通ゼネスト (チエコ外相自殺) (欧州援助成立) 近畿地方官憲と朝鮮人衝突す イスラエル共和国独立 (ベルリン封鎖) (コミンフォルム、ユーゴー除 名) 公務員法改正 政令スト 昭電事件發生 芦田内閣辭職、吉田内閣成立 〔中共満州征覇〕 〔トルーマン大統領に当選〕 東京裁判判決下る 〔蔣介石下野表明〕	

2 8 年 (1953)	2 7 年 (1952)	2 6 年 (1951)	2 5 年 (1950)
一月 十日 (就) 小松 幸吉 三月 二十日 第二十六回卒業式 三月 三十日 (退) 山本 徳治 四月 一日 (就) 佐々木 玄吉 佐伯 昭定 九月 三十日 (退) 吉田 登	三月 二十日 第二十五回卒業式 四月 一日 (就) 山本 徳治 青木 正男 佐藤加寿輔 七月 十五日 (退)	三月 二十日 第二十四回卒業式 三月 三十一日 (退) 島本恵美子 四月 一日 (就) 石田 トキ 小森 澄憲 四月 二十日 (退) 吹田 逸夫 九月 十五日 (退) 小林 章一 十月 十九日 (就) 神部 茂 十月 十五日 (退) 神部 茂 十月 十七日 (就) 村崎 洋	三月 二十日 第二十三回卒業式 四月 一日 (就) 小林 章一 島本恵美子 十月 一日 (就)
三月 三月 二十日 四月 一日 (就) 人見 進夫 十月 末 (退) 金子 乾 十一月初 (就) 山之内 正信	一月 十日 (就) 金子 乾 三月 四月 一日 (就) 新井 本治 大阪 顕一 十二月 末 (退) 大阪 顕一	三月 三月 二十日 (退) 清水 正高 四月 一日 (就) 森安 節雄 羽島 文雄	三月 第三回卒業式
二月 二十日 第五回卒業式 (八十七名) 三月 二十日 (退) 石郷島 克男 中村 正代 四月 一日 (就) 昌谷 忠海 高木美津子 六月 (退) 大庭 重信 (専任) 土屋 浩 八月 三十日 (退) 御喜 昌子 九月 (就) 関谷 英子	二月 二十六日 第四回卒業式 (八十七名) 三月 三十一日 (退) 富永 三郎 尾崎 暢映 四月 一日 (就) 中村 正代 反保 光一 九月 一日 (退) 反保 光一 吉利 喜代 十一月 一日 (就) 石郷岡 克男	三月 五日 第三回卒業式 (九十五名) 三月 三十一日 (退) 片桐 太一 吉田 正良 四月 一日 (就)	三月 五日 第二回卒業式 (七十一名) 三月 三十一日 (退) 宮城 弘 加藤 福子
一月 三月 四月 七月 八月 十二月	二月 四月 五月 七月 十月	四月 九月 十月	三月 六月 七月
アイゼンハワー米大統領就任 スターリン死す 日米通商航海条約調印 朝鮮休戦協定調印 ソ連水爆保有声明 奄美大島日本復帰	日米行政協定調印 日米講和条約、安保条約発効 メーデーデモ隊が警官隊と大乱闘 全国住民登録実施 保安隊発足	マッカーサー総司令官解任 サンフランシスコ講和条約、日米安保条約調印 米相互安全保障本部設立	米対外援助法成立 朝鮮戦乱発生 日本労働組合総評議会結成

3 2 年 (1957)		3 1 年 (1956)		3 0 年 (1955)		2 9 年 (1954)	
三月三十一日 (退) 生越 昭吉 三月三十一日 (就) 上川 淳 四月一日 (退) 鈴木 五郎 五月十五日 (退) 一瀬 前典 九月一日 (就) 佐藤 文夫	第三十回卒業式	三月三十一日 (就) 島田 厚 三月三十一日 (退) 青木 正男 四月一日 (退) 鈴木満男(中学へ) (就) 無着 成恭 新校舎一棟六教室及便所完 成 講堂移転	第二十九回卒業式	三月三十一日 (就) 鎌田貞之助 四月一日 (退) 北川トミエ (退) 村崎 洋(中学へ)	第二十八回卒業式	三月三十一日 (就) 吉田 登 四月一日 (就) 生越 昭吉 伊藤迪休職 創立三十周年記念行事とし て校舎全面的改築を決定す る。	第二十七回卒業式
三月 三月三十一日 三月三十一日 四月一日	第十回卒業式 新校舎に移転 (中・高同校地)	三月 三月三十一日 四月一日 九月二十日 十二月末	第九回卒業式 染谷 誠(高へ) 岡 義夫 鈴木 満夫(小より) 川原正希知 古本貴久子 増田 通二 増田 通二	三月 三月三十一日 四月一日 (就) 村崎 洋(小より)	第八回卒業式 三浦 操	三月 四月一日 十月三十一日 十二月一日	第七回卒業式 岡 義夫 (退) 山之内正信 (就) 三浦 操 若松 善明
三月 四月 六月	第九回卒業式(六十名) (退) 奥地三保子 (専任) 松本 唯史 田中 一水 大類 陽子 (松本と改姓) (就) 渡辺 信一 細川 敬一 古木 薫子 (平野と改姓) 高校新校舎落成	三月 四月 八月 九月	第八回卒業式 (八十九名) (退) 堀 りる (就) 平 雄一 竹之内靖子 桑原 岩雄 松本 唯史 (就) 杉山清朝 W・C・ハカビー	三月 四月 八月 十月 十二月	第七回卒業式(六十八名) (退) 宮島 達夫 (就) 大類 陽子 堀 りる 宮田今太郎 杉山清洋行 恩地三保子 (就) 高木美津子 (松本と改姓) (就) 片岡 恒子	三月 四月 五月	(就) 田中 一水 第六回卒業式(九十九名) (退) 関谷 英子 吉利 喜代 昌谷 忠海 (就) 幡野早百合 (福田と改正) 宮島 達夫 創立三十周年記念式慰霊祭 (物故功労者物故職員、戦 病死卒業生)
一月 二月 二月 六月 八月 十二月 十二月	南極観測隊オングル島に上陸 「昭和基地と命名」 石橋内閣総辞職 岸内閣成立 ソ連共産党中委マレンコフ・ モロトフ等解任 国際原子力機関正式発足 東海村に「原子の火」灯る 日ソ通商条約調印 自衛隊に誘導弾供与決定 日教組勤評反対決定	四月 四月 六月 九月 十月 十二月 十二月	四月 四月 六月 九月 十月 十二月 十二月	二月 五月 六月 六月 十月	マレンコフ首相辞職 紫雲丸衝突事故 日・ソ交渉始まる 日米原子協定調印 自由民主党発足	三月 三月 五月 六月 七月 九月 十二月	ビキニ水爆実験で第五福竜丸 被災 教員政治活動禁止教育中立維 持二法案可決 M・S・A協定発教 ソ連原子力発電開始 自衛隊発足 インドシナ休戦協定調印 青函連絡船洞爺丸転覆 鳩山内閣成立

3 4 年 (1959)				3 3 年 (1958)			
五月				三月三十一日	第三十一回卒業式	三月	就第十一回卒業式
四月一日				三月三十日	(退) 鎌田貞之助 白池 米蔵	十二月一日	(就) 三橋 和正
三月三十一日				四月一日	(退) 島田 厚(高へ) (就) 菅野 昭二 伊藤迪復職	二月	第十回卒業式
四月一日				九月二日	(就) 山浦 邦夫	三月	(退) 福田早百合 片岡 恒子 (山里改姓)
五月				十月十一日	新校舎一棟六教室完成	四月	(就) 染谷 誠一 島田 厚(小より)
校内塀工事完了				十一月	運動場整地完了	十一月	海津 修 伊藤 幸子 前田 明 赤井喜代子 萩原 昌 杉山清死去
第三十二回卒業式				四月一日小、中、高、四・四・四制一貫教育採用			
三月三十一日				三月三十一日			
四月一日				三月三十一日			
清水 睦子				三月三十一日			
石田 トキ				三月三十一日			
(中学校へ)				三月三十一日			
四月一日				三月三十一日			
六月一日				三月三十一日			
九月初				三月三十一日			
九月一日				三月三十一日			
(退)				三月三十一日			
矢野 善之				三月三十一日			
野津 良和				三月三十一日			
野津 良和				三月三十一日			
鈴木 貞雄				三月三十一日			
石田 トキ(小より)				三月三十一日			
土屋 一郎				三月三十一日			
松井 幹夫				三月三十一日			
島田 厚(高より)				三月三十一日			
新井 本治(高へ)				三月三十一日			
恩地 邦郎(高へ)				三月三十一日			
四月				三月三十一日			
五月				三月三十一日			
九月				三月三十一日			
十一月				三月三十一日			
第十一回卒業式				第十一回卒業式			
(私学会館講堂にて)				(私学会館講堂にて)			
(百三十二名)				(百三十二名)			
桑原 岩雄				桑原 岩雄			
伊藤 幸子				伊藤 幸子			
相良 晴彦				相良 晴彦			
井口 芳雄				井口 芳雄			
衣笠 洋子				衣笠 洋子			
田代 力也				田代 力也			
両角 亮一				両角 亮一			
早田 勤				早田 勤			
恩地 邦郎				恩地 邦郎			
ローランド・ランゲ				ローランド・ランゲ			
小学校二教室中高へ移築落成				小学校二教室中高へ移築落成			
自転車置場放送室パン買場出来上る				自転車置場放送室パン買場出来上る			
(就) 奥平 善三郎				(就) 奥平 善三郎			
(就) 折原 教詮				(就) 折原 教詮			
四月				四月			
九月				九月			
九月				九月			
伊勢湾台風により死者四千五百名				伊勢湾台風により死者四千五百名			
問				問			
フルシチョフソ連首相米を訪				フルシチョフソ連首相米を訪			
表面に到達				表面に到達			
ソ連第二号宇宙ロケット月の				ソ連第二号宇宙ロケット月の			
現わる				現わる			
皇太子結婚式に於て投石少年				皇太子結婚式に於て投石少年			
提出				提出			
政府「警職法改正案」国会に				政府「警職法改正案」国会に			
ドゴール内閣成立				ドゴール内閣成立			
開催				開催			
第三回アジア競技大会東京で				第三回アジア競技大会東京で			
米第一回人工衛生打上成功				米第一回人工衛生打上成功			

現在職員

小学校	照井 猪一郎 校長 岸 井 一の一 小 森 一の一 佐々木 澄憲 一の一 室 伯 玄吾 一の一 佐 昭 幸吉 二の一 伊 藤 昭 三の一 町 藤 文夫 三の一 鈴 幸 熊吉 四の一 善 方 国男 四の一 無 着 成恭 校務主任(四の三) 山 浦 邦夫 五の一 上 川 淳夫 五の二 寒 川 道夫 六の一 菅 野 昭二 六の二 広 井 げん 六の三 照 井 登孝 六の三 吉 田 五郎 体育 鈴 木 睦子 図画 清 水 陸技 音楽 北 村 鉄雄 工作 木 野 梅夫 校医 立 井 吉太郎 校医(小・中・高)
中学校	照井 猪一郎 校長歴史 人 見 進夫 一年体育 吉 川 喜美代 一年英語 島 田 厚 一年英語 原 田 満寿郎 一年社会(小・中) 小笠原 良一 一年音楽 古 本 貴久子 一年体育 松 井 幹夫 一年数学 村 崎 幸洋 二年理科 太 田 幸雄 二年美術 宮 川 幸三 二年理科 山 岡 幸子 二年英語 三 橋 和一 二年英語 土 屋 正郎 二年数学 川 原 好照 三年社会 依 田 善明 三年英語(中・高) 若 木 鈴夫 三年家庭 鈴 須 満夫 三年家庭 高 田 トキ 社会 石 田 いち 家庭 鈴 木 貞雄 家庭 矢 野 正薫 校務主任(社会国語)
高等学校	上田 八郎 校長英語 上 田 武一郎 一年数学 岸 田 八郎 一年英語 角 館 喜み 一年社会 堀 本 初枝 二年家庭 松 本 唯史 二年英語 渡 辺 信一 二年英語 海 津 信 二年社会 武者小路 信 二年社会 加 藤 信 三年理科 土 屋 浩夫 三年理科 松 中 陽一 三年理科 横 川 武子 三年理科 横 川 尚 三年理科 柳 沢 明 三年理科 押 川 一郎 三年理科 恩 地 昌義 三年理科 衣 笠 洋彦 三年理科 相 良 彦 三年理科 井 口 雄一 三年理科 阿 角 一 三年理科 井 代 子 三年理科 野 々 正道 三年理科 吉 田 喜代子 三年理科 赤 井 明子 三年理科 前 田 子 三年理科 平 野 敬一 三年理科 細 川 敬一 三年理科 新 井 敬一 三年理科 荻 原 敬一 三年理科 羅 蘭 敬一 三年理科 船 山 敬一 三年理科

総 計	計	女	男	学 年	
549	85	37	48	一	小 学 校
	72	37	35	二	
	75	39	36	三	
	82	34	48	四	
	113	68	45	五	
	122	65	57	六	
391	175	115	60	一	中 学 校
	114	76	28	二	
	102	73	29	三	
491	164	96	68	一	高 等 学 校
	156	83	73	二	
	171	111	60	三	
1431		834	597	計	

編集

後記

初めに、三十五周年を経た明星を共に祝福し、共に愛する全ての人々に、明星のその道程に於る一記念碑として、心から、この書を捧げたい。

三十五年と云えば一つの世代の交代にも当る長い期間である。草深いこの武蔵野に生まれ、その長い三十五年の星霜を経て、つちかわれ、結集されてきたその明星と云うものの意義を、私達は、自分達の話し合いの中で、自分達の上に見だし、又見なければならぬと考えた。が私達は、その過程に於る明星を知らない。知っているのは現在の姿である。その意味で、三十五周年目の今日を書き記す為に、自分達の再現を、誌上に於て試みたのである。いたずらな追憶だけの為に、よき昔を懐かしむ為だけに、この書を計画したのではない。戦後十年を経て、今やとかく言々される私達の同年輩の一人一人として、明星という温室的な、特殊なワクの中で、私達を考えてみなかったのである。

私達は、この書が、一冊の物として出来る過程の中で知った。私達は井の中の蛙でありすぎる事を。他校の生徒との座談会や、父兄への手紙で、あまりに自分達と違うものを発見した。そしてその為にも社会にある先輩を訪問することを計画した。私達は確かに、温室的環境の中にあり過ぎた様だ。だが、それが悪いとも云えはしない。それらのくい違いを判断する正確な目を養う事が必要なのである。それらを含めて、私達が、この一冊の書の中に得た全てのものを、学友諸兄にわかち合いたいのである。

夏休み前に始めた。この書の計画が、一冊のものとして形を成す迄に、五ヶ月の月日を経た。暑い夏の陽は、額を寄せ合って話し合った会議室のままで輝らしていたが、一篇の原稿を得る為に駆け回りしている内に、もう木枯らしが吹き始めていたのである。その間、この書に没入して来た私達は、三十五周年目にめぐり合わせた自

分達を喜んでいる。自分達は、心から楽しんで、この計画を遂行して来た。この楽しみと喜びを、全ての人に味わってもらいたいものである。

そしてこの書が、そこから発展して行くのなら、私達この書の為にたずさわった者として、この上の喜びとするものはない。

終りに、この計画を実行する為に、意余って、力足らずの私達に、その忙がしいお仕事を割いて絶大なる援助を与えられた押川先生以下、色々な支持、激励を与えて下さった、諸先生、先輩、父兄の方々に誌上を借りて、心から御礼申し上げたい。

さらに、これから発展しつづける明星の上に繁栄と栄光のあらん事を祈って……。

編集員一同

丸山 みよさん

共学制の高等学校に初めて文芸部をつくった同人の一人が丸山みよさんです。万事に控え目な人でしたが、同人五、六人の仲間と語り合って、とうとう「明星」第一号を出しました。それが現在の「明星」の元祖です。

卒業後はどこにもゆかず、病気がちの身体を養いながら自分の道をさがしていたようですが、やがて茶道に打込むようになりました。みよさん自身は「お茶」という呼び方をしていました。お弟子もとるようになり一人前の師匠になったのに、今年八月十五日に急に亡くなってしまいました。

「明星」一号に寄せているみよさんの短歌を抄録してみよさんを記念したいと思います。

茂り生ひしみどりの中の川の面に
不思議なもののだよひを見つ
校庭のすみに草喰む母と子の
山羊のあたりに蝶たはむる

文芸部員名簿

高三 金井 三知 天野 元子

上田 紀子 辻 聿子

室谷 幸子 中村真喜雄

桜井 光雄 中村 武雄

丸山 義彦

川崎 勝 茶郷 穰

深山 祝子 高橋乃利恵

川上 洋子 佐久間佳子

杉本 和子 熊谷多勢子

原田 励

柳沢 榊江 高木 葉子

勅使河原郁子 林 典子

室谷 恭子 森本 栄子

寺田 洋子 秦 佳代子

上条 永子 江沢 玲子

徳昭弥寿子 富谷 陽子

友田摩耶子 中川 祥子

風早多美子

石井 聡子 葉 見樹

中園美似子 宮川 木末

川村 桂子

明星・創立三十五周年記念誌

(非売品)

昭和三十四年十二月十五日 発行

発行者 明星学園中・高文芸部

三鷹市牟礼五六六
電話(武蔵野)三四五二番

印刷所 明星印刷株式会社

東京都新宿区戸塚町一ノ五三二
電話(34)九七二八・五五九〇番

